女子文壇

十一月一日

第六年 第十四號



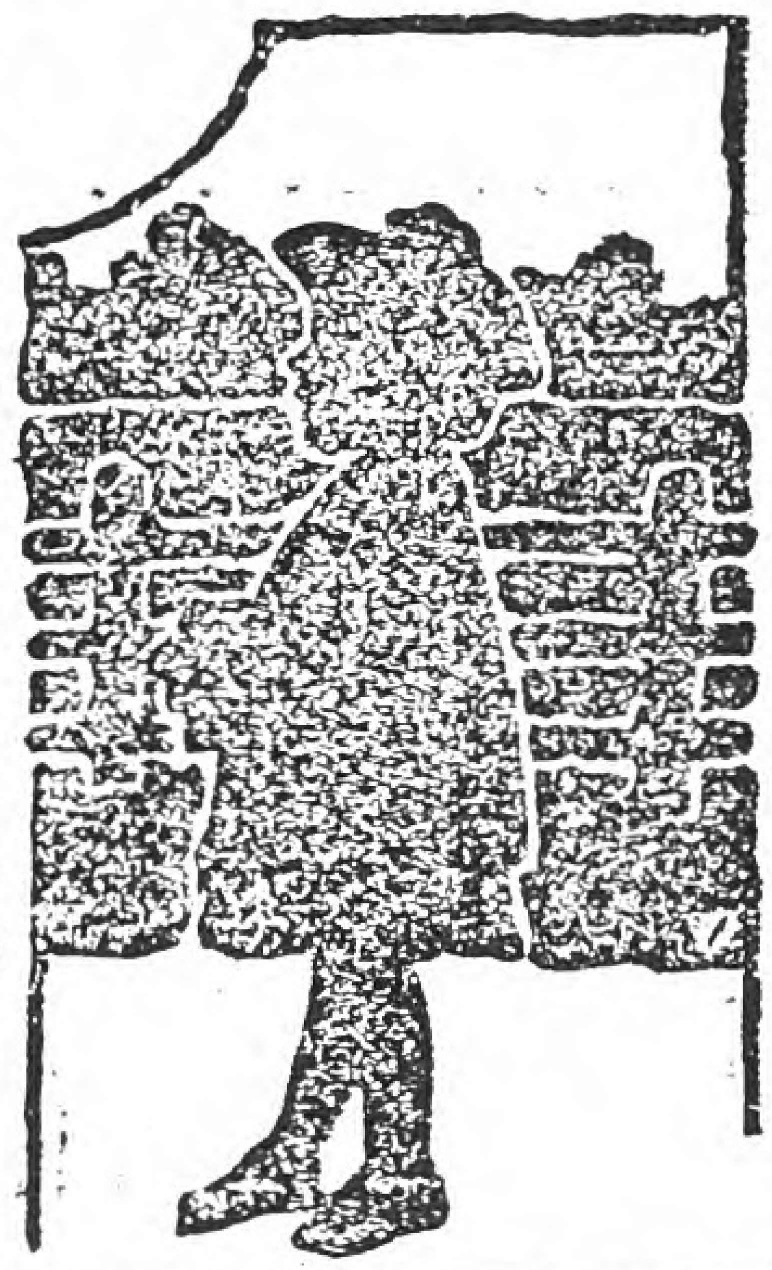
明治三十七年十二月十九日 第三種郵便物認可
（明治四十三年十月廿五日印刷納本 毎月一回二十五日印刷納本）

東京女子文壇社發行

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

愛らしき少女達の讀物には一等評判よい

二巻第十一號　**十一月號**　一日發行



少女



（毎月一日發行）定價 一冊拾錢 送料壹錢 半年 郵税共 六拾三錢 （[illegible]）

發行所 東京京橋區大鋸町 **女子文壇社**（振替口座東京第壹七貳九番）最寄書店に無くば直接御申込を乞ふ

女子文壇拾壹月號（第六年第拾四號）目次

日英大博覽會名譽賞牌受領



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

秋晴



大下藤次郎筆

肺病新藥

私儀明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り各地の醫藥は勿論妙薬なりと聞く毎に諸種の藥を服し東京市內有名大家諸先生の診斷服藥し猶ほ横濱獨逸病院長(ドクトル)の藥劑も其効なく豆州熱海相州箱根上州草津溫泉何れも兩三年入浴するも異狀なく其外鍼灸限なく療養したるも效驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々喀血して皮膚青白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳痰甚しく骸骨同樣に成り最早此上は致方無之只死を待の外なし然るに私は病中臥蓐の內と雖ども常に書見する癖あり一日家藏の古書を點見する中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議に爽快を覺え尚續て服するに益々快方に趣き四週間餘りにて全く根治したり既に死期に臨みたる大患を斯くも容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此の嬉さの餘り爾來肺病患者と聞く每に其實を告げ試藥せしもの五十四人皆共に全治せざるものなし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て寧ろ之を世に公にして數萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名づけ內務省の御檢査を蒙り弘く世の肺患者に發賣する事となれり然る處本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尚ほ淺きにも不拘內地は勿論既に**米國紐育市タイヤーガ商會**及び**印度パタビアヒイアエーテス社**等へ續々輸出し專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に四千六百餘に達せり然るに此奇藥を知らず種々に迷ひ病苦に惱める人士なきにもあらじ天壽を完ふせんと欲せば速に本劑を服して難病根治の一大幸福を得よ

藥價……七日分貳圓◎十四日分四圓◎廿一日分五圓◎卅五日分七圓五十錢◎七十日分十四圓遞送料十錢◎爲替局名は大森局宛取組の事

主治効能◎肺結核◎肺炎◎氣管支加答兒◎肋膜炎◎肺炎加答兒◎たん咳等肺病一切より起る諸病を根治する偉功あり

用法及び詳細は本能書にあり但し本舖へ直接御注文の時は病狀の模樣を詳細に記入申込を乞ふ

東京府下荏原郡入新井村字不入斗二百十四番地

調劑本舖 川名助次郎(電話大森六九番)

東京神田區花房町二番地 山崎帝國堂
橫濱吉田町二丁目都橋際 永井永進堂
東京神田區橋本町二丁目 福井甚藏
北海道函館辨天町 國領平七
東京淺草並木 遠山藥店
東京銀座一丁目 佐々木玄兵衛
靜岡市七間町 市川商店
埼玉縣熊ヶ谷町 櫛田金造

肺治散特約店(全國到る處の有名なる藥舖にて販賣せり若し無之地は本舖へ申越次第特約す)

東京銀座二丁目 岸田吟香
東京日本橋區本石町 守谷萬次郎
東京兩國米澤町角 吉田安五郎
大阪西横堀舟町橋西詰 賣藥卸賣株式會社
馬關西南部町 賣藥會社
東京銀座三丁目 松澤八右衛門
東京日本橋區瀬戸物町 玉置金八
東京日本橋區上槇町 安川晃榮堂
相模橫須賀汐入町 茶本商店
東京神田區鍛冶町 大木合名會社
東京日本橋區本町 大橋博愛堂
東京兩國米澤町 大木口哲本店
越後國長岡市 藤井卯吉
東京日本橋通 中田清兵衛
東京日本橋通 大野傳兵衛支店
大阪堺筋伏見町 谷岡春堂
長野市大門町 小林傳兵衛


吉花
村料
東京傳山町
天野卯兵衛
商店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

「東京へ注文いたすのが便利

であります。東京の三越呉服店へ向け、必要なるものを手紙にていつてやりますと、直に小包郵便にて送つて參ります。かういふ便利なる方法のあるを當地の人は未だ知らない樣ですから、よく教へて上げて居ります』とさる地方の奥樣が仰せられました。誠に難有き仕合せに存じます。（地方注文案内書は御一報次第進呈）

東京駿河町

三越呉服店

九段坂



東京錦石堂石印

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

專賣特許

エンゼル香油

田原藥學博士の實驗御證明 清浦子爵 高山三山兩博士の實驗有効御證明 東京美術學校千頭教授の實驗有効御賞賛狀其他大家より多大の高評を以て迎へられたる特許エンゼル香油は毛髮を黒化漆の如き光艶を出し且毛根を養ふ偉大の特効ある最新發見の高等香油にて殊に本品には目下歐米にて最も流行せる「ヘリオトロープ」『バイオレット』『ホワイトリリー』等の高雅なる香芳を有し御使用後は馥郁として長時間保ちます故別に他の香水等御用の必要は有ません又くせ毛の方はB號エンゼル香油御使用有れば如何なる天性の縮れ毛にても自然に矯正する不思議の特許品で有升



見よ!!

◉實價は小罎六十錢中罎壹圓大罎壹圓八十錢と天性難毛用特製三圓五十錢の四種で送費は市内は何れも七錢内地は小中罎迄は十一錢大罎及び特製十五錢です▲代金引替は一切謝絶す▼

東京市本郷區東片町十五番地

エンゼル商會

電話下谷二五六九番
振替東京二〇七四三番

最新美人法

一冊送料共金廿七錢
振替送金は金廿八錢
切手代用は三錢を十枚

本書は醫學上藥學上の學理實際と幾多令孃令夫人の實驗とより成り然も何人にも實行しやすきを本旨として記述せしもの也。

白色法 醫學上より見たる白色法◉色白くなる飲み藥◉色白くなるつけ藥◉實驗有效の白色法◉色白くなる簡單なる方法◉キメを細かにする法◉日にやけるを防ぐ法◉手の色を白くする法其他種々

美髮法 髮の毛を美しくする法◉髮の毛をやはらかにする法◉つやをよくする法◉毛のぬけるを止める法◉毛をのばす法◉ふけをとる法◉ちゞれ毛くせ毛薄毛赤毛白毛等をなほす最良法等其他種々

美顏法 愛嬌と愉快◉顏を洗ふ最良の方法◉油の多過ぐる顏と油のたらぬ顏◉赤すぎる顏と青き顏との療法◉顏を醜くする食物◉しわのよらぬ法◉齒を白くする法◉ニキビそばかすホクロの療法等

治療法 やせる法こえる法◉鼻高くする法◉聲をよくする法◉おしろいやけイボあざシモヤケわきがヒゼン田虫タコなまづ等毛をはやす法◉赤鼻眉毛のさか毛手のあれを治する法其他の最良療治◉

養生法 根本的美人となる平素の養生法◉食物と美人との關係◉充分に睡眠せよ◉寢る時の心得と寢具◉運動はかくの如くすべし◉醜婦も此の如く常に注意せば亦美人に優る◉婦人病と顏色の關係

化粧法 入浴中行ふべき美人法◉此の如き化粧品は反つて恐るべき結果を來す◉化粧品の撰擇法◉おしろいのつけ方◉鼻高く見ゆる法◉目を大きく見する法◉唇を薄くし又は厚く見する法其他種々

服裝法 服裝を美しくする法◉衣服の材料◉衣服の洗濯◉衣服の色◉衣服ノ縞◉衣服店にて染色縞柄を見る秘訣◉此の如き模樣と縞柄とは甚しく美人を醜婦とす◉帶のしめ方◉前のあわせ方等種々

これ内容の大略のみ、眞に婦人の寶典也、眞に少女の必讀書也、御身の幸福を得べく一日も早く本書を讀め

發行所 東京神田錦町三ノ二 振替東京一六一八番 **學友社**

にきび そばかす

◉はたけなどにて御困りの御方は獨逸皮膚病專門大家カボジー博士の處方によれるカボジーといふ特効藥を一日も早く御用なさる事をおすゝめ申します。もし又御望みの御方には小包料共金五十八錢にて一劑宛御分ち申し上げます。

東京神田錦町三ノ二學友社書店内 高柳孝子

女學世界

十一月一日發行

菊判紙數二百八頁
口繪寫眞版豐富
正價廿錢　郵稅二錢

十一月號（第拾卷第拾四號）目次

東京　本町　博文館

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



東伏見宮依仁親王妃周子殿下



殿下最近の御撮影にして特に本誌の爲に貸與の榮を賜はりしものなり



海軍中將肝付兼行氏令孃かね子

平井政隆氏令孃近江子
（三輪田高女卒業）

西巻正金銀行副支配人令孃さよ子

殘本僅少……發行元にあり

九月一日の

少女

滿一週年紀念號

お伽噺

▲先生は皆樣方の爲めどんなに骨を折つてゐらつしやるか……白羊子

▲お月見のお客樣……與謝野晶子

▲梟の御先祖……朝井千とせ

▲魚が寢て居るよ……生田春月

▲蛙子さん……愛讀者七人合作

▲冒險小說 女人禁制（下）……都その子

▲少女對話 人買ひ……河井醉茗

▲少女對話 大笑ひ……西本ふじ子 吉田しづ子 合作

▲唱歌 蟬の歌……兒玉花外

少女小說

▲美しきイサベラ……一色醒川

▲以前の家……溝口白羊

▲清水谷……海賀變哲

▲少看護婦……松村駿子

▲女間諜（二）……磯萍水

▲暗い心……大麻呂

▲歌はどうすれば上手につくれるか……學習院女子部敎授 尾上柴舟

▲美文 思ひ出……前盛岡高等女學校敎諭 藪白明

▲懸賞繪さがし及答案少女文壇皆例の通り材料豐富……

其外諸博士の面白い動物談、歷史地理談、某外交官の外國の少女談等

▲『少女』はどんな手續を經て出來上るか……一記者

紙數百五十 口繪・石版畫寫眞版數葉入挿畫多

▲本號に限り 定價拾五錢 郵稅一錢

東京京橋大鋸町 女子文壇社發行 振替口座東京壹七貳九

最寄雜誌書店品切の節は發行所へ申込を乞ふ

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

産科婦人科專門醫學士北畠孝夫先生閲

婦人病心得

(最近)子宮病自宅療法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて。素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて、生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である◎著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。(婦人病者の心得)と題し左の各項に分ちて丁寧親切に詳説せり◎病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ。當分の内無代進呈すはがきにて至急申込まれよ

目次——婦人病の總論◎子宮病血の道(ヒステリー)の原因病理及び自宅療法◎神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◎しらちながちの病源及其根治法◎月經時の手當月經諸病の療法◎姙娠の原理、受胎すべき場合、姙婦の攝生、つわりの養生法

發行所(電話新橋三千六百一一)東京築地新榮町四ノ一 笹岡省三

妾事小供の時より薄毛にて種々の薬を試みしも効ながりし所洋行中なりし醫學博士分夫人より奇薬を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし



三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區銀座二ノ十 河村愛子

ちゞれもくせも もはへうけあひ

一大奇法

本法は女髪結師安部歌子女史の多年實地研究したる秘法にて是迄の使用者を悉く滿足せしめたる一大奇法なり照會者は往復はがきにて申込あれ

東京麹町區三番町六十七 小林濟世園

毛生薬

私生へ際に禿ありし處專賣特許の發明薬にて直に毛生せし故廣く同病者に告たし望の方は郵劵三錢封入御申越あれ詳報す

東京市東兩國横網町一丁目十九番地 西森達也

和装と洋装



子爵藪篤麿氏夫人篤子



荒川西班牙國公使夫人

名門の夫人



樺山伯爵令嗣愛輔氏夫人常子



貴族院議員木場貞長氏夫人小百合子



子爵鳥尾光氏夫人 千とせ子



男爵眞田幸世氏夫人 綾子

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨書添を乞ふ

婦人画報

十一月一日發行　十一月の卷　一冊廿五錢　郵稅二錢　六冊稅共壹圓五拾錢　十二冊稅共二圓八拾八錢

畫報

東西両京の髮形……もみぢ……岡落葉筆彩色美人畫

各女學校秋季遠足……臨池會の才媛の立書▼神戸の女學校……生田流琴曲演奏會…▼令嬢かゞみ……

東宮殿下臺臨と京都の女學校……細川流盆石と盆畫▼活花のかゞみ……小兒のあそびいろ〳〵……

閑院宮家の御繁榮……婦人と狂言▼兒童の戸外教授……ハワイ女學校に赴任する兩尼僧……

天長節と物言ふ菊花……ナイチンゲール孃追悼會と葬儀……婦人のモデル▼山室女史門下の彈奏……

寄宿舍生活の一日……貴婦人令嬢の筆蹟▼令嬢と繪畫……大阪と弘前の割烹講習▼名家婦人……

九條島津兩公爵令孃……

讀物

◎◎皇后陛下の御歌……
◎◎大婆公子いね◎臺所學科
◎◎有名なる女髮結ひに髮を結ってもらった記
◎女事務員ものがたり……文子
◎音樂界三才媛の應接ぶり……
◎◎女子の教育の新傾向……中島博士
◎◎婦人の常識……新渡戸博士
◎◎輕薄な文士の言說に誤らるゝ勿　福來博士
◎◎愛嬌は女の命　巖谷小波
◎◎妙齡の婦人讀物……下田歌子
◎新歸朝の小此木子女史を訪ふ
◎◎衛生家事　弘田博士◎宮川すみ子
◎十一月の活花◎十一月の總菜料理
◎小言と小言より見た家庭　倉橋學士
◎◎命から二番目の衣裳　宮田修

皇族画報

婦人畫報增刊

第十五版發行

定價金三十八錢　郵稅金二錢

東京麴町區飯田町四丁目四番地

東京社

電話番町二三三九
振替口座一八一八

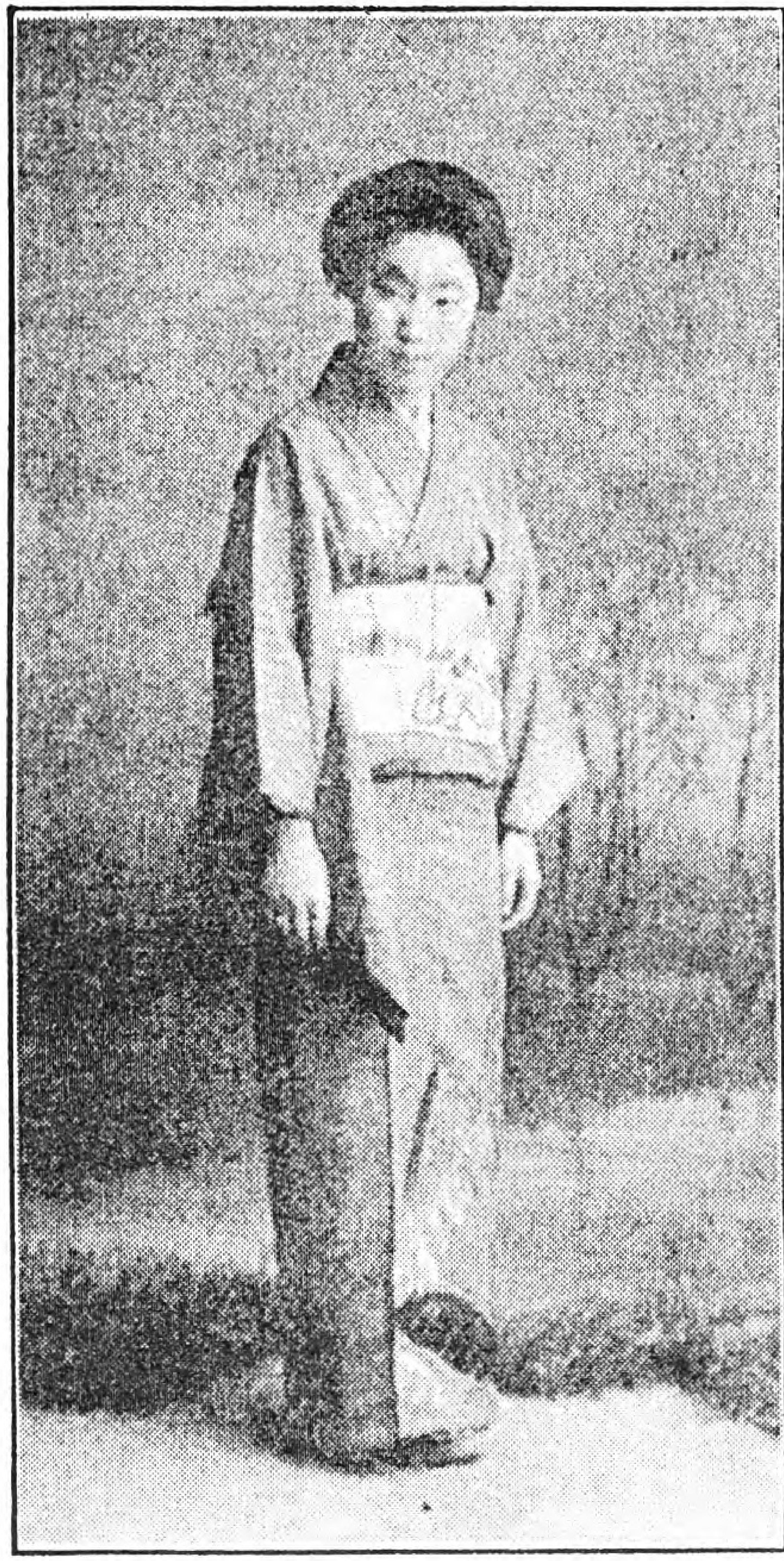
名士の夫人



實業家岩崎重次郎氏夫人きん子



片山陸軍主計總監令嗣眞五郎氏夫人貞子



法學士吉崎龜之助氏夫人李枝子



實業家村井五郎氏と君子（夫人は東京女學館卒業）



久邇宮家從太田宗十郎氏と夫人はつね子



福岡醫科大學助手醫學士岡本孝直氏と夫人壽子

（夫人は京都第一高女卒業）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

夢二畫集

秋の卷出來

春の卷 七版 定價五拾錢 送料八錢

再版と三版の時に、訂正をして新しい木版を入れた。繪の間に散文が入れてある。

夏の卷 六版 定價五拾錢 送料八錢

これには新しい試みとして短詩が挿むである、印象を表白するにあたり、著者はいかなる形式によるかを豫め考へてゐない。氣の向いたまゝに繪になり詩になるのだ。

花の卷 四版 定價四拾錢 送料四錢

たゞ、もう美しければ好い。眞、僞、善、惡、汚、疲、それ等のすべてさへ美しくあり得る。

旅の卷 四版 定價七拾錢 送料六錢

あの白い路は一體どこまで往くのだらう。まあ、歩いて往て見ようゆけども〳〵果てはない……私はまだ、今日も白い路を歩いてゆく

秋の卷 定價五拾錢 送料八錢

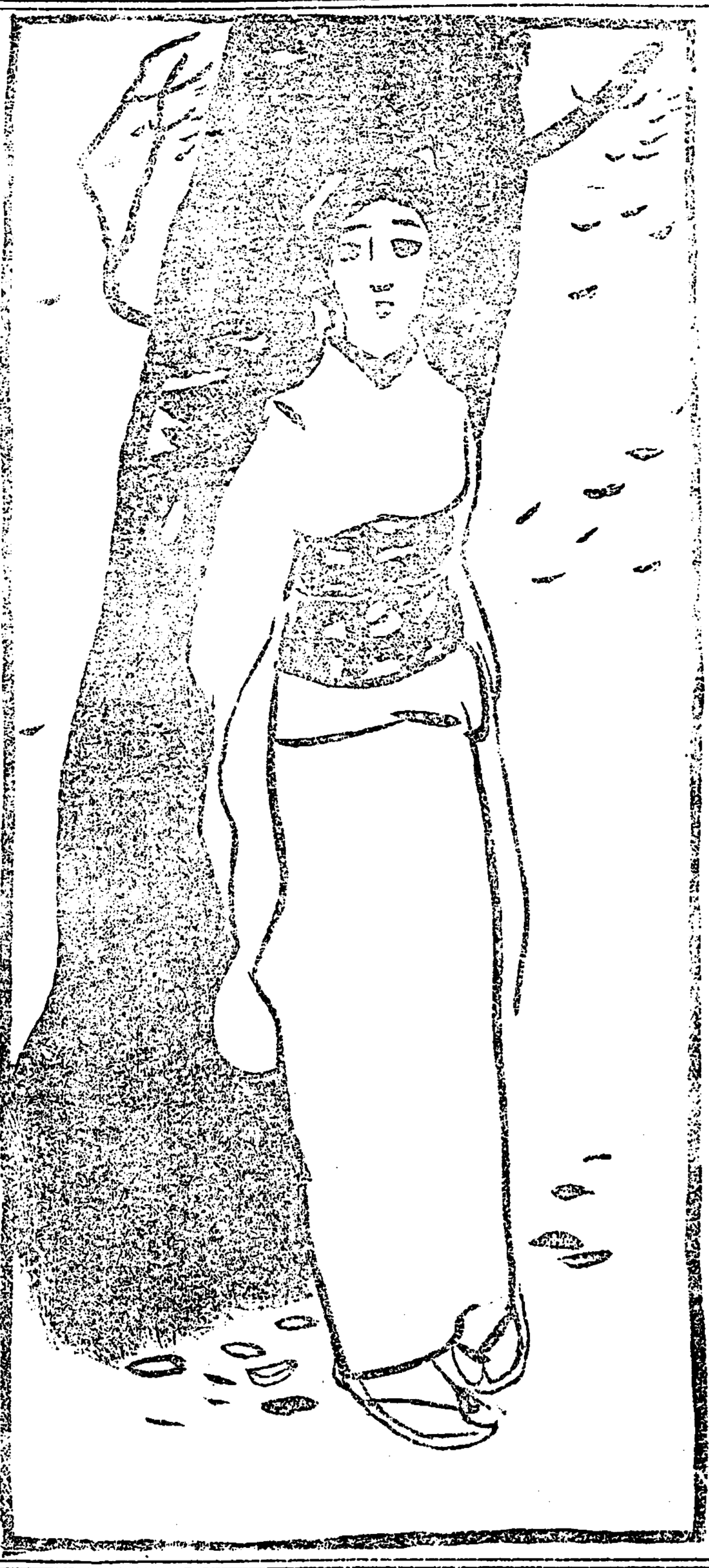
語るに堪へない。
歌はふ。歌はふ。
小鳥のように歌はふではないか。
若人よ。聲をあはせて歌はふ。

冬の卷 近刊

發行所

洛陽堂

東京麹町二丁目二番地
振替東京二〇一九一四番



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



千代田香油

紳士もお嬢さんも奥さんも薫りよき千代田香油に限るとの高評盛んなり

定價
特製 七十錢
大瓶 卅五錢
中瓶 廿五錢
小瓶 十七錢

東京市馬喰町
發賣元 山岸三之助
電話浪花七九三番
振替口座二五〇〇〇番

理想的美髮化粧料新輸入品



透明煉香油 大瓶一本三十五錢 小瓶一本二十錢 各送料八錢

レコードロースポメード

レコードは香氣最も高評にして旬日を保ち惡臭を除き垢及び特に恐るべき脱毛を防ぎ如何なる縮毛くせ毛も一度使用せば意の如く自由に爲し毛髮を自然に黑くし艶麗なる光澤を增す故にコスメチック其他香油に優る特點を有す殊に冬季は完全なる化粧料の一となり顏手足等凡て皮膚のあれに用て最も妙なり在來の煉香油クリーム等と相違し使用心地よき絕品なり

東京日本橋區馬喰町四丁目廿二番地
化粧品雜貨輸出入商 後藤商店

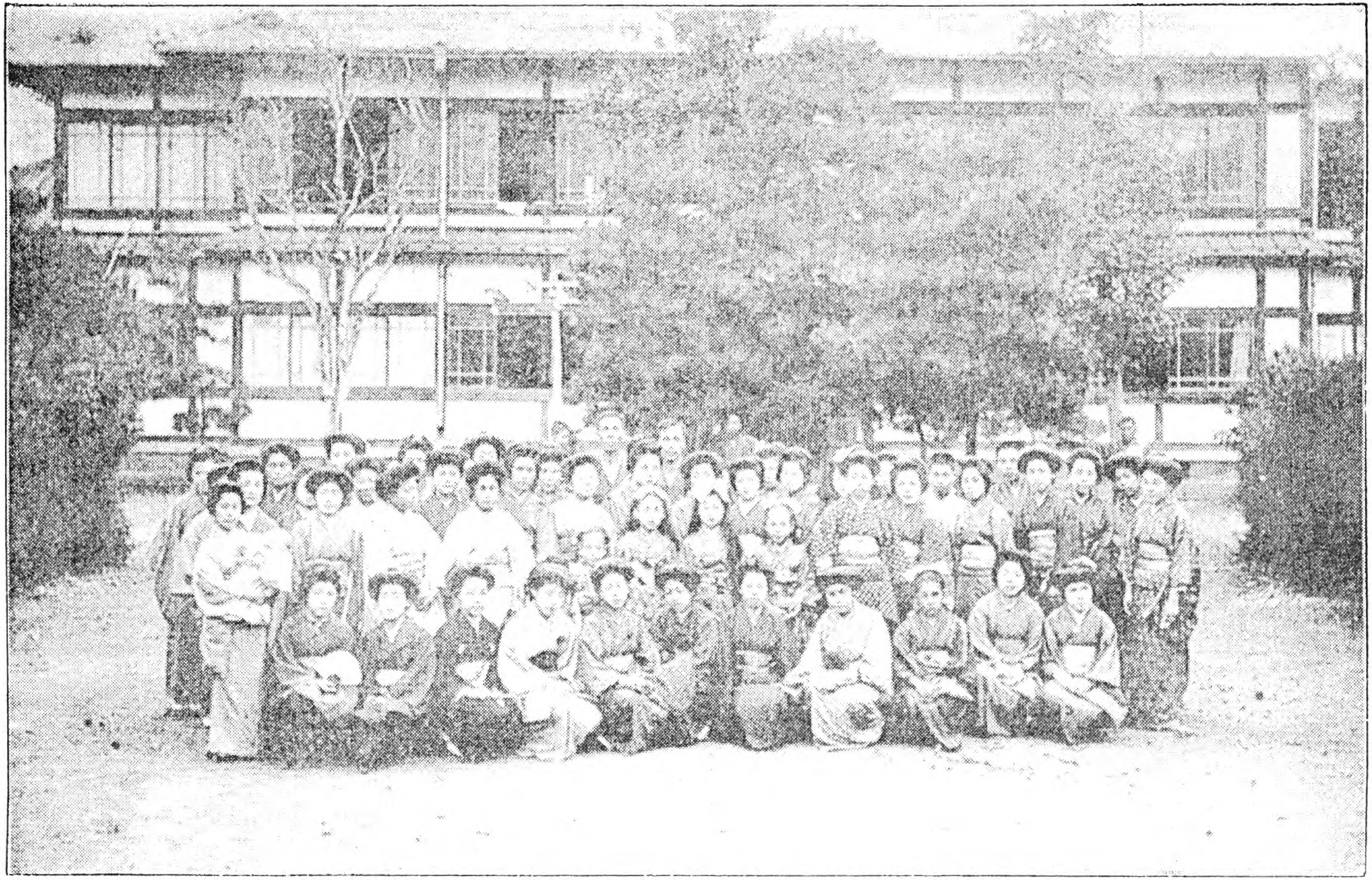
暫く品切の處新荷着

英國製パヒユーム
香水紙
一袋六枚入十五錢
送料三袋迄二錢

紙入、嚢入、書籍、簞笥の引出し等へ其一枚を入れ或は外出の際、帯、ポッケット、帽子の裏へ挾まれよ數月の間は香氣を保ち自然他人に惡感を抱かしむる患なく瓶入香水に比し經濟にして高評なり

京都の女子文壇愛讀者大會

前列（向ツテ左ヨリ）來賓横山法學士夫人、武部準子、山田春子、町田てる子、要司村福子、濱部てる子、川崎道江、改野たけ子、三宅壽賀子、其他は本欄の記事參照



（明治四十三年九月廿五日京都市北野倶樂部に於て）

造花と裁縫



（赤上きく子寄）

宇都宮市女子技藝講習會造花科生



（さゝふれ子寄）

福島縣平町平陽裁縫女學校講習生

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇の讀者にして本廣告に依り御注文の旨御記附あらば各正價より壹割引を以て送附す

與謝野晶子女史新著（大好評第四版）

女子のふみ

實用と文學とを調和せる最新女子書翰文範

閨秀作家與謝野晶子女史が候文、言文一致、雅俗折衷等の諸文體と温健、優美、奇警、飄逸等各種の情調とを以て現代婦人界の必要に應じ實用と文學とを調和せる書翰文の一新例を示されたるもの、作例豐富、作法鄭寧、且つ一般の國語に亙り假名遣をも詳述せられたれば、女子書翰文に添ふるに通俗なる假名遣辭典を以てせる至便の好著なり

◎現代才媛諸孃必讀の良著也

洋裝全一冊極美製　正價金四拾五錢　郵送料金八錢

小笠原流家元 松岡止波子先生　大日本禮節學會長 石井泰二郎先生　共著

明治の禮式作法

本書は紳士淑女が日常心得べき禮式作法を細大漏さず圖解と共に丁寧に説明しあり

和裝頗美全一冊　正價金六拾錢　郵送料八錢

坂正臣先生書

かな帖

折本仕立奉書折全二冊　價金七十錢　送料六錢

發賣所　東京堂○六合館○東海堂○北隆館○目黑書店○前川○至誠堂○文林堂等　大阪市吉岡書店○杉本書店○盛文館○九州菊竹○長崎○京都東枝○若林

發行所　東京日本橋區檜物町　振替東京二三〇番　弘學館書店

賣捌所　東京日本橋角　振替二三八番　大倉書店

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

らい病根治新劑

藥名……レプロイス

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介によりて傳染症たるを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ。輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共壹劑分五圓拾錢特別製分拾圓拾錢

美き聲の出る新藥

發聲藥は古來甚だ多し然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし猥り本劑の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發するの方法を自得せり本劑は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑也何程音聲惡しき方又聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發することを確證す

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記臆力を增進する靈劑

記臆增進元

(藥價)七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢(送料)各拾錢宛

本劑は獨逸大醫スクリーボワト氏の新處方に基き醫學的の元理に徵し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記臆力大に增進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に增進することと誓て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絕顯著なる奇効を知れ

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速に安全に快通

流下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を連用せば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず安全に流經ず且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及び惡血毒を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々夥しき無効なる類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまず、いぼは拾日目に必ず美麗に除去すること保險附新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるること確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

以上專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

安全買物（あんぜんかひもの）

▲最も便利なる買物の方法▼

女子文壇並に少女の愛讀諸嬢の御便利を計り東京市内にて發賣する

書籍及雜誌（教科書並に醫書を除く）定價の一割引

文房具、化粧品、

小間物、玩具類、 定價の五分引

にて手數料を申受けず、誠實に御用達可申候間、多少に不拘、遠慮なく御申越被下度候、割引代金及び遞送費は一切前金にて、可成詳細に御通信願上候

東京市京橋區大鋸町十一　女子文壇社

振替口座東京第壹七貳九　用達部

▲確實で安い物を買入れる便法▼

婦女界

十一月號

◎子女を惡化しつゝある我邦の家庭…菊地大學總長

◎日本の女子は此點を改めねばならぬ…井上文學博士

◎婦人の發狂は如斯き夫に多し…呉醫學博士

◎國民道德に就いての注文…下田文學士

▲十三歳から赤貧の中で二人の弟を敎育した苦心　島貫夫人

▲車夫や立ン坊が喧嘩の仲裁までした細腰饑時代　神谷夫人

▲滿州で馬賊の襲撃に遭ひ奇計を以て免れた實驗　井上藻子

◎舞姫靜の性格……戸川殘花

▲死を決して六人の劍客と仕合ひたる當時の感想　古登子

▲馬を飼ひ釼を磨き薄給の夫を助けた當時の追懷　金田夫人

▲放蕩の男子に嫁し矯正せんとして失敗した經驗　きぬ子

▲子供の泣き癖と其矯正法……岸邊福雄

▲手の人と頭の人との相違……上野學士

▲下田歌子女史と安井哲子女史の面影

▲外交官夫人の身元調べ　お産の前後

▲御飯の食べ方季節料理　婦人の內職

一冊十五錢　六冊九十錢

懸賞文藝
和歌、俳句、短文
繪畫、習字、笑話
等の募集詳細誌上に有

東京神田　同文館　振替 二三五

女子文壇

第六年第拾四號



明治四十三年十一月一日發行

北白川宮武子擴子兩女王殿下の御平生

北白川宮武子女王殿下が、學習院女學部の專習科も御卒業遊ばされたる後、現今御平生の御動作を承るに、其後御殿内に在して、西洋音樂はピアノ、語學としては英語佛語、文學としては殊に和歌の道に心を傾けたまひ、專ら御修養中とのことでございます。御在學中も毎も御成蹟は優等でゐらせられ、學科も何れと云つて偏つて御好き遊ばすと云ふことなく、何の學科も優れてなさいました。御手蹟も御美事にお書き遊ばし和歌、作文なども好んでお作り遊ばします。先年學習院を御卒業の折、卒業生總代として御朗讀遊ばされた御作の文章は左の通りでございます。

いはまくも恐けれども、我　皇后の宮の筑波嶺のかげよりも深き大深惠もて、この學びの園を開きたまひ、春をまちえて匂ひ出づる梅の、花もあり實もある人となれかしと、我等をさとしたまひぬれば、諸諸の道の師も、恐多き御心を意として、永き年月倦まず撓まず、教へ導きませる惠によりて、我等去年の春、中學科の業を卒へ、更に專修科に入り、いよいよ學びの道深く分け入らんとつとむるに、今日しも此嚴かなる式を擧げられて、中學科卒業の證書を

たまひぬ。我等の喜びはたいかなる言葉もてかのべ盡さん、濱の眞砂の數はよむとも思ふ心はつきじ。只我等今より後も、猶恐多き御かげをたのみ奉りていよ〱ます〱學び草つみそへつゝ、呉竹の世にも出でなば姫松のみどり深く、千代のほまれもたててしかなど、ひそかに心に誓へり。さらばかしこきみさとし言にたがひまつらず、師の深きなさけにもそむかざるべし。拙き一言をもて今日のよろこびを聞えあぐるになむ。

御妹の姫宮擴子女王殿下は、當年御年齡十六歲におなり遊ばし、日々學習院女學部に御通ひ遊ばしますが宮家から學校までは僅の道程ではございますけれど御馬車にも召さず、お車にもお乘り遊ばさず、一人のお附人を連れて、お歩行で御通學遊ばします。

此の方は御氣象活潑にゐらせられ、學科も勿論御勵み遊ばしますが、他の生徒と共に能く御遊戯も遊ばします。體操とか、運動會とかにも、凡ての生徒と同じやうに何事でも遊ばすのでございます。

御晝食は御携帶遊ばして、他の生徒と御一緒に御食事をお濟まし遊ばされ、學校からお歸りになりましてから、家庭敎師に就いて、其日の學科を二時間づゝ、御復習遊ばすお定めでございます。

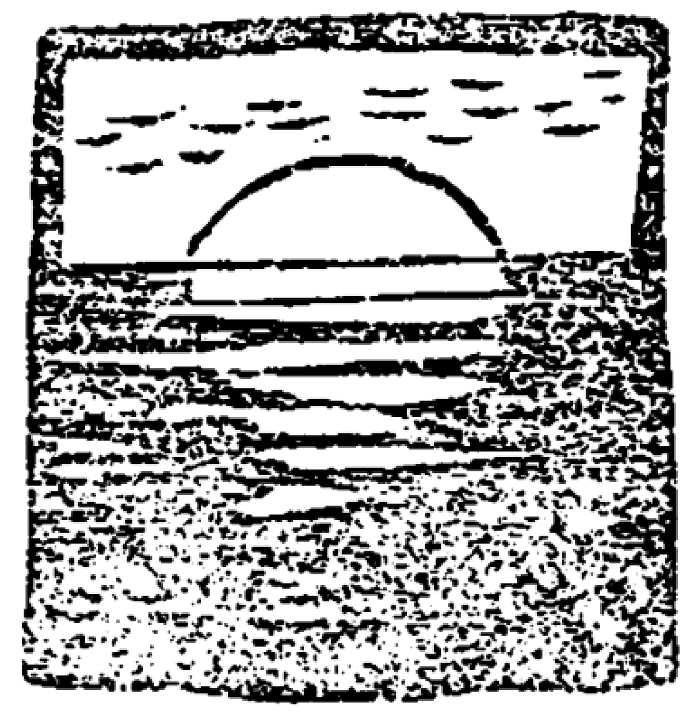
御庭の花壇、盆栽なども御賞翫遊ばします、をりをり母宮殿下、姉宮殿下と大奥の大廣庭に降りたゝせたまひて、御散歩遊ばすのでございます。霞の春、霧の秋、樹立の奥深くには幽鳥啼き、四季折々の花卉は絕えず各殿下の御眼を慰めるのでございます。

御晩餐なども、母宮殿下、姉宮殿下と、とも〲に御睦じく召上りまして、何かと世間の御物語を遊ばすのでございます。

兩女王殿下とも御衣料に就いては、別にお好みと申してはございません、平素は殊に御質素を旨と遊ばすので、御殿内に在す時も、御通學の際にも、大抵銘仙位をお召し遊ばされ、却つて身分の下の者の方が奢つてゐるやうな風でございます。(記者)

早婚と晩婚

文學博士　三宅雄次郎



早晩と云つても十四五で嫁入ると云ふ話もあるし、晩婚と云つても三十前後で嫁入るのもあるが、それらは格外れとして置いても、女は大抵妙齡になれば、それ〲處置のつくもので、然う心配するにも及ぶまい、其本人の體質にも由るし、境遇にも因つて、遲速はあるが、何うしても速い方は、親とか、兄姉とかの意に從つて結婚するので、自分の意思の定まつてない間に結婚することゝなる。遲い方は女敎師とか、何か職業を持つてゐる者であるから、結婚するにも、意思があつて、それが結婚して後の家庭の上にも影響することゝなるのであらう。

別に結婚年齡といふやうなものを一定しなくても、既に一定してゐるぢやないか、然うむやみに遲いのや速いのはない、再婚とか、後妻とか云ふものは別問題だけれど。——

結婚を呪うてみた處が何うにもならんぢやないか、遲かれ速かれ結婚せぬわけには行かない、男性の立脚地から云へば、なほ大問題かも知れぬ。女性の立脚地から云へば、先づ特別の注文を持つてゐない限りは、緣談のある時に結婚するのが一番宜いのだ、遲い速いは家の風にも由るかも知れぬ、本人の自意識が發達して來ると、多少後れる傾向にもなるだらうが、一面には又近頃早婚を望むと云つた風もある、男の方から望むのだ。

聞く處によると、此頃は男子の遊廓へ歩を入れるものが少くなつたさうだ、其等の男子は何うかどいふと

皆若い女の子を欲しがる、十八九の娘と結婚することを願つてゐる、別に深い考へもなく、華やかな生活でもして見たいと云ふことくらゐだらう。一方の女の方でも、まだ學校時代だから家庭のことも、世間のことも餘り知らずに、矢張夢のやうな結婚をする、其等の結婚した男女は、成るべく新しい家庭をつくらうとして、別に家を持つ、處が宜くゆけば好いが、まだ女の方の思慮も分別も定まつてない間に結婚するのだからいろ／＼破綻が生じてくる、此種の早婚者に限つて結果は宜くない、社會の弱者となるのが多い。

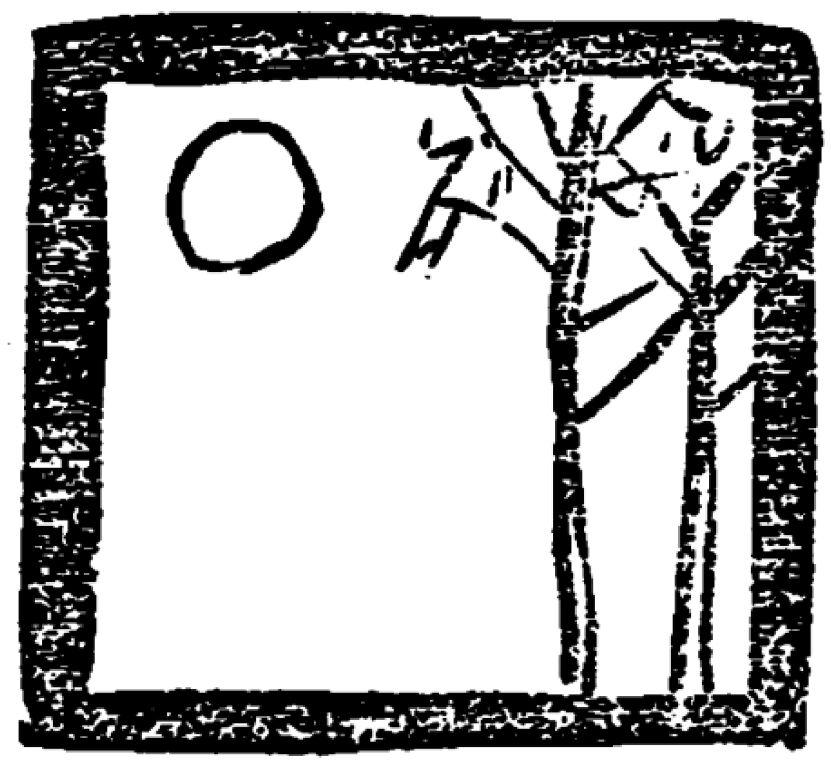
之と反對に、學校時代も經過し、家庭のことも、世間のことも、心得が出來て、思慮も分別も定まつてから結婚すると、比較的間違ひが起らない、何方にも考へて結婚したのだから、仕事の上にも結果が宜いと云ふやうなことになつて、畢竟は社會の勝利者となる譯である。

誰だつて勝利者になりたいから、自然早婚が少くなつて來るだらう、一時の現象として、早婚が行はれても、結果が宜くないと矢張むやみに急ぐべきものでないと分つて來るだらう。

何か一つ秀でた才があつて、一生獨身で立つて行かうと云ふやうな女も、偶には一人や二人はあつても宜いが、それは眞に一人か二人のことであつて、女は皆結婚するものと極つて居るから、妙齢になつて緣があつたら嫁入するのが宜い。

餘程豪い女でも、獨身で世の中に立つて行かうとするには、弊害が伴ふものだ、本人は兎に角、周圍からいろ／＼と噂を立てられる。豪いには豪いのに相違ないのだらうけれど、矢張獨身でゐるから然う云ふ噂を立てられるのだ。

それでも關はず獨身でおし通してゆかうと云ふやうな女も、今後現出れるかもしれない、併しそれは格外として取扱はねばならぬ、やはり女は緣があつた時に嫁入するのは一般的で當然のことだ、早婚と晩婚は本人の意志と、一家の都合で自然に極つてゆくのであらうと思ふ。



學校で習ふことは必ず役に立つ

學習院女學部部長　松本源太郎

◎學問は形を變へて役に立つ

學校と家庭と能く聯絡して、雙方の意思を疏通させねばならぬと云ふことは勿論だが、學校で習つた學科が、直ぐ家庭に應用出來るかといふに必ずしも然うでない、殊に小學時代とか、中學時代とか、級の低いほど、家庭と云ふものと密接の關係はない、只、級も上の方になつて、裁縫とか、料理とか、いふやうなものを習ふやうになつて、初めて家庭に應用も出來るのであるけれども、自分は學校で習ふ學科を、其まゝ家庭に應用出來ないからとて、學問の効用を否定しない、世間では學問の實用といふことを狹く見て居るやうに思ふ、成程家庭とは密接の關係はない、關係はないけれど、別の方面から考へて見て、間接には大いに關係がある。

學問といふものは今日習つて、直ぐ明日の役に立つと云ふやうな性質のものではない、もつと博い意味で考へねばならぬ、つまり學問其まゝを應用するといふことはないにしても、形を變へて應用してゆくのが、學問を役に立てる所以である、高い學問をすればするほど、役に立つ範圍も廣からう。敎師も其つもりで敎へ、生徒も其つもりで氣をつけて習はねばならぬ。

◎眼の覺めた女

今の若い女の考へなどが、以前と變つて來たと云ふやうなことも、自分は認めてゐる、尤も世間の新聞雜誌などに表はれる話で見ると、随分極端なのもあるやうだが、それらは不良い意味で變化して來たものであらう。大體には良い意味に於て變つて來たものとすれば、それは無論教育の力である。今まで識らなかつたことも覺え、考へなかつたことも考へるやうになつたと云ふのは、畢竟教育の與へた力であらう、自然に然うなつて、眼が覺めてきたのだから、一層それを良い方に導いてやるのが教育者の責任であらう。極端な方へ奔らうとするものがあれば、抑壓へてやらねばならぬ、善い意味に眼の開いてきたものは、更に教育の力で良くしてやらねばならぬ。

◎困難なる女子の立脚地

自分は斯う云ふことも聞いた、我國最高の學府と云へば女子高等師範であらうが、該校を卒業した或る女が、男子に對して憤慨的口吻を洩らしたと云ふことである、反抗と云へば語弊があらう、兎に角女子でもやれないことのない事業を、女子には與へないで、男子が幅を利かしてゐるといふやうな意味である。男子がやつて居る事業であつても、それが女子にも出來ることなら行つて宜いのであるが、未だ其處まで行くには多少のわだかまりがあるらしい、殊更男子が邪魔をするといふわけではなくても、女子には不利益な點もあるか知れない。尤も女子には到底出來ない仕事もある、又餘り極端なる運動、例へば西洋のやうに女子にも參政權を與へよといふやうなことは勿論賛成すべき限りではないが、然う極端に奔らないまでも、女子の事業の上には、男子が讓らない一例もあらうといふことを自分は知つたのである。

◎生れつきから男は男、女は女

概して一般に婦人は婦人、男子は男子と、生れつきから相違つて居るのであるから、男子は外の事、女子は内の事に努めるのが正當であらう。世の中には男子

でなければならぬ事業があり、女子でなければならぬ事業があるのだから、それ〲我仕事に忠實であれば宜い。女子は內を守ると云つても、昔からの婦人のやうに內にばかりゐるといふことも何うかと思ふ矢張外に出る機會には外へ出た方が宜いまた女が內を外にして出歩くと云ふのも本末を誤つた話で、それも不可い。學校では世の中に出て役に立つ敎育も授くれば、內にゐて爲になる敎育も授ける、學問の實用は決して狹くない、大いに廣い、さま〲に形を變へて應用が出來るのである。只眼前に應用が出來ないからと云つて學問を輕忽に見るのは甚だ間違つてゐる、世の父たり母たるものも、此意味を辨へて子女の學校に於ける成績を注意して見ねばならぬのである。





新しき婦人の世に立つべき第一要件

虎の門東京女學館監事　西田敬止

新しい敎育を受けた新しい時代の女子として特に舊來の女子以外に、心得ねばならぬ事は、いろ／＼ありませうが、今私の氣付いた事だけを、精神的方面と、具體的方面からお話しようと思ひます。

之等の問題は、今始まつた事でもありませんが、舊來の女子が受けて居つた敎育法と、現今の女子が受け又受けつゝある敎育法とは、餘程違つた所があります從つて思ふまゝ、のびゆくまゝに、其授かつた敎育法を基礎に發展せしめたならば、其所に一樣のものゝ成り上りやうは有りません。之に今甲と乙と言ふ名を附して話すなれば甲は甲で甲の發達をしませうし、乙は乙で乙の發達をしませう。兩者を同樣に觀やう考へやうしようとしても、それは出來ない事であります。そして此二つのものを、相反かぬ樣にしやうとするには其所に調和をとる、と言ふ一つがあるきりであります之と丁度同じ樣に、現今の敎育を受けた女子が、嫁として舊來の敎育によつて育てられた姑に睦み、家庭の平和を計るには此調和をとると言ふ大切な事が、何よりの必要條件となつて居ます。

折角新らしい敎育を受けたのに、たゞ姑の御氣嫌をのみ苦勞病みにして、全然捨てゝ了ふのもほめた話では有りませんが、新しく受けた自分の敎育を振り廻して、姑を姑とも思はぬ樣なふるまひは、無論惡いに定まつて居ます。

いつの世にも姑と嫁と調和するには、嫁には犧牲的精神がなくては出來ない事ですが、現今程又一層鮮明な象を以つて、迫つて來た時はないでせう。從つて之にともなふ犧牲なるものも、舊來の女子と異つた重い犧牲を要する譯であります。

ところで只今の女子の方は、此犧牲的精神のやゝ乏しい方が多い樣にも見受けられますが、之は舊來の女子に立ち勝つて、一層重大な犧牲を拂ひつゝなほたふれない所の、舊來の女子に立ち勝つた覺悟を持つて貰ひたいものであります。

次には體格でありますが、體格もだん／＼とは改まつて來るやうでありますが、世の中がかう言ふ樣になつて、世界を相手にすると言ふ、大なる責任が肩にかかつて來たのに對して、男子もですが、殊に日本婦人の體格は今のまゝではならないと思ひます。

夫に從つては、太平、太西の洋をも渡つて、遠く異國に、異國の人を相手にして行かねばならぬ樣な事が間々あるのですから、精神はもとよりですが、體格も外國婦人に對して劣らぬ樣、充分に、注意されたいものであります。舊來の婦人は、概して體格を好く發達させると言ふ事よりも、美しく發達させると言ふ事につとめた傾がありますが、無論女子は美しく優しく發達させると言ふ事も必要でせうが、之に拘泥して其發達を妨げる樣な事は、新らしき婦人として、決して取るべき方法ではありますまいと思ひます。

よしなし言

むさし野

▲人間は一生眞に解放ざるゝことはない、何に囚はれてゐるかと云ふことすら分らないで、解放を望むは不心得であらう。

▲如何に自信の上に立つても、社會の上に立つことが出來なければやはり弱者である、えらくならうと思ふ女も先づ常識を養はねばならぬ。

▲男は女の爲に大いなる犧牲になつてゐる、女も亦男の爲に犧牲にならねばならぬ、兩者とも犧牲の重荷を輕くしようとするには、男對女、女對男の問題でなくして、人間對自然の問題であらう。

▲文章詩歌の類の能く出來ぬ女は大抵墮落せず、能くも出來ないくせに眞似でもしようとする類の女は最も危險である。

▲穉きものは穉ならしかるべし、早くさとり切つたものはものにならぬ。

▲若くして餘りに用心深い女は、親しみがない、且油斷がならぬ。



婦人に出來やすき小供の觀察

文學士　倉橋惣三

◎婦人でなければ出來ない

兒童研究といふことも、之を學問的に言へば相當豫備知識も要するし、それ〴〵研究上特有のものが必要なわけであるが、單に素人的に兒童を視ると云ふ事ならば其れ程の騒ぎもない、是れにはいろ〳〵な方面から婦人が觀るに最も便宜を有してゐると思ふ。

先づ赤ん坊が生れてから三歲位まで、哺育一切の重もなる部分は婦人の專有するところである、つまり其の研究の對象たる赤ん坊の傍についてゐると云ふ其の一事が研究上の最大要素なんで、男子にあつては太だ困難であるが、婦人には全く其觀察の自由を存してゐる。尤も其の觀察と云つたところで其の人の書いたものが、直ちに學問の根柢となると云ふ事は困難であらうが、正直に、精細にそして確實に觀察して蒐集した材料が斯の研究についていかに多大の功を有するかは測り知り難いものがあります。

今までにもアメリカの例について云へば、シンと云ふ婦人が、まだ母とならざる時、其の姪を研究して、生れてから三歲の時までの感覺、感情、知識の發達等を精密に觀察し、一々之を詳しく記載したが、若き婦人シンの手になつた此の材料は、其後「赤ん坊の傳記」と題して世に公けにされ、兒童研究上立派な材料を供給した、後には其獨譯までが出來てゐる。

も一つはムーア夫人と云ふが、自分の兒童を同じく詳細に觀察し、米國に於ける心理學專門の雜誌の特別

號によつて發表され、是れも大切な材料となつてゐます。

是れらは皆婦人に特有な、一つの事に忍耐してやると云ふ事と、綿密なる眼孔を以て調べ遂げると云ふ事と、今一つは云ふまでもない婦人のやさしさで以て兒童を取扱ふに適してゐるところなどから斯く細かき觀察が出來るのであります。

◎觀察だけの事を發表せよ

さて兒童の知識が漸く進み小學校に入つてからでも女の先生が細かに研究する便宜を有してゐる、教場のみならず其周到なる配慮は自から兒童に接する機會を多からしめ、延いて研究する上にいろ〳〵便宜を有する事と思ひます。

今婦人が何か一つの學術的事業をしやうと云ふには勿論或る場合にはどんな事でも出來ない事はありますまいが、斯かる便宜を持てゐる事と、優美な性質を有してゐる事に於いて、若しその學問的研究が出來得るならば、婦人に在ては至極適當な事業かと思ひます。

我々兒童研究者に取ては廣く材料を得たいと云ふのが目下の急務なので、わざと兒童に接して模索したものよりも、自然に伴ふ結果として、其の觀るところを發表すると云ふ人があらば結構だと思つてゐるので、殊に思ふのは優しい婦人達が、其の事に就いて論文を出すとか、雜誌書籍にするとか云ふ事は特別の知識を有する事だから不可能としても、單にさう云ふ材料を書翰として送るとか云ふ風に、材料の供給をして下さる丈けでも、其れが立派な意味のある事で、よしや其れが直ちに學者の事業とはならずとも、自分の子の爲め又是れから生れて來るものゝ爲め、學術の爲め一種有意味のものとなるでせう。

◎文學に忘れられたる子供

それから是れは學術的兒童研究としては趣が變りますけれど、廣き意味に於ける問題としての希望を云へば、どうもての兒童を取扱つた文學といふものがない

事である、無論文學上の立場からはどう云ふ事か分らぬが、昔しから文學の中に兒童と云ふものを道具に使つたものはあるが、兒童を主題としたものは少い、殊に日本に至つては貧しいもので、よく歌とか何とかに子供が出てゐても、それは兒供を使つて大人の情懷を洩らしたと云ふものばかりである。

近來婦人で小説を書く人も少くないが、專門家は別として、さう云ふ方〲に望むのはこの兒童を主とした文學と云ふものを興して貰ひたい、これは前述の兒童觀察と共に尤もやさしき婦人に應はしい事と私は思ひます。

更に私共日頃思つてゐる事は、女學校あたりの作文の課題などに於ても、子供に對する婦人の興味とか、周到な注意とか、さう云ふものと關聯して、よく兒童を了解し、よく描寫すると云ふ事をして貰ひたい、そして優美なる本然の性を發揮するに應はしいものとならしめたい。それらも子供に注意する一つの方便でせう。

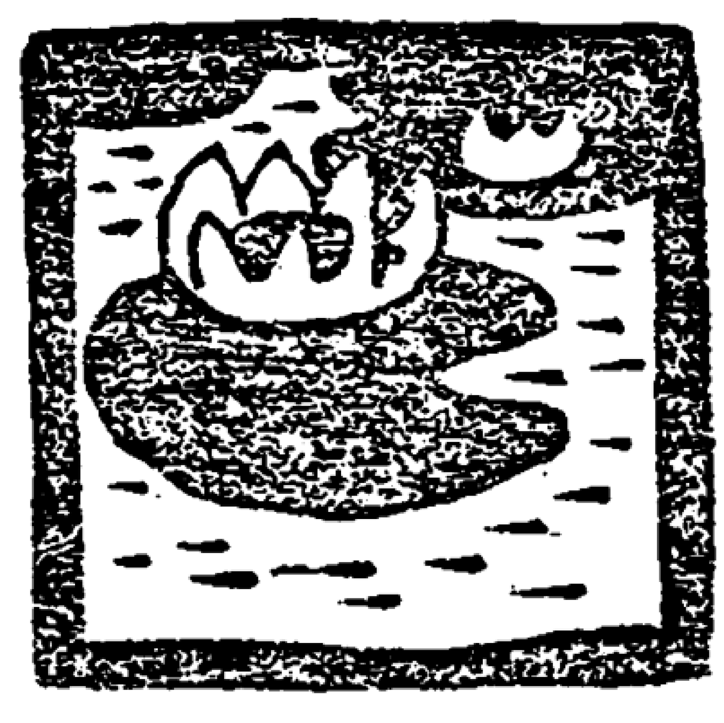
◎子供の心に接近せよ

斯く學問的に又文學的に研究する——語を換へて云へば即ち子供の心と自己の心と接近する——と云ふ事は、實に一方に於ては婦人の精神修養と云ふ上について大なる功果が伴ふ事と思ふ。兒童の中に潜んでゐる美點と云ふものが、研究してゐる者の精神に感化を與へ、兒童を益すると云ふよりも、爲めに自己が益すると云ふ結果が始終出來るのである。此の一點を以てしても若き婦人の兒童に興味を持たるゝと云ふ事は意味深き事である。元來、婦人は兒童が好きだと云ふ事になつてゐるが、これまでは唯愛くるしいとか何とか多く外形の美を云つたものである、しかし是れからは更らに其の内面的精神的愛を感得すべきやう心掛けられん事を希望するのである。

寢ん〱よ、おころりよ
おころりお山の兎は、なぜにお耳が長ござる
お母さんのお腹にゐた時は、
枇杷の實笹の實たべまして、それでお耳が長ござる

外交官の若夫人を訪ふ

一記者



外務省参事官佐分利貞男氏の令夫人、佐分利文子様は小村外務大臣の御長女です、實家に居らつしやる頃は、御病身の母君に代つて、家庭のこと萬端、父君のお世話までも能くなさいましたので、文子様でなければと言はれた方でございます。只今の御宅は小石川江戸川畔で、閑靜のお邸宅でございます、お忙しい處をお邪魔して左のお話を伺ひました。外交官の若夫人となられてから、一層お品も好く、お年齢は二十三四とお見受け申しました、別にお派手づくりでもございませんが、何處となく奥床しい方と存じました（記者YT女）

◎我儘を制してゐる

宅には舅姑もなく、小姑もございませず、ほんの主人と二人限りでございまして、まことに氣樂でございます。それでも一家の主婦となり、家庭を預つて居るとなりますと、日々の買物や、仕事、暑さ寒さの移り變へは如何しようなどゝ、それは〳〵相應に心配なものでございます。

主人も多用で、朝は早くから出かけ、夜は六時七時となつて、隨分疲れて歸りますから、何うして氣を休ませ、心を慰藉めたらよからうかと、いつも心懸けて居るのでございますけれど、氣轉の利かない方で、ほんとにお恥しうございます、それに至つて我儘ですから、後悔することも時々でございます。

我儘を制する事が何より肝腎であると思ひます、この我儘がとかく人を邪道へ導くもので、これさへ無ければ、何時までも常に溫かき交情を保つて行けるのでございますが、さう思ひながら、遂々我儘をして居ります。

七月上旬から身體が惡うございまして、九月になりましてから、十日間葉山に保養に參つて居りましたが其間に自分の主婦として至らないことや、又我儘なことを心底から考へました、時々かうして沈默して考へるのも、自分の爲めに好い修養になると思ひました。

◎時間を無益に費さぬ

一體私は極く子供の時から、我儘の性質でございまして、束縛されるのが、大嫌ひでございました、身體も餘り健康な方ではございませむので、兩親も餘り干涉も致しませんでしたが、一家を持つて見ますと、私の爲めには、却つてやかましく云つて呉れました方が宜しかつたかとも思ふのでございます。

自由などゝ言ふと、大したハイカラな事を申すやうでございますが、何にも勝手に遊んで居ることや、又は爲すべき用事を捨てゝ置いて申す譯ではございません。たゞ壓制と言ふことから逃れるばかりで、別に社會を自由に拔手を切つて、行かうと申すのではございません。

私も健康でない故に、思ふやうには出來ませんが、仕事を一寸延しに延しましたり、又は時間を無益に費したり致しますのは、きらひでございます。多少今日は何と何を致して、明日はどれとどれとを致さう位の目算は立てゝ置きますが、まあ、大抵客來やら、不意の用事やらで、せいぜい目算の半分出來れば、宜しいのでございます。

◎婦人は社交界に出よ

毎年秋になりますと、交際期に入るのでございまして、はや今年も其時期に入つて居るのでございますがこの交際といふことは、最も必要なことでございまして、社會のいろ〳〵な關係から、多くの人々が集るのでございますから、最も注意せねばならぬかと思ひます。

人と人と接すると、禮義といふことが分り、思遣りが深くなつて、自然に道德的生活を味ふ事が出來るや

うに考へられますが、孤立で深窓の裡に蟄居して居ては、衣食住の慾望を充たすに過ぎないので、到底婦人の價値を發揮することが出來ないやうに思ひます。それに婦人は智識が單純でございますから、その見聞は僅かに一家の中に限られると云ふ風でございますと、人情に疎く、事理に暗くといふ事は免れません。其爲に男子の側から、婦人といふものは、大事を共にはかることが出來ないかの樣に、見限られるやうになるのでございませう。

所が幸に交際社會に出て居りますと、社會上の智識が頭腦に入つて參りますから、それが爲めに人情に通じ、事理を解するやうになつて、自然卑屈でなく婦人に通有の最も忌むべき、最も厭ふべき一種の性癖から脫れて、自然に人格が高くなるやうに、思はれるのでございます。

◎交際の上手な奥樣

岡部樣の奥樣や、佐藤樣の奥樣方は、まことに御交際のお上手なことは、私が申すまでもございませんがほんとに一寸でも眞似をしたいと心がけて居りますけれど、今まで實家に居りました時は、母が永年の腦病でございまして、看護などして居つたものでございますから、あまり出來せんでした、止むを得ない場合には、ほんの娘としての御挨拶をいたした位なものでございます。

此家へ參りましてから、時々出て居ります、語學でございますが、二葉會の方へ長く參つて居りますが、一家を持ちましてからは、そんなに本ばかり見ても居られませんし、それに一日に、一時間や二時間習つて參りましても、中々はかどりません、實家に居りました時に、十分にやつて置いたら、宜かつたと後悔して居ります。

服裝でございますか、たいがい和服でございます、着物も自分が好いと思ひましても、他の目から見ると好くなかつたり、自分が氣に入らない色や、柄でも人目から見ると、よく映るやうなもので、他から見さだめて貰ふのが一番宜いやうです、江木樣の奥樣や、日向樣の奥樣方はお見立がお上手でいらつしやるやうでございますね。

血氣に任せて身體を損傷してはならぬ

女子高等師範學校教授　武田錦子

若い女のかたに氣をつけて戴きたい事は澤山ありますが、其うちの一つとして、しかも重大な事を若い方方は何んとも思つて居らつしやらないやうでありますそれはそれ〴〵皆様の健康についてゞす。

何んとも思つて居ないと言つて、何も目に立つて知れる事を、聞き付けないと言ふのではありません、わざと流行病にかゝらうとする者もなく、わざと手足を傷付けたる者もない、さう言ふ事は目に立つて知れるので、誰れも彼れも氣を付けますが、日常の衛生に至つては、自分は若い血氣盛りなので、氣も付かないで居りますが、他日に及んで必ず其反動のあるやうな事を、平氣でして居る事があります。たとへば誰れに例を引くよりも私が何よりの宜き手本であります。私は御覧の通り、かう骨と皮ばかりの様に痩せて居りますが、若い頃には實にどうしてかう肥つて居るかと、自らも怪しむ程肥つて居ました。

丁度私が米國に留學して居る頃でした、米國ではジヤガ芋を喰べると肥ると言ふ事が、昔からの言ひつたへに成つて居ますが、よく寄宿舍でジヤガ芋の料理をしました、然し私は元來がジヤガ芋を餘り好みませんので、いつも喰べないで居ますと、友達がなぜ喰べない〳〵と聞きます、私は別に理由とては無いのですから、唯きらひです〴〵と答へて居ますと、とう〳〵皆してミス加藤は（私の生家の姓です）餘り肥つて居るから、此上肥るを怖れて喰べないのだと、大笑ひをされた程、肥つて居ました。其れが若い勢で無鐵砲に勉

强の度を過して、お食事を丁度の時に戴かなかつたり、さうかと思ふと、試驗休の時など、一時に氣がゆるんだ樣な氣がして、好きなものをつひ戴きすぎたりして、とう〳〵終ひに重い胃腸の病氣に侵され、殆んど一時は生命も危い程の重體に陷つて、それからこちら漸く全快はしたものゝ、御覽の通りやせて了ひました。今私が敎へて居る生徒なども、どうも月曜日には顏色の勝れぬものが有り勝ちです、これは日曜日に必ず何か不養生をして、お腹の具合を惡くして居るに相違ありません、お腹と腦とは密接な關係を持つて居ますからお腹が惡いと、頭が重かつたり、痛んだりして、つひ授業時間を呆然としたまゝ、或は苦しんで過さねばならぬ樣な事になるのです。

此程も家の書生が、夜間こゝの板の間をしきりに往つたり來たりして居ますから、何をして居るのかと聞きますと、今夜餘り御飯を澤山喰べ過ぎたら、お腹がはつて苦しくて本が讀まれませんから、少し運動して居ますと答へました。苦しくて本が讀まれないと言ふのは、卽ち腦をゝかされて居るのです。こんな事は女の方には餘りありますまいが、何事でも度を越えますと必ず身に害になりますから、よく〳〵御注意なされたいものであります。

終りにこれはほんの一寸した事の樣ですが、夜燈火の下で本を讀んだり、お裁縫をしたりするのに、燈火の方へ向つて誰れしもしごとをして居ますが、彼れは目の爲に、どれ程害になるか知れません、光線が眼にばかりきて、手元は一向明るくないのに氣づかれないかも知れませんが、燈火に直接向つて居れば、手元はかへつて暗う御座います。どうしても、眼の衞生には、燈火に脊を向けて、本なり裁縫の品なりの所を明るくしてするのが宜しいと思ひます。

單に燈火のことばかりでなく、若い女達は凡てに於て、自分の身體といふことを忘れさうで不可ませんが何をするにも健康が資本です、不健康の者はどし〳〵社會から逐ひ落される憂ひがあります、氣をつけて其健康の衰へないやうにせねばなりません。

女の若き時は美しきが上にも美しかれ

進歩したる根本的化粧法

百合子

▲根本的化粧法　化粧法と申してこれを取り立てて申す程の事もございませんが、一たいに進歩いたしました。けれどどうも表面計の様に見えますので、私の思つて居る事を腹藏なく告白？もをかしいのでございますがいたしますと、洗粉や、クリームや、石鹼の精選計いたしましても根本的の水とか、食物とか、運動とか、睡眠とか、それ〴〵美容に適切なものを等閑にする力が多くはないかと思はれます。

▲水を選べ　先づ水ですが、中には湯水をさけて、ミルク浴をなさる方もございますが、萬人これを行ふ事はなか〳〵かたい事でございまして、先づ石鹼のよくとける軟水をお選び遊ばしたらよろしからうと存じます。

▲野菜と果物　次は食物でございますが、野菜類は新鮮なものでさへあれば、何を召し上つてもよろしいが、果物は酸味のつよいもの、未熟のものを避けさへいたしますれば、却つて美を增す助けとなるものでございます、殊に林檎、葡萄、梨の類は、毎食後お進めいたしたいのでございます。しかし酸味のないものでも、柿はなるべく節したらよろしうございませう。茶、コーヒーなどもよろしくはございません、酒は無論でございますが、あまり脂肪の多いものもお避けになる方がよろしうございます。

▲食後の運動　運動は朝食前一時間、午食後二時間位戸外に出て充分胸を開いてなさるがよろしい。その他はやはり室内で動いてゐられるでありませう、晩

餐後も出來得るならばお進めいたします。

▲**睡眠の時間**　睡眠時間は六時間乃至八時間位。夜は早く床に就いて、朝は五六時に床をはなれるやうに。

▲**笑を含んで眠る**　床についてからは無念無想、美人には糠味噌くさい妻は落第でございます。西洋のある有名な女優が、口元に笑みをふくんで眠ると、老年になつても若々しい顔色を保つ事が出來ると申したさうです。

▲**心持**　その外の注意は、心の持ち方と精神作用です。

くよくよ物を案じてゐる人に、どうして美が求められませう。

今はもう蒼白い皮膚は捨てられて、紅顔の美しい人がもてはやされます。

▲**間接の日光浴**　それで日光もやはり皮膚には必要なのでございますが、これを直接受けましては、切角以上あげた處の美容法も何にもなりません、と云つて部室の隅に計りは入つて居りましたならば、日陰の瓢簞宜しくなつてしまひます。そこで間接に日光を受けるのでございますね、外出するには洋傘を透してとか、青葉を透してとか、室內ならば障子を隔てゝとかそれ相當に受けやうはございませう。

▲**汗を拭へ**　日光と同じく、色を黑くするのは汗です。

汗は水と鹽とから成立つて居りますので、早く出ました時拭ひ取つてしまはないと、色素が鹽に刺戟されて沈澱いたしますため、濱邊育ちの女のやうになつてしまひます。

これを防ぐには外出する時、ハンケチをレモン水にひたしてお持ちになれば、この憂ひはございません。(量はレモン油二三滴に水一合です)

▲**入浴の度數**　入浴は毎日もしくは隔日、洗面は日に三回。度數を多くいたしますと、脂肪を消耗いたさせまして、早く皺を作るうれひがございます。

▲**多くの化粧品**　これから化粧品の事にうつりま

せう。

昔から化粧水は雪の水に、ヘチマの水とかうきまつて居りました。俗謡に、

富士の白雪や朝日でとける、
とけて流れて三島へ落ちて、
三島女郎衆の化粧の水

今はローヤル水、美顏水、二八水、レート、ライラック水、いろ／＼出來ましたが、ヘチマの水も捨てた物ではございません、その他胡瓜の水、西瓜の水もよろしいのでございますが、一番廣く行渡つてゐるのはレートのやうでございます。



村岡章寄贈

白粉も粉白粉、水白粉、練白粉、それには又たつた御園、水晶、大學、クヰーン、クラブ、それ／＼ございます、この外練紅、眉墨、外出用の紙白粉。

一寸三越あたりへ參りましても、紅白二種位に思つて居ると大まちがひ、青、青白、黃、肉色と、皆薄すりと、それ／＼色が出て、その人の顏に合ふやう出來て居ります。

▲美顏術の應用

まだ化粧術の發達しない故かしれませんが、日本では美顏術へなんか行くのは、よほどの者と思つてゐる傾向がございますが、男子の方はむしろ三分の一位を占めて

居る、そして文士の○○樣なんか、牛込のある處では上客ださうでなど〵口さがない京童が――。

そこにゆくと、さすが外國です、凡てが大仕掛なだけ、お湯に行く位にしか思つてゐないやうです。

朝起きると髮もといたまんま出かけて、歸つてから髮結に行くと云ふ風。

美顏術に行つた記など〵大袈裟にかくやうなものではないのですが、機械が機械ですから、美しくなるのは請合でございます。

これと一つ〳〵取立て〵、美しくはないが、美しく見えるといはれるのは、化粧が上手なのです。

▲秋の化粧法　これから秋の化粧法を申しませう。

先づ堪へられるだけのお湯に手拭を入れて、五六回むしますと、皮下にかくれた塵や脂肪が浮みます。其處へ石鹼なり洗ひ粉なり、すり込みまして、指先でやわらかに圓をゑがいて、マッサーヂいたしますと、血液の循環は好くなりますし、汚物はすべて石鹼とか、洗ひ粉とかに吸ひ出されまして、光澤が皮膚面に輝くやうに出ます。

それからクリームや、レートで、下でしらへいたしまして、白粉をはくのでございますが、

▲溫湯と熱湯　前に申した溫湯の事につきまして脂肪質の方は微溫湯に、肥滿の方は冷水位、やせた方は熱い湯、しかし熱いお湯は皺がよりやすいのでございますから、長く蒸しませんやうに、又三十倍の硼酸水を熱くいたしまして、前のやうに蒸し、直に冷たい牛乳で數回洗面いたしまして、やわらかい絹のやうなもので、濕氣をスックリ取る方法を用ひてもよろしうございます。

▲秋は糠を使へ　秋はどちらかと申しますと、脂肪の缺乏して居る時でございますから、石鹼はなるべく避けて、糠がよろしからうとぞんじます。

▲美の神に對する禮　扨お洗ひになりましたらごく老年の方ならチエリバウダーを、生地のやうに叩いておきます。お若い、殊に人生の花といふ時代には美しい上にも美しくするのがゴッドに對しての禮では

ございますまいか。

▲白粉の刷き方　そこで、レートなりおぬりになつて次にグリーム（植物性の物）をまんべんなくすり込みます。充分すり込んでから、柔かい紙又はなめし皮のやうなもので、拭き取りまして、水白粉をうつすりとはきます、これを二度くりかへしまして乾きましたら、こん度は粉白粉なり、練白粉なりぬり込むのでございます、そうしてぬり込みまして浮きを濡手拭で押へました上を、また化粧水でサーつとなでますと、大抵はげるやうな事はございません。

▲紅の引き方　紅は薄く唇に引くのがよいやうです、頰紅は上からいたしますと、さも付けたやうになりますから、水白粉にまじへて付けて置きますと、その上に白粉がのりますので如何にも天然の血色の良い人のやうに美しさも一層引立ちます。

▲眉のつくり方　次は眉でございますが、柔かい鉛筆をつかふ方もあり、眉墨を引く方もございますがすべて自然の生え工合に添ふて、薄く引いたなら浮き上つて、顔全體が明るい華やかなものとなります。使ひ殘りの紅は鼻の穴と耳へうつすりおはき遊ばせ、尙更釣合がとれて美しくなります。

▲手に及んで、しまひ　洋風にいたしましたなら、尙眼縁の上下を青くしたり、睫毛を黒くチックで塗つたり、いろ〳〵ございますが、一通りは、これで終たのでございます。けれどお顏が如何程お美しくつても、手が眞黑では興がさめてしまひますから、それでよく石鹼でおきよめ遊ばしてから、サヽクレをとつて、爪磨粉でみがき、磨かなくともよろしうございますが、化粧水をぬつて、水白粉をつけ、紅を爪際に薄く入れて置きますと、如何に美しうございませう。

以上は斷片的でございますが、化粧法の大體に渉つてお話した積りです、一つ〳〵のことに就いては又それ〴〵詳しい心得もございますが、先づ大體を心得て居れば、後は諸孃のお手際でございませう。

各國の化粧法もございますが、後日に申し上げる事として、長くなりましたから、一寸切つて置きます。

瓦斯を經濟に使ふ注意

よし子

瓦斯は使用方一つでどんなにでも經濟にやれるのです、時々石油や薪炭などよりも、不經濟だと申される方がありますが、之れは使用法を十分に御存じでなく只だ瓦斯の便利に任せて、過度に使用されるからであります。

　私どもで先月數年居りました下女が歸りましたので直ぐに代りを雇ひましたが、瓦斯の使用量が前の下女の時よりも、倍に使用して居ると云ふ有樣で、尤も使用法も十分に敎へて置いたのですけれど、やはり慣れない故であらうと思ひます、之れに付いて考へても、使用方一つで十分に經濟が取れる理由が分ります。

　炊煮ものは瓦斯を點火しない前に、この次にはこれ其次にはこれと云ふ風に、ちやんと準備した上で點火すると、瓦斯量もそんなに入らず、一々消したり點したりする世話も入らないから、マッチの冗をすることもありません、準備しておくことを忘れてはなりません。

　マントルがよく破損すると申されますが、これは麻か木綿に金屬性の藥品をつけて、燒いて製したものでつまり金屬の網ですから、かなり強い筈です、使ひ方一つで四五ヶ月は十分に使用されます、私どもでは八ヶ月間も使用して居ります。

　尤も掃除する時に、下女がはたきで器具を強くはたいたり、又は子供がいたづらして毬などをベンタント（天井につけてある棒）に打あてたりすると、マントルが破損することがある、それを云はずに、自然にマントルが弱い爲めに損じたかのやうに言はれるのでせう。

　瓦斯の燈を點火します時は、始めにメートルのネヂを開いて置き、それからランプの近くでマッチを點じて、之れを火口にあてながら、器具のネヂを開きます

と、靜に點火することが出來ますが、若しもネヂを十分に開いておいて點火すると、瓦斯が燃えずに惡臭を發し、時としては大きな音がして、點火することもありますから、使用に慣れない方は、特に注意をしなければなりません。

瓦斯の噴出が烈しすぎると瓦斯の消費量も多く、それこそ不經濟でありまして、其割に光力の少ないものでありますから、然ういふ時にはメートルまたはランプのネヂを少し加減することを忘れてはなりません。

瓦斯竈、七輪、暖爐は空氣を混用するのでありますから、瓦斯かアルコール火の樣に、青い色に燃えなければなりません、普通の燈火の樣に赤色で燃ゆる時は瓦斯の消費量が多く、火力は却つて弱く、煤がつきますから、火元の風口をあけて、青く燃ゆるやうにし、それでも直らなければ、會社へ通知をするやうにしないと間違ひを生ずることがあります。

計量器、之れには要水と乾燥の二種ありまして、瓦斯の消費量を計るに、必要な器械ですから、叮嚀に取扱はねばなりません、要水器の方は、冬期になると器內の水が凍つて、瓦斯の通過しないことがありますから、器中に熱湯を注入し、又毛布か藁等で器を覆ひ置くとよろしうございます、乾燥器は薄き鐵板で作つてありますから、重いものを載せない樣に注意しなければなりません。

婦人方は時々計量器を調べて、日々の消費量を計りそして瓦斯を使用されると、經濟ですけれども、未だ計量方を知らない方が多からうと思ひます。

瓦斯の炊煮ものは、嗅がすると申される方もありますが、十分に注意して使用すれば、決して嗅ひなどする氣遣はないのです、下女などが時々早く煮ようと思つて、ネヂを多くあけるから、鍋の底より赤火が周圍にあふれ出て、其故に蓋まで燻ることがある、多分こんな時に煮たものが嗅ふのであるかと思ひます。

元來が薪や炭より經濟的になる筈ですから、之を不經濟に使ふと云ふのは、使ふ方法が下手なからでせう毎月經驗して後々の注意をすべきでせう。

性慾の抑制

產科婦人科專門醫學士
北畠孝夫

童女と處女

小兒時代を過ぎて未だ結婚せざる女子を處女と云ふ、故に處女とは十五六歲より二十歲前後乃至三十歲に至るも未だ結婚せざるものに與ふる名稱である。十五六歲以前に於ける女子は小兒の部に屬し所謂童女と名く可きもので、同時代に於ける男兒、卽ち童男と、その生理上には格別に異なれる點を見ない、然れども十五六歲以後、春氣發動期に達すれば、男女兩性の間に於て生理的に種々の差異を生ずるのである。今玆に未婚時に於ける女子の衛生を說くのは十五六歲より二十歲前後の處女（狹義に解釋せる處女）の範圍內に於て述ぶるのである。

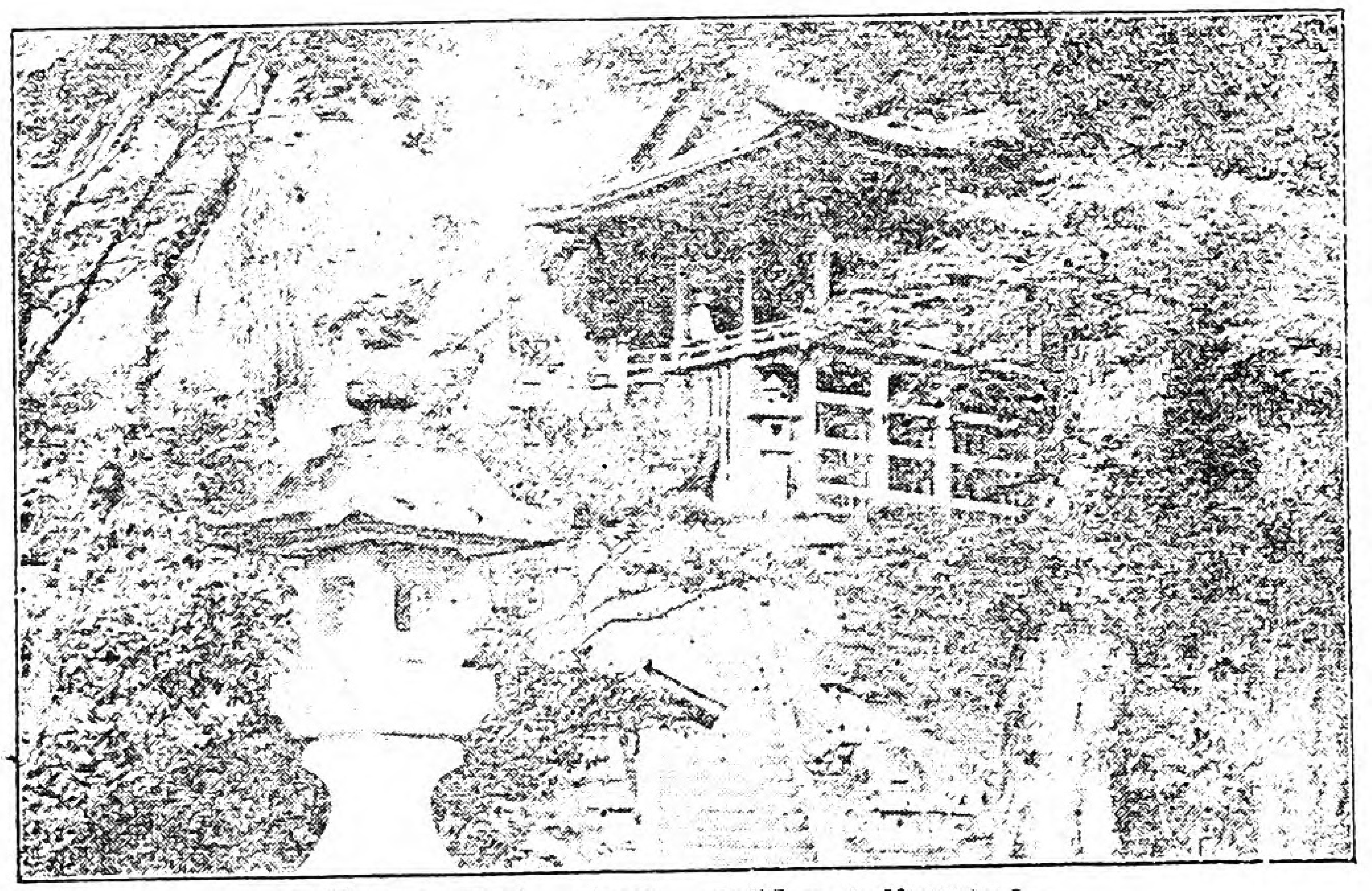
春氣發動期の現象

十五六歲はまだ小兒期を過ぎて間もなき時代なれば殆ど小兒に等しきものと見て大差はないが、最早や十七八歲となれば、身體及び性質に於て餘程異なりたる狀態が現はれる。十七八歲は春氣發動期と稱へ女子の成熟期である、此時になれば女子の性質及び身體は一變し、所謂ゆる女らしくなりて、今までは物事に頓着なく跳ね廻りたるものも內氣になり、柔和となり、兎角物事に羞恥の風情が見ゆるので、全く性質の一變したる實現である。又た身體の變化に就て云へば、先づ乳房の發育が殊に著く大く且つふくやかになりて、最も人の眼につく變化である、その他全身に脂肪漲り增し、女子の肥え太れる時代は此春氣發動期に在る、また生殖器の發育及び變化も頗る著く、生殖器の全部は此時に於て婦人の天性を

略ぼ完成し、月經と云へる生理上の一大變動起り、卵巣よりは毎月成熟したる卵を排出す、之を生理學上にて排卵機能と名くるのである。月經と排卵機能の出現は、女子の春氣發動期の到達を證明するの特徴である。女子の生殖器全部は春氣發動期に於て、全く成熟するのでなく、通常二十歳に達して、初めて全然完成し、婦人の資格を備ふるに至るのである、故に女子の十七八歳より二十歳迄は發育の多大なる時である。

性慾の湧出

女子は十七八歳に及びて春氣發動期に達すれば、性質及び身體の變化を來すと共に、性慾、言を換へて言へば情慾なるものが自然に湧き出で、精神界は殆ど之が爲めに支配せられ、多く良からざる方に誘惑され易いのである。情慾は自然より喚發せられたる生理上の現象で貴賤貧富の差別なく此時代に於ける一つの出來事である。情慾の命ずる儘に活動すれば敢て人類以外の生活體の動作に異ならざる行爲を行ふに至る、然し情慾縱令ひ動くも之を能く制御し得るは、人類固有の道義心と智能の働きであつて、社會は之に依りて秩序を保ち得るのである。然れども青春の時代、即ち春氣發動期に於ては、此生理的自然に呼び起されたる情慾の爲めに、種々の方面に於て身を傷ひ家を破るものは決して少くない。近來世人の口に膾炙せる自然主義なるものは、畢竟春氣發動期に於ける情慾の發現を制御せざる儘に、自然天然に委して奔逸せしむる趣旨に異らざれば、左なきだに情慾に渇せる青年女子



加賀那谷寺の觀音　堺市　足利きみ子寄

は自然主義なる假面の下に、縱橫その意志と行爲を恣にすれば、到底身を傷ふの結果を來す可は、火を睹るよりも明らかである、故に極端に言へば自然主義なるものは、未婚時に於ける女子の衞生の破壞者と見做すも敢て不可はない。

未婚時に於ける女子の衞生法には種々の條件ありと雖も、先づ此情慾を能く牽制し、且つ之を調和し得るの方法を講ずるは、大體に於ける衞生法であらう。

恐るべき結果

情慾の奔逸を制御し得ざるの結果、如何なる不良影響と惡結果を來す可き哉、之に就て多言を要せざるも已に讀者諸孃の首肯する所であらう、畢竟之に促されて或は淫事に荒み、或は手淫に耽りたる結果腦脊髓神經症に犯され、青春の覇氣を頓に挫折し、身神共に疲勞衰弊し、不眠、健忘、倦怠、記憶力減退等を來すのみならず、然かも病勢尙ほ進增すれば遂に神經衰弱精神病に陷る場合あり、或は又た他の神經系統の疾患に犯さるゝ場合もあり、加之ならず、手淫の結果、種々の生殖器疾患を發生する場合は少くない、未婚者に於ける生殖器の疾患は、既婚者のそれよりも統計上少なきは、他に種々の原因ありと雖も、余等婦人科醫として屢々之を實驗する所では、多く手淫に原因するやうである。

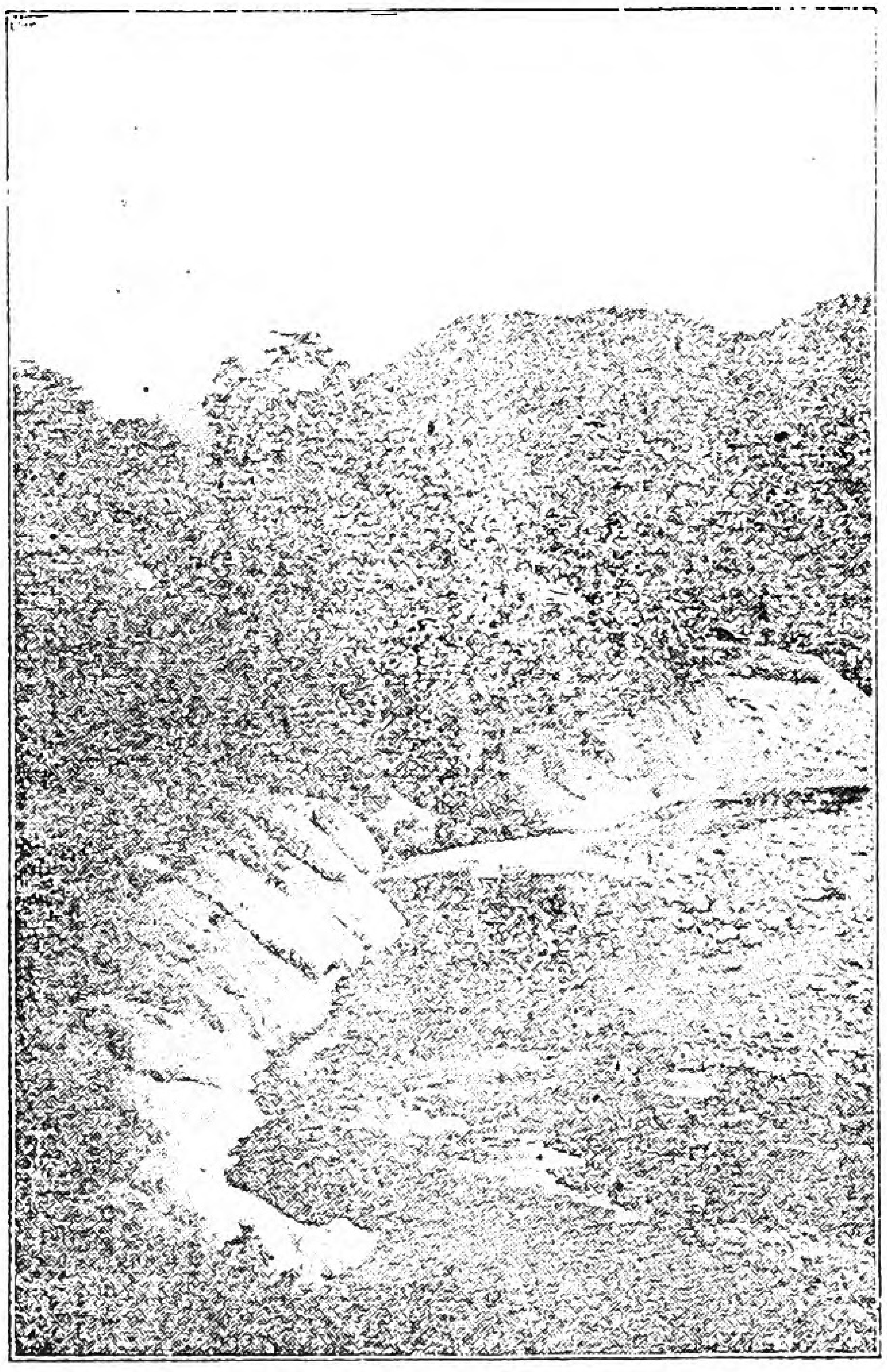
治療の困難

斯くの如く情慾に制御する所が無ければ、手淫に耽り淫事を弄びたる結果は、遂に恐る可き神經系統の疾患及び生殖器系統に發せる疾病となるのみならず、尙ほ延て全身に害毒を及ぼし、種々の疾患も之に因りて起る場合少なからず、一度是等の疾患に陷れば、治療甚だ困難であつて、治療の爲めに無益不生產的に長年月を費し、曠日彌久病床に沈淪するの止むを得ざるに至る、その結果として學事を荒廢するのみならず、青春時代に於て學ぶ可き種々の業職を抛擲せざるを得ず從て將來具へおかねばならぬ個人としての確實なる

資格は、玆に頓挫し、他日立派なる婦人として社會に立つことが出來なくなる、實に嗟嘆に耐へざる次第である、約る所唯だ己れが情慾を制御調和することが出來なかつた結果に外ならない。

制御と調和

然らば情慾を如何にして制御し且つ如何にして調和し得可きやの問題を解釋するは今日焦眉の急に迫つて居ると云つてよい、蓋し人として情慾の湧發を促す可き外界の刺戟に遭遇すれば之を止むる事は不可能なれども、之を壓抑し制御する事は敢て至難でない、そは其人々の智德如何によりて出來得るし又た出來ない、智德の修養は玆に於て乎最も必要なる條件となる。畢竟未婚時に於ける女子の衛生の根本は此智德修養に在りと云ふも過言でない、智德の修養は個人の性質によりて自から消長ありと雖も之をして最も能く發達せしむるは、主として家庭の敎訓と學校の敎育の力に待たねばならぬ、加之ならず又た社會公德心の發達の如何も之に多大の關係がある、



群馬縣鏑川

縱令ひ家庭と學校に於て智德涵養の途を切々鼓舞すると雖も、社會より來る挑發的刺戟例之ば所謂ゆる自然主義の如きものに誘はれたら、切角家庭と學校に於て積み重ねたる智德も靡然として一掃せらるゝ恐れがある。故に家庭學校及び社會の三者相協力せざれば、智德の修養は全きを得ざるものと斷定するに憚からぬ、現今青年男女の氣風は滔々として自然主義的思潮に傾きつゝあるやうだから、玆に於て乎愈々智德の修養を想ふことが切である、智德の修養なる哉、智德の修養なる哉。



海上五十哩を距てたる絶島の孤兒院

佐々木好母

嘗て、文部省から推奬せられた慈善事業の團體の中に、長崎縣下奥浦孤兒院と云ふ名が在りました、其後此名は私の心の奥に深い印象を殘して、忘れられませんでした。私の郷里は東京へ出るよりも、却つて朝鮮支那へ出た方が近い位で、日本の西南端にあります、長崎から五十哩計り沖に、連つて居る群島で、昔から捕鯨と鰑とばかりで有名な五島と云ふ所なのです。此島々には德川時代に、天草の亂以來九州にも居られなくなつた、

天主敎の流竄者

が渡つて來て、部落を作つて諸所に靜な波瀾のない宗敎的生活を、尙今日に至るまで續けてゐます。そして外人の服裝にまねてか、男子は皆、盲目縞の股引、半被を着用して、昔通りの髷を結つて居ます。

私は奥浦と云ふ名を見た時に、あゝ是は必然天主敎の事業だなと感づきました、然し彼の樣な偏鄙な絶海の孤島に、孤兒院の事業などをやる樣な特志の人があるかと思ひ、又其島が久しく歸らないにしても、自分の郷里なので一層もの懐かしく思はれ、是非一度訪ねて見たいと思ひたちました。

長崎の三馬鹿

と云つて長崎には、ペーロンと稱する船競ひ、三月の節句の凧揚げ、七月十五日頃の盂蘭盆の最後の夜に行ふ精靈船流と此三つがありますが、私は丁度此市民が皆狂者の樣になつて、熱中する精靈船流しの夜な

どを美しい歡喜に滿ち充ちた若衆と、それを見るために七重八重に取巻いて見物してる、此追懷の深い町の住民――麗しい裝せる女等の間に立つて、また自分も共に時には群集と歩いて、云ひしらぬ印象を得、情調を感じました。其後二三箇所の芝居を見ました、勿論田舍廻りの旅役者なので取たてゝ云ふ程の事もありません。

涼い夏の夜であつたから、うれしい希望を以て、平穩に海を渡れる事と思ひの外、海は暴風雨の後だとかで、大きな家の樣な波がやつて來ます、大分それに空の模樣も嶮しくなつて來ました、甲板の人々は皆夫々、船



（東京日本女子技藝學校西洋畫の教室）

室に歸つてしまつて、今迄月が見えて居たのに、何とも云へぬ凄さとなつて來ましたので、一所に來た妹は一等室へ私は其食堂に入つて、恐ろしい苦しい一夜を過すことになりましたが、

風車の樣にスクリューは浪の山から谷に下りる時、からくとなるのです、胃腸の弱い私はひどく苦しくて堪へられぬ位でしたが、遂に無事に鄉里の岸を見る事が出來ました。

其翌朝總ての船客は蘇生した人々の樣に、甲板に出ては昨夜の事を語り合て居ました

其後四十日計りを父母と弟妹等と共に暮しました。然し孤兒院!!孤兒院!!と私は片時も忘れられなかつた祖母などに聞くと、天主教の事を外道と云つて、其てと話してくれました。或る日、何處までも止度なく、歩いて見たくてたまらないので、午後から一人奥浦と云ふ村落をさして出かけました。田舍の道なので一里半位と云つても中々遠い、しかし道中は色々の事を思ひながら、遂には奥浦の村に入りました。

奥浦村

と云ふ所は色の新鮮な松の木の生えて居る小山が、細長く入込んだ奇麗な碧色の入海を取り圍んでゐますその村の道路を修繕して居た人々や小供たちは、洋裝をした私を珍しさうに眺めていました。此小學校長は親戚なので其人に道を敎へて貰つて、孤兒院を訪ねました。

近い樣で中々遠い、もう此邊だらうと思つて人家のありさうな坂道を上ると、農夫の家なのです、そして皆天主教の人と見えて、家に殘つて居る老婆は、詰め襟になつた襦袢を着てゐます、中々方言がわからないで困りました。漸く「赤子を養ふ所は何處かな」と聞いてわかつたのです。暫く行くと。

門構の二階家

が左手に見えます、表札も何もない、入つて行くと五六人の婦人が皆少し褪めかゝつた、盲目縞のシャツの樣な上着を來て、下には襞の無い後まで廻る前掛けをして、畑の手入をして居ました。

私はふと西洋の尼院を思ひ出しました、ずつと入つて行つて井の傍の女に挨拶すると、庭の方を指さして彼方へ行けと敎へました。庭から椽先へよると、威嚴ある一人の五十餘りの婦人が、先云つた樣な着物を着て、胸に銀の十字架をかけて、一人の若い婦人に髮を結ばせてゐました、其若い女は雜種ではないかと思ふ位な、西洋人に似た顏形をして居ました、年の頃二十四五、私を見て物恥しげにして居る樣でした、來意を

つげて院長に會ひたいと申しますと、三十餘りの女が出て來て、私の問ひに答へて呉れました、座敷には二三臺の機があつて、奥からは梭の音がします。

孤兒院の由來

此は孤兒院と云ふのではなくて、「慈惠院」と云ひ、他の孤兒院とは樣子がすつかり異つて居て、此に收容する幼兒は皆、信徒の家庭に何から何までも手のかゝらぬやうに、養育料衣服料食料まで添へて、まあ云へば里子にやるのださうです、そして學校にも通ふ、大抵は其家の養子養女になるさうです、そうでない青年や女子は其希望によつて、長崎縣大村の宗教學校などに入れたり、また勉强させたり、女は貰ひ手があれば嫁けてやる、何から何までの世話をしてやるさうです

此孤兒院は十六年頃から始まつて、今迄に約七百人位の人を育てたさうです、其内から不良の青年などは無いさうです、昨年財團法人の願ひを出したさうで、傍の室で髮を結はせてる婦人が院長で、法人組織になつてから、第二番目の院長で、長崎の本部の方から來てるのださうです、理事書記敎師、以下皆婦人ばかりで、僅に三四人の男子の相談役が設けてあるばかりで其名が紙に書いて張り出してありました。

此院は約一千圓位の不動産に、機や作物からの年々數百圓の收入と、敎會などの寄附金とでやつて居るさうです、さうして、敎會とは全然離れて、獨立して居るのださうです。

成長した女の子の中には、生涯此に來て働く人も居るさうです、そして此院をやつて居る人々は獻身的で獨身で生涯暮すのださうです。私に應對した女は敎師兼書記で明瞭な言葉でよく話しが分りましたが、時々「お左樣樣です」と手を揉む樣にして答へました。

私は其後、歸つてからも、幾度か其時の事と人々の風俗と、若い女の姿と眸と、働いて居た人々の姿を思ひ浮べます。

孤兒院は全國に澤山ありますが、場所も成立も異つてゐますから此處に紹介しました。

解放されたる若き女の男性觀

陽炎

▲貴婦人の見たる男子

某日、幼少の頃、恩惠を蒙つた、某男爵家を訪ひますと、去年外交官に嫁した律子孃も、否律子夫人も丁度折よくお見えでした。

矢つ張り若々しく美しく、その上に冒し難い威厳とを備へられて、妹君の美子孃と共に、まあ珍らしい人！と許り私を迎へて下さいました。お二人とも學習院在學中は、拔群の才媛で、交際社會の星と仰がるゝお母樣が、中々の御自慢娘でした。然し妹の美子樣の方は、＋＋男の令孃と云へば、お俠と美貌とが看板……まあ遂ひ口が辷りまして御座いますつまり鏡花式の令孃と申ましたら宜いでせう、それと異つて姉君の方は當世の貴婦人風の品と、難を云へば父君や良人の勳功を、我身の勳功でもあるやうに心得てる、舊習を脫したやうで、まだ根本の囚れたる女でした。

ピアノがあり肱掛け椅子があるかと思へば机もあり友禪の座ぶとんもあると云つたやうな、和洋折衷の美子樣のお室で、話は中々花が咲きました。

『美代さん近頃は獨立してるのですつて、それはまあ大變な事、無邪氣といふ事は長所でもあり、短所でもあるから、美代さんのやうな無邪氣な人が、多くの男の方の中に居て、どうして誘惑に勝つて行けるだらうつて、それはそれは心配して居ましたよ。』との律子夫人のお言葉、私は少しムッとして、無邪氣とはお世辭に事を代へて有難い、誠に恐れ入りますと云ふ處だつたけれど、善意に解せば善意にも解せるので、私は忍んでその所謂無邪氣な笑顏を見せて居ました。

すると話は益々賑つて、夫人は此度美子孃に向つて妙な問を發しました。

『お美樣、貴女には男の方と云ふものが、眞個によく解つて居ますか？』

と例の冷靜な調子で問かれますと、

『あらまあ、お姉樣。』と美子樣は微笑しました、けれどもそれは恥かしいのではなくて、冷い嘲りの笑なのです。お姫樣方の冷笑にはどういふ意味があるのか、愚鈍にも私には解りませんので、默つて居りますと、

『男の方といふものは幾ら研究したつて、解るものではないさうです。英國の婦人は然ういふ事を、大變に娘の時代には研究しますのですつてねお美樣、』と律子夫人が仰有ると、今まで何か讀んで居た美子孃が急に、

『けれど姉樣、それに對する女だつて然うで御座いますのよ。』と口をはさんだので、話はそれきり切れて了つたけれども、高い煉瓦塀に圍まれて、生存し來つたお姫樣のお口から、斯ういふ問題の發せられた事は何だか夢のやうで、餘りに思ひまうけなかつた。

▲家を持てる男子の不貞操

自分は少からず驚いて其處を辭したけれども、多くの男の人に接すれば接する程、男とは永久不可解の動物ですね、そりや此方が勝利者の位置にある時は、彼の心に思ふ事が手に取るやうに見え透くけれど、一度彼が背を見せたらば、どういふ事を考へて居るか、どう云ふものに支配されて居るか、そりや正直なやうでも中々御油斷はなりません。

操縱術とか申ますけれど、あれは勝利者にしか、使ふ權利がないのです。私は獨身の方よりも、妻君ある人の忌しい不貞操なお話を伺ひますと、何だか益々男なるものゝ心裡が解せなくなりますの、これは最近の事件なので御座いますよ、ある一人の紳士があつたと思召せ。

その方は美しい奥さんがお有りになります、然も想思の仲で、お子もお二人、お小い方はまだ乳母の乳房に許り縋つていらつしやいますが、上の方はもう五歳の、女兒ではあり姉さんではあるし萬事がませて居て、私共が御主人とお話致して居りますと、お傍で凝と聞いてゐらつしやいます。それをさへはゞからないで、君は僕の初戀の女に表情が似て居るとか、又はさま〴〵の甘い事を仰有います。はては眞面目に、初心な青年が初めて戀でも打ち明けるやうな事を仰有います。

聞けばその方は女子大學あたりの方にも、隨分な御交際とか、私は泌々考へまして御座います、世間通例の意味の幸福を、慥かに彼の人は受けて居て、何も不足のない圓滿な境遇に、あの人を置きながら、人生といふものは何といふ落漠としたものでせう、彼の人をしてそんな惡戯を行はしめる程に、人生は寂しいやるせないものなのだと云ふ事には、胸の痛む程同感致して居りますが、一人の少女を自分の爲に犧牲にし、妻君を泣かしめても、敢へて自分の寂しさを忘れやうとする抔、餘りに憎むべく忌はしいでは御座いませんか。

初戀の時代には心から相手が尊くも見え、女神のやうにも思はれるでせうが、その時を過ぎて來た男の方程、女に對して利己心と好奇心とを放縱にするものはありませんね。

それは口の先が巧みです、自分があるものを獨占しようと思ふ時程、何事をも辭さぬといふ、その熱心には驚きますが、それが永久性を持つたものだと思ふと、大變な間違ひです。現の男の方で二十二三まで清い情を持つた人抔、薬にしたくたつてありません。そりや決してとがむる譯はありませんけれど、も少し女を見る眼が眞面目になつて欲しいと、

それ許り願つて居ります。

私達のやうに何の手腕もありませんが、斯うして自由に解放されて居りますと、職業を失つた時でも、御懇意の男の方に手依るといふ風になりますが、その男の方がまた、その女といふものに對して何の目的もなければ、決して世話してくれるものでない、と云つてよい位、ちと申過ぎませうが、世の中とは下劣なもので御座います。お可笑いと申ませうか口惜いと申しませうか、近頃の事件で御座います、今更らしく申すまでもなく、皆樣何も彼も御承知なのでおらつしやいませうが、田舍に育つた私共は、危い事に許り出會ひます。

△潜在心ある若紳士の言行

これは××を事業として居る紳士なので御座います、物の整然とした正直な若い紳士！と思つたのは此方の眼がきかないので御座いますか、私はその人の經營に成る××の、××に雇はれたので御座いました。すると、私の前には思ひ掛けない報酬と讃辭とが、何時もいつも美しく並べられるので御座いませう。

若い女の前に並ぶ言葉の大方は、ばらの花のやうなもので御座いますのに、忽それを忘れまして、讃辭に醉ふて中毒した、とやうな事を、今迄にも度々演じて參りましたから、其時は多少警戒も致して居りましたが、彼の人に於てはよもや、と信じて居りました。

其人に對しては決して尊敬など拂つては居りませんでしたが、唯正直なる溫厚なる紳士として信じて居りましたのです。

するとある日の夕暮！その正直なる溫厚なる人は、私の下宿を訪問しました。××に就いて種々御相談申したいから一緒に散歩して下さい。それに是から用事を達さなければなりませんから、上野の西鄕氏の銅像の處で、二十分の後に逢ふ事にしませう、との事。

少々薄氣味惡くも感じたが、××の相談とあるからには、厭とも云へず、私用にかこつける譯にもゆかぬので、時間を約して彼の使を送り出して、獨り思索致して居りますと、丁度友人が參りまして、圖書館へ行掛けに寄つたとの事、丁度好い處へ來たと思つて、今の事を告げますと友人は笑つて、

『貴女は大層神經過敏になつて居る、近代人にも似ない事だ、一緒に散步したとて何が何です、もし××の用で實際話があつたらどうします。行つて御覽なさいとも。』と叱るやうな意氣込みなので、ぼんやりして居ると、

『そんなら僕が一緒に行つて、尾行し乍ら守つて居て上げても宜しい』と云つてくれましたが、それも迷惑に思つて、

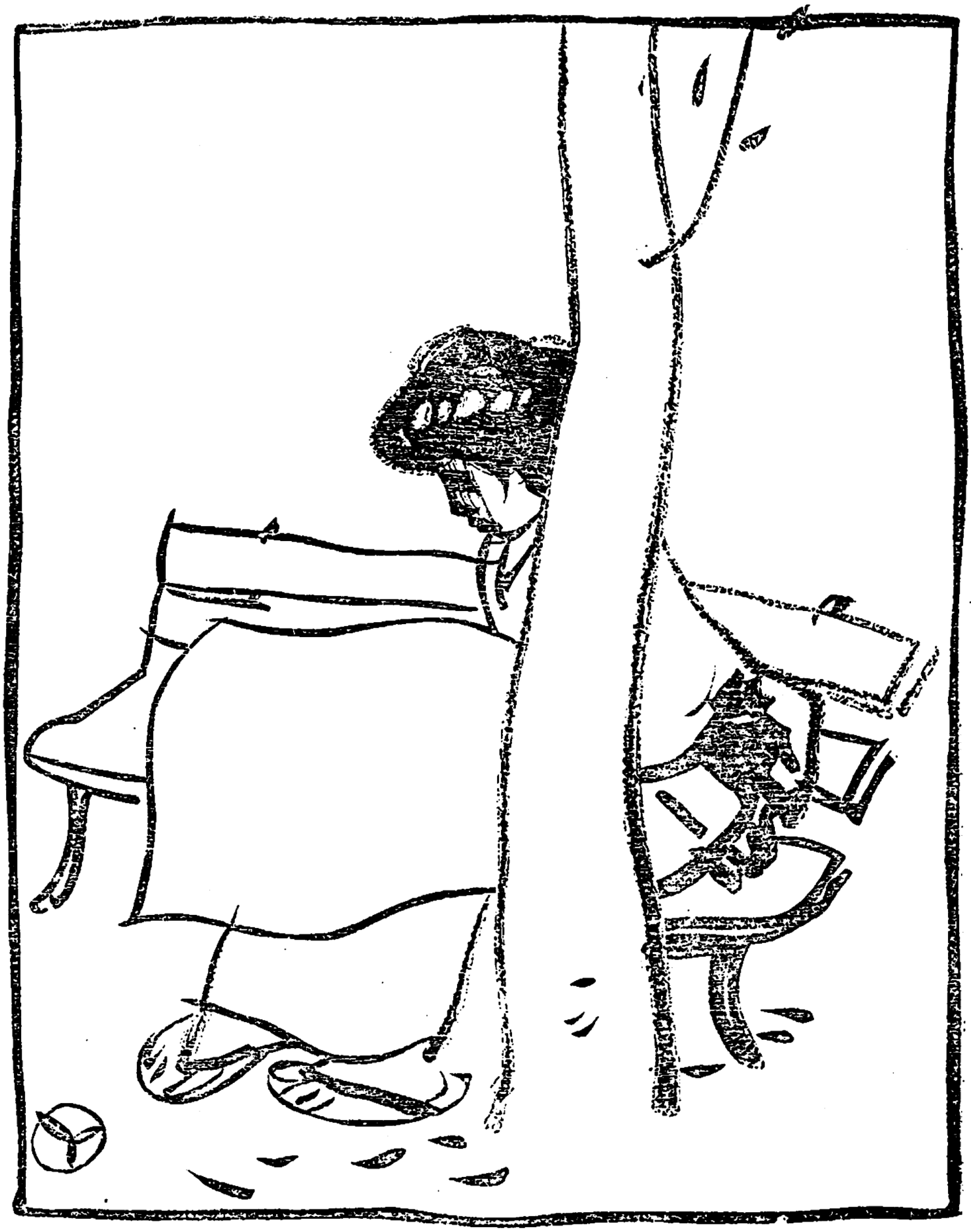
『然うね、どんな會話があるか聞いておらしつて頂いても宜いけれどまあそんな事は止して下さい、何、何を云はうと知れたものですからね。』と無理に男氣を出して外出しますと、もう夕暮の燈が景氣づいて、廣小路の街は暮れようとして居ました。二人は三橋の西洋料理屋の前まで來て、突と會釋を交換して別れて了ひました。森の方を見ると、入

口の小高い樹の下に、黒い紋付を羽織つて、白地の單衣を着た男が、凝と此方を見て居るのでした。私は少しハッとして急ぎ足で其の方へ近寄りますと、慥かにそれでした。

もう日はずつかり暮れて、蒼い瓦斯燈の光りが、物凄く木立を縫つて居る細い道を、竹の臺の方へ歩を向けるのでした。

年若い男女の二人連れが、何かささやき乍ら行くかと思へば、自然主義!と叫ぶ小僧がある。自分もその御仲間だと思はれるのは甚迷惑だから、『××の御用といふのは』と切り出すと、君はお若いのに感心だとか、自分の事業の爲に片腕たる事を永久に誓つてくれとかのお話、劇の話、世間の話で、何處をどうしたものか大分歩き疲れました。

併し私は虛心平氣で對手の話を聞いてゐました。



▲果して卑劣なる誘惑

すると以後親密な交際をしてくれとか、それも承知して見せますと、明後日の日曜を多摩川の方に散歩しようとの事、それ丈は流石の私にも怪しまずには居られなかつたから、

『何ですか、親密な御交際と仰有ると、潔白な師弟間のやうな——……然うぢや御座いませんか』と堪へられなくなつて問ひ糺すと、

『ハヽヽ勿論然うですとも、妙にとつて下すつては困るぢやありませんか』との事。

『それなら殊さらに仰有らなくとも、私の方ではもう、奥様にも御親密にして頂きたいと思つて居りましたのですから。』とわざと奥様の語を響かしてやると、先生は當惑の色を見せて、『ナニ妻抔は無教育で相手になりませんから、却つて何も仰有らぬがよい。』

終には遂う〳〵白狀して、私は君の爲にあらゆる滿足を與へるとか、然ういふ失敬な言葉は聞き捨てにもならず、

『私、何時貴君に何を要求しましたでせう、お氣の毒ながら、貴君方に依つて滿足を與へられるやうな苦悶は、少しも〳〵ありません。』と云ひましたが、相手は中々執着に、

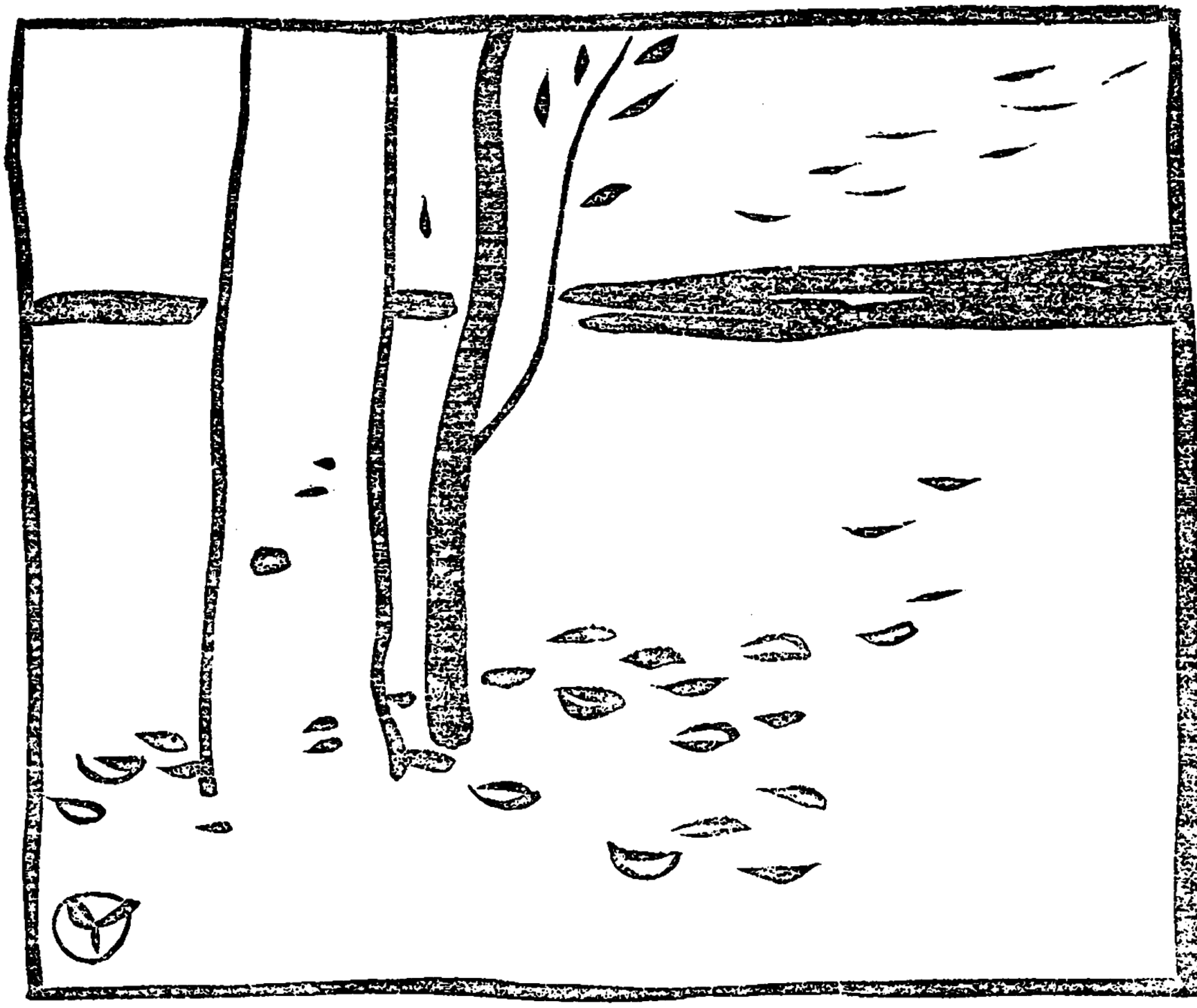
『それでは今夜はこれでお別れするとして、明日もう一度逢つて下さい。』といふ。

『問題はこれで解決がついて居るではありませんか、又お目にかゝる必要なんかありません、幾度お目にかゝらうと、一つ苦い言葉を私は繰り返してお見せ申す許りです。』

その夜は振り切るやうに別れたが、幾度も私の宿を訪ふて、宿の者にお上手を使つて、彼の女は多くの男と交際するかの何のと、餘りに下劣な事を問ひ糺すのでした。

誘惑の仕方が餘りに卑劣で、初めから此方の人格を踏み潰してかゝつて居るのですから、私は毎晩家を開けて、留守をきめて居りますと、遂に彼は來なくなりました。それと同時に然ういふ人格の低い人の爲に、一日でも働く事は潔くないと信じて、職を棄てゝからの不都合をみすみす知りながら、斷り手紙一本書いて、それからは過去の傷まで思ひ出したやうに、痛み初めて、鬱憤の中に日を送つて居りますと、後の整理もつけずに××されたのでは本會の名譽にも關する……と葉書が來ました。如何に弱き者汝の名は女なりだつて、人を馬鹿にしてる、×××會は足下の事業ならずや、足下の人格の消滅と共に、×××會の名譽など既に存在して居ない、笑止千萬……といふやうな激文を投じて、少くとも胸を撫で落さうと決心したのでした。

まだ何と云つても、女子は男子から眼下に見下されてゐる形があります、斯う云ふ時代に女子たる者が外見を飾つてひたすら男子の歡心を買はうとするやうな、卑劣しい態度を取るよりも、目前の地位を爭ふことよりも、根本的に女子の人格を高め、優れた人間となる心掛が、何より彼より女子全體の幸福の爲であらうと思ひます。



故郷のゆきき

山田邦子

いかにしても早く歸京らんかへり來て又戰はん悲しきこゝろ

病みやせて歸るべくなりし故郷の夕思へば涙流るる

悄然と行李を見つめて物言はぬ俥のわきに洋傘置きし友

殘り居る友の顔をばつくぐと住みなれし家に見つゝ別れぬ

障子やゝ白みそめたる家の門に友を殘して別れてしかな

午前八時われ乘せし汽車はましぐらに都はなれぬこゝろみだるゝ

別れ來て走りゆく汽車の窓により友の心をはからんとする

別れけりしばらくぶりのなつかしき聲して友と笑

みかはしけり

別れ來ぬはかなごゝろにしみ〴〵と野は雨もよひ秋の香に滿つ

心々いづくにゆくや身は今しふるさとへ汽車にはこばれてゆく

何にかも歸るわが身ぞ汽車はゆく故郷さしてあゝ汽車はゆく

汽車がゆくかげにも秋の花咲きぬ山國と言ふなつかしさかな

山の樹の青にまじりし白樺のほそきが見ゆれ富士見にと來ぬ

思ひあまり見やる彼方の山の樹に白樺まじる富士見につきぬ

うら悲し山には細く白樺もまじれる寒き富士見に暮れぬ

此の依賴語るにあまり細き聲叔父のみまへに心もとなき

一脈の秋風庭の木に鳴れり栗めづる縁のうすら冷めたさ

風鳴れる木々をこぼれてえんがはのくゞのつぶらに秋の日さしぬ

初ぐりをむく此えんのうら悲しあたりに風はさやら渡れり

故さとの信濃の秋をしみ〴〵と胸にのこして都にかへる

故郷を去る此心さびしさを思はんとせず汽車にのるかな

故郷の十日はわきて何事もなしえぬまゝにはやたちて來ぬ

聲あげて泣かば心の足りなんかたゞ故郷にはなれゆくなり

あはたゞしう追はるゝが如のがれてし故郷戀し淚流るる

高原の山に圍まれふるさとはいさゝか秋にやつれしすがた

故郷に歸るともなく都にも歸るともなく歸りゆくかな

默せる二人の男（散文詩）

八橋有春

曇天が、幾日か續いた。微細な黄土の粉が漂つて居る樣な町の空氣は色をして居る。町の人々は幾日か、此の黄土の色を見なくてはならなかつた。葬儀社の店の廣い板間には二人の男が、早桶を造つて居る。一人の男は鉋で、板を削つて居る。一人のは削られた板をあつめて、竹の箍をつけて、早桶に組み立てんとして居る。二人とも、石の樣に無言で居る。二人とも青い顏色をして、頭髮は、伸びて額の上に毒草の樣にかぶさつて居る。箍を嵌める木の槌の音、鉋の音の中に、二人の姿が、前の戸棚のガラス戸にうつる。淺草観音堂に程近い此の裏町の淋しい通りを、汚い衣の此の町の人にまじつて、美しい衣の人が折々、過ぎて行くのが、此の葬儀社のガラス戸にうつる。ガラス戸棚の中には、朱塗りの小いさな放鳥籠や、白色の花瓶や未だ何にも書いてない位牌や桃色の蓮華の造花や、香爐や等が飾られてある。――「死」を如何に飾らんかとして來る人間の爲めに、是等のものは置かれてあるのだ。――器物は、皆、寂然として默して居る。左手の戸棚に入れられた數個の早桶と精靈ない空虚な人をのせるべき籠とは、皆寂然として默して居る。早桶を造つて居る二人の男は、未だ何等の言葉も交はさない。ガラス戸棚の入口の奥室は、暗く、正面の戸棚に、燈明の光りがユラ〳〵と搖れて居る。そして、佛の種々の金具は、其の光りをあびて、無數の燈明の光りを宿して居る。奥室の向ふは、燒跡らしい廣い原に爲つて居て其の盡くる所に、並らんだ銘酒屋の裏手が見えて、中程の家の前の干棹に赤黒く爲つた、ゆもじがつるされてあつた。裏手の戸口をあけて、原へ飛び出して來た眞赤な顏した男がある。其の後から、白い脛もあらはに、一人の若い女が出て來た。そして女は、男の首に噛ぢり付いて、何にやら、わめいて居たが、やがて、男を家の内へ連れ込んで行つた。

早桶は造り上げられて、又次ぎのにと手をつけられた。鉋屑は、其の數をまして行つて、折々カサ〳〵と木葉にあたる風の樣な音を立てる。相變らず、二人とも無言である。二人は啞者かも知れない。聾帶のない喉を有した畸形兒かも知れない。先刻からもう、五六時間に爲るが、何んの談話もしない。

店の天井の白熱の瓦斯には、火が點ぜられた。二人の男は、此の灯の下で、早桶をつくつて居る。二人は未だ、水も煙草も飮まない。そして、少しも休まないで、斷えず一人は、鉋を動かし、他は木の槌をふるつて居る。唇は、何にか云ひたげに、ブル〳〵と振へる事があるが、何んの言葉も出ない。外には、黄土の色は消えて、黒漆の液に塗り替へられた。此の黒色の液の中を、人影が行く。灯影が行く。

一人の男は、鉋の齒をはづして、砥石の上にのせて硏ぎ初めた。小いさな桶にのせた砥石から、タラ〳〵と鐵と砥とのとけた水が桶の中にたれる。男が齒を砥からはなして、火影にすかすとき、キラリと一道の光りが、齒から迸り出た。男は、再び齒を鉋にはめて板を削り初めた。そして、黒漆の色の外を見た。突如として、男の顏に微笑の影が浮かんだ。が忽ちに消えてしまつた。其れと同時に黒い液の外に、赤い帶の女があらはれて、直ぐと見えなく爲つた。

八人の黒い衣を着た男が、かついだ長い、大きな寢棺の棺が、此の店に下ろされた。奧から、大福の樣な顏した小太りの四十歲許りの此の家の主人らしいのが出て來た。八人の黒衣の男達は、其れに叩頭をした。

『やア、御苦勞でした。』と主人は云つた。八人の中の頭らしい男の手に、幾何かの銀色の錢が、渡された。人々は、又主人らしい人に、叩頭をして、外へ出て行つた。十間許りさきの町の角の黒塀の傍で、銀色の錢をわけた。傍の瓦斯燈は、人々を照らした。

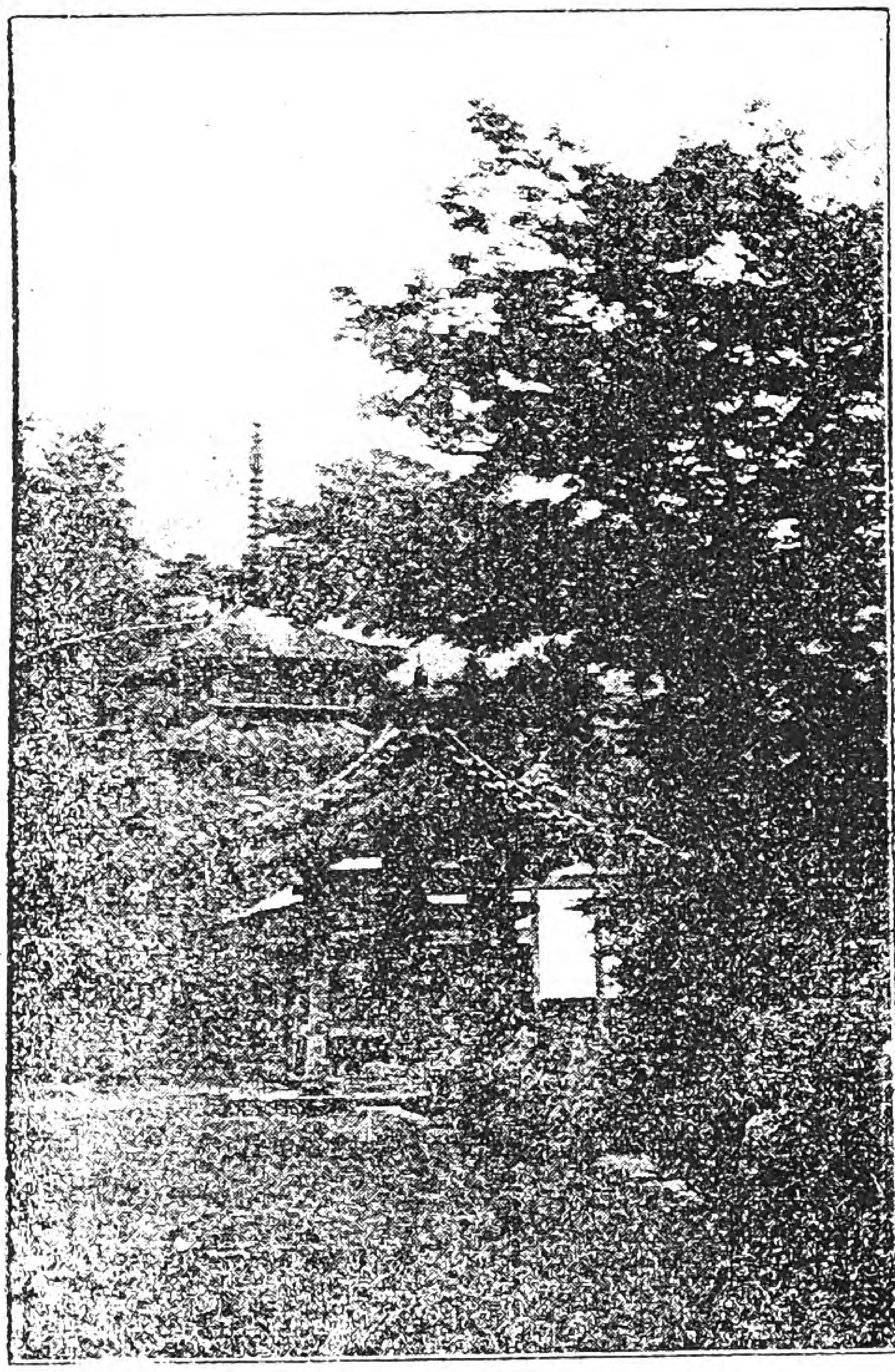
『今日の佛樣は、つまらねえ死方をしたものぢやねえか………。』

『そうよ、電信柱が倒れて來て、其の下に爲つたんだ

つてな。人の命は解らねえものだなア……鶏頭が好きだと云ふので、鶏頭の紅い花が隨分來たな……。』
『ウム………。』
と是等の會話が、黒衣の人々の中に取り交はされた。それから、ガヤ〳〵と、何にかしやべつて居たが彼方の燈火の明るい町に這入つて行つた。

葬儀社の店には、主人の姿は見えないで、先刻からの二人の男が、無言のまゝ、かつぎ込まれた棺をとりはづして居る。新らしい『死』の臭が、四邊に漂つて來た。古い『死』の臭のしみ込んだ四邊の木物に、新らしい『死』の臭が、しみ込んで行く。二人の男は、未だ何等の言葉も話さない。店の床下には、蟋蟀がなき出した。斯くして、黒液の町と啞者の樣な二人の男の動いて居る葬儀社との秋夜は更けて行ッた。

—千九百十年九月二十八日作—



兵庫縣下高源寺の塔　（大槻幸子寄）

たばこ

ゆみ子

煙草を吸つてみた
辛い、あぶらくさい、けむつたい
咽喉が痛い
舌が爛れるやうだ
もつと甘い
醉ふやうなものかと
想像してゐたのは異つた
こんな苦しいものを
男の人は喫みたがつて
唇から離さない
どれ、もう一度
吸つてみやう
矢張、辛い、苦しい
煙がスーと消えてゆく
終まで吸つてみやう
火がついてゐるから

鐵道線路の草

磯萍水

兒の顏

私の初めての兒を朗と名づける、但し女だか男だか未だ解らない、女房がないから何時生れるのか一寸今の處では見當がつかない、私は女の兒が欲しい、親に似ぬ美しい女の兒がほしい、老をとつて立派な婿をとるなんぞと謂ふ遠い望みはもたない、その兒が年頃になるまで生きて居るか、或はまだ母の腹に出來ない中に私が往生するか、解るものでない、私の死んだ後で藝者にならうと少しも係はない、死んで了つてから兎や角謂へるものでない、いくら金を遺して置いても、運だ、どうなるものか、たゞ美しくあれ、良妻賢母なんぞにはなつてくれなくつてもよい、近頃の式のたぶたぶ肥らずに、姿よく背たかく、美しくありたい、その俤はよく私の夢に浮ぶ、まだ十一二らしい、今まで何處でも見た顏でない、まさしく私の娘に相違ない、見やうと思へば何時でも夢に見る、何時生れてくれるのかな、それには女房を貰はなければ不可、貰ふのは氣が進まない、女房は半歳だ、馬は三月だ、女房なしで授からないか、私と朗との間に女房がないと好いのだが、女房があると非常に間が遠くなる、時間がありすぎる、朗、ほがらとは好い名だ、その名のやうに美しい心なれ、また雨だ、寂しい晩だ、衾は冷たい、廣い座敷に一人で寢る、寂しい晩だ、朗に逢はう、朗の爲めに健康を祝さう、私は半身を起して灯を消した。

茶

月も忘れた日も忘れた、某日の黃昏、まだ發車には二十分の間があつたので、飢いた咽喉をしめしに新橋驛の二階に茶を飲みに上つた、私の左の卓に客があつた、二人の男で、襟の汚れた、四五日剃刀に御無沙汰をした顏の、靴も恐らく光りのない木靴のやうなのだらうと思はれるのと、一人は髮こそ白いが、如何にも

活氣の滿ちた顔で、中背ながら骨の逞しい日本服であつた、椅子を引出してかける途端に此方を向いた日本服は、平沼さんだ、横濱と謂へば、そこに住んで居る人物の一人として大抵の人の頭に直ぐと浮んで來る、平沼專藏さんであつた、私は會話に氣をとめず、或る考へ事をして靜かに紅茶を啜つて居た、やがて十五分程經つた、私は椅子をはなれやうとした、それより先に平沼さんは席をはなれた、給仕が來た、廿錢銀貨が二個渡された、給仕は直ぐ釣錢をもつて來た、ニッケルの小盆の上には、汚れた白銅と銅貨が一個づゝのせてあつた、專藏さんは待構へてそれを丁寧に財布に納めた、給仕の顔に嘲りの色の上つたのは謂ふ迄もない專藏さんは改めてまた一個の廿錢銀貨を指につまんで卓において、腮で給仕に示した、給仕は不意を打たれたので、習慣より低く低く叩頭をした、私は面白いと思ふた、人の兎や角謂ふ平沼さんだけに尚面白いと思つた。

暫くして私も其處を出た。

五郎丸の墓

五郎丸の墓が八百屋にある。

五郎丸に二人はない、謂ふ迄もなく彼の狩屋の椽で曾我の五郎と取組み合つた御所の五郎丸である、天晴勇士の五郎丸、八百屋にそのお墓があるとは、人が人場所が場所だけに、妙であらう。

私は此男が大嫌ひだ、この男といま一人は彼の三段目の加古川本藏が嫌ひだ、同じ意味に於て大嫌ひだ。

二人ともに情がない、本藏なぞのは武士の風上に置けぬ奴だ、吉良と賴朝とは譯が異ふが、五郎丸も意氣好かない、組とめるだけの力があるのなら、何も女の被衣などを冠らずとも事だ、芝居でも碌な役者はしない十番斬れの連中、愛甲三郎、海野小太郎、宇田五郎、これ等三階のお役者と雖、太刀ぬきかざして眞向から名乘りかけて戰かふに、何の事だ、名乘りもかけず、女に化けて不意につけ入るとは、それでも十六の時に叡山で主の敵を討つたと謂へるか、もつとも甲斐

の忠頼に奉へてから、忠頼の亡てのちのめ〳〵と二君につかへる心だから、知れたものだ、兎や角謂ふのが野暮かも知れない。

けれども人間は生きて居る時に氣障な眞似はして置くものでない、曾我兄弟を御覽なさい、裾野に、箱根に、曾我中村に、一寸した處にも三個所も墓があつて人は帽をとつて叩頭してすぎるのに、五郎丸は八百屋の食客！

この邊一圓を御所山と謂ふ、その昔五郎丸の住居のあつた處ださうな、私の眼には十四五年前の光景が眼に浮ぶ、木の塀の高い監獄があつて、片傍に家がまばらに立つて、片傍は雜木山、處々稻などがまいてあつた、その中にこんもりと塚があつて、前のは小形の二輪の塔が一基、錢苔が一面に浮いて居て、たゞ一根の槐がさびしさうに立つて居た、五郎丸の墓と誰ともなく敎られたが、彼の紅顏の稚兒髷がこの下に埋つて居るかと思ふと、小供心にも面白いと思ひ〳〵した。

十五年たつた今は、監獄の跡は官舍になつて、それを當込の商家が軒をならべてできた、五郎丸の墓は家の中にとり込まれた、塚は平らにされた、墓だけ殘つて居るのが不思議な位だ、人々はまた紅面の卑怯ものの惡戯を恐れてゞあらう、その家は八百屋であつた、その墓はその店の最中にそれこそ大威張に威張り込んでつッ立つて居る、恐らくこの八百屋で重な代物と謂へば、この石塔の右に出るものはない、八百屋では大切にする、線香こそあげてはないが、茶碗に水があげてある、人參、牛蒡、八頭、苺、そら豆、サラダ、キヤベヂ、お初穗は必然まづ五郎丸さまの前に供へられる五郎丸殿もし菜食主義ならば、舌皷を遊ばしてさぞ御滿足であらう。

友達の家の茶話に更けて、雨の降る夜などにその前を通ると、大根、蕪、人參、里芋、その群を拔いて軒をついてそゝり立つ二輪の塔、その下には例の、紅面の、もえぎ縅の稚兒髷が眠て居るかと思ふと、面白い慕かしくなつて、入りもせぬ菓物などを買ひに入つてもし獨語の聞えもするかと、そつと石に耳をおしつけて見た事もあつた。

常陸の丘より

文學士　澤村胡夷

『あれが利根河だ』
と伴れの男が僕を顧みて言つた。僕等は雨あがりの泥路をとぼとぼ歩みながら、漸く此岡の中腹までやつて來たのであつた。なかば裸になつたやうな崖の一方から平野を見はらすと、煙に閉されてゐた村落、森、並樹、それから田の畝まで次第に現はれて來て、其間に光を失つた巨大の水面が蜿蜒と横たはつてゐるのを發見した。而して半ば繰上られた帆が煙の間からその影を見せてゐるのを知つた。

赤土の柔かな上には桃も散つて了つて、僕等は灌木の新芽の胸をうづめながら、隨所に起つてゐる桃の樹を眼あてに譯もなく路なき路を辿つて此崖のところへ現はれて來たのである。伴れの男は眼を轉じて今來た道を熱心に眺めてゐたが、あの道を見給へと瘦とぎつた顎を反してみせた。僕は言はるゝ儘に其方を眺めると、泥光りのした細い道が村落から村落へと續いてゐて、その路の上をお葬の行列が徐々通つて行くのであつた、僕は默つて點頭いたまゝそれを見てゐたが、行列はちぎれちぎれになつて、一筋路を進んで行く、白い提灯が眼立つてその中から見受けられた。曇つた空に生溫たかな風が吹いて、旅商人らしい若者が崖の下を通つて行く。

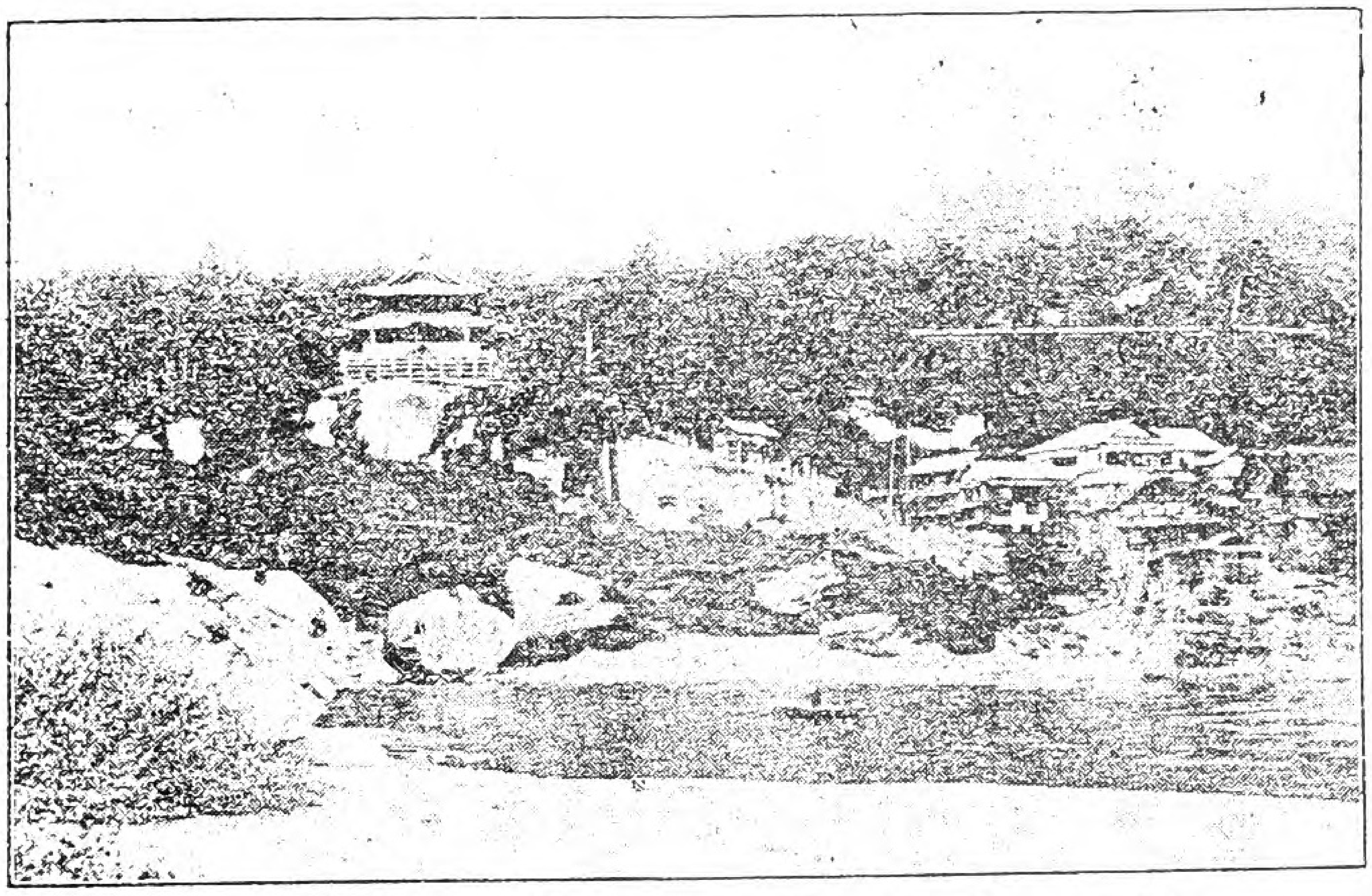
『行かう……』
と伴の男は術なげに上の方を見あげて、僕を崖の上に遠慮なく殘したまゝ、さつさと頂上さして歩を移す。僕もその男について、また灌木の間を立泳ぎをするやうにして前進すると、次第に灌木が疎になつて、濕つた山土がぼかぼかと足の裏に着くやうな氣がしたが、直ぐに道らしい所へ出て來た。

『此道にちがひない』
から獨で云つたまゝ先に立つた伴れの男はすたすた行くのである、僕も丹土を撥返へしながら其後から從いて行くと、廣闊として平地が丘の上に展開して、其處

に大きな堂と庫裡とが無遠慮につき起つてゐた。あたりは甚だしく荒れてゐるが、本堂をのぞくと森閑として無論人の氣配は少しもしない。玄關の方へ迂廻して頼まうと大きな聲を張上げてみたが返答は少しもしなかつた。是ではならぬと思つて伴の男と一所に庫裡を迂廻したが、庫裡と本堂との周圍には人らしいものは一も見られなかつた。

丘の上の此寺に人らしいものがゐなかつたので僕は非常に失望したが伴の男は少く腹立し相な顔をしながら、山茶花の樹の下で當惑の體であつた。『居ない筈はないんだがね……』と言ひながら、つと起つてまた玄關際まで行つて、大な聲を出した。すると今度は應と頓馬な聲で返事が聞えた。

『若柴の金龍寺といふのは此方ですか』



會津只見河畔　越後　井上貞子寄

伴れの男は小僧さんが玄關へ顔をつき出すや否や叱るやうに尋ねかけた。

『左様です』

此返答を此方から聞つけた僕は急に玄關際まで進み出た。而して伴れの男と一所に名刺を出した。暫くすると此方へ通れと云ふ事で、何の花か知らぬが眞紅の花が二三輪生られてある靜かな客間へ僕等は請ぜられた僕は義貞の用ゐた弓の折でもそこらに懸ては無いかと客間を一通見まはしたけれど、床の間の花の外は一物も注意を喚ぶべきものは無かつた。而して僕等二人は金龍寺の客間にけろりんと和尙の出て來るのを待うけてゐた。

曇つた日は煤けた障子紙に浸んでゐた。

鳥の寢息

河井醉茗

鳥は寢た
あんなに歌ひたがつた——
あんなに飛びたがつた——
あんなに廣い野を慕つた——
あんなに好い聲を惜まなかつた——
鳥が
小さな木の葉の巣を
暖かさうに
能く熟睡つた

鳥よ
小鳥よ
外に清い空氣があらうか——
外に高い天があらうか——と
煩悶たり、憧憬たりした
その日の夢は
地を離れた花のやうに
大空に萎んで行つた

あんなに注いだ涙が
みんな草の下に吸はれてしまつた
消ゆるものは清い
かわいさうに、泣いても
やつぱり、もとの小鳥
夜の闇は恐ろしい
眼を覺ますなと抱かれて
夢遠ざくる翼の重み
忘れて寢た小鳥よ
小鳥の寢息よ
今、月が上つたらしい
明るくなつた木の葉の隙から
きら〳〵と光線が顫ふ

手紙や氣合で病氣を治す精神學院

一記者

遠隔療法といふことで名を知られてゐる神田三崎町の精神學院に院長眞島丹吾氏を訪ひました、應接間に導かれ、待つ程に多忙の中をお會ひ下さつて、治療法をお話なさいましたが、あまりに不思議なので、催眠術でございませんかと、尋ねましたら、否よく人があれは催眠術だとか、大山師だなどゝ罵るものもありますが、催眠術でもなく、又罵る人は罵る人としておきますが、市内などでも重患で來院の出來ない人や、又地方の患者の爲めに、遠隔治療をして居ります。全快した方よりの禮狀をお目にかけますと、大きな文庫を二個出して見せて下さいました、山なす禮狀のうちでも、目につきましたのは、栃木縣の醫師よりの禮狀でございました、その禮狀の一節に「拜啓お蔭樣にて病氣も追々快よく相成り候咳嗽咯痰は大に減退仕りよろこび居候(中略)貧弱なる小生の信仰は確立し精神は物體と變化し得べしとの確信を懷き候、小生自己の疾病を治癒する者との信念は不拔なるまで向上致し候、此の如きは實に先生の賜物として深く感謝仕り候、右よろこばしさの餘り御通知旁々書き加へ候」云々とありました。又電話で治したこともあるさうです、それは昨年八月の頃に群馬縣桐生の霜島敬司と云ふ小學生が盲腸炎で十日間餘り苦しんで、一睡もせず大學よりも某博士出張せられ、いろ〳〵施術されたるも效なく、遂に長距離の電話で、病狀を申込まれ、直ちに第一回の治療をしたが、不思議に痛みを去り全治した、其禮狀なども見ました。

院長は言語を改めて、以下の如く語られました、私は元々醫士でありますが、先年精神靈動の著者桑原先生より、精神治療の有効なることを聞きまして、いろいろ實驗の結果大に効驗を知り、藥物療法にて治療することの出來ないものは、精神療法による外ないと思ひまして、專ら精神療法の研究に全力を注だのです。

精神治療は我等の肉體は靈によりて活動もし、また沈靜もするので、病氣になつて、嗚呼自分は病氣になつたと、落膽すると其れがすぐに、肉體に及ぼして全細胞を弱らし、益々重患になりまして、遂には其病氣に抵抗する細胞力が次第に衰へて、病の爲めに死ので

あります故、病氣に對する意志力を盛にし、これ位の病氣が何だと、云ふ精神を起して、一切病といふ觀念を去らせて全細胞力を强大ならしめ、治療するのです、其治療範圍が無限でありまして、藥物治療にて持てあます、リウマチス、胃腸病、腦神經、脊髓、ヒステリ、寢小便、中風とまあ云ふやうなものも、精神治療にて全治することが出來る、今實驗をお目にかけますが、只エッと云ふ一喝の下に、患者の全精神を轉換させ、悲觀を變じて、樂觀的にさせます。

それより院長に導かれて治療室に參りますと、十五疊敷位の大廣間に、四つの



精神學院に於ける眞島院長の治療

寢臺がならべられ、四十五六位の夫人に、二十三四の貴族の奥樣かと思はれる方と五十位と三十位の紳士風の方と、何れもお身分の賤しからざる、この四人のお方が寢臺の上に横はり、着物のまゝ其上に白毛布をかけられて、仰向けに居られ院長はこの四人の患者の枕元に直立不動の姿勢で、鐵拳もて患者を睨む樣に、エイ、エイッと、大喝されるのです、どうなるものかと見て居りますと、患者は電氣に感じたかのやうに、ピリッと全身を震はし、それがだん／＼烈しくなつて來て、手足も電氣を感ぜし如く、ピリ／＼震ひ出します四人の患者を變るべくこん

な風に、エイ、エイと大喝すると、皆同じやうに、今にも寢臺から落ちさうに、痙攣を起してゐる、かうなるとこの患者はこれで、全精神は轉換したのですと申されました。

治療中は、自然患者を勇躍歡喜の觀念を呼び起させるやうに、隣室に絶えずオルガンにて種々な面白き歌曲を奏されて居ります。

遠隔療法。地方に居つて治療を受けたいと思ふ方は手紙又は電話で、今までの病狀の有樣を委しく通知し、規則通り申込むのでございます、すると治療を受ける心得に、日と時間とをこんな風にしてお知らせして居ると、書類をお見せになりました、此處に書してある通り、申込んだ患者が其日其時間に痙攣を起すさうです、また患者よりの靈感日記を見せて下さいました、そして一週間を第一回期限として、毎日指定の通知時刻に、此方ではるかに、氣合の靈動を發します、患者はその指定の仕度で、これを受けるのです、患者と病によりまして、一回期限で全治しないものは、尙二回期限やり、三回期すると云ふ風にして全治するまでやつて居ります。

右のお話と實驗で、大體の樣子が分りましたので、お暇して待合室に出ると、こゝには五六人の患者が、何れも顏色の惡い、風采の立派な男女のお方が施術を受けるのを待ち遠しげにして居られました。

電話と女子

我邦電話架設の當時、交換手として少年を用ひたけれども、遲鈍で粗雜で、加入者の苦情が絶えなかつた爲め、少女を試用した處が、意外の好成績であつたので、遂に十三歲から二十三歲の、輕快な未婚女を用ふる事になつた。又交換局は、空氣の流通を良くし、內容豐富の圖書館を有して居るのみか、交換手の爲めには、無料を以て茶、珈琲を給與し、可なりの給料を與へてあるから、家計を助け樣とする少女には最も適當である。交換手練習所は一の小交換局で、新入交換手は此で充分の敎練を受け、通話者をして故參と新參との區別を知る事が出來ないまでの練習をさせるのである、現今の交換手數は

	判任官	主事補	交換手	見習
本局	一〇	二五	三一三	五〇
浪花	七	一九	二八六	五〇
芝	二	一一	一三六	二五
新橋	七	一四	二三一	三〇
番町	四	一〇	一四二	二五
下谷	四	一三	二〇七	三〇

一人の受持座席は、平均八十五席で、最大は百であるが、交換局では交換手に對する體格檢査、性質の矯正、分解的の成績發表抔を嚴重にし、作業の改良加入者に對する態度を監督して居る。

女子文壇京都愛讀者大會の記

開會の模樣

幹事

會のプログラムを幾度も手にして、待ちに待たれた九月二十五日！、其日は初秋の天美しく晴れ渡つた。

會場當日の準備は、階下五十疊敷を二室ぶつ通しまして、正面には毛氈を敷いて壇に當て、其左右には金屏風引き廻らして、オルガンを程能く据え置き、天井には萬國國旗を飾つた。

思ひ〳〵の盛粧に、此日を樂しと集つて來た愛讀者は、大廣間にズラリと居並んだ、衣服の色彩、化粧の香氣、周圍の空氣は自ら女性化したであらう。

頓て午後一時半、開會を報ず。

劈頭、幹事の一人要司村福子、壇上に立つて開會の辭を述べた、女性が文學を愛する意義を說き、惹いて今日の機運あることを簡單に述べ、拍手の中にしづしづと壇を降りた。

次に主筆河井醉茗先生の祝辭を、要司村福子代つて讀む、先生は無據故障ありて、遂に出席されなかつたので、一同遺憾に思つた、祝辭の主意は皆懇ろに聽いた。

唱歌『集會』に移る、アルトの聲、サブランの調、淸らかなコーラスは會場に響き渡りて、皆肅然と心を新たにした、樂は橫山法學士の令夫人、夫人は以前濱部氏の姓を名乘られた頃には、本誌上にも作物を寄せられた一人であつた、今日の會に出席せられたのも決して偶然でない。

かくて橫山夫人の祝辭あり、上村松園女史代理の祝辭、幹事の祝辭あつて、直ちに餘興に移る。

朗讀「蘇武」、透徹れる聲には滿場水を打つたる如く聞惚れた。對話「唐辛子の滑稽」には腹をよらした。箏曲「黑髮」、未だ幼き大橋姉妹の調べ、感嘆の聲に滯りなく一曲を終へた。ダイアログ「龍宮使者」四幕に渡つても、少しも倦色なく演せられた。唱歌「夕の鐘」も流暢に濟み、次に番外飛入として、箏尺八合奏、曲は「春の曲」、箏は橫山夫人、笛は係員某氏、瀏喨た

る淸響は正しく滿堂を壓した。活人畫「小楠公」二場とも無難の出來榮え、頓て箏曲「千鳥」、裏と表の聯彈には一層面白みを催ほさしめた。

時に四時半、此間に暫時休憩を爲し、一同前庭にて寫眞を撮影した、模擬店も開かれた。

再び餘興のつゞきを開演す、箏曲「常世の曲」(上田高子、武部準子)斯道の妙手、輕忽な筈はない。次に活人畫「一花賣女」京名物大原女の姿は正に一幅の名畫を展開したる如く、瞬間の光線に人を醉はした。

なほ番外として數回の演奏あり、漸く暮色、座に迫る、町田氏起つて閉會の辭を述べた、特に本社より寄贈の『女子文壇』『少女』を各自に配ち、福引を引くにさまぐの滑稽ありて笑聲は四方に起つた、斯くて若く花やかなる笑ひさゞめきの裡に名殘惜くも、今日の會は閉ぢられた。

別記の一

要司村福子

さあ愈々當日になつた、此間からあれもこれもと思つてゐたのに、朝六時に起きて居ながら、やけにオルガンを彈いたり、爲跳におちついて女子文壇に目を通したり、自分ながら可笑しくなる。母樣にそれ着物よ髮よと急き立てられて、髮は一寸とき上げて、すぐ着物を着て出かけようとしてゐる處へ、三宅樣と小使とが一しよに來た、小使とオルガンを車にのせさせて、自分は母と會の時の着物を、三宅さんには經机と活人畫の着物などを傍につんでもらつて、二人とも車で倶樂部へ出かける。

短かい人は皆それぐ内で、天井には萬國旗のつなぎをしていらつしやるし、私等三宅さんの樣な長い者は表門と裏門と横門に貼る「女子文壇京都愛讀者第一大會」と記してある模造紙を持つて門口へ貼りにゆき、歸りに近所の天神樣の露店へいつて、ゴム風船を買ふ、福引に使ふのである、かうしてだんぐ時間が迫るにつれ、式場の用意も、模擬名の天幕も張れ、何も彼も出來上つたから、皆々お晝飯を頂いてゐる處へ來會者ですよとの叫び、びつくりしてゆくと第一に横山夫人、次で大阪の畋野さん、川崎さん、其他の人々が今や車から下りやうとして入らつしやるところ、さあかうなると私は誰だが誰方やら知らぬけれど、何だか嬉しいやうな恥かしいやうな氣がして起つたり座つたりしてゐる。

かたの如く式がすんで餘興になる、可笑しい對話だの美くしい活人畫があつて一時間の休憩、其間に一同前庭で寫眞を取つた、私のとなりに座つた濵部さんが、手をどこへやりませうつて問はれる、すると町田さんが、扇持つてに何う、つてまあそんなおとなしい人と違ふわていつたら皆がクスくく笑ふ。

模擬店は大にぎはひ、私に町田さん、三宅さん、濵部さんと四人が天幕の中できりくく舞、誰かうしろで紋付のおぜんざい屋さんて、あら筆子さん、可笑しいかしらお茶はこびながらからかつて入らしやる、齋藤さんとこへ持つて行つて、となりのお方に「早くくさめない内にね」といつたら、ホヽと笑つて計り、其間を蓄音機が大きな聲で「モシくく龜よ」と大浮れ、一番あとに係員が大阪の二人を引張つて恥かしがつて被居のを無理に座らせてはこんでいつた、お二人、膝を重ねんばかりにして障子の陰で食べて被居るのを見て、町田さん「あんなにかゞんで食べると健康に害がありますよ」つて眞面目で說いてゐらつしやる。

走りつゞけたおかげ樣で、幹事や係員の番になつてきた、皆、自ら持參、腰かけて一番に私が箸とるを申合せたやうにお食りになる。

可愛いゝ筆子さんが目を大くして走つてきた、何かしらと思つたらあの方が皆のスケッチしてなさるの、しかも顔つたら口ばつかり」まあとあきれてゐると、氣の早い方、三人程かけてつてすがるやうにしてもらつて來た、をや可笑しなスタイルだ事。

待ち構へてゐた福引が始まる、銀行の火事と出ておさつの丸燒（さつま芋）もらふ人や、神無月、出雲の大社、紙くづかごを貰ふた人もある私盜人が逃げたといふのでおつかけを頂いた。中には大根が當つて逃げてゐるお孃さんがあつた。

是が濟むと本社から特に寄贈して戴いた「地方の婦人」「少女」等をおわかちする、皆々少女を〳〵といつて忽ち「少女」は品切となつた。

ぱつと點つた電燈の下で愉快に終つた此會の名殘に、名刺交換、又はあなたお名を、お恥しう御座いますといふ言葉が耳に入る。會員の方々は初めの時と違つて、お歸りには誰れも聲をかけて下さる、私は幾枚かの頂いた名刺を手にしつゝ、さよならさようならと心から別れが惜まれて挨拶申上げて玄關までお送りした。

別記の二

なでしこ

來會者の中で最も人々の視線を引たのは横山夫人、品の好い丸髷に結うて、可愛い赤樣を抱きには成るが、色白の痩ぎすなお顔に、黒目勝の眸の中に、利かぬ氣が現はれて何所かに殘る女學生風、そゞろ當年の快活なる御姿を偲び參らせた。會が初まつて合唱「集會」「夕の鐘」に合せて風琴をお彈き下された、番外として「春の曲」を尺八に合せてお箏をお調べになつたが、世は秋風の颯々と右近の馬場の松の梢に、殘る暉が哀れを鳴くに、此所の一室は春に返るかと思はれて聞く人の感を催した。

可笑かつたのは動作「龍宮使者」の御姫樣、出る前に或る方が全でラブシックの樣だと冷評されたのをば、場に出て思ひ出して、お姫樣の顔を眺めて笑ふ事も出來ず、ほんに苦しかつた事。も一つは合唱の時、T子樣が前の餘興の際、胸に張つた名の書いた紙を其まゝに歌はれたのを不圖氣が注いたが申す事も出來ず、笑をかみ殺した。

京都の人は常に遲れて居る、いやに遠慮深いなど東京の方は云はれますが、さうでも無いと思ひます、芳名錄に記入して頂くにも、ずん〳〵御自筆でお認め下さる。寫眞を撮る時でも後に隱れる樣な方は一人も有りません。模擬店のお汁子屋もお出に成ら無い方が有るかと案じて居ましたに、皆樣お出下された、然しお替りを召し上る樣なさもしい人は有りませぬ。

福引の引替に、オールドミスで緣遠い？豌豆一袋、不孝者に與へたき物で大根、こう〳〵の種などは、當つた方がお氣の毒でした。

お歸りになる人々のお話に

「初めての會から善く準備が出來ました事ね」

「ほんとに感心ですね、私面白かつたわ、次の會が待たれますね」と名殘り惜しげに別れ行かるゝ頃は、北野社頭の燈籠が薄暮の空を照らして居た。

私は跡の始末が終つて七時頃、夜參りの人々が織る樣な、兩側の露店のカンテラの煙りが立ち登る中をば、俥で歸る途すがら、樂しかりし今日の會合を思ひ出で、若き燃ゆるが如き血の充滿た活氣を帶びし集ひ、次の會に私は出られるか出られぬか、素より運命の神樣より外に知る事ならねど、此美くしき會の何時迄も何時迄も――永久に幸有れかしと、こんな事を考へて居る内に我家に着いた。

別記の三

壽賀子

受付には紫納戸の御紋付に、お太帶を立て矢に結びて、品よく遊ばした福子さん、黒紋付に同じ立て矢におそろひのリボンをおさし遊ばした町田さんが、來會の方々に、一々筆を渡して芳名録に、お名をかいてもうつていらつしやいました。

俗にいふ京都時間とやら、さすがはこんな會だけ、そんな方はありませんでした、定時すぎる頃は三々五々美しう遊ばした來會の方々が、受付につめかけでした。中には自分の名を「イ、エもう私なんか」なんておつしやつて、御遠慮遊はず方もありました。受付の横の廊下を右にとりて會場へ御案内いたし、只何やらいそがしいので、御あいさつもろくろくせず、半時程して、はや紅白の幕をめぐらして、各國國旗をたこつりにし、美しうかざられた會場は、花のやう美しいくく方が澤山おそろひになり、それはくく目もさめる美しさ。高島田の品よくいとゆかしいお髪にお上げ遊ばした方が、さすがは京都だけに十人も御座いました。

會員の方々も大分おそろひ遊ばした御様子に、開會のあひづとともに福子さんの開會の辭で、會場の正面屏風をめぐらした小高いところでのべられました、短くして意を得てよどみなく會場は水をうつたやうな静かさ。

醉茗先生よりの電報もおよみ下さいました、先生が御出で下さらなかつたのは誠にくく何よりも殘念でした、しかし私等もやつぱり先生のお顔が見えるやうでした、このたのしい會をひらいて、先生等とともにたのしみ居るやうで、來賓席に先生が御出でになるやうにまで思はれました。次に唱歌の「集會」といふ歌二部合唱たのしさみなぎつた皆様のお聲に「あな面白の今日のむしろ」とおうたひ出し遊ばした時には、皆々同じ思ひでした。

大阪からお出で下すつた改野たけ子様　川崎みちゑ様にお出でになつて御あいさつもせず、會の中、廊下にふと行きちがつて「失禮で御座いますが誰人でいらつしやいます」などと御あいさつする、會の中、そこゝで御あいさつの聲もとりぐでした、「夢二さんに」をお書き遊ばした千代子様にお目もじ出來るのをたのしみにして、いろくと御姿まで想像して居りましたのに、御あいさつもせず、どの方ともわからなかつたのはくれぐも殘念でした。

人様の批評ばかりいたしまして御免遊ばせ、皆様が餘興などのことも御書き下さるでせうから、此れで筆を止めます。

出席者芳名

橋井益子　岩村さく子　橋井小まき　田中千夜子
川崎道江　改野たけ子　生田きみ子　大橋のぶ子
新井たみ子　吉田わき子　中川ふく子　伊藤幸子
佐々木春子　高野笑子　巽千代子　奥田とく子
茂山小糸子　吉田八重子　波多野くい子　元井千代子
大久保菊枝子　松尾露子　河地福子　久保八重子
文字ふさ子　瀧川みき子　齋藤香野子　生駒祥子
武田よね子　岡本朝子　辻井久子　山本のぶ子
倉田しな子　村田りつ子　武部すみ子　土田道子
中原ふく子　大橋せつ子　大橋あい子　上田高木
宮原みつ子　荒井たつ子　[illegible]本はま子　奥村ふで子
山口春江子

幹事

町田てる子　三宅壽賀子
濱部てる子　要司村福子



短篇小説

水野葉舟選

○補助（天賞）

流水女

暑い日の光が東に向いた窓一面から狹い三疊の室を充滿に照してる、夏子は横手の障子を開け放して机を壁の蔭へ置いて、時間表通りに漢文を習つてゐた、古い錆の出た目醒時計がカチ／＼と鳴つてゐる、もう十時だ、筆を置いた夏子は倦る相に横になつたが、不意と定次の事が胸を襲つてきて驚いた樣に起上つたが、机に凭つて凝つと考へ込んだ。セチ辛らい世にしかも見知らぬ人に誰が十圓二十圓と呉れる人があらう？…

無報酬で月々金を貰ふ事になつた時、夏子定次の來る日を心配したが定次は思つた程尋ねなかつた、一週間に一度、二週間に一度ときては堅つ苦しい話をして歸へつて行く、今度こそは厭らしい事を言やしないかしないかと怖々してたが何も言はなかつた、夏子は其分らない人を疑ふよりも、學校へ這入つた半頃ボンとつき放されやしないかと、それ許り時々起る深い思であつた、その初、紹介所から紹介書を貰つて定次を尋ねた時、夏子は東京へきた理由も志望も、すつかり僞らず語つた。

三日許前の夕方定次が茫然した顏してきた、その少し前に情夫の壽から葉書が屆いてた。どう見ても小使か造幣の職工か位にしか見えぬ定次は、そのづんぐりむつくりした身體を座らせると「お賴が有ましたか？」と定つた樣にきく。

「えゝ、でも此頃は少しつか呉れないんですよ、きても葉書、今之來たんですの、厭になつて仕まふ」と投

げる樣に出した。

夏子は定次と相對して座つてゐても、恩人なんて心はちつとも起らない、普通の樣な、定まつた事の樣で反て自分は高い所にゐる樣な氣もちがした、實際定次の拙い字や文やを見ると、プライドの勝つた夏子には這麼場合でも、敬ふ！つて心は出なかつたのだ。

讀み終へた定次は「矛盾した性格ですね」と笑つたが「まだ若い！」とつけて「貴女も可憐想ですよ、戀の犠牲になつたんだ、夫婦の情愛つて這麼もんぢやない若い女が其の日〳〵をどうして暮らせるか？位考へなければならないですよ、一體戀だつても常識で判斷の出來るんでなくては駄目だつて言へますからね」と途切〳〵のまだるつこい調子で言ふ、夏子は言ふ言葉が見付からなかつた、でペンで綺麗に書いてある壽のハガキを口の中で繰返へした。

御疎遠を謝し候、近日僕は厭世思想に囚はれ總ての事に對して絕望を感じ辛らき〳〵懊惱の日を送り居り候讀書も執筆も全く廢したゞ頭を抱へては吐息のみ洩らし居り候、名譽や地位小生の爲めには何等の權威なし、小生はわづらはしき世を何とかして離れ度候敎師となりて兒童の前に顏を晒すはもうイヤに相成候、希望したる新聞記者も裏面の情實を聞きては成り度もなし、文士などは望んでも達せられず、小生は何も捨て申し候英語など硏究したとてつまらなし、只食へる中は食つて墓を待つのみに候（八月には必ず行くべく候）

一番初め急いで讀み下した時には、涙――刹那の……をハラ〳〵と憎らしい程落したが、すぐ後から反抗の念がむら〳〵と湧いた、今讀むと馬鹿らしい！つて心の外何もうつらない、氣にすると自棄に落入るわと心で言つた。初めつからどうせ不自然な戀だつたのだから――スウーと皆消えちまふのも遠くはあるまい――

定次は先程から何か色々と言つてゐたが夏子の心には何にも入らなかつた。

「貴女の夫、義兄樣ですね、その人から幾何か補助して貰ふ事出きないんですか？」と言つた時「あ、低い聲にして下さいな」と遽て言つた

「八圓や九圓ぢや嘸困るでせうと思ふんですよ、男ならですがね、――今日それに付いて來たんですよ」

「言へば呉れない事も無いでせうが何しろ薄給なんですからね、――いつかも三圓程云つてやつたら、いつに似ず厭な〳〵厭世の手紙よこしたんですよ、同棲し

たと云つても二週間やそこらですから。あ、八月に參りますから八月に申しますは…………」と答へた「八月も直ぐだ、私の事手紙で一寸言つたら如何です」と云ふ「止しませう、手紙だとどうしても誤解し易うござんすから」「それも然うですね」と言つたが氣が付いた樣においでいからお蕎麥を取つてきたら宜でせうと言ふ、夏子は三四軒先のそば屋に走つた。



（天賞）山みち　水戸　須摩子

洋燈が机の上に灯つた、定次は歸へり相にしながら種々と話す、西洋の誰とかと云ふ人が學術研究の爲、生涯妻を娶なかつたとか、啞者を研究する爲に啞者の妻を娶つたとか、大變感心したらしく話した、其の後でいつかも一寸話した定次の妻の話が出た。

癩病だつたのを知らずに娶つて死ぬ迄よく人の冷笑

もかまはず看病したと云ふ事を詳しくした上で、「妻も不幸な者でした」としんみり言つた。

ふと夏子は此人の慈善――まあ慈善だ――も其身についてる病氣の爲めぢやないか？と吹出物のしてゐる定次の顏を氣味惡相に眺めた。

定次は壽より一つ下の二十六だ。八時頃歸つた。暑い晩でだら〳〵汗が流れる、夏子は定次の歸へつた後で隣室にゐる書生と二人で、ぶら〳〵神樂坂の方へ行つた、夏子はもう男となど歩くのは、平氣になつて了まつてる、ぞろ〳〵と行人の後から二人もぞろ〳〵行く、氷屋へ這入つたが夏子は壽のことや今後の自分のことなどが、いつになく深く思はれて沈んだ顏をしてゐた。

* * * * *

十一時頃から夏子の室には日が射さなくなる、が暑さは矢張甚かつた。

夕方定次がきてから九日程過ぎた朝、いつになく、定次から手紙がきた、青い封筒を何氣なしに切つて、何氣なしに讀んだ、讀んでる中に涙が滲んだ。

夏子は壁に寄つた儘いつまでも凝と考へてゐた。

○或る夜（地賞）

横濱市　梅子

「あゝ負けたり、今夜はもう駄目だ。頭がぼんやりしてるんだもの……」とKは將棋の駒を投げて盤を押やりゴロリと寢そべつて、長い煙管で莨盆を引きよせた。何度も勝ち續けた米吉は血色の好い、頰に微笑をたゝへて、つい此頃呑み覺えた卷莨をば、眼を細うして吸てゐた。Kは暫く歸らないでゐる間に、滅切り大人ぶつた、垢拔けのした米吉の姿をつく〴〵眺められた。

「お前莨を吸ふんだね…」とKは氣がついた樣に云つた「えゝ友人が皆やつてるものですから…」「友人！あゝ夜學のだね、此頃英語もやつてるかね、なか〳〵偉くなるなあ……」と何處か冷やかす樣な調子で云つた。

「…………」と米吉は何か云はうとしたが、Kの眼と合はせると何となく出なくなつて、默て袂から手巾を出して額の汗をふいた。其處へKの妹の幹枝が湯上りのつや〳〵した顏で入て來た。手には梨をのせた塗盆を持て居た、「又兄さんが敗けたの？おや〳〵…」とはしやいだ聲で云て笑た。「此度一度幹枝さんやつて御覽よ兄さんとさ。」と米吉は幹枝の前へ將棋板を押つけた。

幹枝は笑ひ乍ら「私駄目よ…」「いゝから一度おやりよ」と米吉は小聲で云て袖を引いた。とKは一寸と向き直て「俺れとなら厭やだよ…今夜は根から氣がのらんもの─それより梨でも食はうよ。」と、寢そべつた儘手を伸ばして、梨をとつて剝き初めた。何か剝くものを倘一つ持て來るわ…」と幹枝は取りに立た。藍色の勝た浴衣を、引ずる樣に長く着て、細い下紐を卷きつけただらしない姿だつた。持て來ると、又米吉の傍へ橫座に座て、器用に庖丁を使ひ初めた。米吉は女の恰好のいゝ髱の邊りから白い頸筋を眺めた。剝き了ると幹枝は、「召上れ…」と笑ひ乍ら米吉の前へ出た。そして自分にも、剝き乍ら少しづゝきつては、紅い唇へ露のたれ相なのを持て行た。夜は靜かに〳〵更けて行く。時々街の方から、囃の音が夢の樣に響いて來る。「お祭りでも此邊は、相變らず靜なものね。」と幹枝は誰れにともなし云た。「お祭つて云へば、今日の吉野君には、實際驚ろいて了た─」と米吉は手巾で口をぬぐつた。「驚ろく程の事もないさ、吉野の事だもの…幹枝見たらう、吉野が花車を引いて步いてゐた風をさ…」「えゝ一寸…」から云て幹枝は心持ち顏を染めたが、てれがくしに、團扇を取てバタ〳〵使た。そして今日見た吉野さんの姿を浮べた。揃ひの絞りを着て、花傘を被つた男振りの好い彼を不圖見た時にはつと思たが向ふでさも親しげに、にこり笑てゐたので、平氣で傍へ寄て行て、言葉を交はしたが、其時、何となく、さうした姿をした男とよりそつて、口をきいてゐると云ふ事が堪らなく嬉しかつた─と思た。「全く思ひきつた事をなすつたはね！」と幹枝は何氣なく云た。「あゝ…」とKは其時もう眠む相な氣のない返事をした。そして傍にあつた莨の箱に手巾をのせて枕の代りにして、重い瞼を伏せた、米吉は詰らな相に、莨をふかしては、出がらしの番茶を注いで呑んだ。幹枝は散らけた皮を盆の中へ纒め乍ら猶ほ吉野さんの事をば、思ひつゞけた。調子の賑やかな囃太皷の音をきくと、何となく心がそそられた。華やかな、街の樣をも思た。若い男女も多數通るだらう…其中には逢ひたい人もゐるかもしれぬ行て見たいなと思つた。「兄さん眠て了たね…蚊が食ふよほら。」と米吉はKの額に留た蚊を逐た。幹枝は新聞紙をKの顏の上へ被せて、米吉と顏を見合せて笑た。米吉は後ろへよりかゝる樣にして、眼を眠り、粋な文句の交た唄を、小聲に唄ひ出した。「巧いのね、いつ何處で覺えたの！」と幹枝はきいた。「聞覺えさ、だがな

かなかむつかしいんだ」と云て、又一寸頸を曲げたり頤を出したりして唄た。本當に何時覺えたらうと、幹枝は氣になつた。米吉は思ひ出した樣に唄をやめて、「幹さんの縁談は何うなつた！」ときいた。「立ち消えよ、いつ迄も縁談なんかない方がいゝわ……」「ぢや寧そ一生獨立して行ける樣に、何か習ふといゝよ、タイプライターでもさう」と笑た。「とても私那麽、自分でお飯が食べられる迄に、何か習ふなんて、それこそ努力はないわ、何處迄も男にくつゝいてなきあ……」「それあ大丈夫だとも、幹さんは面が好いものね。」と米吉は幹枝の顔を見た。「莫迦にしてるわ。」と云たが何となく嬉しかつた。米吉は時計を出して見乍ら「十時と……歸らうかな……」と欠伸を仕乍ら立ち上た。「約束でもあつて！お樂しみね。」と幹枝は米吉の脊を叩いて笑た。米吉は默て笑てゐたが、格子を開け乍ら「此度の土曜に出れないの！」と聲を秘めて云た。「何方にしても米ちやん家迄來るといゝわ！」と云た。米吉が歸ると、幹枝は、明るい座敷へ戻て、柱へもたれる樣に座て、心持ち仰向き長い睫毛を伏せて、想がへると云ふ樣子をして見た。

○病院（入賞）

栃木たか子

Kさんが看護婦の後を尾いて長い廊下を傳つて行くと看護婦はちよつと扉の側へ寄つて「此室でございますから」と丁寧に案内して呉れた。Kさんが禮を言ふと看護婦は會釋して行つて仕舞ふ。Kさんは把手へ手は掛けたものゝ妙に氣臆れがしてやゝ躊躇つた。思ひ切つて扉を押して見る。

「あら、えいんですよ、どうぞ、どうぞ其儘にして下さい、構ひませんから……どうか其儘で」

Sさんが半ば身體を起し掛けたのを見たKさんは強ひてやうと無闇と言葉を續けて制したので、Sさんは哀氣な笑ひを見せて臆劫さうに再び身體を寢せながら

「御免なさいまし……何うも自由になりませんで」

其言振りが何となく悲しく胸に應へる。Kさんは戸口に立つた儘茫然した眼射で視てゐたが徐かに枕元へ座り、一應の挨拶もそこ／＼にして、

「御氣分は如何で被在います！」覗くやうにして訊く

「はア、お蔭樣で幾分快い方で……」息遣ひが苦しさうに見える。

「お大切になさいまし」
「はア……」
Kさんは只無言で幾度か堅唾を嚥みながらSさんの窶れた面を瞶めてゐた。蒼白くなつ額、尖つた鼻、大きくなつた眼、兩頰の衰へたこと、Kさんはハンケチを口元へ當て丶眼をパチ〱させた。
突然醫者と看護婦が二人這入つて來る。看護婦はSさんに被けてある布團を排いで、兩側からSさんを援けて起した。一人の看護婦は手早に腹部に捲いてある幅の廣い繃帶をくる〱と卷き込みながら解いて仕舞ふと院長は側へ寄つて極く簡單に診て一寸と計溫器を拔いて見る。院長の言ふのには最早心配ないと云ふ。院長は直ぐ行つて仕舞ふ。看護婦は眞白い綿を捲いて其上へまた新しい繃帶をくる〱と捲き付ける。看護婦が去つて仕舞つた後でSさんは、
「眞實に厭になつて仕舞ひますわ」と云つて苦笑した强ひて笑みを見せるのもなか〱に哀れな樣子。Kさんは何と申して好いか、たゞ跼蹐してゐた。
暫く經つと唐突に何處の室からか幼兒の泣聲が洩れてくる。泣聲はだん〱高まつて來て、如何にも苦痛に堪へ得ぬらしく、嗄れ切つた聲を咽喉の底から絞り出すやうで切なく胸に響く。幼兒は一頻り泣いてゐたが何かの施術が終つたものと見え、次第に鎭つて行く。他人のことだが溜息が出さうである。後は森として一種病院と云つたやうな陰性の寂寥を感じてくる。
Kさんは今更のやうに白いづくめの中に橫になつてゐるSさんを眺めた。それから又室内なぞを視囘した。窓掛が半ば上つてゐるので、表の樣子が硝子窓越しに見ることが出來る。午後ながら秋の空は綺麗に晴れ渡つて、日蔭になつた庭先に、松や檜の混みに栽ゑられてある中を、鳴かない雀が枝から枝へ跳ね舞つてゐる暫く足音の無かつた廊下に、輕い上草履を摺る音が聞えて來たかと思ふとSさんの母樣が這入つて來た。
「あら……どうも種々と御心配をお掛け申しまして」と丁寧に挨拶してから、
「昨日も院長さんに聞いて見ましたがね、最早心配は無いからと仰有るんですから、もう大丈夫だらうと思ひますの……妾眞實に安心いたしました」と溜息を吐かぬ許りに仰有る。
「あの、赤ちやんは如何で被居しやいます！」Kさんは聞いた。
「は、彼は壯健でございますから………」

Sさんの母様は妙に赤ちやんの話を避ける容子なので
Kさんも其切り聞かなかつた。
其夕方Kさんは病院を出た。長い生牆に沿ふて、足に委せて歩みながらKさんは種々と考へた。そして女性は如何うしても淺猿しいやうに思はれて、何者を怨むともなく憎悪の念が湧いてくる。Kさんはハンケチを以て時々人の知ぬ間に瞼を拭いた。

小說の選評

選者

例によつて、女子文壇社の方から送り屆けられた順序で、短評をして行く。勿論、應募の原稿を全部批評すると言ふ事は、自分として堪へられぬ事である。ともかく、自分の目で立てた標準より以上のものを批評するのである。

自分が投書をされる諸君に希望するのは、この標準と言ふものが、今は極めて低い處にある。それを諸君が努力して、高めて欲しいのである。

△憂愁（孤雲）　この人はまだ自分の心持を、自分で批判すると言ふ事すら出來て居ない。心を潜めて新しい文學が如何な意味を持つて居るかと言ふ事を、研究すべきである。

△疑ひ（くれ竹女）　この人も幼稚だ。しかし伸びて行く人らしい。初々しい心があるやうだ。しつかり作をする事に努める事が第一に必要である。

△月の夜（いと子）　深くは何にも書いてはないが、しんみりして居る。全體としても、いゝ處がつかんである。隣の奥さんの話――挿話が有機的にならなかつたのは、まだ手腕が足りないからだ。これからはもつと深い處、もつとしつかりした處を見ると言ふ事が必要である。

△病院（たか子）　サツパリと書いてある、割合に無駄が無く明るいのが嬉しい。感じにも稍深い處がある。

△補助――故郷（流水女）　前號の「補助」と言ふ原稿が如何した間違か、まぎれて殘つて居た。で、今號には二篇の中からいゝ方を取る事にした。「補助」の方はまだまとめ方は足りないが、可成深い處に立つて居る。たゞ尋と言ふ男だけがよく感じられるが、夏子が如何な事をして居るのか、定次が如何な身分なのか、一寸分らぬ。が、たしかにいゝ深く感じ、心にしつかりにぎつた處がなくつては出來ない作だ。もつと自由に書いたらよかつたらう。「故郷」の方も、「補助」と同じ缺點はある、ばつとなりすぎて、まとまり方が不足だと思はれる。これはたゞ、作の感銘を不明瞭にすると言ふだけで、此人の爲めには強いてとがめる必要はない。ブロークンならブロークンで澤山だ。で、この作は前のより劣つて居る。全體に低音の悲しい、グルーミーな處は見えるが、捨てばちになつた心持に淺い處がある。噉み方の足りぬ處がある。しかし、この方が「補助」よりはまとまつては居る。自分は「補助」を取る事にした。さて、自分はこの人が眞實に感じつゝある心を尊敬する。

△母と嫂（優梨子）　この人はだん〳〵手が上つて來た。この作なども、前のよりいゝ。たゞしかし、ものを見ると言ふ上には、幼い。も一息、努力する必要がある。

△田舍の子（小笠原ゆり子）　この作も書く方が巧くつて、にぎつてある處が足りぬ。諸君は自分の心を養ふと言ふ事を忘れてはならない。

模範

燈下可親の秋來る模範一部は机上千卷の死書に優る

每月一回定期雜誌
第二號 拾壹月一日發行
第二號 三版出來

學問を尊ぶ家柄の娘と御姫樣育ちの令孃……鳩山春子

就いて學ぶ可き美風に富める仁尾惟茂氏の家庭……山川秋子

模

◎拾壹月號

發行所　東京市神田區旅籠町一丁目

範

内容梗概（一日發行）

◉天下の青年に北海漁業の冒險を鼓吹す　郡司成忠

◉模範の意義と女子の人格教育　成瀬仁藏

◉洪水恐るゝに足らず　本多靜六

◉實際は報酬に依つて導き理想を絶對義務とせる我が教育界　三輪田元道

◉嘗つて放浪高吟せる新平君は今の後藤男爵　田野俊貞

◉鹽原多助の子孫は今如何にしてゐるか　一記者

◉貸座敷の帳場係一躍して社會的大發明家となる

◉余の古英雄觀……衆議院議員　島田三郎

◉米國家庭の長所と短所……アツエラー、オブアーツ　二宮貞子

模範

内容豐富記事清新にして趣味滿溢一般の家庭及び青年の好伴侶

定價

一冊金拾五錢　郵税一錢五厘

半年分六冊金九拾參錢

一ヶ年分十二冊壹圓七拾參錢

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

婦人雑誌中に嘗て見ざりし新しき材料に滿つ

女子文壇第三増刊 八月十日 好評

地方の婦人

紙數二百餘頁 挿畫澤山 **定價貳拾錢** 郵税壹錢五厘

▲地方婦人の自重を望む…………下田文學士
▲女が中心になつて働く…………横井農學博士
▲行ける處まで行き得ない…………田山花袋
▲女性の自然の觀かた…………小島烏水
▲天然の美と婦人の美…………大下藤次郎
▲海豹島の婦人生活…………岩野泡鳴

◎下京の女…………兒玉花外
◎杉坂峠…………澤村文學士
◎私の故郷…………尾上文學士
◎伊豆の海岸より…………中村文學士

◎琵琶湖…………しのぶ
◎雲雀鳴く野より…………横瀬夜雨
◎淡路の生活…………一色醒川
◎海岸…………河井醉茗
◎旅より友へ…………川路柳虹

◎色彩的區分したる大阪市の婦人…………みどり女
◎東京近縣の女の特色…………遊蝶花
◎神戸…………淡柏
◎岡山…………よし子

◎富山と岡山の女…………下枝子
◎五年以前…………山田邦子
◎都會より地方へ…………きく子
◎機の旅日記…………町田靜江

▲小說 漁父の母…………小栗籌子
▲小說 賣り桑…………水野仙子

◎婦風器 目賀田男爵夫人、仲小路遞信次官夫人、中野武營氏夫人、辻村靖子、岸すみ子、中村若子、遠山稻子、武田貢、松岡いと子、其他名流婦人の地方婦人話、旅行談など

◎都會に憧憬るゝ若き女の叫び…………數篇

▲山岳、海岸、町村 △石油の噴出△巖の旅△熱海△房州△秩父△高尾△揚梅の里△大山の麓△山城の北△善光寺△岐阜△山形△裏日本の一部△越後の海△越後甚句△北海道の一漁村△甲北部△外數項

◎本州の南北兩端より（國際の村落より、北見の漁村より）

◎農村の處女が最も活動する田植時（伊豆、伯耆、近江）

▲諸國通信

發行所 東京京橋區大鋸町 **女子文壇社** （振替口座東京第壹七貳九番） 最寄書店に無くば直接御申込を乞ふ

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

青年雑誌 秀才文壇

◎拾一月一日發行 第拾巻第拾九號
◎一冊(郵税共)拾四錢五厘 ◎三ヶ月分増刊共四冊六十三錢 ◎半年分同八冊一圓二十五錢

發行所 東京神田旅籠町一 文光堂 振替口座一九五五五番

△或る夜（梅子）何が中心と言ふ事なく、若い男女の心が動いて居ると言ふ處が、よく書いてある。自分はこの中心として何にも置いてなく、しかも、生活の一斷片が見えるやうに書いてあるのが氣に入つた。

△花子（佐久間貞子）幼稚である。感情も文章も。

△お崎（宗子）すら〳〵と話してしまつてあるが、感銘の殘らぬ作。

△義兄（妙子）この作者は少し倦んで來はしなかつたらうか。何處かに鋭く感じた處があるが、何だか、一つ處に滯つて居るやうだ。今一息だと思ふ。倦まずに書かれ度い。

△母（あぢさゐ）斷片だが、佳い處がある。何でも無く書いてはあるが、正直な處が佳い。

△おふみ（明保野）一寸したウイットが書いてある。娘の我儘も娘らしく、いやみの無い作。しかし、その他に何にも感じられぬ作だ。

△仲働（久子）もつと、鋭い心でものを見てほしい。まとまつては居るが、そこが足りぬ。

△貰ひ子（淺井きよ）佳作である。この一少女が凡てのものから離れて、本能的に生きようとする力を、よく書いて居る。しかし、殘念ではあるが自分はこの作は取らぬ。爲政者はこの一小篇に迄、干渉せずには止むまいと思ふからである。

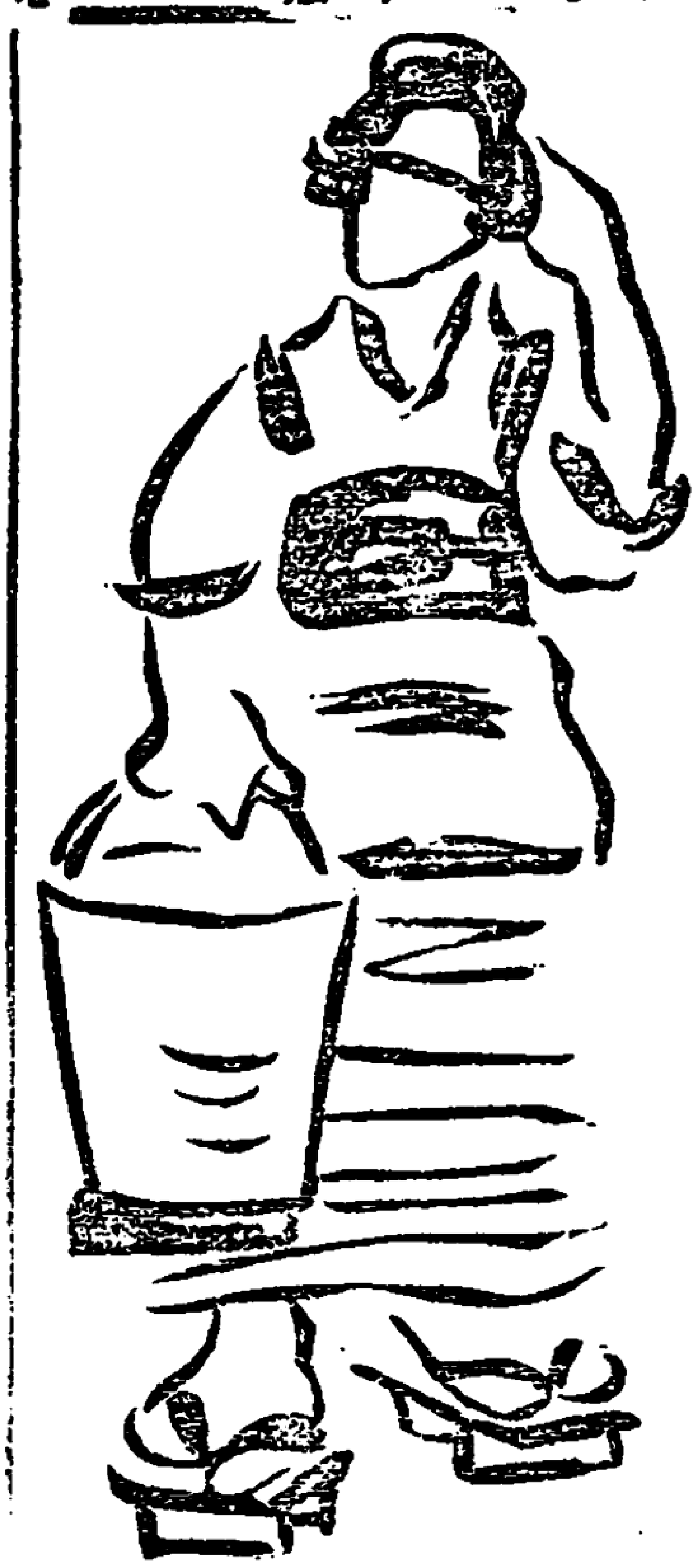
△溫泉宿（原田澪子）巧みだが、こさいた作である。凡てがツクツてある。いくら巧みでも、ツクツた作には生命は無い。

△みづ繪（はち）妙なロマンチックな、魅力のある作だ。何處かに捨てられぬ處がある。

△寺の娘（葉むら）藝術と言ふ事を離れて居る。私情を——むしろ藝術化されて居ぬ私憤を言ひすぎて居るのが缺點だ。その代りにその感情も又人を動かす處がある。たゞ、あまりに長く、規定を越えて居るので、殊に狹いこの欄の爲め、他の人の迷惑を思つて、取る事をしなかつた。

以上の中、以下の順序でとる。

△補助　△或る夜　△病院　△母と娘　△みづ繪　△義兄　△田舍の子



（地賞）下女　福井てつ子

【秀逸】

○母と娘

信濃　優梨子

私はもう此處に居るのが嫌になりました。早く學校が始まれば好いと思つて居ます。母のあの齒痒い仕打ちを、凝と見て居るに忍びませんもの。

瘦せた小さい自分の體身よりまだ氣の小さい母が、絶えず嫂に氣兼して居る事は、決して今始めてではありませんけれども、此春私が出京前より猶酷い樣に思はれます。

「嫂さんは一體どんな氣がして、あの氣の弱い母樣につん〳〵なさるんですか」とろく〳〵母の言葉に返事もしない嫂の前へぴたりと座つて、

詰りたく思ひますけれども、兄の手前控へて居ます。又私として出來ない事でせう、只母を氣の毒だと思つて居るより仕方がありません。

おと近な二人の孫にぐずられて、夜もおち〳〵眠れない母は、もう暗い内に目を覺して起きやう〳〵とするのです。と其度に抱いて居る光子の方が、お祖母ちやーんと泣くものですから、

「什麼した〳〵泣くじやないよ、よ、お祖母ちやんはこゝに居るからなア」とまたそつと横になつて宥めます。それを幾度もして、いつかそつと起きます。

「母樣もうお起きなさるの！構はず嫂さんの起きなさるまで寢て被在れば好う御座んすのに」と私が力のある、それでも光子が目を醒さない樣に小さい聲で云ひますと。

「さうして居るとめつた遲くなつてなア、嫂さんは赤子が泣くと不可ないからそつとしてお置き」と云つて、音のしない樣に靜かに勝手へ行きます。

私は見兼て母の後を追つて、朝飯の仕度にかゝります。――私が歸省した次の朝から斯うなんです、――。それでも嫂さんは別に濟まないとも思はないんでせう。乳が出なくては時々泣く、此二月生れた廣を「なせさう泣くの！」なんて叱りながら、御飯の火が引ける頃まで寢て居ますもの。

母は其間にお襁褓を揃へて、練牛乳を立てゝ、嫂が廣を起すのを待つて居ます

もし其間に二階から光子か其上の俊雄の泣き聲がすると、急いで飛んで行つては、

「おゝよし〳〵泣くじや無いよ、お祖母ちやんが居なくて惡るかつたなさア起きするか」と二人の孫の機嫌を取り〳〵、起して來ます。そして二人のを顏を洗つてやりながら、

「母ちやんにも父樣にもちやんとお手々をついてお早うつてするんだよ、よ、お悧口だからな」と云ひ聞かせて居ます。

餘り母が小用が有つて氣の毒な時には、私が洗つてやる事もあります。それを嫂さんは嫌な程知つて居ても「まア今朝は祖母ちやんに洗つてお貰ひしたの、よかつたネ」など、晴れやかな笑みなど見せた事は、まだ一度もありません。いえ決して私は其麼お世辭を云つて貰ひたかありません、けれども、暫く居なかつた私にさへ斯うですもの。押して母への仕打ちが察しられます。私は只それが慈しくてなりません。

嫂さんだつて別に惡氣が有つてゞありません、性來が極く無愛想で、お世辭など云ふ事を嫌ひな處へ持つて來て、母はそれを直さうともしないで、餘りお靜〳〵と機嫌を取り過ぎたものだから、嫂さんははずーつとそれで押し通して、あんなになつたのでせう。けれども、麴町の義從姉さんがあの叔母さんによくする處を見て來た私の眼には、餘りに嫂の動作が飽き足らなく思へてなりません。

もう堪らない程いら〳〵する時には、構はず麴町の義從姉の話をして遠廻しに嫂にあてつけるのですけれども、一向御當人には感じないらしくて、却つて母が傍ではら〳〵思つて居ます。

「何故母樣は嫂さんにあんなに氣兼許りして被在いますの！」と、夜床に就いてから、低い聲で聞きますと、

「別に氣乘するつて云ふじや無いけれどもナ、兄樣はあゝして始終出張勝ちだし、子供は大勢だしな、もし今嫂さんに病みでもされたら、什麼斯うと云ふ樣な事があつたらそれこそ困るからな」と恁麼なまぬるい樣な優しい事を云つて居ます。

來月歸校の時には是非母を連れて來る樣にと、麴町の叔母によく賴ま

れましたけれども、什麽してあの母が行かうなんて云ひませう。

私は什麽して母の氣を咬る樣に、花屋敷の面白い事や、歌舞伎座の舊劇の好い事や、銀座の夜店が賑やかな事など、暇にまかせて話しますけれども、

「今私が居ないと嫂さんが困るからな、まアもう四五年も立つて子供が手離れる樣になつてから行から」と又しても嫂の事を氣づかつて居るのです。

また私は例へ十日でも二十日でも、あのうるさい子供から母を離して華やかな都會の空氣に觸れさせたいと思ふものですから、

「家なんか下女を賴めば好いじやありませんか、一體兄樣が下女を置けつて被仰るのに母さんがまア〳〵つて斯うして朝から晩まで雇ひ婆さん見た樣に動いて被在るんですもの、其麽時でも雇女を賴まないで什麽しませう、ネ母樣左樣して出京いましな」とわざと調子を强く云ひますと

「大そうも無い、だア其麽事してまで行かずさ」なんて、てんで行きたいとなど思つて居ないらしいんです。嫂さんはまた私がいくら其麽話をしても、

「お母樣家の方は什麽にだつてしますから行つて被入いまし」などゝは一言も云ひません。例へ表面だけでも、若しそんな優しい言を云はれたら、母は甚麽に喜ぶでせうけれども………。

恁麽ですから、待ちこがれた始めての歸省も、思ふさま母の慈愛に浴する事も出來ないで、却つて叔母の家の暖かい空氣が懷しくて、早くあの春の樣な香に醉ひたいと思つてやみません。けれども〳〵又私が上京た後の母の苦勞を思へば――あゝ堪らなく氣がいらいらします。お察し下さいまし。

○みづ繪

羽前　はつ

「狐……狐、誑れ烏ア……」ませた口に囃りながら逃げ散らばつて行く「いゝわよ、弱虫…吝嗇…明日學校へ行く時見てお出で」よく廻る薄い唇をそり上げてやあチャンも負ずと返答して「ほんとに憎らしいッたらありアしない、九チャン明日學校で貴孃とこ許り遊んで上げてよ又繩はねしようネ、彼奴等ウンと責めてやるから…」と親しげに肩に手を掛た私は何だか厭で何しても友達に行きたいけんども怖くて云ひ出せない、優しくされゝばされるだけ、逐々手にいつぱい持つて居た水繪を渡してしまつた「有がとうこんなに皆貰つていゝの いつか私も買つた時上げてよ」嬉しさうに微笑んで其の一枚を嘗めて白い腕をまくり上げピツタリはつてもう一枚をとりつや〳〵結ひ立ての桃割をかしげて私の手の甲にはつて呉れ「オホ、嬉しいわネ二人同じのよ」と美しい眼でニツコリ「あゝ彼れ上げやう、梅の花、今日の雨で澤山落ちたのよ、いつか貴孃欲しいて云つたでせう」しきりと機嫌をとつて手を引く、二人は張つた水繪の上をピタ〳〵打きながらやあチャンの家の暗いくゞり戸を入り店に續いた母屋と隣りの家の板塀との間の細長い所を溝板渡つて行く二代前までは指折りの糸屋だつたと云ふ住居も今は癈れ果てゝ朽ちた雨戸を閉きつた暗い軒下に殘雪が白く暮れ殘つて居る、土藏と勝手との細い所を折れるとすぐ中庭、十坪許りの狹い雨垂水が四方から流れ込む所、眞中に只一本大きな梅樹が枝をいつぱいにひろげて蕾のや開いたのや一面に水に散つて居る、濕つぽく靜かで何かはしらず恐しく淋しくなると「九チャン早く、早くお拾ひな」とやあチャン躰をひそませて自分もセツセと細い指でつまんでは私の前掛に入れて呉れる、と突然「おやよ坊……

おやよ坊ぢやねえかいやかましいやい何しとる」大きな聲でどなつたので驚いて顧ると後の小座敷の障子が開いて大きな男が立つて居る、向ひの米屋の次男不頼漢の藤さんだ、「馬鹿野郎何だつてこんな所へ來て居るんだい」つか／＼下りて來て抱き上るなり「かうして呉れる」と側の納屋に投り込んで重い大きな戸をビシヤーン閉てゝしまつた「御免、藤さん御免…よ」ズタバタ悶えたがやがてバツタリ止んですゝり泣きの聲、藤さんはグン／＼上つて行つてしまつて又もとの靜けさ、自分はガタガタ歯の根も合はず立ちすくんで「やあチヤン／＼」いくら呼んでも返事がない、ボンヤリ花越しに空を眺めて居るとガラ／＼格子が開いて忙しさうに母さんが出て來た、ホツとして見上げるとチラリ顧たきりツイツイ細の方へ行つてしまつた、「やあチヤンの押込められて居ると知らないのかしらん」と悄氣にとられて居るとやがて戻つて來て臺臺を入れた前掛を片手に片手で默つて開けて呉れた、「サツサと出ろや、惡いことするとさう云ふもんだ」やあチヤンなか／＼出て來ない「强情つばりー」ピシヤリ喰はせる音して母さんは又ソヽクサ出て行つた、「やあチヤン」恐る／＼入つて見ると暗い壁にピタツとくツついてすゝり上げて居る「惡いのねーほんに、私この花皆舊通りに置いて來てよ、散らして來てよ、いゝでせうさうすれば貴孃叱られることないわ」「いゝのよ／＼かまはず持つてお出でよ」こけた顏は青ざめて險しい眼からはまだ涙が流れて居る、それを袂で拭うとして手を引つ込ますとたん袖口からホロリ落ちた紙片ー水縮のーまくり上げて見て居たが力士が顏が半分しか寫つて居ないので腹立しさうに指を嘗めてすり落した、自分はハラ／＼として「不可かつたのネー」と云つても默つてサツサと出てしまつた、後について急ぐとたん前掛の端の一片が手からほづれて花が溝板の上にこぼれた、狼狽てゝ拾はふとすると「いゝからそんなもの構はずに、早く／＼」とひどく落ちつかない風で引つぱつた、と足下に一筋の光が射して「やよ、まだ居るかい」ふと見ると二寸許りの障子の隙から明い燈に照し出されてしどけなく散かした黑い帶や紅い衣服や、いま寢返り打つた女のギラリこツち見る眼やーおやあチヤンの姉さんーお轉婆のーだーがチラリうつつて見えたのでびつくりして駈け出した、見返るとその一室許りがパツと明るくて相變らず家中ひつそりして居る。

外に出るとまだほの明るい空は又雲ひく／＼垂れて今にも降り出しさうだ「おゝ寒い！」やあチヤンは自分の袂でギユツと私の首をまいて呉れ私は手を後から廻してやあチヤンの帶へはさむ、何だか妙にしんみりしていつもの怖いやあチヤンではなくて心の底からひどく慕しかつた、「やあチヤン、これから私家に行つて御飯お上りな」「いえ、家ぢや今夜御馳走あるのよ、藤さんが來たから」涙のあとは消えて居た、角まで來るとニユーと現れた黑い影、「おやよでねいか」「お父チヤいま歸つたの…」屑繭の大きな風呂敷包みを背負つて居る「お父サヤこれ何！」右手の手拭ひ包をいがる「六部の燒餠だ、一緒に歸らんかへ」「お父チヤ今歸ると叱られるよ」「ヂア丸チヤン左樣ナラ」「アラ送つて行かないこと！約束して…私獨りで歸れないわ」「いやよ、丸チヤンは弱虫だ」冷淡に云ひなぐつた、もう小きざみな足駄の音はパータリ／＼疲れた體をひねつて妙な眼で見上げる「ヂア丸チヤン左樣ナラ」

らしい草履の音を追うて遠くなつて行く、「いゝわ、今度から決して何も與らないから…」俄に口惜しいやうになつて獨りでバタ／＼暗い路を走つた、後からおやあチヤンの高調い鼻に通ツた唱歌の聲が聞えて來る。

○義　兄

妙　子

道子は身度して了てから又其の病院へ行く道順を繰返してきいてた。

母ものろ〳〵した田舎調子で繰返して説明してた。

しわの寄た指で疊の上へ線を描いたりなぞもして見せた。

「何だ大騷だな、電車から下りたら町をきいて、其町へ行たら其病院をきいて見りあ直ぐ知れるぢやないか、むづかしい事アないや。」

今まで默て新聞よんでた彌助、道子の義兄が如何にもうるさいと云ふ聲で斯う言つた。

クド〳〵喋てた母はぷつと押默て了つた。何か惡い事でもした時のやうな落つきのない眼をして！

「はゝ左樣でしたね。えゝ知れませう。」道子は切口上で輕く答へた冷たい眼をしてた。

「だけんど…横道が多いから！」

母は低聲で不安らしく道子の顏を眺めた。

「大丈夫よ。迷子にもホゝゝまさかね。」笑つて立上た。恰度其時裏木戸から、近眼鏡をかけた若い男が入つて來た。道子と一番先へ眼を合せた。

「暑い！」と云つて男は強く日光のさした椽側を眩し想に上つて來た。

「あゝ北村さん…お暑う。」

道子は汗にぬれた其人の蒼白い額を眺めた。矢張り少し心がをどつた。兜町あたりで活動いてる人だ。一度彌助に嫁の世話をしかけてからチョク〳〵心易く出入する樣になつた。日曜にはよく來る！其日も日曜だ。

彌助は新聞を隅の方へ押やつて大儀らしく座直した。

「どう！市場の方の景氣は。」

「イヤ。面白くない。」

「さうかねエ。」彌助は顏をしかめて椽側のてりかへしを睨むやうに眺めた。道子は冷したむぎ湯に角砂糖を入れて二人に進めた。

「道子さん！暑いのにどこへ！」北村は、絹の薄物に足袋までつけてる道子の姿を氣にして質問た。

「えゝ私！あのウ病院！少し身體惡くしたもので！。」ぢき赫となるくせの顏を其時も苦し想に答へた。

「夫りあいけない、暑さに負けたの！」

「さうかもしれません。」道子は好加減な返辭をした。

「弱い人だね、そんなぢや仕方がない、もつと肥るもんだ！肥んなさいよ。」北村はぢいつと道子のやせた顏を眺めた。道子は何か云出さうとして、ふと義兄を見た、義兄の小さい眼は道子の顏の方へ注がれて居た。のみ込むやうにして默て了た。彌助は普通の首の大きいキセルで刻煙草の煙を吐いてた。別に氣になる樣な表情を見た譯でもなかつたが二、義兄の傍だ！警戒しなくつてはと直覺的に思へたのだつた。

道子はつと立つて自分の室へ入つた。紙入やハンカチを用意して茶の間へ出て來た。

「出かけますかい——ぢやよく容態を話してね、道は大抵解りませうねエ！」梨の皮をむいてた母は氣づかはしげに娘の顏を見上げた。

「えゝも、大丈夫、解りますよ。」道子は力強い聲で答へた。

「何！始めてゆく病院なの、どこの！」

座敷から北村が聲をかけた。

「え、あの山の手の方ですの。××病院つて。」

「あゝあの病院！僕知つてるけど、始めてぢや一寸解りにくいよ。どうせ遊でるんだ。近所まで一緒にゆきませうかねエ。」

北村はいつも這那風だつた、其を道子は親切な人だなと思ふ。

「いゝえ澤山。暑いのに。私獨りだつて解りますよ。」

道子は感謝してる詞を使ふ事が出來なかつた。

それが自分でも物足らず思へた。

「お志なんだ、行て貰ちやどうだい、ね繼母さん。」皮肉のつもりか彌助は這那事を云ふた、母はヲド〱した樣な眼をして挨拶に窮してた。

道子の弱い胸にはムラ〱反抗心が起つた。

「あゝさう仕樣、行て上げやう。譯アない。」平氣で云ふ北村の聲をきいて道子は何のためかわけもわからず、胸が熱くなつて泪が流れてきた。

○田舍の子

牛込　小笠原ゆり子

「お定ちやん、さ、御湯に行きませう」從姉の絹子がシャボンや白粉や色々な道具を小箱に入れて椽がはで雜誌を見て居たお定を誘つた。

「エ、御湯！さうね、今頃はこんでるでせうね」

「アラ今頃が一番すいてるのよ、一所に入らつしやいよ、さ。」

お絹は活々した調子でずん〱思ふ事を云ふ、そして無遠慮に自分の思ふ事を相手におしつけて平氣で居る。内氣なお定はいつも半分は云ひかぶせられて不本意ながらお絹に從つて終ふ樣になる。

「妾、何んだか、あんまりこんでるのはきまりがわるくつて………」

「マアお定ちやんは。どうしてそんなに内氣なんでせう田舍で育つた人はおとなしいのね」

お絹はよく田舍の人々々と云つた。けれどそれが別に意味が有つて云ふのではないけれど、お定にとつてはひどく是が耳について不快に感じる

「アラ田舍にたつて妾見たいな氣のきかないもの許りじやないわ」

お定はくやしさうに云つた。そして「いゝわ、いゝわ今に偉くなつて見せるから」と心に云つた。

「さ、早く行ませう、よ！」

絹子にせかれてとう〱お定も家を出た。

ゆく道々で「今度芝居が開いたら行きませうね。先達はね、好かつてよ芳三郎のお七の人形ぶり、そりやほんとにお定ちやんにも見せたかつたわ」

直ぐ近所の劇場を指してこんな事を云つて歩いたお定はこんな話しはあんまりきゝなれぬかして面白くはなかつた「さうオ」と空返事許りして歩いた。

お湯は、あんまり人が居なかつた、子持の神さんづれの二三人入つてゐた丈けであつた。

それでも國の自分の家で許り入りつけたお定は廣く明るい場で着物を取る事は、何んだかいやだつた、大きな姿見の前に洗桶を並てお絹は熱心に襟や顏を洗つた。お定は姿見の中に白いお絹の顏と並んでうす黑い自分の顏がうつゝてるのを見ると何となく氣はづかしくなつてきてわざとわきの方へよつて洗つて居た。

もや〱と淡い湯氣がお絹の體をめぐつて立ち上つてゆく。手や足がピンク色になつてムッチリとふくれた乳房、肩から脊にかけての曲線が云はれぬ程うつくしい。お定はどこの故でかう東京の人は美しいのだらうと思つた。

「あたし、今度、島田に結つて見樣かしらね、定ちやん似合ふかしら妾しに」

鏡を見て髮をかいて居たお絹は、かう云つた。

「定ちやんも、そんなひさしがみはもう御よしなさいよ、髮の毛がだいなしになつて終ふわ、島田にでもお結ひなさいよ」

「アラ、妾しが島田にいつたら、それこそお猿さんの樣だわ」
とお定は云つて、ひよつとわきに居たお神さんがこつちを見て居るのに氣がつくと思はず耳が赤くなつた。
絹子は餘念もなく白粉をつけたり髮をかきつけたりして居る傍に居たお神さんたちは絹子が人もなげに姿見を占領して居るのと若々しい派りの美しさとをねたましさうに眺めた。
「おさきに、つけてよ、さア定ちやんおつけなさいな」
お絹は人形の樣な顏をしてニツコリ笑つて白粉を出した。
「アラ、妾は入りませんの、つけるのはきらひ」
お定はわけもなく胸がをどつてあわてゝ手をふつた。
「マア、さうオ」
お絹はおかしな人ね、女のくせに白粉がきらひだなんてと云つた樣な目つきをした。
お定はあたりの人がいかにもお絹と見くらべて、田舍者だよと笑つて居る樣な氣がしてセツセと體をふいて上つて終つた。
湯上りの美しいお絹の姿は夕ぐれの街に一きわ目だつた。往來の人がチヨイ〳〵ふり返つて見る。
お絹は之も樂しみの一つであつた、けれどわざと氣がつかぬ樣な風をしてお定に色々話しかけて歩いた。お定は早く家に歸り度い、往來の人がお絹を見る度に自分を馬鹿にしてゆく樣な氣がしてかけ出し度い程に思つた。
お定はお絹の影にかくれる樣にして歩いた。



（入賞）隣の人　京城　横田月子

五文づゝに分けて淋しや草の花　子規
兩袖にたゞ何となく時雨かな　惟然
天地の話とだゆる時雨かな　湖春

かがやき

長曾我部菊子

武藏野の地味は豐穰で、其處に根を托して居る木草は皆黑みを含んだ靑さを充分に葉脈に漂はせて、ゆるやかな圓い形や、心臟(ハート)の形や、針の形なのや思ひ思ひにみづみづした若さを溢れる程湛へて居た。

蓮田には、卷葉も立葉も皆張り切つた生の力を表現して、微吹く風の手にゆすぶられると心持好げにざわめいた。

心に一方ならぬ煩悶を持つてゐる私は、よろよろして其の靑一色の夏い路を彷徨つて居た。

路には折々赤煉瓦の破片が轉つて、赤い色を草間にちらかして居た、私の思ひ煩ふ處は、畢竟するに若い女の解放せられた喜にともなふ苦い責任と、たより所のない孤獨の心細さの外には出ないのであつた、私はいつも煩えて居る。もだえてもがいていつとて一月に三度四度の心の革命を經ない事はない。私はいかに、自由を得て、自由の空に飛ぶ女の淡い悲を、悟つたであらうか。

私は目を上げて靑く澄んだか廣い天を眺めわたした。平原の偉觀を抱し武藏の國の空も赤漠々として見る眼心を樂ませる。濃いけれども、靜に輪形に解れていく煤煙の五條六條も今日はそれほど私の心に壓迫を與へない。自然と私はいろいろの思出を辿つて、一方ならぬもだえの火に水を打そゝいだ。悶えは苦しい。苦しいけれども、私はもだえを避けてのがれ等はすまい!。

昨日であつた。私は矢張此の道を、淸爽しい靑色に眼をまかし切つてぶらぶらと歩いてゐた。それはやはり此の邊であつた兩側の稻田に蛙がころころと鳴いて、白い名なし草の小花が畔に咲いて見えた。花々稻田を眺めて彳つてゐた瞬間……ふと心の底にきらりと閃くあるものを捉へた。實にも實に偶然であつた。閃くものは光明の鍵とも言ひ現さうか。人には得語れぬ示しやうのない展開が、みるみる暗い悲いもだえの扉に生じて欣喜雀躍、私はつつしみもなく、笑ひはじめたのであつた。抑へやうとしても窄め樣としても、ぴくぴくをどり上る喜べる心をもつて、熱もてる眼を思はず、榛の並木の方にむけた。

と、並木は風に小動ぎをしながらびらびらと翻す葉の音樂は私を浮立たせ、さやさやさやさやと、耳にいつぱいであつた。木でも草でも石ころでも、仰げば雲、さわたる風、ものとして私の高き胸の皷動にひびきをたとしくせぬものは無い。

空は曇つては居たけれども、空氣中には、草の香氣ある水蒸氣を含んで居るかのやうであつた。而して、私は深く悶えたい雄々しく強く立つて苦しんで見たい、と思ふ覺悟は、其時さらに固く胸にすわつたのであつた。



詩

河井酔茗選

○魔睡の稲田（天）

府下　章子

夏の日のくもり日の朝
田の面には霧ふりそゝぎ
白き夢、稲穂にかゝる。

青き愁と
あを白きおもき沈黙と
白がねにかゞやく
きりは沈みて。

かげれる陽のもと
蟬なきて、けだるげの
風吹けば
稲穂悲しげに夢よりさめて
うれはしげに青き額僅にあげて
ひそやかに、ぬすみゝしぬ
魔睡の稲田。

かくて又悲しげに憂愁にねむる。

何ものゝ怒力もあらぬ
ひそやかのおちゆくゆめ。

いつもある邪歴物が取り除かれて、詩の姿がたいへんすつきりしてきた、これで追々内容が充實してゆけば本詩壇の重鎮である（評）

○若き日の歌（二）（地）

和泉　金田代志子

若き瞳

『何求め汝はうち默す
柔かき月の光に
白き花、ほのに抱かれ
静かにも顫ふ夕に。』
『然り、今、何時の夕にか
夢の如別れし君の
色青く濡れて匂ひし
彼の若き瞳こそ欲れ。』

類型あり（評）

夏

日は暑し、眞夏の眞晝
風は落ち、腕たるげに俯向し
桐の大葉のけだるげさ。
屋根の瓦は白き光を反射して
眩暈ばかり惱しく、はた聲も無く――。
井戸の陰なる濕り場に猫ぞ夢見る
其のそばに血の如萎へしひなげしの苦惱の思――

此詩を見ても作者が技巧のおとなくしてゐることが分る（評）

暮れゆく海のにほひ

風落ちて波も靜かに
渺茫と暮るゝ海の上
灰色の淋しき空に
旅の子が道を失ひ
迷ふ如、小雲の一つ。
悲しくも惱ましく光消え失せ
只一人嘆きつゝ暗きに迷ふ。
あゝ濕りたる潮の香は
夜の氣をさそひ迫り來ぬ、
我が立てる磯に
雲迷へる空に
斯くて又暗も迫ひ來ぬ、
足許に寄せ來る波の
悲げの音により出され――。
見よ遂に雲はかくれぬ
暗の中――、我の心も
たどるべき道も知らぬに。
あゝされど未だ光なし。

此詩は傑作、いつも云ふ模倣の痕も少く、全く作者獨創の詩才が溢れてゐる。進みたまへ、此態度で（評）

○闇吹く風（人）

麻布　早川花子

君は我れに、――我は君に隱れて
信頼りし人は離れたり、
曉の夢、未だ覺やらぬ
迷ひ泣く夢の歎き
迫るは秋の淋しさと
冷たくなりし我が胸よ。
戀知りそめしその時は
黄に霞める野も山も
懷しとのみ思ひみし
荒れたる風に誘はれ――我が胸は
涙の外になにを守らむ
冷たき風に吹き巻かれ
天なる星も我に背きつ胸の悶を嘲ふ
心の柱奪はれて動搖が儘に任せ泣く
夢につなきし――面影も――
夜晝逢ひし現にも
幸なる光りは悲しきもの
去りにし後は現なりと泌み〲思ふ
あゝ、辿りきし秋の野も空も
淋しきものよ、掠めしまゝに
消て行きなば闇吹く風に任せなむ。
玉は去りたり流れたり
はふり落る涙は

病葉に似し胸に注がむ
薄衣に抱かむか、若き傷し胸を
いかへす星の輝きに
胸のおひめを語らむか。

あゝ、われたよるこの天地も
おぞましきもの——あゝ我れは
ものゝまぎれに生れきしや
人に背きてかたくなの
心を抱きときがたき心の謎に
泣き泣きし悲しき調べ
夢は我が身につらかりき。

言葉の貧弱なるは何うも仕方がないけれど、其乏しい言葉を振り絞ってこれだけ歌ひ得たのは殊勝である、一寸得がたい佳句も二三ヶ所にあるふたんの熱誠が稍詩の文字に徹してきたのであらう（評）

【佳作】

○二つの天地

港の女

「あゝ今誓し、この瞬間を」と
ふるへながら叫びくるふ
いたましい聲—若い心の終焉の聲か
あゝ—あゝ何處かに——何處かに
自分のために作られた今一つの
自由の國がある?、樣に只—只
信じて駈つて行く心もとない眞晝



赤き椿の精　金澤市　蜂須賀正

皮膚を病んで居る樣な山肌
眞直に下て來る鋭い〱眞晝の光は
あゝ痛々しうも照らしつけて居る
ともすると柔い私の肌といたましい
山肌とがふれ樣とする細い道
夢見て居る—面白い赤土の道
沈澱した重い〱なやみは
よわい私の足をわづらはす
けれども——けれども——
此道こそ誰も知らぬ—自分も
不可思議な道の樣に思ふ
あゝこの山間に漲つた大氣は
初めて私が吸ふのだらう
信じては又まどふ
だん〱足元が輕くなつた時
虚無を見て居た目の前に
ひらかれた、綠の色、柔かい—
倉皇しう、綠の中に踏込む心
よろこびか——おそれか——

以下削除した分は別に一篇とした方が宜い以上だけで一齣の詩を成してある、以下の分は未成品である、作者一考を　す（評）

○けぶる雨

木がくれ

朝顔のすがれ葉をぬらし、終焉の色
に泣く小さき花に、強い囁きを殘し
て、柔かく又淡く雨はけぶる……
強く頭を上げる白い花、青ざめし女
の夢はたまゆらも無く、花の眞に吸
はれし、逃れ行く、何處とも知れず
靜かに流る、オーガンの赤き音波の
執着
美しき夢を秘めたる雨もやは、僅か
にくもるにぶき空に、緊張の力を示
す、青松は並ぶ小山の頂、はひより
て、めぐり流るゝ
蜻蛉の透きたる羽根は、冷え――雨
にせまき旋律……
青錆びし哀寂の情調、低き呻き
ぬれし花、てゝかしてに啜泣きを傳
へる壓迫
けぶる雨、淋しき曲節は力を見せて
淡きなげかいの夢をのせて、遠くは
るかにたゞよふ。

決して下手ではないが、未だ此作を見たゞけでは何とも其技倆は分らぬ(評)

○花の最後

しらはぎ

はらはらと淋しい音がした、
何であらうとふり返ると茶色になつ
た白百合の花が二ひら三ひらまだ青
青とした生ある樣な疊の上へ落ちて
居た、上を見ると花さしにはつかれ
きつた葉の色
花の短い命の亡ぶる時がきたのだ
雪の樣な肌をほこつた白百合の花も
今はうす茶色に老いてしまつた
あまり短い命ではないか、だけど
あれ〱また一つ二つはらりと音を
立てゝ落ちた。

原作には花を折つたのは私の罪だから、怨んであるやうに思はれると云ふ心持を表はしてあつたが寧ろ無用ではなからうか(評)

○十九の秋

蛾

風は吹く風は吹く、十九の秋を風は吹く
まつしろな雲が青い空を走つて
淡い光は硝子窓に照る
あゝ十九の秋、それもまう
風と一緒に行つてしまふのだ。

はら〱と髪が散つて
ゆかたの袖は寒いやうだ
椽ばたに只一人、私は
秋逝くな!と叫んで居る
けれど風は吹き止まないのだ。

くれる秋、あゝ寂しい
秋海棠がなやましさうに
逝く秋を悼んで居る
黄色になつた朝顔の葉は
ふら〱と動いて居る。

いくら惜んでもいくら泣いても
逝くものは仕方がない
いつそすつぱりと思ひ切つて
未練なく別れた方がいゝ
とはいふものゝかなしい「別離」だ。

○穴ぐら

越前　露

巴か土に木の根はみ出で
崖下の朽ちし扉、
手鍵もて衝とおせば
仄暗く冷たき穴ぐら、
（身を吸ひぬ）
濕々と土の香傳ふ清水のにぢみ
塑ばかり濡れし土棚、
淡青き硝子の器
白きくち音して抜けば
酒の精腦に入りて
土の香の半を消しぬ。

重き壜搖みもあへず
光さす扉の外口……。
濕りたる白き浴衣
花毎に靈氣は浸みて
妙なるは……わが心の刻み――。

○魔

麴町　月待草

何處かで微な口笛がなつてゐる、
ホウーホウーと――。
暗い植込の奥からの様にも聞える、
かすかにホウーホウーと。
ふくろの聲を遠く聞く様だ、
暗い影から魔が呼ぶ様な氣がする。
あゝ漸々心が魔の方へ引れて行く様だ。
魔は茂みの間から眼ばかりギヨリと出して 私の
心を手繰てゐるのぢやないかしら？！
何かに縋りついて行くまいとすると それが根なし草の様にズル〳〵と抜けて了ふ。
そしてだん〳〵魔の方へ引かれる、
恐ろしい、恐ろしい、助けて――助けて――。
かう思つても聲が出ない。
あゝずる〳〵と引かれてゆく。

○夢日記

札幌　清川ゆき子

まだきのにぶき雲
あめつちのはてに消え
渺茫たる紺碧の
丈たゝぬ底には
大魚の饑餓てひたあへぎ
鬙の如き海面に
無言の風はゆるう流れぬ。

故山何千里――
大氣は沈默し海はねむれど
あゝ――まどへる若き旅人は
祕むべきもたえとあこがれに
絶望の瞳あげて――何をか求むる
「あゝ！まつて――白鳥よ、どうぞ
どうぞ、一刻も早く、此思ひをとつて行つ
ておくれ……」
狂ひたるそのさけび！そのひゞき！
（またしてもかなしきおもひでをきざむか
このむねに――、強い痛みをおぼゆるよ）
あゝ―――
白鳥よ――白鳥よ――
はてしなき宇宙と限りなき自然界とは
神秘の國に羽ぐゝみて
自由の翼をさづけしか？
肉はおち、血もかれたる女の子
つかれたる魂のおのゝきに
生の色こそなけれ
たゞゆらのこのなげき、このもだえ
あゝ―――あゝ―――
白鳥よ――さめたるかげよ――。
とりとめぬ悲哀をいだきて……

○彗星

徳島市　升田福子

眞黒なる空。
唯、眞黒なる空……恐れを離れて
凡ての者の君王のごとく
止まざる火光の紅き威壓は
更けたる五月二十八日の夜半に輝く。
震動せる微細なるレンズの戰た。
一九一〇年の初夏。
人は偉大なる自然に恐れて
くしくも弱く叫び
よろよろとよろめく細き人影のあしどり……
靴の……下駄の……空氣草履の響。
橋の上、丘の上、人は其長き尾を恐れ
豫期したる歡待の心意氣も
暗の火焔に包まれては回はり回はる……

新詩句

○白い藻の花、お前も淋しいの　筑後　柴田百枝
お前も淋しいのと言ひかけたところに、女性らしい情調があつて、短い詩の一句としては、これくらゐが佳作に屬する

○離れたくはない、影のやうに　京都　松木絹子
これだけでは平凡、詩にも句にもならぬ、なほさうかと思つたが一寸考へが浮ばぬから此まゝにして置く

○こほろぎが鳴く、折れたダリアの下に　土佐　すみ子
原作は『萎へたダリアに悲しげなこほろぎが鳴く』とあつたが、如何にも下手に説明したものだ

○おゝ嫌な蟲、火を消した　秋田　ふみ子

○誰かに搖られながらこほろぎが鳴いてゐる　府下　三ケ島葭子
誰れかにゆられながらといふ形容は獨創で面白い

○花の魂も私の心も圓い形だと思ふ　備中　篠原繁子
原作『花の香も』とあつた、何故圓い形だと思ふのか、勿論理窟ではゆくまいけれど、此作は理窟を脱しやうとして理窟に囚はれた失敗の作

○眞暗な室、息がつまりさう　濱松　平岩白菊
原作に『眞暗』とあつた、別に新しくもない

○木犀の花にキスした若い女　うた子
木犀のやうなこまかい花にキスは出來まいと思ふ、それとも木犀の花を御存知ないのであらうか、選者はキスと云つても、其香にあこがれて房の傍まで持つて行つたのだらう位に解して、此作を採錄して置く

○いつまでも華やかに、華やかにとは思ふけれど　茨城　川和田初子
原作下半『華やかに笑つてゐたい』

○蝶の翼が流れてゆく、冷たい水に　越後　金塚美代子
原作『澄んだ秋の水に灰色の蝶が溺れてゐる』溺れてゐるは露骨だ、灰色の蝶もをかしい

○夢を見た、言はれぬ夢を　鳥取　松浦春江子
原作『戀しい夢』

○砂丘の上に月見草がパツと咲いた　港の女
原作『砂山の黄色い花を月見草と教へられた』はやはり説明で、教へられたもつまらないことだ

○あれ……つかまいちやあ……と夢に泣いた　麻布　草雲雀

○人氣のない窓、悲しい文字が並んで行く　淺草　ひなげし
人氣のないは好かつた

○風が吹いた、芙蓉の花が動いた　くれなゐ

○誰がなんと云つてもお嫁には行かないよ　美濃　梅香

○冥想をさまされた、人の手に　麻布　美耶

○春風か、女の聲か、歌ふのか　美濃　蔦の葉
原作『春雨のやうな女の聲が忘られぬ』春風でせう、春雨のやうな聲とはわからない聲だ

○夕暮の色、黄色い花がぼんやり漂ふ　加賀　勝崎菊
原作『ぼんやり見える』

○花のなみだが星から落ちた　札幌　清川ゆき子

○若い日、私は人待つ宵もあつた　大阪　紫水



散文

編輯局選

○睡蓮（天賞）

夢の女

睡蓮の花は靜かな眠りに沈まうとして、淡い吐息を洩らしてゐる。

片瀬の町に灯がついた。砂山のうしろにちらちらと寂しく瞬くを、はじめてわが見しは四月なかばの夜であつた。黒い山蔭をぱつぱつと青い火花が亂れ咲いて、たちまち消えてしまふ。七里ヶ濱を通ふ電車がとほるのだ。あの蔭に鎌倉の町があると思ふとなつかしい。廊下にながく彳んだが單衣のそでが少し輕く思ふ位ゐうすら寒くなつたので、座敷に入つて障子をしめた。青白い瓦斯の燈が臺洋燈の紅い光りであつたらと思つた。放浪の旅人が獨りを泣くにふさはしい靜かな海邊の宿の夜である。

ザア、ザア、と汀の砂を噛む波の音が絶えまなしに聞える。月が出たのか、沖をはしる浪の白いのが、硝子窓を透して見えた。

旅の情緒に、逃れ來た時の心持ちとすこしも變らなかつた。わづらはしい家や人や、すべてのはげしい檢束を脱けて奔り逃れて旅に出た。わづかな人に送られて市街の家から汽車に、たゞ二人何處とも定めぬ旅の人となつたのは、晩夏のつめたい雨の朝であつた。

海邊の三日は長くはなかつた。けれどもう此處を去る時は來たのだ。明日はどこに行かうかと考へた。海より山に行かうかと人は云ふ。それより町に歸らうかとも云つた。私はどこにゆくともいゝのだ。たゞいつまでも同じ地に留りたくない。旅の情緒のゆれるまゝ、奔るまゝ、海に山に町に、絶えず新しいところを求めて旅に終りたいのだ、明日のことは明日考へるさ。追

はれて暮すのは苦痛ぢやないか、しかし明日は立たうと人は云つた。旅のやうな世の中だつたら、と私は思つた。

暗い明るいに拘はらず、若き日は幸ひです、此文、旅の情緒の動くまゝに動いてゆきたいやうな心持になります、情の文を能くするもの、此君の如きも亦持つて生れた才分であらうと思ひます（評）

○野にて（地賞）

牛込　平塚白百合

野は際限もなく廣い。秋の七草は一すぢの白つぽい道を織り出して、信州境の連山が桔梗色にうるほひを見せて、初秋のカラリとした空にそゝり立つてゐる。

朝の野！清く澄んだ透明な空氣の中に燕が心地よく風を切つて、花の一つ／＼は、たくはへた芳香を一氣に吐いてゐる。

私の立つたのは岡の上だ。

畑も見える。遠くて分明らないが四五人の女だか男だか動いてゐる。草をつけた馬がくる、よみがへつた朝の光線が一ぱいにみなぎつて、目の下の牧場に開放された牛があちこちにちらばつてゐる。

赤や、まだらのや、黒いのや、肥え切つた牝牛が足早やに歩いたり、ゴロ／＼したりしてゐる。

大きな牧場だ。

私達もやつぱり人間以上の者の目から見たなら、牧場に飼はれてゐる牛のやうなものではなからうか。

開放よ！自由よ！と叫んでみても、やつぱり柵を出る事は出來ない。牧場に飼はれてゐるのだ。

私は草をしいてから足をのばした。足のふれた草は皆こまかくふるへて、日がパアーと照つてゐる。あかるい山肌を見てゐた目は、紫と白と青とが渦をゑがいたやうだ。

微風が野をやはらかにわたる。草といふ草は皆何かひそ／＼樂しさうにさゝやきあつてゐるやうでうらやましい、甘い匂と青い香とがてんぐらかつてくる。

たら／＼と下つて、また次の岡へとのぼつてゐる細道のかくれたつがの沈鬱（メランコリヤ）な影のひそんでゐる黒づんだ岡越えに、浮き雲のかくしてゐた淺間は悠然として大きな姿を連山の上に現はした。

たゆらかな白煙、山肌に煙がちつてほんのり山影がうすれる。

煤煙も塵埃もふくまれてゐない煙。清潔く美しい。さうして崇高な男々しい煙は絶えず奔騰してゐる。

私は信州境の連山を見ながら、何となくかうなつかしいある力がひそんでゐる信濃の國を想像した。

初秋のあざやかな空は物によろこぶ少女の瞳のやうに

すみわたつて、浮雲の白いのが如何にも輕さうだ。野はまぶしい、鮮明である。

――溫泉の後ろの丘にて――

平塚さんは文章が上手になりました、斯うあぶらの乘つてきた時に、うんとおのばしなさい、其技倆を（評）

○あしあと（八）

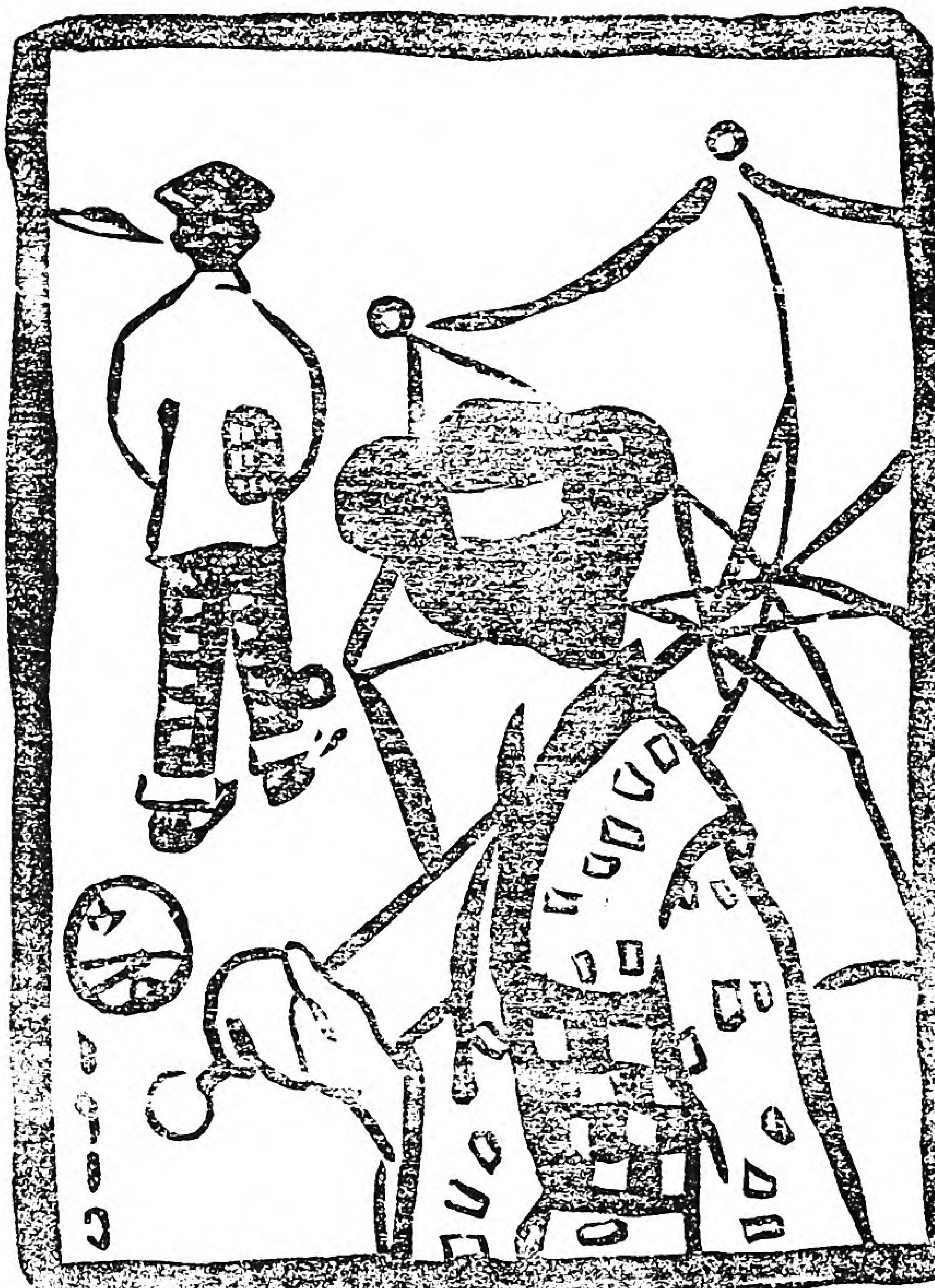
麹町　月待草

濕つた砂地に澤山の足跡――小さいのや大きいのやはつきりしたのへ自分の足を入れて見る。恰度はまつた。屹度此人は九文の足袋を穿んだと思ふ。

誰の足跡だらう？二つ宛果もなく遠く足跡がついてゐる。私は其通に踏で行つた。往來だつて自分の歩いてゐる道は屹度何時か誰かが歩いた處を踏んでゐるのだけど、斯う、はつきり此足跡の主と寸分も違はぬ方向を取つてゐるといふのが好奇心を起させる。この主も矢張りこの青い空をのぞみ、この浪の音を聞き乍ら辿つた道なんだと思ふと、から、神秘的な感興が湧いて來て、深く考へると頭が變になつて了ふ。

隨分ながく足跡を辿つた後と氣がついて（これが何處まで續いてゐるのだらう?!）と其行方を想像したこの主とこの行方を知り度い！といふ好奇心は胸をそそつてついて出たけれど――行方を知つて失望するのは堪らなく悲しい――好奇心にひかれる足を思ひきつてわきへ外した。

好奇心は好奇心だけで、外に或るものを見出すべく此思想は既に舊いのです。（評）



うしろ姿　橫濱　臼井ひで子

【秀逸】

○疑惑

麻布　美耶子

表紙はあせてるけれど新約全書の四字は美しう金色に

輝いてるバイブルを抱いて、又默想に耽つた。わからない、どうしてもわからない。佛敎を信ずる家庭に、こんな本のあるのがわからない、考へれば考へるほど、何にか包まれてる秘密でもあるかの樣に思はれて。此間はからず父樣の書箱から出た此の本を持つて、もう好奇心に滿々た瞳に母樣のお顏を見上げながら、「是誰れがお讀になつたの」つて伺つたら、はつとなすつたらしかつたけれど、すぐとお顏色を靜めて何氣なく「お父樣がお若い時にでもお讀みなすつたんでせう」と仰つて次の間へ立れたので、お可笑いとは思つても、讀たいと思つてた本なので、ページを繰つてゐたら又出て居らしつて「讀でるの、そんな物をよしなね」と深くもおとめなさらないので、とう〱私の物になつて終つた。其夜父樣に「若い時はなか〱ハイカラだつたのねお父樣も」つて例の本を持つておそばへ行つたら、母樣のお目くばせ、瞬間のお目くばに、たゞ父樣も「うん、うん」と總てを包んで終はれたので、疑惑は一層翼を廣げた。どうしてもあの寫眞ブックの二枚目に微笑でる〇〇ミッション、スクールの制帽制服を着けた十四五の少年、姓名を聞いても決して仰らぬあの可愛少年と此のバイブルと何にか深い緣しが秘めてある樣に思はれてならぬ。

　深く深く考へて見ると、私が五ッ六ッの頃兄樣と親しんでた方がたしかにあつたと云ふ樣な事が、夢よりも淡く、たゞかすかに浮ぶのみで、其の人は生てるのか死んでるのかそれとなく、ねー母樣私にも夢に生れて夢に消た兄樣があつた樣に思はれるのよつて申上たら淋しう笑つて何んとも仰らなかつた。疑惑は益々迫るけれど、バイブルにふるゝ如、幻の君に對する慕はしさはつのるけれど、あゝ何時〱とけるのだらうか此の謎は！。

感じの深いお話です、意味の深いバイブルです、散文の材料にはよすぎるくらゐ、好い題材です、文章もわざとらしくなく善く書けました（評）

〇桑の林

羽前　あらゝぎ

朝まだき、私は跣足で、桑畑のなかの徑を歩いた。ぽとり、ぽとり、としづかに露のたる音がする。皮が朽ちて剝げたり、うつろになつた太い幹の老木ばかり青暗く林をなして、淺綠の二番目の葉は皆涼しい汗をかいたやうに濡れて、雫を落してゐる。があん、でん、でんう、――とほど近い法音寺の鐘が鳴る。があん、でん、でんう――緩るやかに葉の茂みをくゞつてひゞいてくるのと、ぽたり、ぽたりと、奧深いなかまで、滴る音の一つづゝ、いひつくされぬ、しづけさが身にしみる。

ばうせんとして、しばし我にかへると、日は葉越しに

きら〳〵とかゞやいて、白い光が横からなゝめに、木の間にさしてゐる。その光のさしたところだけ、薄霧がかゝつたやうに見えるなかを、小さい羽蟲がとびかうてゐて、ぽたり、ぽたりときらめく露の雫も數へられた。

濕地の籔

なが雨の後につゞいた曇が、午後から、からッと西風に雲をはらつて、鮮やかな夕日をこぼした。

畑のぐるりを圍つたやうに植ゑつらねた、玉蜀黍の昆布のやうな葉が、ぴら〳〵と、すれあひ、からみあつて、ざわざわと果てもなくあらがうてゆく。

李の樹の下へゆくと、すつぱい匂ひが草の中から湧く、熟さぬうちに蟲がついてひとりでに落ちたのや、ほろひ落す時、そこらにひそんだ實が腐爛する匂ひ。そのあたりの籔に私は芹の花と薄荷の花をみつけた。芹の花、みづ〳〵しい葉、莖、細かいのがかたまつて咲いた白い花。おそ夏の野に咲く花で一番私はなつかしい薄荷は嗅ぐと、鼻のすくやうな強い匂ひがする。萎びた晝顏が籔のなかを縫うて咲いてゐる。

女らしい机の据ゑてある四疊半や、煤煙のうづまく都會の空や、シーツの白い自分の寢室や、病氣療養のために好いと云つたやうな海岸やは、描寫する人に乏しくありませんが、野を描いて、これほど淸新の氣を與へる人は一寸外にありません（評）

○野分の朝

野の百合

盛りを樂しんだコスモスが、無慘に根からたふされた上へ、折かさなつてヘリアントウスが打伏して居る。唯さへいた〳〵しい朝顏も、垣から哀れみもなく振もぎられて、やう〳〵菫かの蔓がこれのみはとまとひ付いた葉から時々堪されぬやうに、ぽたり〳〵露が零れて來る。丈の短いのが幸して、葉かげの淋しくなつた程で濟んだ夏菜の根方へ、パンゼィや撫子へリオの鉢が哀れを乞ふやうに轉け込んで居る、其上を何處から來たか羽の破れた胡蝶がつかれ切つたやうに止らうとしてはとまり兼ねて居る。

今樣、枕の草紙とでも言ふべきもの（評）

○或る夜

さくら子

次の間の八疊で何だかがさ〳〵する、滋ちやんが便所へでも行くんだらうと思つてると、不意にすら〳〵と私の所の襖が明いた、おやつ、御苦勞樣な、何も人の所まはり道して行かなくつてもよささうな物を、其れとも私を驚す氣かしら、いゝわ寢たふりしてゝやれ、わざとぢつとして居ると、ミシツーミシツー、地の底まで沈んで行く樣ないやな足音、眞夜半だから餘りよい氣持はしない、と私の足の上へ乘つた、思ひの外輕い、をかしいなと思つてる間に胸の上へ來た、すると急に息ぐるしくな

つて體中へ鉛の重石を乘せられた樣だ、うむと唸らうとしても聲も出ない、怪しい物はぢつと私の樣子を見てた樣だつたがいきなり鼻の下まで掛つてた天鵞絨のえりの搔巻をつと巻くつた、私はアッと云つて下からおさへた、もう其時は盜ちやんでない事は知つて居た、夢じやない、私はたしかだ、其れでも人がよくうなされるつて惡歴のじやないか知らと思つた、私は度胸をすゑてそつと見てやらうとした、が什麼しても目があかない、口惜しい、と私は其が白衣を着た白髯の長いやせさらぼへた老人の樣な氣がした、つと半夢中で搔巻の下から兩手で突いた、心は一生懸命だけれど手がきかない、でも不思議と怪しい者はつと退つて足の上へ來た、今度こそはと全身の力を込めて右足でとんと蹴つた、あゝいやだつた其時の！、まるで薄紙でも散る樣に力なくはらりとくづれる樣な氣分が氷の樣に足の先から腦までこたへた、丁度何年も埋つてた死體を堀り出すともとのまゝちやんと殘つてるが浮世の風に觸ると他愛もなくくづれてしまふと聞いた、見た事はないがきつと其れと同じだと思つてぞつとした、ほんとうに胸へかき上られた時はこはかつたが何糞と反抗する氣があつたから其樣なでもなかつたが、其倒れた時と云つたら、實に何とも云ひ現せない惡感が肉をくゞり骨を透して全身の血が一時に止つた樣に思つた。

隙もる風にゆれて蚊屋がさらりと頰へ觸つたので見ると私は座つて居たあんなに身動も出來なかつた私が何時の間に座つたんだらう、何だか頭が痛いので緣に出て雨戸を一枚開けた、下弦の月は悲しみを持つた青い光を下界に投げて居る、と何處かでおど〱した不安におのゝいてるやうな鳥の聲がした、ふと昨夜蚤がひどかつたので裏返しに着た寢着姿の妙なのをかつきり月が照らして居たので、誰れも見てないけれどはつとした。

斯う云ふ夜半の恐怖、幻覺を描いた文章は今までに澤山ありました、ありましたけれど、此篇を捨てないのはそれだけ後になつても好いところがあるからです。（評）

○手帳より

蛾

○

新らしい「人」として生きたい、かういふ叫びが胸に起る、世のあらゆる物と鬪つて自らをみがきたい、そして後に始めて求むるものは見出し得やうと思ふ。

出來る丈勉强もしたい、考へもしたい、旅行もしたい、少しでも愉快に我意に叶つた生活をしたい。

○

私は古い思想の壓迫を恐れない、自らの信ずる方に進む、そしてそこに朽ちざるあるものを拾ひたいと思ふ。

○

日常生活の爲に多く煩ふのは愚の極である、ある程度まではそれも考へなきやならないけれど、それを以て人生の全部と見倣すならばあまりに人の價値は輕い。

○

私は考慮にいそしむべき時である、自然をさぐるべき時である。空高く澄み、水ゆるやかに流る、あゝかゝる時、誰れか堪へ得ぬ悲愁を胸にいだいて、悶々としてあるべきぞ、舊思想の壓迫を嘆くの子よ、銳利なるナイフを揮つて汝が束縛のきづなを一斷せよ、然して自由の廣野にあそべ、恐るゝ勿れ、汝に新らしき「頭腦」あり、「覺悟」あるならば！

意氣は昂ぶつて居ますが、偖て解放された後には何うするのでせう、其覺悟が少しもほのめいて居ませんから、空氣絽のやうに見えます（評）

○誌友訪問記（其二）

名もなき花

つか〱と四十餘りの面長の中婆さんが出て來た、私を見て吃驚した如な顔して叮寧にお辭儀して、只ギロ〱見てゐる計り、「新趣味の關西支

部とかの……目黑痴月さんは居られますか」と漸く言葉に出た、家の内は四疊敷が二間あ　らしい「へイあの人甞はおゐやしまへんどせ」廣告の割合に訪問する人が少ないと見えて、中婆さんの目が大分うろ〳〵してゐる「おるすですか――何處かの學校へでも」「あゝッ本なら何やら是だけ預かつてまつせ、甞は下ん町の鍛冶屋へ行つてはりますが、もう歸らはる時分どす」何だかあやしい「何かしに」「へエ、お仕事に、先は横山といふて南向ひの惠比須樣の社をぬけたつきあたりどす、四國の人で親がないとかで此間から來てどす」「其處へ行つて來ても構ひませんか」「へい〳〵」ははア、口どめがしてないらしい、行つたらどうするだらう「一寸拜見」と先刻持つて來た本を見た、七月の新趣味には男子より見たる婦人美、今の女等第一番に書いてあつた、外のは前金申込書や、ノートブック等だつたから用事もないから其處を去つてすぐ横山へ急いだ。社をぬけて西側に横山と軒燈が上つてゐるやはり鍛冶屋だ、門に立つと入口が朦朧だからよく見える、門の方に向つてシャツ着てゐる人二人、裸體のが一人、同じ臺の上で仕事をしてゐる、如何して呼び出さうか、何と言はうかと考へてゐると急に心がおじける。

折よく十一位の女の子が歸つて來た「アノ目黑さん居られますか」「へえ呼びませうか」「……はい……」自分乍ら嫌だと思ふ程微かな聲だつた、待つ間に家の内を見ると器械鍛冶らしい、女の子の呼ぶ聲がすると共に一番端に仕事してた人があわたゞしう立つて來たが、私を見て、たぢ〳〵後へ退いて影をかくした。あの裸體の人が其目黑なんだらうか、何だか用事がすんだやうな心地がして歸りたくなつた、着物きて門口まで出て來た、主意を聞くと文學趣味を世に廣めたいと云ふ。新趣味の申込法や投書のことなど語つた、私はもう何も語る必要がないから「ぢや又今度お伺ひ致します、お手とめまして」といつて計畫して居つた次へと走つた、先刻話を聞いた時と、廣告を見た時の私の心は、急に張合なくなつてむしろ落ついて來た。色々考へながら次に行つた所は、そこよりずつと北の方でS樣といつて昨日一寸葉書を出して置いた、家內に病人が出來て殘念だがとの御挨拶、次も〳〵海水浴に行つて居られて不在だつた今日は不意に思はぬ處でひまどつて、五人程一日の內に訪れようと思つたのに、もうそろ〳〵長い日も暮れかゝつて、後一人がどうかと思はれる、私方から一番近さうである人を後廻しにして、少しはなれてゐるＯ樣へ走つた、初對面だのに大變心置きの無い方で快活に語られた、趣味が合うて誌友會の事は大贊成して居られる、次の會見を約して歸らうとした時には、もう日が暮れて仕まつた、まだ伺ふ處が澤山あるが、次の日として、急ぎ我家へ歸つた。

選者は此記を讀んで、滑稽に感じましたけれど、鍛冶屋さんだからとて文學を愛するといふことに二つはないのです、願はくは其態度の上に眞面目なれ。（評）

○道を歩みて

京橋　野はぎ

いひがたなき佗しさ悲しさに堪へかねて、そつと裏口から逃れ出た。去年まで毎日裁縫の往復に通ひなれた其夕暮の道を佗しい思ひを抱きながらたゞ當もなく歩るいて行く、立ち並んだ兩側の家も人も去年と今年と少しも變つた樣子はないけれど――あゝ今の私はもう彼の時分のやうな華かな少女ではない、自ら世にも人にもそむいて、すねてひとり孤獨の淋しさをよろこぶ淋しい子！、何とはなしに新しい涙が湧いた。

或る日の午後私は相變らず裁縫の包を抱へてせつせと歩るいて行くと、向ふからハイカラな男が私の方を見てニヤ〳〵笑ひながらやつて來た、妙な人と思ひながら出來るだけすまして歩るいた、と、互に近づいた時まあ、小學校時代によく可愛がつて下すつた○○先生だつたのですもの相變らず見えないねつて笑はれて極りの惡い思ひをしたのは丁度此邊だつたけど、ふと思ひ出でゝはなつかしさにちよつと立ち止まつてあたりを眺めた時、道傍の人々は冷かに私の方を見て居たので、はつとして急いで逃れるやうに通り過ぎた。

あゝあの玉やをまだ生れない時分から、先生に上げるお約束をして仕舞つて、度々の催促に仕方なしに手ばなし難いのを思ひ切つて連れてつた其晩、どうしても心配で可愛想で堪らなくなつて、小母さんにいろ〳〵言ひわけをいつて氣まづい思ひをしながらも、やつぱり又家へ入れて、

恐ろしがつて逃げ出さうともがいて鳴くのをしつかり押へて自分も泣き出しさうになりながら一生懸命駈け出して通つた事もあつたつけ……あああの時分の私は、もつと〳〵單純な少女だつたのだ………いひ知れぬ忙しさに冷たい涙が頰を傳うた夜の幕は次第にせまつて晝間はさしもに騷がしい都の小路も今は人通りもまれになつた、あゝ私は何處まで行くつもりなのだらう………淋しい。

何處と取りたてゝ好い處もない代り、間の拔けたところもない、整つた文章です。(評)

○大文字の夜

京都市　つきくさ

門口まで來たが一寸入りかねた。默つて吉川と染拔いた暖簾を半分くゞりかけながら、三條通を西へぞろ〳〵引つきりもなしに行く人を眺めた。ことり、自分の下駄が鳴る。はつとして家の中を見入ると、綺麗に片附けられた店と中の間との隔の硝子障子から、ちらと丸髷の影が覗いたかと思ふと、お照さんが出てきた。「まあ靜さん、初めて來た家でもないのに、おほゝ、何してたの」いきなり私の背をぐん〳〵押して、とう〳〵表の間へ上げて了つた。「そんなにせいでも……酷いわ、姉さん」わざと其儘其處へ座りこむのを、耳にも入らぬやうに、「好い下駄えな」、心附いてぬぎ捨てたのを、揃へやうとすると手早く直して「さあ」と押す。横にあつた艶な下駄を、ちらりと横眼にみやりながら立ち上つて「誰?」「お勝さんよ」。ランプの下までくると、姉さんは、私をつく〴〵見て細面ににつこり、髮のほつれが白い頸に縺れかゝる。椽端の夕顏鉢に目をつけて「まあ大きく咲いたこと」行かうとするのを止めて、帶ゝ直して下さる。「さあ二階へ」階子をとん〳〵、裾の鳴るのを氣にしながら、一緒に上つて、二階をすつと椽へ出る。其處に急な階子がある、今年新に出來た納涼臺なのだ。空をふり仰ぐと星が五つ六つ暮方の空に美しう瞬いてゐる「氣をつけて」相變らず姉樣に押されながら昇り盡すと、上は思つたより廣い。三四人の視線が集つた、默つた儘端に座つてお辭義をする。「どうぞ」と子供を膝に乘せた兄樣が座蒲團を進めて下さつた。顏を上げると叔母樣の肩越しに、大きな眼が白い顏から浮ぶ樣にはつきりと覗いて居る、お勝さんだ。目を見合せると莞爾頷いて「おゝ靜代さん、お久しう、ほんまにお見それ申しましたわ、大きうおなりやしたこと!」かう見られると恥しくて「いゝえもう」口中でいつて伏目になる。膝の上で扇を弄くりながら、そつと見あげる。濃い多い髮を高島田に、前髮を大きく髱を思ひ切つてぐつと張つて、秀でた眉、何處を見てゐるのか長い睫毛がちらとも動かない。長いえり足に紫縮緬の襟がすつきりと映えて銀薄の簪が岐阜提燈の灯とともにさゆらいだ。お勝さんはすらりと立つて欄による。にこやかに此方を向いて「もう大分ともりましたえ」。皆たち上る。點つて間もないのに、左大はもう端から消えやうとして、船は細く、如意ケ嶽の大文字はつい其處にでも燃えて居るやうに、炎々と煙まで見える。伸上ると鳥居も見える。北に聳え立つ二條城の松に遮られて、妙法だけは見えぬけれど。「よう點つて美しいこと」姉樣が上つてきた。五つの榮ちやんが「私にも見せて」抱き上げて見せると「何ぢやい、船で、ボートの形や」皆が笑ふと自分も笑つて足をぴん〳〵させる。月はまだ東山から出さうで出ぬので、暗の中に大文字や船やが、浮き出たやうに冴えて美しい。そつと榮ちやんを下す。何處かで六齋念佛の囃子が聞える、賑やかな太鼓の後に淋しい笛の音が殘る。いゝ音だこと、夢のやうにぢつと聞く。まだ幼い、六齋の獅子を恐がつて逃げた頃、あの頃、共に遊んだ一つ上のお勝ちやんを、今のやうに美しい人だとは思はなかつたが……庭の樹の梢を渡つてきた微風が、すうつと冷たく頰をなでる、囃子はまだ止まぬ。「お茶を一つ」驚いて見るとお勝さんは愼ましやかにお茶を飲みながら姉さんと話してゐた。しばらくお話の仲間に入つて、さて、お勝さんと一緒に、お暇申して立ち上ると、月はもう大分上つて、六齋も聞えず、大文字もすつかり消えて、如意嶽あたりにぽつつり一つ小さい灯が見えた。

ゆつくり描いてある處は京都式とでも言はうか文章は癖のない女らしい文章です。(評)

○朝鮮行（對話）

周防　屋根のくさ

娘　そして今度はおかみさんも御一所で御座いますか。

客　ハハイいやありやそのもそうと山口におかうかと思ひます、まあーなんでも一儲してから、そいからよぶ事にしやせうかと思ひますので………

娘　ハー、ぢや貴下の處へ今五人來ておいでるのですね　一番年まと仰有るのがいくつ位でせう。

客　なに一寸見ちや三十餘りでんすが、なんでも四十一とか云はれました、あとはみんな貴女方丁度二十かけはづれでんす、早く行こう行こう云ふてせめたてられて仕樣がないやうな始末でハッ………そりやとつても〱こゝでどね…なえゝ家へおいでた處で朝鮮の樣な給金は夢にもないからのんた私の目からでも貴女ならめつこう十圓はとられる、そりや私が保險付。

娘　でもそりや………

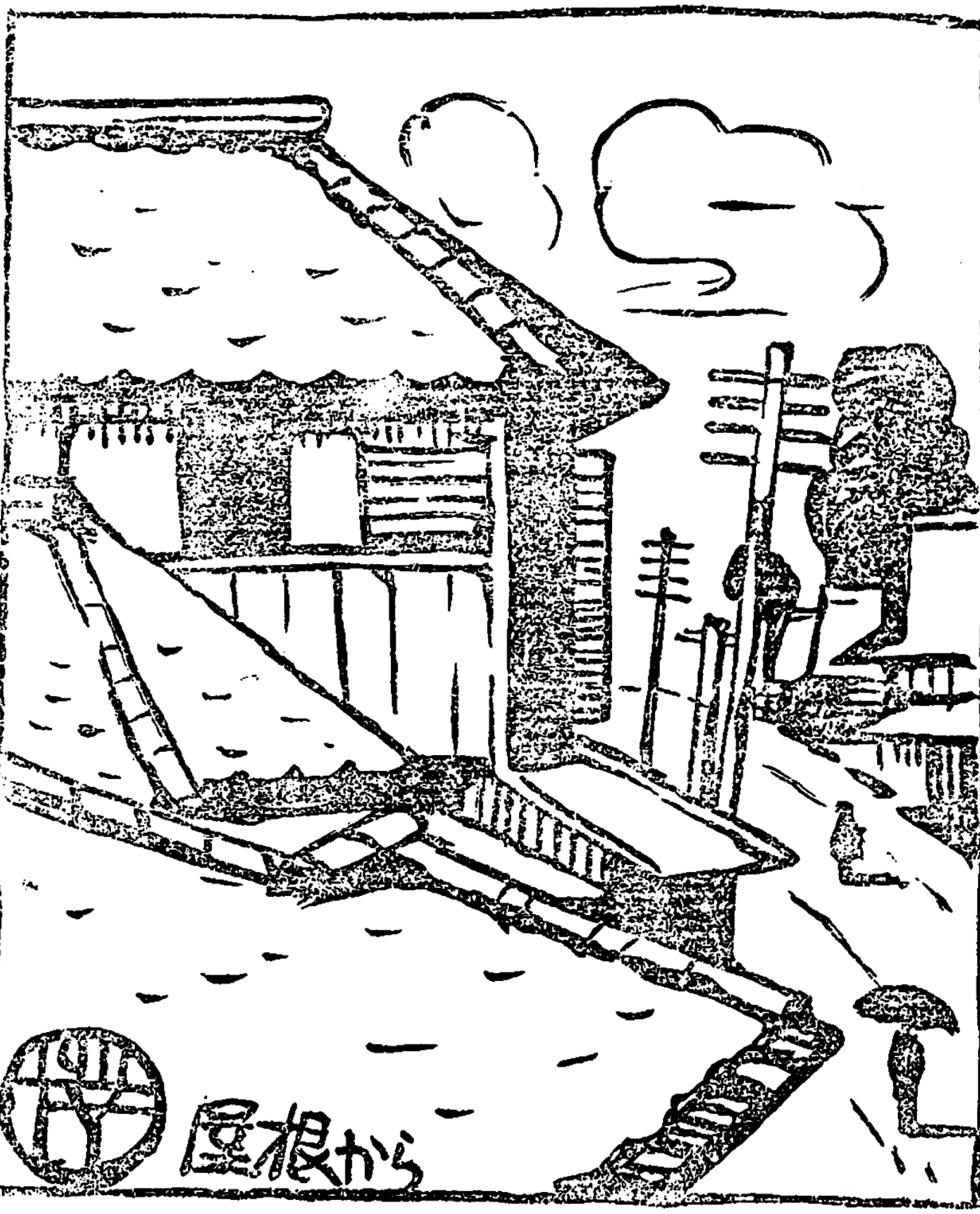
客　ナナなんのそそ、ねーなあんたー間違ひがどうしてあらうぞ、そねーなだます樣な事どもしたら貴女ぢあない、私が先にくゝられる、めつそもない、そりや安心なされ、一人の大事な娘さんを、……イエそりやその私をで御座んすの、親と思ふて居っていかさんせ、間違やうそは夢にもありやせんから。

娘　イエそりや安心しましたけど、ホ……一文なしぢや。

客　イヤ〱其御心配は更に無用、なんにもいりやしません、ほんの着のみ着のまゝで上等、向ふへ上陸してごろじ、片つ端から皆銘仙ぢやもの、それがみやすうに出來るときちよるからのんた、そして知人の多い事つたらありや、あんたもおいでたかて、さあ〱ちうて賑かな嬉しい事いの、一度は是非おいでませ、玉子でも一個が只の八厘、うそのやうな事で御座んせうがの、ハッ………

娘　ほんとにねー行きたいは山々でも、ついこれでとび出るわけにも行きませんから。

客　イヤそりやおいでるようなら、明日出發の處は明後日にしてもよう



屋根から　徳山　安澤芳子

ござんす。

娘　……一文いらずと仰有つても、そりやとりかへでせう。

客　ンーハイ、イヤ、そりや追々でようござんす、一寸五圓十圓入用の事でもあればすぐ心配します、みんなあゝして行かれるのが何かといつたら嫁入仕度でんす、そりや目ざましいものが出來ますから。

娘　ぢやかうしませう、おとゝ(父親の事)が十一時にや歸りますから、もう一度相談して行くようなら、今夜中にお通知しませう、たいていなら行く考へですから。

客　承知しました、あんまりくどい樣でんすが、儲に於ちや云ひ分なしでんす、また不安心なような事は爪の垢程もないから、呉々も安心なされ……ぢやどうぞお頼します、こりやとんでもないお妨をしまして。

娘　どう致しまして御親切にありがたう御座います。

客　イヤ〳〵明う御座います、こりや姉樣恐れ入りました。

なるほど地方の娘は斯う云ふ風にして瞞されるのかと、一寸實際を思はせます、方言も其邊の人が見たら却つて興味を惹くでせう(評)

○ある日曜の夜

本郷　青葉

蒸暑くつて眠られないから起き上つて表二階の障子を一枚開ける、スーッと強い風が入つて來て危ふく洋燈の火を取られる處で有つた。

未だ十二時前だと見えて外壕電車が一臺、夏の闇夜のせきばくを破つてカンカアーンと通りすぎた、後は又た元のしゞまに返つた。

私は、洗濯した計りの眞白いシーツの上へ腹ばひに爲つて、今月の文壇を繰り返し始めた、何日かも斯うした儘ねむつて仕舞つて明方に氣が付いて驚いてけした事を思ひ出して、もう寢入ても火事に成らない樣にと手のとゞかぬ位離れた所へ洋燈の位置を移した。

燈火が遠いのと眠いので目がボーッとして來た、雜誌をふせて今度は今日一日の出來事を考へ始めた。

私は今日の日曜を何して暮したらう?、昨夜取つて置いた白水で自分の一週間分のよごれ物は殘らず洗つた、高い青空に白い雲の浮いたいり付けられる樣な日向で張り物もした。一通り片付いたので午後は例の通り本箱の整理を始めた、机の引出も、其れから手文庫も……。其手文庫の中から二束の手紙が出た、一ッは誠樣からの、一ッは茂樣からの……。

私には親の定めた許婚が有る、此樣な物を持て居て其人に濟むかしら?

今日こそ、今日こそ、今日限り皆燒き捨てゝ仕舞ふと、火鉢を持つて來てツトくべた、パッ〳〵と火が移る、理性の勝つた誠樣と感情に生きる茂樣の心の影が一ッに成つて灰になり行くのを唯夢の樣に見詰て居た。誠さん!茂さん!御許し下さいまし、繋がれて居る女には御二人の誠を受ける事は出來ません――。義理と云ふきづなのいましめ堅くして御返事を上げる事は元より、御文を持て居る事すら出來ないで今日灰として仕舞つたのです、御許し下さいまし、茂樣!誠樣!。「婦道は貞なり貞は誠なり、秩序は人の生命なるよ」と誰れやらの仰せた通り、道に從つて、再び來ない青春時代を華やかな戀も無く、唯平和にすごす私は幸福でせうか?。

最う寢直さうと起き上つて手をのばすと、すき通る樣な腕の內側の所がピツシヨリばら色に汗ばんで美しい。

○三回忌

東京　若紫

くまなく照す月今宵、君何處にさすらひ給ふ。思出多き故鄉の空を後にして立たせ給ひてより春雨秋月三度。嗚呼何處にて、この月に泣き給ふ。幸薄き君を思ふて泣く妾も又薄命なる女。

月落ちぬ。しつとりぬるゝ露草に冷たく洗はるゝつま先の心地よさ。松林にて思ふ樣泣きて〳〵泣きあかしたる胸の又しても痛みはげしき。首細くきめ細かきは肺病の特長とか……。

ハラ〳〵幾ページか先をまくつた。紫色ににじんだ血のあと氣味惡るう最後の日のが記けてある。

恐ろしき〳〵死の神の御手は妾の想にふれぬ。人の最も悲しむ死の路に妾はさそはれぬ。生まれてより此處に十八年あゝ。

此の日、此の日だつたふるへる手を無理に運ばせて芳夫さんに殘す一通と最後に私に一通。

靜江さん私は最う逝きます、せめて一目と思ひましたけれど二百里の餘も離れた貴女にとても夢にでゞもなければかなひませんもの、最うあきらめたの、親も兄弟もない私此のまゝ思ひ殘す所なく天國に行きます、親愛なる靜江さんいつまでも〳〵丈夫でお榮え遊ばせよ。せめて草葉の蔭で貴女の御幸福を祈つて居ます。では永久に永遠にさよなら。御身體をくれ〴〵も御大切にね。

これを受取つた私は三日目の夕又更に電報を受取つた。一週忌も空しく過ぎて三回忌の今日未だ主の知れぬ今一通を預つて居る。

○男か女か

備中　小見山春子

殘暑尚烈しくと云ふ頃私は海邊の叔母の家に行きました、翌る夕方叔母と一緒に湯上りの輕い身體を海岸に運びました。海は靜かで油の樣に、此山が無かつたら此處の町の景色は零だと云はれた位の古城山幾百年を經た老松が山裾から頂迄そんなに高くはない所々に紅葉した栗の木が一段と趣を添えて居升、近く片島神島鞆の仙水島も向ふに名も知らぬ浮島行く舟歸る舟も繪の樣で、私は住吉神社の玉垣にもたれて夕榮の美しい空を見乍ら叔母と話して居升と後でお涼でム升が、だしぬけに聲を掛けられたので吃驚して振返るとチョィとお尋申升最前此處を銀行の小泉と云ふ方がお通りではムませんか體格の良い色の白い方ですが、如何にも流れ肩の力なさそうな身の構ひ衣裝と云ひ着振と云ひ私が顔を見た時眞赧に成つて愴てゝ顔を脊向た風はどうしても十七八の處女其儘で色の淺黒い角形の顔大きな鼻少し癖の有る濃い髪を左分にした姿は今の聲の主かと怪まれて男の姿に大變驚きました、叔母は私達今來た計で一向、ねと私をごらんになるので見ませんねと答へると男はでは道が違つたんでせう大きにおじやまを致しました奧樣旦那樣に宜敷と愛嬌をこぼして引返したので私は後姿を見送つて妙な男も有る者ね叔母樣あの人どうしたのと聞くと叔母はどうで彼れは男子女だよ豐吉と云ふんだが皆でお豐さんにして仕拂つてハー小さい時からあんな風で親の内が氣樂なのでお金を持ち出しては男に附き廻りしてブ體に成つた事が一度や二度じやないさう而して自分の好きな男の家へ這入り込んで奧樣氣取かしづくんだつて見て居ると馬鹿らしくなると婆やがよく話して居たがそんな男だから鉾も上手で又お裁縫だつて一通りするそうだよ全くあれは女の生替れりだな、と聞いて私は不思議に思ふた歸りにふとおまん屋で最前の男を見附ました竹の皮包を洗朱の風呂敷に包んで帯の間からお金入を取り出して居ました其横に成る程白い顔の八字を貯へた立派な紳士が立つて、此頃はあの人の奧樣になつてるんだなと叔母と顔を見合しました。

○お盆の十五日

紅花

今日は御盆の十五日、一昨日まで降りに降つて洪水にまでなつた雨は名殘なく晴れて、昇つてまもない望の月が筋向ひの屋根から七分ばかり顔を出してる、白いふはりとした雲やうす藍の雲がすうーとかすめて通つた何といゝのだらう。しばらくうつとりと眺めて居た。もう何處でも松薪が高くつまれた（長さ一尺五寸位の四五尺の高さに三角又は井桁につむ）大人も小供も皆浴後の小ざつぱりした着物にかへて表に出て居る。もう一丁目の方では大抵火がついた、そろ〳〵二丁目でもつけ始める。まもなく本町通りは西を見ても東をみても赫々と火が燃え立つた。

人通りの大變なこと、近處の村のものが老人も幼兒も若い男女も皆手をとりあつて、見に出てくるので中々の人だ、それに町の人も新盆の家の提灯を見やうと西に東に通るので　さすがひろい往來も雜沓してゐる。火は盛りに燃えて恰ど鎧武者が騎馬で出陣する時のやうな勇ましい感じがする。火の子の交つた黒い煙は、大空を一面にこめて月の光も掩ふて了ふ程である、此火は大そう稲によいさうで虫がよ程少くなるとの事。やがて火が鎮つて全くおきになると、水をかけて殘らず掃き取つて了ふすると人出は又一層で印袢天に赤、桃、時色などのめりんすの襷十字に

花笠にかんながらを色どつたおこまがせをつけてかぶり、白足袋に白緒の草履腰に鈴をつけた踊兒も通る。男まげのかづらをつけた人僧のまねをした人等、思ひ〳〵の仕度をした、十五六から廿からまりの男女が入り亂れて、新盆の家の前で大きな環を造つてをどる。やぐらが上つて太鼓を敲きながら透るいゝ聲で音頭をとる。

それから名高いぢやんがら念佛。二十前後の村々の靑年が二十人位一組となり提灯持つた二三人の組頭がついて來る。鐘をたゝく人がわを造り太鼓の人が三人中に入つてお念佛をする。太皷を敲く人の三人共よく揃ふこと實に上手だ、白の襷に少し長めの太皷を肩から釣つて腰邊でとめ一尺位の白い毛のついたばちを持ち白の鉢巻をして、腰をかゞめたりのばしたり左を向き右を見一方のばちを上げくる〳〵まはし一方で敲き、頭上でわをかき足下で圓をかき其手振の巧な事は、常に鍬鋤持つ荒々した人とは覺えぬ程で感心して見てる。新盆の家では貰つた提灯普で百位夫を店から裏迄つるし六枚或は八枚の屏風を立て佛壇は店に飾りいろいろの供物をする、こゝには大きな提灯一對つける又走馬燈籠や石燈籠をつくり御花をかざり、日蓮上人佐渡島で難儀の場を人形や樹木を集めて造り等していろ〳〵の趣向をこらしたものが店の先に飾られる。踊やお念佛は大抵十二時ごろまで盛りで、それからだん〳〵人通りも少なくなり、二時すぎにもなるとその賑かさは他ごとのやうに靜になる。

○夕がほの道

淺草橋　ひなげし

足にからむ夕がほのつるをソツと除けながら何となしに美樣を見ると、後向きになつて下を向いていらつしやる。「どうなすつて？」と肩へ手をかけると、一寸體をひねつて又脊を見せた。その時私は始じめて、美樣が泣いてるんだ、と氣がついた。又何を思ひ出したんだろう、玉川へ來てからまだ一度も美樣のお顔のさえたのを見た事はない。病氣上りの瘦せた肩をふるはしておらつしやる處を見ると、私し、もう何といつて慰め樣かと思ふ。そしてそして一體、誰が泣かすんだか、本當に恨めしいと思ふ、「美樣、一寸、きれいな石！」美樣は「いゝわね」とわずかにいつた。何んだか私には物足りなかつた。朝の冷たい空氣に右から左へと流れる。月見草の根に雫がたまる。河原の石は露でシットリして黑いのなどは一層艶やかだ。美樣のお髪も艶があつた。

「歸りませう――つまらないから……」。美樣はさきに立つて歩き出したと急に周章てゝ二三歩もどつて來て砂の上を空氣草履ですり消した。美樣は砂を消した。何だらう砂を消した。そしてホツと悲しい息をして苦しさうに咳入つた「行きませうよ………」焦れてグイと私を引つぱつたその手、なんて熱いんだろう。

まだ美樣はうなだれたまゝ夕がほの道をとぼ〳〵前へ行く。

私は此頃美樣の、あの小さい胸の中にもしや小さな花が開いたんぢやおるまいかと思つた。

そしてその花は此夕がほの樣な、淡い、かよわい――淋しい――のぢやないかと………。

○家屋の破壞

朝鮮　山百合子

家屋も荒むが儘にし、草木も生ゆるにまかしてあつた隣の家が今朝未だ淡き暗の頃より韓人のかけ聲と共に崩された、先づ四五人の韓人は屋根に掛けてある梯子を上り、内部を守り隱しておた瓦をはぎ取つた。其瓦は屋根に掛けてあつた板を傳つて、目さむる許りに勢よくする〳〵と地上へ辷り落つ。と早や廿日餘りも照り續き乾ききつた土がぱつと白煙を立てゝ舞ひ上る、見ておた私は何だか嬉しくてならなかつた。瓦を取りはづして了つたら内のすゝぼけたいろ〳〵な者が際立つて目に付く、風雨を塞ぎおた白壁も哀れかまのさまにかかつて崩され、遂には柱迄をもひとつ〳〵にもぎ離される無情さ。嗚呼ひと時の間に此家は倒されて了つた。向ふを見ると今迄家の蔭で知らなかつた唐黍が伸々してる、朝鮮

にそだつ唐黍でも岳壓に成るのか知らん。……、私は思はず其方へ足を向けた、先月の大風雨に根本の土は皆洗ひ流されて、赤く茶がかった根を洒し出してる。けれ共其多くの根は地へ深く食ひ込んで、しかと大地をつかんでゐる、先月の大風雨の時もかうして凌いだのだと思つた。

○夕野に立ちて

備中　篠原繁子

今日も又樣々の雲湧く空を眺めながら、あゝ秋は來た秋は來た、收穫の時季、わが燈火親むべきの時季、詩人の好む時季は來た、と裏の野山に歩を運ばせた。

もう此所の七草は盛りを過ぎて、桔梗女郎花の濃き色はあせ、萩、尾花は一しほ頭垂れて何とも云へぬ淋しみを表はして居る、ふと片手に持つて來た絹團扇ゝ出して其淋しげな景色とを對照して見た。

あゝ七草よ、檜よ、秋よ……、風よ……、心は何か求めようとして、焦つてもく何者をも求むる事を得ない、果ては茫然となつて、萎えた花を眺め、山を眺め海を眺め、色々に形變る雲を眺めて、暮れ行く淋しさを味ふて居ると、其淋しみの中から、淡い喜びと微かな呼きとなつかしさとが空虚な胸の扉を打つ。何所からともなく、ふうわりと、花園が見えた、其香料の高き廣やかな花園に子供が遊んで居る、美しい女の兒許り、蝶々が舞つて居る、白や黄や黒や、小紋や花を召させく、と下髪に白のリボン長く飾した少女が二人友禪の振袖をふりながら奇麗な花束を持て、戯れて居る、其聲、其姿、花園の中に出でてはかくれかくれては出で——あゝ何たる、艶麗なる樣よ、何たる長閑なる自然よ、針の如き私の魂も、此美しき天然にふれては、只もううち忘れて、夢とも現とも知らず、恍惚と酔つてく眠つて、果ては花の色、花の香に溶け込んで了ふ。



琵琶法師　呉市　後藤あさ子

○夜の町

府下　吉田清子

三ッ角からまがると左が洋品店で、其の隣が魚屋で、二軒とも瓦斯の光で品物を活かして居る、今魚屋で買物して居る廿八九の女、洗髪のふさふさしたのを帶の下までさげて、市松がうしのはでな浴衣に、黑繻子に何やらの合せ帶、きゆうとしつかけに結んで、すらつと立つてゐる姿はまるで繪に書いた樣、通る人は振り返つて見る、意氣作りも一寸好いと思つて、洋品店の陳列場に立つと、夢二式の大丸髷に、セルの洋服付した旦那樣が、何か小聲で話しては笑つてゐる、淋しい町には大丸髷と白粉の顔が、瓦斯にまばゆく光かる、黑い大きな影がうつる、橋の手前まで來ると、先つきの洗髪の女に又逢つた、風で毛がさらさらとなびく、うるさそうに白い手で顔からかき上げる、橋の袂から右にまがつた、私は何だか物足りない思ひで、姿が暗に消えるまで見送つてゐた、淡い光大丸髷、白粉の香など鈍い印象が殘る、洗髪の姿が闇を渡つて行く、向ふ岸の角の本屋の蓄音器が、水の上をすべつてはつきりと聞える、水はきらきらと光つては小波を渡つて行く。

○朝

羽後　K子

雁が鳴きながら、薄いコバルトの空を飛んで行く。

濠の中の芦の葉は夜露に濡れて白い粉がついた樣になつて重さうに、たれてゐる。そこに今昇つた朝日がさして湯氣の樣なものが廣い場所から立ち昇つてゐる。すべての草木は露と朝日との惠を受けて、生々して「お早う／＼」と云ふ樣だ。時々芦の中でバン鳥が鳴く、すると芦がざわ／″＼と動く。角力の太鼓がドンコ、ドン／＼と裏の通りを通るのが聞える何の木かの葉かげから太陽は顔を出して、その美しいこと。眞中の光る所をよく見ると葉と同じ位の大きさの、太陽と同じ色のものが澤山見える。自分の所まで來る光線は、青く、赤く、紫に、黄に、細く光る幾筋かの虹の糸である。目をはなして、他の處を見たら、ぼんやりして、わからなかつた。帳面には鼠色の點が所々に出來て……字が書けない。

煉瓦場

とろ／＼と、赤い火が燃えてゐる。煤煙で眞黑くなつた屋根は斜にかけられて、側の二本の煙突からは黑い煙がモウ／＼と立ち昇つてゐる。四邊はだん／″＼と暗くなる。

其のトロ／＼と燃えてゐる火！何かを呪ふかの樣に、又暗い處で發見した新生涯でもあるかの樣にも思はれる、四人は看守につれられて煉瓦を運んでゐる、平氣な顔をして。

○黄昏

長野縣　近藤清子

夕暮の日が赤々と一時にカッと照りつける。白銀をもつたやうに、河の水は面腫れて動かぬ。河沿ひの爐が、赤う滲んで、姿を水に寫してゐる。橋の上を人が通る、馬が行く、牛が行く、歸りを急ぐ其影が、都人のやうに、生の不安に追はれて行くので無く、悠々と一年の糧を運びつゝあるのだ。樂しげな笑は頰の邊にほの見ゆる。

散在せる村舍から褐色の煙が、糸のやうに寂しく立昇り初めた。

橋の袂の茶屋の前を着古した單衣の上に、名計りの三尺を締め、疲勞した軀を重腫れた病の足で、運んで行く一人の旅人がある。人の視線を避けるようにして、本道を辿り二本松のかたへの燒跡に止まつた。カッと照つた暮の色は、音も無く四邊を罩めて、愁はしげな旅人は橋の方に歸つて行く。

其途中で村の人に逢つた。

「一寸お尋ねしますが、二本松の山田は何うかなりましたか」「はあ御本家でがすかあ、一昨日の晩火事を出しやつての、えらう騷ぎやしたよ、お袋の世話は新宅でして御座るが、新樣が居たら……………」と言は絕えた。「有難う」旅人は村の人と別れた、村の人は小首を傾けて目送しつゝ、何事か獨言した。社會の逆流に立ち、艱難辛苦と戰ひ、勞れた、軀を見苦しい襤褸に包んで、悄然と故鄉に歸つて來た彼の旅人山田新一は、目前に己が家の火災に罹つたのを見て唯一の光も暗に消たやうな氣がした。



和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　豊後　菅原芳子

三つ程も二十すぐしゝ少女子のねやの戸にきてこほろぎの啼く

○（地賞）　久留米　松香

笑めば笑み泣けば相泣くなつかしき形と共に君およすげぬ

○（人賞）　西多摩　葭子

君見ゆとあまたのかげの胸にきてすばやに重き憂もて去る

【佳作】

○　京都　三宅壽賀子

世の若き女のごとく美しき衣につゝめどさびしかる胸

○　周防　屋根の草

いつしかとすぼむ姿よ三十路する人にも似ける朝がほの花

○　伊賀　山村龍子

捨てられし人さへ世さへ恨まざる淋しき人を今日も見つわれ

○　金澤　むらさき女

聲高に啼きてもすぎぬあけがたの灰色の鷺いとこゝちよし

○　大阪　藤堂さく子

我なみだ尾花にやどる白露と同じさまにもおもへる人よ

○　岡山　黒瀬つね子

都より嫁ぎみ來るてふひとも燭をつらぬる萱草の花

○　福島　春子

いと弱き女のすがた花にさく朝顔ばかりうれしきは

なし

○　阿波　吉田紫花

秋風はくろかみながき少女子も黍の破れ葉もけぢめせで吹く

○　長岡　秋月すゞ子

岩山のくづるゝごとくいかづちの雨にかなづる其の立琴よ

○　秋雨

黒きあぶ朝顔の花したひきぬものうとましくあつき八月

○　牛込　平塚白百合

額さげてひざまづく子を憎み得ぬもろき心を少女といふや

○　丹後　伊志子

歌舞伎てふものゝうれしさ身にしみてあでなる人の戀に泣くなど

○　和泉　田中きよ子

君に寄る我嬉れしさのたぐひなき心に似たる月のぼりきぬ

○　松江　清き花

秘め置きし清きしら玉くれなゐに燃えてならんずいかにしてまし

○　前橋　みどり

女てふいまはしき名に囚はれてものをおほくもかこたるゝかな

○　安藝　田村繁子

磐城野のたきぎをつめる黒牛の並べる上の天の川かな

○　近江　鈴蘭

花白う咲く黒嶺黍の末葉にも靜心なく秋風ぞ吹く

○　兵庫　足立春子

月見草さみしき野邊を相ゆきし少女の白き顔に似て咲く

○　大阪　田野靜子

白き萩赤き萩など手折りきて柩かざりぬうら若き母

○　長崎市　永井主子

いかにせむ君見る我れの心まで寒う吹きくる秋の夕風

○　岩代　栗村かつ子

吾れすでに生をおもはず今日となり死をも忘れぬあはれなるかな

○　山形縣　草玉萩

雨上り鳥の音聞きて戸いづれば海棠のちる夕暮の庭

○　大連市　柿本千枝子

底しらぬ淵に身投げし順禮におほくおとらぬこのごろの戀

○　長岡市　二九子

大方の男は弱きものなりき己れ笑めば笑み泣けばまた泣く

○　野の花

美はしき影をたづねて少女子ははてなき野邊にあこがるゝかな

○　美濃　梅香

松風の音もさびしき夕暮の小窓に文をながむる少女

○　芝　渡邊郁子

おく山に白萩愛づる姉の痴戀しく思ふ夕ぐれのかね
千葉縣　高山左枝子

○

日の暮れて秋風吹くや戀しさに玉の小琴をかきもならしぬ
四谷　榊崎佐喜子

○

わきいづる岩間の清水手にくみておもふことなし山のひと時
石狩　王子きよし子

○

からすなく森の木のまに月落て初霜白き朝ぼらけかな
札幌　佐々原清子

○

初秋やそと窓押して眺むれば傘深うさし君は野路行く
大阪市　緒方とし子

○

遠方のかりがねきけば何となうわが家戀し初秋の頃
小樽　矢木りつ

○

かくてまた今日も明けゝりかくてまた今日も暮れけり君を見ぬかな
札幌　幸坂隆子

○

戀といふあやしきものに呪はれて悶へつ泣つ二十すごしぬ
丹波　大槻幸子

○

白萩の香滿ちたる谷間ひの泉にゆらぐたそがれの月
伊豫　渡邊文子

○

秋の野にさびしく立てる女郎花馬上の人に手折られて行く
日本橋　松岡千代子

○

いと深き谷間の花を得むとする悶もはかな少女子のわれ
新潟縣　村田けん子

○

妹の病む夕暮に外を見ればものうく秋の雨のふりきぬ
東京　しらつゆ女

○

しのばれぬ思ひをしのびて笑む我をろふたき人と人の云ふかな
徳島市　升田福子

○

淋びれたる悲しき街を灰色の衣着けたる旅僧の行く
徳島　玉野房江

○

秋の日や出水のあとの草叢に折々啼ける朝のこほろぎ
福岡縣　菊香

○

臨の朝肩美はしき知らぬ人口笛吹きぬ木犀のかげ

○

秋更けし深山の奥の杣が家の翁病む夜をさをしかの鳴く
德島縣　西野富美子

○

悲しさは淡き山居にとざゝれていさゝか濕める有明の月
伯耆　佐々木とさ子

○

露ふかき桔梗が原の朝月夜送り來ませし人と別るゝ
越後　早津つい

○

亡き母の棺のふたに打つ釘の音高くして涙流るゝ
金澤市　宮本登美子

○

秋の夜の雨垂れを聞きそゞろにも昔しのびぬふるさと人と
千葉縣　佐久間和子

○

赤き帶白き浴衣の行く橋を夏の夕に行けどさびしき
橫濱市　山本かほる

○

天地の二なき大事に面したるおもひに君と初めて逢ひぬ
島根　百合子

○

捨てられし女と云ふやあなさびし花ともみ名をまゐらせたきを
山城　木の花

○

秋の朝うれたる木の實兑てありぬ我思ふ事の末もおもひて
京都市　町田てる子

○

何となく寂し悲しき病室のすみのくらきにこほろぎの啼く
上總　星華女

○

よき人の亂髴にも似て白萩は狂ひちるなり秋の夕ぐれ
草花

○

秋の夜は寂しきものと人は云へど心のほてる君をまてれば
松江　しらぎく

○

白粉の廣告のペンキ煤煙にすゝけし街の淋しき女
和泉　金田代志子

○

運命は幸追へば追ひ止まればとゞまる影ぞ毒矢手にして
秋田　すみれ子

○

よき眼して立波形のむらさきの袂やさしう青葉かげゆく
宇都宮　安乃子

○

長門　輝子

世の人は何つぶやくぞ君と我變らぬ戀によろこぶ時に
○　北海道　麻上晋子

いざよひの月の光の照る中をあわたゞしげの秋の風吹く
○　能登　近江加能惠

山蔭の小さき村は昏がれて寺きうれひに古池けぶる
○　岐阜市　牧野米子

すゞろなる悲しみおぼゆ二十九の女の秋は髪おほくおつ
○　越後　三保子

我が心うつろなる故蛇とかげうかがひくると君をいとひぬ
○　釜山　今井久子

せめて此のものおびえする心だに忘れむとして君に交はる
○　宇都宮　松葉子

思ひわび少女心はゆく秋に琴づめとりぬともしびのもと
○　淡路　紅霞

血のもゆる若き少女は何となく月を仰ぎて涙するかな
○　靜岡縣　みどり子

夏の夜は心死ぬまで忍ばるゝ愛宕の山の露わけしこと
○　羽前　野口菊子

我こふは黄金にあらず玉ならず暗闇をてらすまごころのその
○　山口縣　椰艮美那子

少女子の思ひあぐみて頰につたふ涙とばかり時雨降りきぬ
○　丹後　仲田品子

唯一人淋しき夜半の徒然にこほろぎどもをうたふ歌反古
○　加賀　勝崎喜久子

さらぬだに秋は悲しきものなるに此夕ぐれのいにしへに似る
○　富山縣　畠山ゆき子

うちむれて白鳩遊ぶ尼寺の眞晝靜かに萩の花ちる
○　靜岡　香月女

百人の男の瞳胸を射れど何とも我は思はぬものを
○　A　B

母なくて人なつかしむ性なれど二十歳のわれを危ふがる姉
○　丹波　小草

たゞひとりたゝずむ原の日は暮れぬいづこいぬべきうつそみの世に
○　徳島縣　あをなみ

みどりわく木蔭の風に吹かれつゝ遠方人を思ふ夕ぐれ
○　陸前　小岩やなぎ

禍を包める胸と大海の浪間の岩にねむる鷗と
○　伊豆　土谷鈴子

小夜更けて一人靜かに物思ふ枕邊近くこほろぎ鳴くも
○　信濃　よし子

百合さかばさゝむと云ひし日は來ぬれちぎりし友はあな土の下
○　釜山　五月雨女

朽ち果てしベンチに倚りてもの思ふ秋の夕べはさびしきものぞ
○　三重　池のふじ浪

谷川の清き流れは細くともとはに絶えぬをわが戀とせむ
○　京都　忘な草

歌うたふ少女の聲のすゞやかさ湖水にとほくすべりて消えぬ
○　久留米　絲柳

惱むてふ君をみどりの夢醒めて夜半のこほろぎきくがかなしき
○　長岡　秦山木

秋の夜の月を眺めて只一人物思ひする二十の少女
○　小倉市　工藤榮子

朝草の露ふみわけて絲はぎの花折りし子はまたもきたらず
○　丹後　雪子

窓によりうつむく君を思ふかな初秋の日のさむき夕風
○　上州　きく子

藻の花を分けつゝ登る舟白し笠縫あたり月のかたふく
○　常陸　一少女

われに似る面影畫きてたまはりし若き繪師こそこひしかりけれ
○　岩代　鈴木千代子

美くしき花はも野より園へ行く野は淋しけれ色もあらずて
○　大阪　畋野夢址

人はみな冷たく死にてゆくものと友はいへりき世にあらぬかな

○　三島　村瀬紫子

あだしごといひとかんとて口籠る少女あはれめ白百合の花

○　京城　中尾艷子

戀すてふ文など寄する百人の男の子のほかの君とおもへり

○　麴町　牧野はん子

あれにたる窓より桐の一葉づゝ落つるをながめ心淋しき

○　山梨　吉田邦枝

君を見きこすもす匂ふくさむらにむしの聲きく月の夕に

○　くれなゐ子

うつろなる心の中に來れるはありし昨日のおもひでの夢

○　大阪市　夢園萩子

秋立ちぬ君の來ぬ夜を彈く琴の此頃いとゞ音のさえつゝ

○　西茨城　田村波津子

一枝と乞はるゝまゝに心なく百合はも折りてささげてしかど

○　麻布　横谷白雨

かたときもいにしへの民基督を忘れかねつるごと君思ふ

○　四谷　荒木狂花

わが窓のまつ蟲の鳴く月かげにそゞろ戀しく人おもふ時

○　神戸　石野君子

かの少女やせし面わは青にてる此ごろの秋のあはれおぼゆる

○　近江　野の人

靜かなる心の水に思出の波の輪たちぬ君おもふ時

○　麻布　美耶子

戀ふ人に送らん文は紫の紙に思ひを紅に書く

○　大阪市　辻井信子

雨晴れて青葉に光る夕日影山より山にほとゝぎす啼く

○　備中　曙の里

物思ふ窓による身の額にてり月はおぼろにかたぶきてける

○　美作　水江新子

恨めしき人なる者を如何なれば病むときく身のおとす涙ぞ

○　越後　吉田かほる

我いたくさびしと見るをこの君は知らずて白き花を愛みにき

○　濱松　平岩白菊

我が妹は露のふるなる朝の野に咲ける野菊のふぜいなるかな

○　辻本愛子

人の魂亡ぶと思ふ物みなの灰色をする十月の日に

○　三重縣　山崎初子

たわやなる二十少女が物おもひ野をゆくさまやコスモスの花

○　上毛　世伊子

袖垣に月かげ帶ぶる白菊はほのにかをりてたれをまつなる

○　遠江　加藤敏子

こぼれては土にまみるゝ白菊を見るにえたへぬ我が心かな

○　宮城縣　齋藤菊子

夕まぐれ稻田のくろに佇めば玉をつなげる稻のなびくよ

○　秋田　愛子

妻戸吹く嵐に宵のゆめさめてしら菊どもの香に泣くわれは

○　岐阜　蔦の葉

我心人にさゝぐる日のあらば何に包まん綾か錦か

○　茨城縣　川和田初子

夕暮れの垣に凭れてダアリヤの強き香りを泌々と吸ふ

○　熊本　波の花

さめはてゝ戀に醉ひ得ぬ我作らかれゆく血潮をしみては泣く

○　筑後　柴田百枝

われ二十胸の垣根の色褪せし小さき花よ何を夢見る

○　下關市　山田國子

庭ぐさの暗きが中に蟋蟀の悲しくなきぬ三日月の秋

○　長岡村　川輪田春野

戀てふは若きがありのすさびぞと云ひつゝもなほ歌たまふ君

○　靜岡縣　富永ふみほ

朝寒や獨木の橋に置く霜の白き渡りに君のかへりぬ

○　小倉壽榮

秋風にさらばひいでしやせ蚊にもおとるかたきはよそに見てゐむ
○　大阪　高山米子
母在さでこの人の世の二十年を氷の如く過せし少女
○　大和　松田清子
やゝ寒き風に立ちたる袖垣にほころびそめし萩の花かな
○　京都市　久芳清子
わが心かくまで疎しいたづらに戀をかけざれ病み給はざれ
○　伊勢　露木雅子
そゞろにも忘れしことも思はるゝ秋の夜なれば日記おほくかく
○　茨城縣　宮本きみ子
無花果の影のふるへる庭に下り歌を思へばひるの蟲鳴く
○　和歌山　雪子
むらさきに霞める山の奥に入り身も世もわすれひとり泣かばや
○　野の少女
おくられしばらをつゝみし白ぎぬの上に見出でぬ紅の血を
○　京都市　平林波津子
晝の雨白き芙蓉とむらさきの嫁菜にそゝぐ九月となりぬ
○　珠洲　不如歸
夏草のつゆふみわけて御やしろに里のうなゐの通ひくるかな
○　伯耆　新田文子
秋雨のそぼ降る窓に身をよせて戀しき君のまぼろしを見る
○　會津　桑原靜香
君去りて寂しき秋を泣く夜ごと夜ごとに蟲の聲細りゆく
○　名古屋　胡枝花
山陰の清く流るゝ小川にてすなどりあひし子等なりしかな
○　新潟縣　岩本芳子
紫苑咲く庭そと抜けて磯傳ひ君が家に來ぬかはたれ時を
○　京橋　久蔦
紫の葡萄の露をよりて吸ふその音にすらはゝゑむ少女
○　大阪市　吉田うすい
恨めしく悲しき秋の足乳根の棺をうつかわがやはき手に
○　伊豫　山口たけ子
日沈みぬ船の上にて淋しくも秋風きゝて歌などうたふ
○　名古屋　加藤花子
夕日さす青き梢になく蟬の命おもへばかなしくなりぬ
○　筑前　笹つゆ
若人は眞萩の上の白露をふりうごかしぬ人まつときに
○　下谷　亡き人の子一枝
淋しさに形見の笛を取り出でゝ吹けばとひくる秋のかりがね
○　鳥取　安木はる子
雨にくれ人なつかしき海の宿瞽女のうたなどきゝて涙す
○　能登　新出ときは
吾五體消えもゆくらむ心地しぬ秋の夕を人のいぬとき
○　廣島　後藤あや子
花園にあまた咲くなるなでしこを集めて君におくらんとする
○　能登　清枝子
世の人は何をあてどに歩み居るわれかく思ひ秋の道ゆく
○　長野縣　宮坂明子
今日ありて明日を知らざる運命を切に感じて涙しながる
○　長野縣　コスモスの花
十九年夢として逝くわが极百合の花もておほへとぞ思ふ
○　千葉縣　宇佐美あい子
夜に入りてうらぶれし子がふる里へ歸る小道の蟲の聲かな
○　臺灣　はな子
たらちねの母ゆきまして十年經ぬ思ひ出多き柿の木の實よ
○　靜岡縣　壽賀
しら梅やぬかるみみちと戀人と夜ゆく袖にこぼれくるかな
○　小樽　清田芳枝
少女子の誇を捨てしわれなれば朝の光を仰ぐにたえぬ
○　信濃　ひなげし女
懷かしき君と別れてこの幾夜枕にきくは秋雨の音



日記

横瀬夜雨選

○再び上京して（六）

白山吹

何だつて又私は來たんでせう。何がよくつて。あゝわからない、私はほんとに狂人になつて了ひさうだ、けれど斯う云ふ氣分には誰でもなる事があるのよ、古河の家の下女は何時かも、濱ちやんと呼びかけて、私斯うやつて働いて居ても厭な氣持ちになりまして、遂歌でも唄つたりします、然うしないと、胸の塊りがとれないんです、と云つた。

私はそれをアンドレーフの『人』を思ひ出しながらシンミリと聞いて居たつけ。

相馬中村の新開樓が燒けて……………と彼が歌ふその音律の下卑て居る事、まあ何て色氣づかない子だらうね、愛想もこそも盡きちまふと、家の皆は不思議がる、然し其の野卑な音響の中にも意識しない胸のもや〳〵が含まれてある、可愛想に、彼の女は高い美しい響をもつて若い苦悶を發散させる事を知らないのだ、ほんとは彼の女は十八の若い美しい緒情をあゝした唄で胡魔化して了ふのだ、と私は思つた。あゝ私は歌ぐらゐぢや迚も〳〵、犬のやうにワアーッと吼えやうか、唯ワアーッと叫ぶ丈でいゝんだから。と胸が燃えつくやうにいら〳〵して來たけれど。ほんとに何故東京がいゝのかしら、I氏からY先生へ告げたのに、一度都の榮華をゆめ見た者が……とあつた。眞に私は然うなのかしら。一度都會の榮華の夢は確に見た、けれど決してそれに醉はされて居やしない。然うでないと云ふ事を殊更に辯明したつて何になる、唯今後の自分を自らも見て行かう。私はまあ何と云ふ馬鹿だらう、去年の悲劇を再び演じて又古河を立つて來たのだ、歸郷前師の君がお文の中には、古河の天は高し地はひろしとあつた。噫渡良瀨河畔の第二の故郷、生涯放浪の旅にあるとも、心は彼の故郷を抱いて居たい。然し故郷は背い

たる者を決して永劫に溫く迎へては吳れやしない。冷淡にとりすました自然と、敗殘の我が姿を見忘れた里人とに接する悲しき日は何年かの後に來るのであらう。詩人ならざる自分には溫いと云ふ自然のふところに抱かれてさへも、あの嚴然たる冷やかな調子が癪に障つてならないんだもの。

ほんとに何故私はこんなに寂しい人間なんでせう。然し故郷はまだ忘れ得ぬ、利根を東へ渡れば色靑き筑波の山の麓には眞に欺かざる淚を注いで下さる師の君がある。けれどあの暗い家が嫌なのだ、あの家の中には女の暗い運命が纏れあつて叫びあふ聲は、生存の激しい慾求なのだ。

今朝も動物園裏を圖書館へ通ふ時、幾萬の鳥獸のけたたましい叫び聲を聞いた、何の聲だか知らない、けれどあの聲を聞く時、泌々生の怖ろしさに戰慄せずには居られない。

古河のお母樣は可愛想だ、お母樣許りぢやない、娘を自覺させた母親くらゐ氣の毒な方があるだらうか、況して自分が生んだと云ふ責任もないのに。あゝ私は何時もあらゆる悲哀を集めて母を思ふ。

……日

東京は矢つ張り四十日前の東京である、その癖私は何か新しい印象をくと求め步いて居るやうだ、それのに餘りに自分の心に何物をも殘して居ない事を思ふと寂しくなる。

夜——妙さん來る。妙さんは容貌の美しい、心の單純な、世の中を見てる割合に素直な人、それ丈若々しい感情を持つて居るやうに思ふけれど、根底のない所謂都會の女らしい。

花柳界の人を除いて、女らしい女の友人を知らない私には、幾ら妙さんが優しく美しく女らしく映つて居るのかわからない、唯ほんのそれ許りなのだ。その意味から古河の小堀の道子さんとも親むで居るのかも知れない、道子さんは落ちついて全然服從的な、世の中の荒い風にも波にも揉まれた事のない淸淨な人、自分とは小學校の一年生から親友であつた、一緖に寫生もしたり茶の湯の稽古にも通つて何も彼も一緖に小兒から少女になつた。

あゝそれを今はもう自分の心を打ち明けるべく餘りに單純な人だ、一緖の道を辿りながら私はまあ何故からだらうと思ふ。

道さん散步しませうと屋敷町の暗い方へ誘ふと、町へ出ませうよくと明るい方へ步を向けてしまう。そして、もう怖いから歸りませうと云つた、妙さんも然うだつた。妙さんのやうに都會の少女でも、女は矢つ張り自分の身を護る事に忠實である。その代り、其の貞操は一步の斷崖に置かれてある、勿論意識しては居まいけれど。

……日

洪水の村よりとした師の手紙が落漠たる事務室の机の

上に置かれてあつた。『あなたは何に依つて寂寥を慰むるか考へれば不思議にも思ふ。』とある。上野の山に添うて淋しく池をめぐる時、浮ぶものは下宿の現金なお婆さんの顔だ、それでも家には何かしら自分を待つてでも居るやうな、其の心持ちに許りせかれて毎日家へ歸るのだ、然し二三の人を除いて全く凡てを絶ち盡した自分の許へは手紙一本來るべき筈はない。寂しさを遣る爲には廣小路の通りへ出て、人形を買ひ、仲町で新形のメリンス友禪を買つて來て着せて見る。何と云ふ平穩な生活であらう。



お清書　千葉縣　峰島よし

近頃の不思議な事、樹の枝のそよぐのも小鳥のさへづるのも、深い深い意味のあるやうに感得せられる。あゝも一度若々しい、フワアリとした感情の少女に歸つて見たい。

石ころを拾つて人の顔に投げつけるような荒つぽいいらいらした文章である心から泣き心から悲んでゐるかと思ふと、妙に悟りすました哲人見たいなことも言ふどうしても尋常の娘さんではない。

女子文壇の畸形兒なる此君は實に數奇な　べき運命を荷つて生れたので、母ぎみには巌の上から捨てられ、父君には公に膝に縋つて泣くをゆるされず、養はれて紅燈綠酒の裡に人となり

失脚顚倒、こゝに十九の秋もすぎて、行く行く歸るに家無く行くに道を知らぬ放浪の人たらんとす、同情あるべき山田邦子すら冷烟過眼視するのみならず、岡田三千代は起て鼎の侮辱を加ふ、同性相食むいたましさは言はずもあれ、誰か其心の傷をいたはり其おもてに集る矢を庇ふ? 今われ何の辭ありて再び草長き茨城の野に歸れといふを得べき。

貞操一歩の斷崖に立てる妙子、妙子とは星ケ岡の集りに終始我傍に在り名知らぬ人として夢二のスケッチに入りし會津の君ならずや、自分はこの人のダークサイドを知つておる、裝へども飾れども終に欺くべからざるもの一人のあるあり。よき人よせめては今の一人よりうつる勿れ。

○兄 （地）

羽前　つね

姉の命日、いつにないねぼけ顔を皆に見られながら、お供への花とりに出ると大根畑に父様が青い朝風に吹かれながらピチ〱青蟲を潰して被入る、丸い御肩を笠に隱して何考へて被入るのかしわだらけのお手に憔悴れたおとがひを落したまんま私がお側を通つても何とも仰らぬ。母様無理に起きなすつて團子を作らへなさる、それを上げる芋の葉を日の射さぬうちとつておけと命せられてあるのに今朝は寢忘れたものだから流元から一枚とつて一寸水にぬらして上げると母様知らずに安心して被入る、美しい秋の日が烟抜きから射し込んで釜の蓋をとるとパーッと立つた湯氣が暗い天井に籠つた、香の烟紫になびいたお佛間で皆揃つて初物のお芋の御馳走を食べる。

皆畑に出た後で羽織の縫ひかけを出す、兄様はわきで賣物らしい藝者の寫眞をひろげて眺めていらつしやる家に歸るを許されて漸々四日なぜかう不眞面目が直らぬのかと悲しくなつてわざと知らんふりをしてだまつて居てやる、午後は兄樣と川向うの南瓜片付け、桑の青い中に南瓜は枯々になつて伏して居る、蔓の一所をグイと持ち上げると雜草も一つに引かれて千生ほゝづきの紅い實がハラ〱と散る、腰から鎌をぬいて二人違つた方向に刈つて行く、赤いのや青いのや思ひがけない所からヒョイ〱飛び出して面白い。と、土黑々ときれいに片付いて積んだ枯蔓のかげから暮色が迫つて來る、通りかゝつた隣りの太郎坊達を「瓜燈作るの一つ宛やるから」と云ふ約束で手傳はせて家に運ぶ、七つ殘してあとを皆繩で結つて籾庫の軒に下げる、兄樣は下げ方私は運び方、下で見て居ると梯子の上の兄樣は今東から上りかけた白い花のやうなお月樣よりも高い。

町へ茄子賣りに被入つた大兄樣おそく御歸り、そつと小倉の帶地を出して「あんな繩みたよなへこ帶なんぞしめて居らアナ、縫つておやり、もらつて置いた分にしてナ」と仰る、やつぱり可愛さうと思つて被入ると

見える、家内中みんな同情して居ながら互にはゞかつて居るもんだから兄様はなほとねぢけなさる、うら悲くなる、私の羽織は後にしてもうおそいがすぐかゝる、兄様はまだねそべつて雜誌の上に頭おつつけて蟲の音をきいて被入る。(九月二十日)

放蕩無賴の少兄をあはれみて夜更けて爲に針を運ぶ。憤れども罵らず、悲しめども傷らず、いたましい哉。鬼灯あかき畠に出でゝ鎌を鳴らし。月下人の乘れる梯子をおさへて瓜を吊る、人格想ふべし。文品尊むべし。

○奥の人(八)

森のをとめ

二十二日

白い雲がふわり〳〵空に浮いてる日、脊を柱に凭せたなり、明けるともなしに目を見張ると花に醉うて安らかに眠つてる石膏細工の美人が見える、床は相變らず寂しい。眠いのではない勞れたのでもない、どうしてかう氣がはつきりしないのだらうと眉の間を指で押へてふらふらと起たうとしたら、室の中はまぶしい迄明るい、硝子越に青い空が見える青葉がかすかにゆらめいてバタリ〳〵と梨の實が落ちる、誰かばた〳〵とかけて來てひろつた樣だが姿は見えない。夕方心うき身を俥に運ばれて優子樣へ上る。立派な御門を入つて二階へ通されたが、「暫くお待あそばして」といふので、私はぢつと目をつぶつて、またしても夢の國へ運ばれてゆく樣な、又現實にさめた樣な思を辿つて居ると、梯子段に音がして靜かに座につかれたのは優子樣。ほつと上氣した湯上りの頰を押さへながらほゝゑまれた。しつとりとぬれた毛の二すぢ三すぢ衿元をなぶつて、ねたんでも見たきほゝゑみは絕えず御目許に浮ぶあはぬと心が濟ず、あつて汚れなきお胸を抱かれる幸なる人を見ては心はかきたぐるやうになつて顔を上ぐることだに苦しい。

七つ八つの頃から自分には露ちやんと優しくよばれて抱き締られるを嬉しく思つた人があつた、赤いリボンが好きときいて幅廣のを買つてくれたのも覺えて居る、一つ〳〵年を重ねて黑髮の丈ののびたと共にお下げに結んだ赤いリボンは二ツのハートを結びつけたのである。洋室のアームチエーヤに二人腰掛けて、樂しかるべき未來を語つた時、二人の瞳は如何に希望に輝いて居たらう。ホロリと散つた白椿を、「露さんこれが僕だつたら……默してまゝ立ち上つた私はやにはに花をむしつて。……テーブルに散つた花は二つであつた。抱かるゝまゝに抱かれとらるゝまに手を取られてあへて私はこばまない、親からも人からも許された二人であつたもの…………。

それは冬であつた。頰を流れる淚を振り拂つて空をあふぐと刄の樣な十二月の月は冷やかに照つて、木より落つるわくら葉は肩と云はず袖と云はずふりかゝる、ぬれてはゞつた頰の肉は切れんばかりに風が吹いて

ゐた。月光に照らされて立つてた肩はどんなに慄へて居たらう、柔き胸の扉を破られながらなほ追うてくすがつた私はおろかであつた、……今はすべて過去である、去つた人はうらまぬ、血も愛も自己てふ總てをもひとりの人に捧げつくしたわかき子の胸はうつゝとなつて終つた、華かなるべき私の生涯は餘りに早く終つたのである、今は胸のいづこをさぐつても只大なる疵！ふるれば痛むばかり——。

夜霧に包まれたS町の灯はにぶい光をはなつて居る、私の魂はそれよりも弱い。あゝ病を得て陸奥のはてに來て居るけれど……物數言はぬ二人の間にだん〳〵と夕暗の迫つて來るのを心嬉しく思つた。自分の天地はこれ迄東京に限られて居た、活働の都、たゞかひの庭、いま意氣地なくも負かされて病を獲たばかりか、囚はれの子となつて遠く松島のほとりに追はれ來たのである、松島の海よりも上野の山が戀しい、八百八島の月なんか見なくとも宜い、私は日暮里へ歸りたい………ふと我に返れば廣瀨川の流れの音は夕暗に迫り、まともの森も眠らんとして居る、慶子樣は目を張つて靜かに私を見守つて居られた。あゝ今迄私は何を語つて居たらう、暮れゆく二時間を……。

どんよりと曇つた空は灰色に沈んで、暗は暗を重ねてゆく、夢のうちに私は友とふたり出でゝ廣瀨川の岸に立つた。

日しづみ行く宮城野の、
南をくぎる廣瀨川、
水に沿うて立つ櫻が岡の、
影枕する岸に來て、
西をぞ思ふ、秋立てば、
雲の響も似ぬものを、
胸にかくるゴルデンチエーン、
リングの玉は指にかゞやけど、
たれか知る、傷手にくらむ心から
十八にして戀しらぬ、
宮城少女の君し見て
羨しさにねたましさに、
しきりにおつるわが涙。
水はつめたう流れ行けど、
星はくもりてかゞやかねど、
灯、忘れし室の中の暗きもよし、
我は暗きを好むと云へば、
十八の君もうなづく。
白く浮くかんばせを、
互に見入りつ、
暫しを暗に默すかな。
あゝ此瞬間！
都少女われに破れし心なく
宮城人君ひめ持てる戀もあらじな。

握り合うた互の掌はあつかつた。

富豪の娘たちまちにして落魄の人となり、滿盈の新人やがて行方定

めぬ旅に泣くはふるきためしもあれ、ひとり君を悲しむべからずと雖、されど、この涙誰ゆゑに流れこの心誰の爲に亂れたる？おもへば君も亦薄命の人なるかな、秋まさにたけなはにして都の風は美しき君の友を吹きつつあり、宮城少女よ君が心は如何にやいかに。

【秀逸】

○途すがら

越後　雅樂子

朝飯がすむとすぐ家を出た、今日、新潟二番上りで、來る筈の從姉を迎へに。

ネル一枚の肌を丁度引き占める程の、心地よい風が吹く、二百六十間の長生橋は先達の洪水で、中央がゆがんで歩るくとグラ／＼搖れて恐い、水は青いほど澄んで居た、向ふから人一人づゝのせたが筏が二つ靜かに、靜かに下つて來る、立ち止まつて見て居ると、だんだん近づいて、すーと橋をくゞつて、水も動かさず、流れて小ひさくなつて行く、漕がず、語らず、歌はず、只、流れに任せて、靜かに下つて行くあの人達、何を見、何を思つてるだらう、始終は厭だ、たまにはあんな生涯もしてみたい。

態々裏町ばかりを選んで歩るいて病院の側へ出た、一等室の窓から、病院などにはふさはしくない、華やかな顔の女が往來をみ下ろしてゐた。

私の前を角帽被つた學生が三人歩るいてる、きつと、縣農事試驗場の講習生だらう、一定した制帽を被ぶるんだらう、厭な事だ、私なら菅笠で市中を歩るく。

新道から、二人引きの車が七八臺、飛鳥の如く走つて來て、寶田會社の正門を入つた、其後から株劵仲買師らしいのがぞろ／＼來る、毎日／＼の石油株の下落、株主は氣が氣でない事だらう。汽車の來たらしい音がする。

溫健、町田靜江の文に似て、加ふるに大自然の風光をとり入るる自由と手腕とを有す、北越由來人少し、願はくはひとり草生水日記の作者をして盛名をほしいまゝにせしむる勿れ。

○ある日

眞萩

雨の箱根はほんとに淋しいどうしたつて懷鄕の念が起らずには居られない笑はれるかも知れないけれど昨日御歸りになつた母樣が戀しい直ぐ下の道を美しい人が四五人强羅へ遊んで降られてか素足の小褄を手にきりりと取つてもやひ傘で通る藍の色に引立たせた白い手が傘の柄に絡んで洗心亭の文字が段々木立の中へ隱れる羽二重絞りの浴衣白い金春の半巾帶この細い雨に生れた人の樣後から早川の流が森の中へ追つて行く外は只灰色の雲が浮いてゐるあゝ箱根の山！この奧には妾の尋ねる人が居らつしやりはしまいか、昔刑法に何故山流しと云ふものを定めなかつたでせう梅雨の頃連山重る足柄の奧に封じられたら如何な極惡な人だつて悔恨の情に打たれぬはないでせうに、閻魔の廳の調べ硫

黄口の拷問は餘り慘酷ですわね、方丈記を出して讀んで居たらはがきが來た床しい和洋折衷の花一輪森閑とマリアの像や百合白し表を返せば三界無緣の乞食僧快天、御質問の拙僧の頭圓からぬは地藏の如き下等な佛は嫌な故に御座候「十戒なんてあんな窮屈なものどうして」との貴女の言葉君も中々隅へはおけぬ新代の人と感服仕候薰風や涼しき君の句を聞かん。はからず云つた言尻を捕へて私は御嫌な俗人の娘そして矢張古今の眞似をして喜んで居る身で御座います鎌倉や佛なれどもなどの御歌はようも存じません妾は嘗て御衣の手前餘り變つた言行に快天樣は如何云ふ御身？と伺つた時學の深い道心の固い人との御言葉もあつた今更ながら自分の淺薄な心を恥ぢた。

夜媼やがまあ御寺樣が御返事を今の御若さにともう泪ぐまれる一切衆生悉有佛性中には雙が岡の法師もおはすあながち檀特の峰の松風にあこがれるわけではないけれど妾の阿耨だら三藐三菩提の種は生れた時から持つて居た、怨めしい二分短い此小指に。

指の不具なるを悲しみて三藐にや歸依したまへる、さるにても君が涙のあはあはしきは何ぞや。

○につき

大分　原田澪子

やん〳〵云つて仕末におへぬから、負つて表の大家に遊びに行つた。お母さん一人居たが、其所まで買物に出て來るから一寸留守してゝ呉れと云ふので、緣に腰かけて子供を庭に遊ばせる。ふと、板屏一つで隣の井戸邊での話聲。

『麥飯でん唐芋飯でん頂戴しとりや、男ん云ふ事あ聞かんならん』と云ふのが聞えた。

私は頂戴の二字が、大變意味ある言葉のやうに思はれて、痛快だと微笑した。

『女ん子の悲しさにゃ馬鹿でん助でんなあい、男は男に立てちいかんならんわ』。

讀む事も書く事も知らない人達の方が却つて意志の發表が上手だと思つた。

『……ぞげな事かあるもんかえ、隣のお裏ん人を見んさい、十もちがふちうぢやねえかえ。女ん子は子供一人出來りやずつと年寄るけんない。そりでも取らん年やどつか若けえない。あの奧樣が物言ふなあほらあ愛らしいぞへ、肥後はばつてん云ふちうにちつとも云はんない、あの奧樣に子供抱えさすんなむげねえわん』

噂されてる御本人が、耳をすまして御座るとは夢にも知らず、話は益々佳境に進んでゐる。

四時、顔中ひげだらけの良人歸宅、餘り見苦しいから『ひげ位そつては』と注意すると、鏡の前に坐り乍ら、『己はもう此度は一つ立派にたてやうかと思ふ』と云ふ。『ふふう月給でもあがるんですか』『さあ東京の洪水で米は上つても當分月給の上る見込は先づないね』『ぢやひげ許し立てゝもつまらんぢやありませんか』『ムウ、それも考へものだね』。

勿論彈は考へものである。序に細君をして君のうはさをさせないようにすることも考へてくれたまへ。

逆襲

▲どつけしはようがんすかつて、鷄の糞ではありません、何ぼ越後者だつて鳥の糞を紙袋へ入れて賣歩きはしないわ。あれは毒消つてお寺の土だつてきいてますのよ。長岡邊へも「毒消いりませんかあい」「おつかさん買うておくんなさいや」つて賣りに來ます。(佐藤浪子)

▲本當に困ります、新聞なら事實無根につき取消を出す所ですわ、おめでたなどちつとも無いのに、どなたか外にお廻しになる方はございませんか、笄町へかたづきなすつてそれから又何處へかいらした妙子さん、お美しい新潟縣の素封家蒲原早蕨さま、朝井よつ子樣平塚つげえさま、皆さうなのでせう、なぜ皆樣にはおつしやらないの。(早川花子)

▲おぼえてゐらッしやいよ、澤山いぢめて下さいまし、私はいつまでも忘れはしません、本たうにお口の惡い方、これでも茶かされると悲しうござんす、まつたく隨分ですわ。(不美人草——七重子)



日なたの編物　芝區　みね子

▲千とせ子は玉のようなる指もてり錦のおびをあをのリボンをはあんまりですわ、こんな汚い手を……あの雜誌を机の上におきましたら、誰かゞあいにく見つけてこんな歌を作られるようぢやいかんなあ、今度會つたら海獅子をもとりひしぐようなと言はれるように働けつてホヽヽ、この頃は水も汲めば鍬ももつて、植木を植ゑたり草をむしつたりして、大丈夫犬ぐらゐはとりひしげさうになりましたわ。掌にのりてくしやみなどする狆ならば、とりひしがんとかれはおもへど。SEA LION 手捕にせよとはし妻に猛きを强ふるにくきわがせよ。(千年子)

▲そりやえらいの私、ちつとも覺えはないわ、女學校を優等で卒業したつて言つたことが。ソンチャの國の口惡先生、三年先の鳥に灸を据ゑさせたい(蔦)

▲千年さんが二十九でないと美しうおはすとを保證するつて、一體あなたはお幾つ?、四十四?それとも五?(要司村龍子)

▲美人には面會謝絕だとのお斷りがあつたけど、私にだけは許して下さるでせう……(かい野)

○特に長篇の日記を募る。
每號一篇を限りて揭載す。

○秋

木がくれ

朝、細い雨が降つて直に上つた、足なんか氣味惡くもえて、手は青白くふるへて居る、寒暖計を見たら、攝氏の廿六度に足りない、この寒暖計は、不正確なんだよ……放り出しておいて、カーテンをのけた窓から覗いて見たら、裏合せになつて居る斜の家に、白いシヤツの男がする〳〵と木に上り始めた、梢ががさ〳〵ざわ〳〵と搖れて、何にしろ赤くうれた實をもぎとつては、下に籠でも持つて受けて居る人があるのか、うつむいては又、もぎ取つて居る、土塀にくつついて居る桐の大葉が、一つ死にかけて居た。秋！〳〵……秋の情調は、あまりに弱い身には、痛過ぎる。

晝、引くるめて居た髮をといて洗ふ、一杯になつた水でばさ〳〵髮の裙を洗ふ快さ、眼をつぶつて居ると、遠い〳〵高い空に、青葉でつゝまれた一團の美しい國が浮んで見える、チヤームする音樂のメロディは、たえず耳を打つて、美しいもやが流れ、萬象は新らしい香に匂うて居る、多分憧憬る藝術の國なんだらう、あゝだれも居ない林の此方に一人、白い顏を遠くから見つめたら、阿波の菊子樣らしかつた、華やかな笑ひ聲、林を透かして、綺羅びやな帶、くすぶつた着物の裙、丸い肩、若い方の面目が、さながらに現れる、自分の位置は何萬里とも知れぬ下界の、荒みきつたはて、力無く眼を伏せる………。

頭を上げし眼を開けてはつとした、馬鹿だなあ………今、現實に生きて居るんだ、氣がしれない………。

夜、久し振りに琴をさらへるつもりで先きに爪をはめて琴を下して袋を取ると、なーんだ、絃が一本ビーンともブーンとも云はず切て、ぎり〳〵他の絃に蛇の形して執着のさまを見せて居る、急にぞつと底寒さを覺た。

われから藝術に對する憧憬を嘲つてるのを見ると、この君も亦あたら才を埋めて甘んじて平凡化する一人であらう。はゝき木すでに去つてはやぶさ（もとのまきばしら）も亦詩を忘る、近くは白山吹も秋とともにすがれて某孤兒院に埋もれんとすといふ、去る者多くして來る者は少し、止んぬるかな。

○八月二十九日

朝鮮　山百合子

夜來の雨も心地よく晴れて朝日の光りうら〳〵と四方を隈なく照り渡す、嗚呼今日は韓國の葬式日——日本は日出度き出產の祝日——昨日迄の韓國は新日本國と化した。あゝ今日韓人の心中、いか許りならむ。水汲み韓人が例の大きなお臀を振子見たいにプリ〳〵振り乍ら、重さうに水汲んで來た。ヨボは今日から日本人よ、と云つて聞かしたら私今日から日本人よと云つて非常に喜ぶ、そして其側に有つた箒を取つて欣喜置く能はざると云ふ樣な面相でやたらめつぽに踊り廻る。俄然結髮の頭をべつたり下げて、寶に有難うとて禮を言ふ、來る韓人も來る韓人も皆聞いては喜悅滿面にあふれ出でむやみに頭をペタ〳〵下げる。日韓合邦完了したるを何だか自分の力ででもある樣な心地して、いやに小鼻が蠢めいてならない。支那人が又だらしのない姿して葡萄を賣りに來た、早速窓から頸突き出して籠の中をのぞいたら、まあきれいだ事と思ふがいなやヨダレがぽたり落ちた、スーとすつた時はも駄目、一寸こゝへ上げて見てと云つたら、いや奧さんこすいですよと云ふ、支那人に朝鮮人は女でさへあつたら娘も老母も皆奧樣と云ふのだ。此頃では平氣になつてしまつてのみの食ひ付いた程にも思はない。

「奧さんがいゝのをよるから上げて見てつてば」と迄口に辷らしたら先程より應接室に肥つた體をどつしりすゑ付けてゐられる宮木樣が可笑かつ

にのか、扇子で顔隱して、すぐ連想する顎のうなぎを思ひきりうんと横へ張り出して、其上に赤髮がピーンとしりつぽ出してる。其歴に可笑しいのか知らん、私だつて十八だわ、十八で奥樣になる人も澤山ある。と思つて見たが急に恥かしくなり、くわつ〱と顔の赤らんだのを自覺した。

遠くから宮木さんのあごのひげを見て、すぐうなぎを聯想するほど、朝鮮には喰べたくても蒲燒が無いと見える。いやにうごめく小鼻」の小をもし大と書き更へたら？

○出立の日

一條光子

「姉やんえ！、此汽船でござらつしやるのぢやあないなー、早く仕度しないと、もう二度目の笛がなりましたゞよ」しとおみねあんこう（娘）が息をはづませ乍ら汽船の出帆を知らせに來た。叔父は今日のようなシケでは、とても行かれないから此次ぎにした方がよいと仰つしやる。あんこう等は、此シケは多分二百二十日が過ぎる迄は續くだらうと云つて今日立つ事をすゝめる。私は叔父に從はなければならないけれども、學校の事を考へると、波の荒い事等は云つて居られない。叔父は高い波が、小さい艀舟を思ふ存分に搖り動かして居るのを、默つて見つめて居る。娘達は叔父と私との顏を、いら〱し乍ら見比べて居た。

「先生、此シケは何時やむかわかりもしないよー」と、おしげあんこうが、じれつたさうに云つた。叔父は、漸く思ひきつたと見えて、

「ぢやあ、今日おたちなさい」と云ひ置いて濵へ下つた、切符を買う爲めなのだらう。私が家に入つて荷造りをすると娘達がそれを濵へかつぎ出してくれた。

船頭が八人掛つてやつと艀舟が漕ぎ出された、娘等は白い手拭を振り乍ら「また來いやー」とどなつた。私がした返事はもう聞えぬらしかつた。

方言をうつせとの注文に應じて書いて來たのはよいが、あんこうは姉公か、魚の名から取つた名ではあるまいか。

○唐かみ張りの半日

京都　益子

何ァに大丈夫、立派にはり上げてお目にかけますわ、と、そつと買はせておいた、唐紙に糊をひき初めた。綺麗にふいた板の上に、唐紙の裏面を上に敷き、柔かに溶いた糊を、刷毛もて其上一面にまんべんなくはきつけ、二人が兩手で四隅を持ち上げ先にはづして置てある襖の上にそつと、ゆがまぬようにのせ、上から乾いた別の刷毛でさァ〱とはく、するとしわものび美しくはれる、一枚はり上げた時の嬉しさ一息ついた。たゞさへ裂け安い唐紙の、糊にぬれて、うつかり持たうものならすぐと破れる、それをやつと持ち上げたまではいゝが、さて今度は、餘程見計らつておろさないと、一分狂つても見苦しいし直さうとすれば、紙が破れさう、骨のをれる事並大抵ではない、わき目もふらず、息もつがずに、一枚〱と繰り返しつゝ、襖一面に、唐紙五枚、それを四面合せ廿枚、折には隙間が出きたり、穴があいたり、おまけに節角張つた其上に、糊汁が、ぽたりと一雫おちてにぢんで圓くしみがつくやら、なか〱うまく行かない、半分頃にはもう、いやになつてきた、もう止したいわ、なんて、妹はそろ〱弱音をふき出した、何そんな弱い事でどうするの、と勢をつけ乍ら、其實、妾ももう〱閉口、父樣にあんな威張つた事さへ、云はなければと、しみ〲悔いた、どう氣張つたつて出來ないものと思つていらつしやるのだもの、やりそこねたとて笑ひなさるどころか、當然の結果だと思はれるには決つてるもの、いつそもう止さうか、泣きたくなつてきた、けれど自分乍ら恥かしい、またせつせとやり出した、何しろお父樣の不在中にはり上げておどろかさうといふ、趣向なのだもの、氣がせかれる、始めの内こそ丁寧に注意もしたけれど、終りの二三枚といふもの、もう面倒くて〱粗雜が過ぎて隨分と見苦しい、いゝわいけない所は隅の方へやつておけば、まさかのぞく人もあるまいもの、さうとも〱のぞく人あらばのぞかせておけばいゝわ、なんて、二人でいゝかげんにすませて、やつと皆、出き上つた時の嬉しさ、ア、と二人は思はず同時に胸をはつて大きな息をはき乍ら、顔見合せて、笑つた。

「經師屋さん、日當はいくらなの」「え、五十錢よ」高い高い。

○曇り日

下野安乃子

は止んだが重くるしい日、何だか物足らなくて〳〵雜誌や詩集など本箱中引き出して拾ひ讀してたら忍びやかな足音が上つて來た、暫くして又ソッと下りてつたやうだ誰だらう、私が二階に閉ぢ籠て居ると時々あんな事する厭アな、お花かあッ若しか母樣?どうし樣お仕事と思ひついたが遲かつた四時近いのだもの今更初めるでもないと階下へ行つたら母樣せつせと裁物して居らつしつたが私をヂロリお乳をせがむ可愛い健ちやんをうるさいつと呟いたのでよろ〳〵とお尻持ちついて泣き出した、ハッと思つて茶の間を覗くと父樣はお店の方へいらしつた樣子なのでまあよかつたと思たらお花と婆やが如何なさつたと出て來た、口惜しさを笑顏で堪へていきなり健ちやん抱いて庭に下りた、かまはないでおくれと仰しやるもきかず中庭迴て例の庫の傍のお稻荷樣の石段に腰かけたら今更のやうに淚がせ〻り上げたいつもの事だけれどこんな小さな者に當つて……健坊は中々泣きやまぬ、其處等ゆすぶつて步きながら眞緑な葉の間から燃ゆるやうな柘榴の花を取てやつたら何が嬉しいのかニッコリ、池へ行て花瓣の一枚〳〵浮べたら波も立てずにすーと赤い舟が行く〳〵、フウと息を送るとゆら〳〵と搖れて散り〴〵になつた、あんな小舟で大海原に乘り出してそしてあんなに散つたらば………ふとロビンソンを思ふ、併し心が靜まるにつけ自分が惡いのかなと思ふどうして私はかう物に耽けるのだらう明日から裁縫しよう厭でも仕方がないあゝ淋びしいと思ふと一層兄樣が戀しうなる(七月二日)

仔細あつてこの文によりて或人を聯想する。母の愛を受くることのすくないのも、裁縫のきらひなのも、弟をいたはつて庭をさまよふことも皆、或人の爲て來た事であつた、……今は知らない。

○秋の夜

草花

「郵便」と異樣に響く聲と共に、バサリと格子の內へそれが落ちた。父樣の許へであつた。私は何といふことなく、らくたんした。どういふものかこの「郵便」の一聲がなつかしくつてたまらない。皆が歸つて來た時の用意に、お湯を湧して置いて、すつかり閉めて、一室に籠つた。

裏隣のお末さんが、また長唄を習つて居る。爪彈きでもなささうだが、何だかさえない音だ。お末さんは、目のパッチリした、それこそ夢二式の女だ。何でも貰ひッ子で、藝者になるのださうだが、自分もそれを欲してるのか、何だか、平氣な顏して、毎日、笑つてばかりゐる。こんなことを思ひながら、ボッ〳〵、お菓子をたべた。ふと、氣がつくと、いつか三味の音は止んでゐた。

ランプを、もう一倍明るくして、雜誌や繪葉書を見て、そして、綿入物を出した。幾度なほしても、どうもつまさきが思はしくない。先日のは、こゝがいッぺんでよく出來たから、テキパキと仕上て終つたが、これはもう嫌になつた。とう〳〵出來ずじまひで止めて、何もかもほつたらかしておいて、床を敷いてすぐもぐつた。ランプをずつと細くして。

「うどーん、そばー。」と、哀れつぽい聲して、ひつそりした門を、うどん屋が通る。「秋だ」。何となく、秋といふ感が、ひし〳〵せまる。「うど〜ん、そばー」。私は、遠ざかりゆくこの聲を聞きながら、うつ〳〵と夢路に入つた。

戶を閉め切つてお菓子をひとりで(?)喰べたり、縫ひかけのきれを片づけもせずに床へもぐりこむだり、それでゐて立派な奥さんなのだから驚いちまう。

○日記の一節

西多摩よし子

もうこれで乘換へずにすむと安心した三田行電車の窓から、ライオン齒磨の廣告の上にある時計を見ると十時半になつてゐる、どッちの側もすいてゐて五六人になつたと思ふと又四人位になつてしまふ、いつも夜でもつゝ賑はふものがと思つてゐたのに、今夜の淋しさ、女など一人もゐない。山門前といはれて捨てられるやうに降りて高い電燈と瓦斯燈の光の下を山內へ入つて行くと廣い通に並んで自分の步くと同じ位の速さ

に二人の女が手をとつて話しながら歩いてゐた、どつちの方からきたのか知らなかつたけれども私が左へ曲らうとする時、「それではねあのかたにもねよろしくね！お大事に」、といつて戻りかけた方が又、ちよいとさあちやん」と少しはなれた方ゞ女を呼んで「そこへね女の方がいらつしやるからそこまでごいつしよにいつていたゞきなさい」まあ自分のことかしらと思つて私はこの時はじめて二人が姉妹であると悟つて妹の方の様子を見たら桃割の十七八のたゞの娘でもないやうな人、言葉でもかけるかゝ思つたらだんだん遠ざかつて知らぬまにゐなくなつた。紅葉館の方へでも入つたのか、この間一言も口にしないけれど私の心は二人のためにさんざ使はされたばかく〳〵しい、木の間から月を仰いで今朝出た山地のことを思つた。

増上寺の山門―をぐらき夜の木立を背景にしながら大芝居が打てなんだのは殘念である。

○八朔の夜

安木春子

お客さア、踊が立ちましたに、見にいきなんしよ」宿の内儀が階段の處から顔だけ出して言つた、よみさしの湖月抄下において、そつと祖母様の顔をみると、行つてもよささうな顔してゐなさるので、手早く帶だけかへて、團扇片手について出た、宮本の所の角で、湖山のものだといふのが二十人餘りも男女入り交つて揃浴衣に、揃の手拭、赤緒の編笠を、眉深に被つて前後左右にすゝみしりぞく手ぶり身ぶりのをかしさ宿の次男が自慢の美音がしめつた空氣にふるへて濱邊の方へ消えて行く合間合間を、ア、コリヤ〳〵と細い鋭い女の聲が拍手をとる、私は宿の内儀の後に柿の木にみをよせてぢつとみてゐた、一番先に踊つてゐる人は脊が高いので、二重になる程屈んでゐる、立派な鬚のある、眼鏡をかけた人が二人までゐるので、好奇にそればかりみてゐると、一人が、くしやみした拍子に鬚がおちた、まア附鬚だつたのか、軒につるした御神燈の光が踊り子の半面をてらし、はた〳〵と風にゆれて、私のゐる邊まで照らした、皆が、不思議さうにずつとよつて來て、私の顔を覗いては行く、「お花さん！」と肩に手をおいた人もあつた、えー、と顔を上げると「やあ濱屋のお客さんか？御免なんしよ」と逃げて行つた、堀部安兵衛か何かの、うかれ節をうたつてゐた人がふいと節をかへて、「濱屋のお客さんが出てをられるで皆さんまじめに踊んなんしよ」などゝ言ひ出したので急いで歸つて了ふ、時計をみるともう一時、まア三時間もみてゐたのか、と驚ろいて、急いで床に入る、祖母様はすや〳〵と輕い寢息をたて、やすんでゐなさる、群集のどよめき、さえた歌聲が新しい蚊帳の香に交つて流れて來る、旅に病んでゐる友の上、家にある弟妹の事等、いろ〳〵な事が、ごつちやに考へられて、ねむれず、四時をうつ頃やうやく寢入る。神よ、夜と共に踊りあかす若き人の上に幸を給へ！

四五人に月落ちかゝる踊哉。

○雪の日

常陸　河骨

八月十四日、雨も降る、風も吹く厭やな日だ。今朝早く成田の長さんが下肥上げに來て、初めて堀つて見たからと云つて、洗ひたてのつら〳〵してる里芋を一升計り持て來てくれた。附木の變りに有合の緋のリボン、二尺位たら廿二錢だつて云つたつけ。昨日青物屋が賣りに來たの訊いたら廿二錢だつて云つたつけ。附木の變りに有合の緋のリボン、二尺位ゐの娘にやつて頂戴つて上げたら、かうだ物頂いちやあ、はあけえつておつりとりますなあ、て頻りに氣の毒がつて行つた。解物しながら居眠りして、お前は座りさへすりあ居眠りが仕事だよ、て母に嫌味云はれて無暗に氣がいら〳〵する。意地の惡い涙がボロ〳〵出る、お影で居眠りの魔は何處かへ飛むで了つた。

お晝にはお芋と生揚げでも煮ようなんて話してる所へ、小學校の同窓會へ行つて見て來た歸りだつて泰様が寄る。今日は白絣に小倉の袴、一高の制帽、例の近眼鏡をかけて、すつかり向ふが丘の健兒の御風采、學校で大いに歡迎されて了つた、て云ふから、其帽子が巾がきいたのでしよう、て云つたら、或ひはさうかもしれんだつて。お茶入れてお菓子何つて母に訊いてたらお茶菓子なんかいらない、話さへすりやあいゝつて、出せば何でも殘すのは容物ばかりの癖に。

お晝のご飯は、て聞いたら、學校で辨當食つて行けつて云つてくれたが、途中で歸つて來たから、てちやあお芋煮ますから食べていらつしやい、

て云つたら、那賀ちやんのお料理ときたら、黒人も跣足！だからね、て、相變らず皮肉が酷い。生揚は何う切るんだらう、と一人言してゐたら、三角に切るべし、て云ふが否や立つて來て、袴の先生庖丁とつて妙な手つきで薄つぺらに切つた。笑可しいから何とか皮肉つてやりたいと思つたけれど、一寸出ないので、只笑つてたら、自分でも可笑しいと思つて矢張り笑つてゐる。

煮える間、側に寢ころんで、例のデッカンショと云ふ歌を、バンカラ聲でうなつてゐたが、わけはちつともわからない。此歌ばかりは學校で許されてるんだつて隨分大變な歌だ。

白瓜の押し漬けを牛ぺら、お芋と生揚はお皿ばかり殘し、ご飯を四杯もおかはりして、それで、もう一ッおかはりしたいんだが、那賀ちやんが恐わい顔してにらめて居るからよしにしよゝ、て悄らしい。

お天氣に成つたら、お錦ちやんと二人で筑波山へ連れて行つて貰ふことに約束する。四時頃歸る。夜、中央公論を見る。雨風強し、涼し。

那賀子さんの顔は私の見た時も可愛くふくれてゐた……と言ふと、逆襲がこはいから今の内取消をする、しかしかういぢめられては、「兄さま」たるものやりきれまい。

○兄様

四谷　荒木狂色

歸つたのは四時すぎだつた。さつそく〱さつきのもの戴かうと思つて見たらオヤ〱中味が煙になつちやつて、包んでおいた紙に何か書いてある。「主人の留守に名刀を盜む。石川五衛門」だつてまあ、兄樣だわ金つばの名刀？ほゝゝ、大切な名刀を盜まれては、すぐ兄樣のお室に突進するとベラ〱ベラ〱ドイツ語の練習中だ、兄樣でしよ？私の名刀を盜んだのは、ハハヽヽ或は然らん、而しだね刀を盜まれても知らずに遊び廻つてるやうなのらくら武士ぢや末が案じられるね、なんてすましたもんだこれぢや怒る事も出來ない、すなはち金つば四つ取られ損、仕方がないからお室に歸つて講義錄讀んでたら兄樣何思つたか、これはおすうちやんに、上げますつてドロップ持つて來て下さつたまあ有難く頂戴する。

又入浴後兄樣と桂ちやんと私と三人で通りへゆく、桂ちやんにねだられてアイスクリームを飲んだ、歸りに區役所の角まで來たら兄樣首をひねつて、僕、何か忘れものしたやうな變てこだ、はあてなつて考へてる、あゝあのステッキでしやう、今の氷屋に置いて來たかも知れないわ、取つて來ましやうか、そうだ〱面倒臭いあれは「ステッキ」としちまへ、なんてズン〱先へ行つしやる。笑ひ乍ら後からついてつたら暗やみからヌツと出た書生體の男すれ違ひ樣何とか吐鳴てつた、吃驚りして、兄樣今何んて云つたのつたら、何にあれかいあの男は千里眼でも持つてるんだらう、さつきの事をちやんと知つてたよ、イヨー、ステキーつて云つたんだつて、ほゝゝ、兄樣も却々しやれがうまいわねいつ何處で覺えたんだか、月の光に眼鏡が光つた。笑ひ乍ら御門を這入る母樣にお話ししませう。

この男、學校は落第はしても前座には大丈夫なれる、多望なるかな。

○小雨ふる日

松本市外　吉澤辰美

朝から小雨がふる何となく氣が重い、新聞も雜誌も讀む氣になれない過去を思ふもいや未來を忍ぶもいやたゞ横になつて池に落つる雨の音を聞く、夕方きり雨ふる野道を彷徨ふた、音なくしてたゞ白く見ゆる小雨が充血した頭にかゝつて心地がよい、袴腰や八仕の峰がきりの中からぼんやりと見ゆるよいながめだ、吁四月前、もの足らぬ思ひをいだきて寂しい住家へ歸るのです」と置手紙して人の去たもこんな夕ぐれだつた、去りにし人は北國の野にありと聞けど……。夜は早く床に入た、ねむられぬ、思ひはいろ〱の人の上にはせて、花守と藤村詩集をきれいにうつして送てくれた從兄樣に二十八宿をもとねがつたけれどゆるされなかつた、悲しい時に悲しい詩は讀むなと云ふ私は讀んで泣きたいのだけれど。ひとりの妹の安らかに住むべき愛の家をさがしあたへて、かへつて永久に怨をまねいた僕の姉樣は如何遊ばして御出るか、「姉樣ありがたう」と御手にすがつて泣きたいのだけれど、何ものか知ら、後より「怨めよ、反抗せよ」とさけぶ、吁。

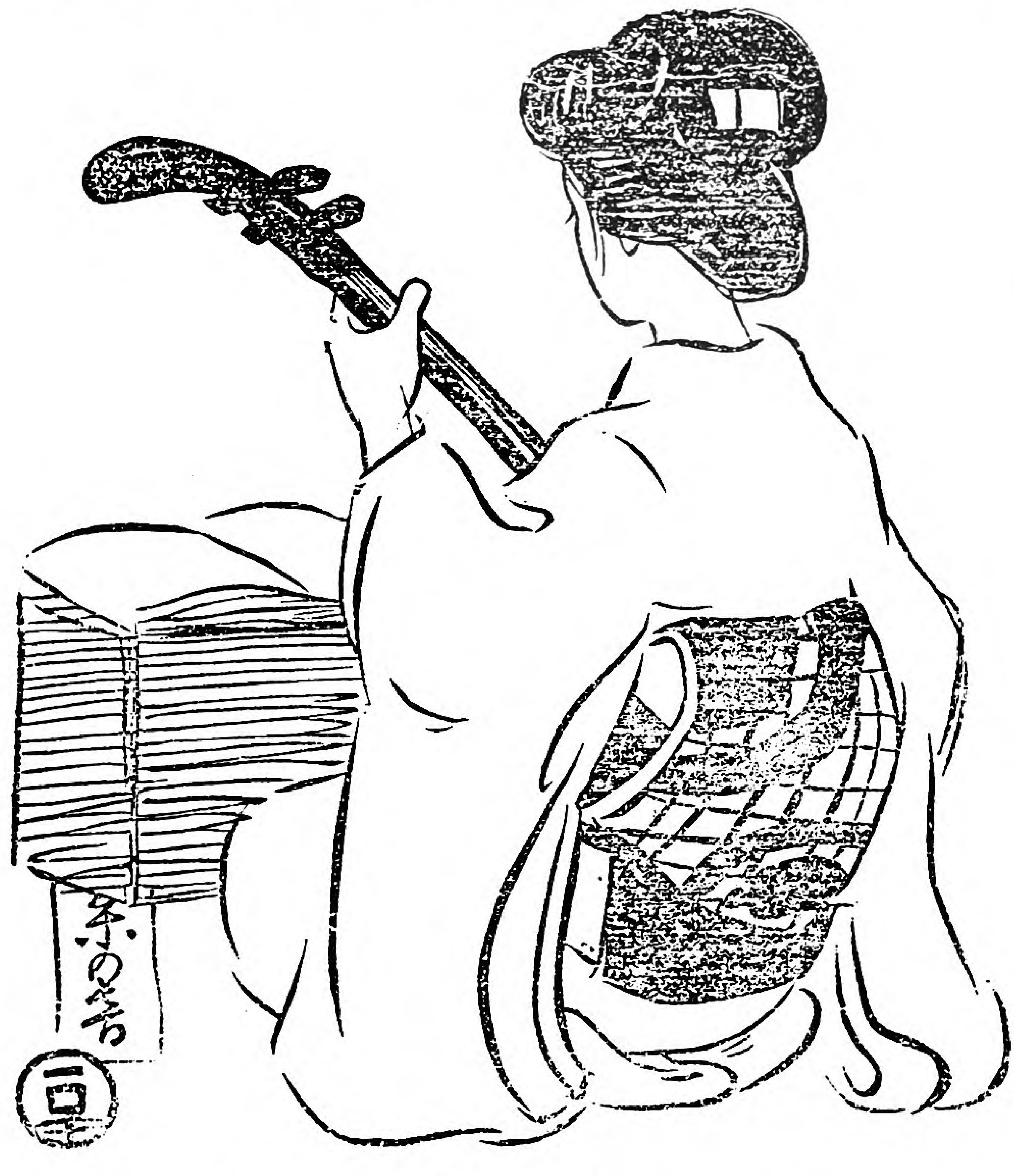
同じき國に、產聲上げしとのみ知る、多感の女詩人山田くに子樣は北信の方か、南信の方か、花散る四月の末に十六にして人妻となつた從妹、

初秋の風に吹かれて、奈良の高師へ、歸舎すると云ふ友は……。
山をこさへようとしてあまりに細工をしてはいけません、あなたには女少尉の名でおどかされてからも久しいものだが、もつと勉強せねばだめだ。

○窓の想ひ

土佐　重子

昨夜は夫の家で泊つて、暑い事此上もない一里の道路を、重く〳〵て捨たりさうな足を引摺り〳〵やう〳〵と歸つた。汗にまみれて、息がはづんでたふれたかつた。其寢室へ行くと、机の上に置かれた封書は、千葉の夫からのであつた。窓の下で南風に吹かれ乍ら、御手紙を見た、けれ共私は筆を握るのが厭で……。歸つたなら、若しやと思つたのが、想像とはぐれて矢張り空賴のなさけない思ひがして、がつかりして急に泣けて來さうになつた。吁私は何て意氣地がないのでせう。けれ共私の胸は或物に憧憬して居る、髓かにして居るのです。此二三日の厭やな事許り思ひ出しては、窓の下にねころんだまゝ、私が年少の頃から胸に充滿した、理想は、つひ〻實現されずに一生彼のうつくしゝ胸に漲らした希望の光明も、打ち捨てられて、私はあれは矢張り空想として



絃の音　失名女

終らねばならぬのでせうか。青葉を渡る涼風は、現實を嘲るやうに聞えます。私はふしあはせな女に生れたのであると、思ふともう矢鱈胸もワク〳〵して來ます。つと起きあがつて立たうとすると、よた〳〵と障子へ倒れかゝつた、暑いめにあつて歩いた故か、例のやうに動悸が高ぶつて、手も足も慄へる。窓にひぢをもたせて、面をうつぶせにして、私は死ぬのだらうかと想ふと、先日細野先生が、神經を興奮さして泣くな、泣いては自分で自分の軀も心も傷めるからと、御注意下すつた。其の時私はすみませんから、泣きません、泣きませんとも、こらへきれない折には聲をたてずに泣きますと、云つたのを考へだして、すでに私は軀も心も傷めず居るのに氣づいた。私は又窓の下へ臥ころんで眠れぬ目を閉ぢて、何ものかを求き樣と、靜まらぬ心であせりました。恁うして私は日の暮れるのを待つ……
（七月十日）

寂靜子、何ぞ小心翼々たる……。

○赤、白

東京　ふみを

青々と晴れた空には、雁が一列渡ていつた。八時半二發の銃聲で開會、ほがらかな軍樂の響き、心も身も溶けて、流れて、輕くなつて天上しさうだ。もう父兄席は一杯、まご〳〵してる中に、自分達のワルツ、ワルツは外の學校ではあんまりしない。いゝえ、出來ないとの事。割烹室にいつて見ると、先生は今入らした。楽隊の御馳走は、赤の御飯に、味噌汁に、おなますに、西洋料理一品と、忙しい事、松茸をさく、生姜をきざむ、澤庵を切る。時計を出して、もう十時半、とせか〳〵してると「早く、カレドニアンにおあつまりなさい」と外から注進、手は生姜臭い、澤庵臭い、でも思ふ樣氣取つてすます。ぢきに競走、今日は朝から白許り勝つから負けるものか、と私の方の白がいふと「何赤が今度は勝つに」と大した威勢、出ればもう夢中。あゝあゝ負けた。一人半負けた。何負けるとなれば、相場が極まれば、かまはないものゝ、口惜しい。先生が傍から「何二人や三人、中に、はしこい人が出れば勝つ、そら、しつかり」と仰るので、さうだ、さうだ。私の處でと力味なほす。私と一所に出る赤組の人はもう先に、夢中で飛び出す。金槌を取る、釘をうつ。まだむかふは、かけながら人より確に早いと自信した。次は岩井さん、あまた赤の西さんは、歸らぬ、これで一人、勝つた〳〵。見物人はあいた口がふさがらぬといつた樣な顔つき、最後の運動會も勝つて終つた。何となく心地がよい。卒業生の遊戲丸まげも、銀杏返も、草履も、駒下駄も。日本婦人もかうなれば豪いと思ふ。來年は私ももうあの御仲間なのかと思つたら何だか淋しくなつた。

こんな平凡な事を書いて滿足してる人では無いと思ふ、この君はまつすぐに延ぶべき才を持つてゐる。

○雨の日

阿波　雨野ふみ子

幼なかつた頃今日の樣な日は雨戸を立た暗い座敷の唐紙をずつと取のけて鬼ごつふや隱れん坊をした、其時の大將は姉樣や兄樣で私はまた、目の子だつた、いよ〳〵眞暗になると黒い雲の樣なお化が自分の前に立つてゐる樣に思はれて只隅で下女の袖等に縋つてふるへてゐた、其くせ其な事が面白かつた、それから隱れん坊の時は秀さん（從子）と私はよく行李の中や簞笥の引出に隱されて隨分苦しい事もあつた、今となれば只なにとなく今日の樣な日がなつかしい、電話がかゝつたので行つて見たら水はどうですかつて「此處は十六番でございます！」といへば警察とまちがへてゐた、魚屋が來て川は大分水が增してゐるとか、下男を見にやつたら橋まではまだ一尺餘あいてゐるそれでも皆水の出る用意をしてゐると云つた。

こんなに降つても車屋だけは大繁盛、大阪通ひの氣船が皆此所にいれるので鐵道のまだ通じない田舍、陸ではガタ馬車か車より外しかたがない。夕方大分小降になつたので雨戸を開て見たら日が照つて虹が二ツ立つてゐる。庭の木は皆いたんでゐなかつたが私が切角植た玄關の駒寄の所の雞頭が大きいのばかり皆根こぎにされて、池の水岩石の紅白の萩が當のまゝ大方ちつて枝が水の上に蔽ひ被つてゐる。夜になつて晝よりもはげしき風雨、雨の絕え間を椽に出て見たら黑潮の樣な雨の間に蒼白い星の光がなほ物凄さを增す。

雨が黑潮のやうに降るといふのがわからぬ。其間からまたどうして星が見えたのだらう。

○こほろぎ

福島市　春子

昨日、秋海棠の葉下で、ころ〳〵とこほろぎのなく音をきいてから、眞黑な羽根に模樣のある、かはゆらしい其姿を見たさに、六疊の座敷へ仕事をもつてうつつた。「あやさんのいふことをきいて、こほろぎがないたら明日は雨がふりますよ」といふて、祖母樣かつぷり〳〵眞綿から絲を引き出しながら笑つていらつしやる。けれども私は、いまにこほろぎがなくやうでぢつと御庭を見つめて居る。後の窓から涼しい風が吹く、九月になつて涼しくなつた樣に思はれる。ぷつと絲を切ると友ぜん長襦袢がひざ元に波をうつ、物さしをもつて、ぢつと空をながめて居ると、白い雲が靜かに東に流れて行く、自分の體も一しよに流れて行く樣に思はれた。



論文

編輯局選

○夜雨樣の選評（天賞）

艸雲雀

私の妹は女のくせに學校の敷居へ油を引いて先生をころがす事が上手です。夜雨樣は夫れ以上のやんちやんで、餘りお口が激しいから目を瞑る時もございます、けれども皆樣も覺悟の前で內々は、ビク〳〵ながら投書なさるでせう。第一は一寸思ひかけぬ評を付られて痛み入る方がどんなに多からう、お煮花を拵へたとて饑饉の用心とは限らないし、お友達の結婚を羨んだからつて、親御樣にねだれ口はあんまりよ、肋骨が一本足りぬ國の生れではないから、其のお怨みはHさんとやらにお讓りします、「教ヘラレタルバイブルガ何ニナルタヾ純ナレ」とのお訓は手を組で聽かねばならぬけれど。

お目に掛れば親しくお話もなさる、わからぬ事は教へても下さる、いざ雜誌へ出したとなると、稻妻ピカピカ神なりゴロ〳〵本當に本當にこわう御座います、昔は優う居らしつて太田きし子樣を初め導かれて立派な詩を作る樣になつたと聞いた、青山で拜見したお寫眞帖には十三から二十までの邦子樣、十一から十八までの萩花樣、凄艶とでも云ひませうか、振ひ付たい樣な鳥子樣「黑百合」のヒロイン、まきばしらの君、千紫萬紅花は色々に匂うてをります、夫れを今は皆、憎き者になされてか、冷嘲熱罵女は皆人でなしの樣に仰有る……其の動機は私共の知らない事で御座います、けれど或一人の方が德に背き義に背たからとて、はたの人が側杖をくはねばならぬ義務はないと思ふ、左樣では御座いませんか。夜雨樣の選評は言はゞ御自分の感

慨をもらす爲めで、あてこすられても冷かされても腹の立ぬかはり、時々六つかしい漢文が交るので弱ります、定子樣御夫婦を「一雙の孤雁高く飛べば一對の鴛鴦獨立つ」に比したのなど謎の樣にもとれます。
先生よ、どうぞお手柔かに。

これも亦逆襲の別働隊か、一騎駈の功名、他の欣羨に價ひす（評）

○女子の天職（地賞）

越後　齋川幸子

人形を持つて遊ぶ女の兒を見た人は、誰でも其遊びの中に母たる性格が遺憾なく具備して居る事を覺りませう。其人形を膝に抱き上げて、撫でたり擦つたりする擧動は眞の母親が其子供に對する愛情を立派に現はして居ます。此點に於て女の子は小さい阿母さんです男の子は阿父さんの雛形とは申されませぬが、女の子許りは早や七八歳にして婦人の性格を美事に表はして居るから妙です。それで妾は何時もさう思ひます。やはり女の子は女の子である、世間で如何に彼是申さうが、畢竟婦人の天職は母親となるにありと。

男の兒は小さい時は腕白で仕方のないと云ふても、大人になつて左樣であると申されませぬ、少年時代に仕方のない兒が、後に立派な人になつたものは澤山ありますが、女の子の方は然うでない。お轉婆娘は何時迄經つてもお轉婆、子供の時溫順であつた女の兒は、やはり大きくなつてからも變らないので、其故に人形を可愛がつた女の兒は母親となつてからも、其子の爲に我が身を忘れて盡す人です。

女だからと云つて皆々嫁入らなければならぬ筈はない或る婦人は結婚しない方がよいかも知れませぬ。獨身であるが故に成功し、多少世の中の爲になる人もあるでありませう。然し妾は女子の結婚して世帶を持つて妻となり子を育てる母となるのは、自然であつて、結婚せずして別に社會の職業を求め、生涯獨身で終るものは不自然であると云ふことを憚りませぬ。

所が近來不自然なる變則の婦人を生ずる事が益々多くなつて來ました。我が國でも今日は女の判任官、女のお醫者樣、女の先生、女の番頭さん、女の新聞記者など漸次多くなり、何も女だつて人間であるから男子と併行して同等に仕事をすべき筈ですけれど、それが爲に女子の本當の領分たる天職を蔑視し、或は全く棄てるやうになりまするのは、眞に遺憾なことだと思ひます。昔は女子は十五六歳にでもなれば、嫁入るものと

極つて居り、今日のやうに三十四十になる老孃は滅多になく、若し何かの都合で年增になつて古巢に留つて得る事があれば、當人の恥辱な許りでなく、世間で許さなかつたさうです。所が今日の婦人は未婚であるのを何とも恥とも思はない。何故こんな傾向になつたのでせうか、是には種々理由がありませうけれど、要するに女の虛榮心です。女は割合に負けぬ氣が強く、其友達の中で出世したのを見ると、羨ましくて耐りませぬ。隣家の奥さんがピアノを稽古して居ると、自分もそれが稽古して見たくなる、すると眞面目に臺所に燻ぶつてゐるのはつまらなくなり、嫁になどなつて氣兼するのは厭やになります。

眞に文學技藝に趣味あり、それを以て社會に立つのは本人の爲でもあり社會もそれが爲め利する所あるけれども、唯人がするから吾もと云ふ様な淺薄な考は大に愼むべきであると存じます。何故臺所の仕事は下品で、ピアノを彈くのは上品でせうか。妾は職業に貴賤はないと思ひます。總理大臣も人力車夫も社會生存の爲に働く點に於て同一だと思ひます。唯總理大臣の職業は人力車夫の職業より影響する所大なる許りです。



日韓併合　岩代　鈴木葉蔭

眞に好きな書物なら鐵瓶の沸く間にも、御飯の煮える間にも讀む事が出來ます、而してそれが反つて机の上で讀むよりも趣味ある事と思ひます。

圓滿なる常識の上に立脚したるお說、未來は知らず、現在の婦人は此論に服して可いと思ひます、說としては反對もありませうけれど、やはり天下の大多數の婦人は此お說を守るのが本當だらうと思ひます（評）

○馬琴と種彥（入賞）

安木はる子

馬琴と種彥など言ひましても、私は何方にも通じてゐません、只先日來、病床にあつて退屈まぎれによんでみた、「朝夷巡島記」と、「邯鄲諸國物語」と、この二つについて、思つたまゝを書いてみようと思ひます。馬琴の文章について、際立つて目に立つ事は、艶麗な形容詞を澤山につかつた事と、ある一事を描くにしてもすぐ左から突つこめばいゝものを、前をまはり右をまはり、後を通つて、もとの左に入るといふ、まはりくどい描寫と、昔唐の世に、とか、誰々の言ひける、とか到る處で故事を引張り出した事と、七七とか七五とかに無理に調子づけた事とです、種彥にはそれがありません、てきはきと心地のいゝ文章で、ずん／＼かきなぐつてあります。餘り筆を惜しみすぎると思はれた所もありましたけど――尤も種彥の文章にも調子づけたやうな處はありますが馬琴ほどくどうないから、それ程いやきがさしません、馬琴で感心するのは、八犬傳のやうな長いものでも、何處といつて粗末にかきなぐつたやうな處もなく、勞れたらしい色もなくて、同じ態度で始終一貫してゐる精力です、ですが長編のわりに内容はとぼしいやうに思ひます、種彥の方は、江戶つ子肌の一時的にヤッつけたやうな文章、之には短編の方に氣のきいたいゝものがあるだらうと思ひます。

皆樣、新しい者をおよみになるひまに、古い物語類もちつと御らん遊ばせ、今の大家の方で一寸言へぬやうな事が、苦もなしにかけてゐるやうな處もありますよ。

過し頃には馬琴、種彥優劣論なども盛んにありましたが、文壇の趨勢の移つた今日、女性の口から之を聞くのは珍しいと思ひます、且言ふところ悉く肯綮に當る（評）

【秀逸】

○女學生

大和　靜子

女子敎育の進むにつれ、女學校入學生の多くなるのは誠に結構ですが、どうも此の女學生の心掛が違つてゐはしないかと存じます。先づ入學に先だち學費の有無家の事情、身體の强弱、腦力の如何等考ふべきものですが、兎角近來の女子は、某は女學校へ入つた、某も某も、とまるで女學校へ入學しなければ、人ではないかの樣に考へ、又父兄にしましても、何家の娘は女學校へやつた、何某の娘も、女學校へ行く、どれ家の娘も一つ女學校へ入れてやらうかといふ樣な工合で、全然根本から間違つてゐます。そして、あゝ裁縫の材

料に困る、本代が高い、お金が澤山入る、休暇だつて宿題許りして家の手傳をしない、何の彼のつて小言をいつてゐます、元より娘たるものも惡るいのでせうが、まだ十三や四では家の事情を考へ得る力はないでせうから、父兄たる者宜しく將來を考ふべきであります。しかしながら父兄のいふのも亦尤至極、學生たる者よくよく其本分を辨へなければなりますまい、世には隨分勉强したいが親が許さない爲泣いてゐる人も多うあります、幸にして入學さして貰ふだけでも何程幸福だか知れませんに、兩親が汗水垂して働いた大事の〳〵お金を湯水の如くに遣ひ、又家の爲に學校へ入つてやつて居るかの樣歸宅しても少しも家の手傳をしないとは何たる心得違ひでせう、尙學費の爲の金錢ならば縱令少々位無駄がありましても許すべき所がありますが、柄にもない身の廻りのものに浮身をやつすに至つては、お話になりません、皆が皆迄さうとは限りませんが、どうも大勢はかく向ひつゝある樣です。なかなか人一人女學校を卒業さすのは容易な事ぢやありませんから親の苦勞も考へてせめては在學時代に衣服、髮等の費用をはぶいて專心に勉强をし、餘暇には家事の手傳を充分にせられて、女學生たるの價値ある樣して頂きたいと存じます。

立派なお說です、此心得あつてこそ女學生たる本分は盡くされるのです、名流婦人などのまはり遠い論より、此無名の一婦人の女學生論の方が何んなに適切かしれません(評)

選者又曰く、本號は近來になく論文欄が振ひました、振はぬ〳〵と言つて居りましたけれど、本號の如く以上の四篇は勿論、以下四五篇とも皆、間隙のない好い論文です、此調子で進んで行つたら、屹度本欄の特色は表はれて來るでせう、皆さんも進んで考へて下さい(評)

○活動寫眞に就て

下谷 佐藤幸子

活動寫眞、自分は此語をきく度に、一種なんとも云へない厭やな感じがする、けれども自分だとて始めから活動寫眞に趣味を持たない事はない、今から七八年も前よく本鄉座や、錦輝館で盛んに廣告して廻つた頃は姉や弟など〻、變り目每に出かけた事も覺えて居る。そして西洋の妖怪屋敷や罪のない子供のいたづら、或は荒浪よせる濱邊の景など見て喜んで居た、その頃は時間の制限と、觀覽料などの關係からか、比較的に下層社會の人は居ないやうであつた。夫が三年計り前に錦輝館で始めて團十郎の紅葉狩を、大薩摩入りで見せたのが、非常に人氣にかなつて、日延迄したけれど、夫はもう故人になつた團十郎の、再び舞臺に現はれる

からこそ、活動寫眞の眞價であるのに、夫を眞似して淺草の電氣館や、外二三で盛んに芝居物をやり始めた、曰く乳兄弟、曰く金色夜叉、夫等は未だしも忠臣藏夜討、或は梅川忠兵衛、丸橋忠彌と、電車内の廣告を見ても、活動寫眞か芝居の廣告か譯がわからない。其上三味線は勿論、聲色迄入れる、そして僅かな觀覽料で時間の制限がないので、忽ち暇のない勞働者や、趣味の低い人達の嗜好にかなひ、晝夜大入大繁昌の有樣、夫も名優の寫眞なら未だしも安芝居の名もない俳優の演じたのを喜んで見て居る人達の氣が知れない。況してや暗いのを幸に色魔が横行して、名刺を袖へ入れるとか、尾行するとか、新聞にも珍らしくない、夫を知つて行く女は誘惑を求むるやうなものである。淫賣婦とかに間違へらるゝも無理はない、否白粉を塗つて盛裝して活動寫眞なぞに行く女に品性の高い者はないと云つても敢て過言ではあるまいと思ふ。自分はもう絶對に活動寫眞は見たくない、芝居が見たければ、劇場へ行く、明るい處ならば品性を侵されるやうな事はない、されば心ある親は其子女に活動寫眞へ友達同志で行く事を禁じた家さへある、妾は活動寫眞で見た芝居を喜んで話して居る人を見ると、寧ろ滑稽だと思ふ。そして活動寫眞館の傍を歩るくのも不快である、だから淺草公園なんか絶對に近よらない、自分ながら妙に反抗心の強い頑固な女だと思ふと可笑しくなるけれども、自分は自分だけの品性を永久に保つ積りである。

活動寫眞が時好に投じようとして墮落してゆくことも、見物人の不したらも仰せの通りです、併し現に大流行を極めてゐるのも事實です、此論は餘りむきになつて反抗してゐるから、活動寫眞熱愛者には反感を抱かせるかも知れません、更に透徹した説を多くの人に聞きたいものです（評）

○「岡山の婦人」を讀みて

大阪　杉山花枝

下枝子樣は何處の御方だか存じませんが、先月發行の『地方の婦人』の中岡山の女と云ふ君の御作を拜しました、御言葉の通り中國女は落ち損なつた洗ひ髮の樣でせう、陰險でせう、何を云ふにも都會の御方々の目から御覽に成つたら、山の中、草の間の女ですもの、つまりませんわ、けど下枝樣の御國はどんなに御缺點の無い人ばかりか存じませんが、餘りあれでは御言葉が極端では御座いますまいかと私は思ひます、私の故郷が岡山だからとてそれで彼れ此れ云ふのでは有りませんがあんなに缺點ばかし上げられ、そしてそれを尙幾層倍かに惡しざまに云はれますと、其國に住む婦人の大半は君の御文章を見て決していゝ心地は仕ないでせう、私とて其一人です。「地方の婦人」と云ふと地方の特色など有りの儘に語るべきでせうが、あんなに缺點ばかりお上げに成つてそして岡山女、中國女、と一口に仰るのはどうかと私思ひます、下枝樣の御言葉の通りとすれば、岡山女はまるで岩藤か八汐の生れ變り、其れに吝ん坊虛榮を加へて厭やな癖の言葉を使はした樣な女ばかりの樣ですわ、其れは何處の國でも婦人に特色は有りますわ、つまり下枝樣の仰る岡山婦人とは或る極端な女二三人の事なのでせう、二人や三人の女の短所を見出して操

方の婦人を論じなさるはどうでせうネー。

「地方の婦人」中の富山と岡山の女に就いては、異論があるだらうと豫期してをりましたが、果して數篇の駁論が來ました、而し多くは文章を書き熟れない方と見えて言ふ事が徹底しないのです、中に此作は斷片ながらも要領を得てをります(評)

○農業は呑氣でない

熊本縣　水川廣子

都育ちの令孃がたよ、皆さんは定めし、農業は呑氣なものと思召して居られませうが、私どもの職業とします農業は、なか〱呑氣どころの、話ではありません。

じり〱と、骨も溶けよと照り付ける、炎天の下で、汗を流して働くのが苦痛ではありません、肥料桶をかたにするのが不平ではありません。農業には、老練なる經驗と、骨を惜まぬ勞働と、非常なる根氣とがなくては、とても農業を以て生活して行くことは出來ません。凡そ農業を以て一家を經營してゆくには、出來得る限りは、廣く耕作をせねばなりません。

かく廣く作り擴ぐる、農民の心は寸時のゆだんもできません、若し安閑として居らうものなら、たちどころに、田畑は草茫々となりまして、如何に上等の土地でも、忽ち荒地と變じてしまひます。其の他種子蒔などには、餘程注意を要します、若し無經驗であつたなら數反の土地を、無作ですごすことがまゝ生じます。肥料に付いても、餘程注意をせぬと折角の苦心も水の泡に歸することがあります。

又何時の間にか、害蟲が發生しまして、折角豐かにできし作物も常に注意して驅除をせぬと一穗も實らぬと云ふこともあります。

其の間、稻田の水はあるか、粟畑に土龍が入りはせぬか、今年は旱魃が續きはせぬか、永雨が降り續きはせぬかと、空の雲足の早きを仰いでも若しや、暴風が起きはせぬかと、自然相手の農民の胸中いつも戰々兢々たるものであります。

稚氣あれど眞實を語るものです(評)

○葬儀に飮食する惡い習慣

肥前　露子

私は此頃つく〲感じた事が御座います。東京などでは見られませんが、當地方などでは習慣上葬儀の時に、飮食の盛んな事です。村内の人が死ねば、其所謂小字の人には一軒の家から米一升宛を持て、悔みに行かねばならぬ事になてつ居ります。小字と云つても百軒位は大抵御座いますから、其上に親類近隣の人々を加へて、葬式の取り込んで居る時に酒と御飯を出すのは容易の事ではありません、暑い時の炊出し掛の者なぞは中々の困難です。中には人にあてられて病氣になる者も四五人は御座います。又之は遂二三日前の事ですが、村内に火事が御座いました。其は夕方其家の妻君がランプをつけて見て、油が足りぬ樣だからと火のついたまゝのを石油鑵の上に以て行つて油をついだのです。野良歸りの忙がしまぎれとは云ひ乍ら、危險な事では御座いませんか。其内火がぼうつと上つたと見る間に、油つぼに移り、此度は石油鑵に移りて破裂し火のついたまゝの石油がパツと散つたから堪りません。片々は家に付く一方は妻君に付くで、家の人が驚いて妻君の方に掛つてる間にもう家はどん〱燃え出しました。妻君の方も所嫌らはずに燃え付いたのですから、手が燃える足が燃えるといふ騷ぎで、遂に助からず生き乍ら焦熱地獄に葬られて仕舞ひました。田舍の事で近處も遠いものですから私共は其夜は知らずに居た位です。加ふるに其人は姙娠七ケ月であつたさうです。同時に家を燒かれ妻をやかれた其夫なる人の心は何麼にある事でせうか。

其翌日葬式がありましたが、其麽悲酸な出來事の時にでも、悔みに行つた者は酒と御飯は飮食せねば歸らぬのです、惡い習慣と思ひます。家財道具何一つ取出す事は出來ず、又今は百姓には一番米の少ない時で、其もあつた物は皆やかれて了つた家族の食物にさへ差支へる時です、其麽

時にも習慣とは云へ、百人以上の賄をしなければならないのは其人の身に取つて實に氣の毒だと存じます。つく〴〵改めたい事です。最近に感じたまゝに一寸筆を取つて見たので御座います。

如何にもお說は尤もです、田舍では良い習慣でも惡い習慣でも、習慣とさへ云へば是非善惡を辨別せず、重んずる風があります、純朴な風もあるでせうが、進步もしません、殊に葬儀などは地方と都會を論ぜず、根本的に改革する必要があると思ひます（評）

〇白い山と紫の山

大阪市　渡瀬淳子

七十里の銀盤の東に立ち、日入る前の紫色の比良比叡を觀じて、山紫水明とはよく云つたものと、嗟嘆しく暮した私が、やがて富士を仰ぎ、日本アルプスの領に入り、筑波に攀づるに及び、幾度か白い山紫の山と心にうなづいた事で御座いましたでせう。古來、白い山のモデルとして富士をあげ、「白扇懸倒東海天」紫の山に筑波をあげます「雪は申さず先づ紫の筑波山」。富士を德高き夫人に譬ふれば、筑波は感じの強き少女とも申せませう。又彼に功成り名遂げて勇退せる高士の俤あれば、此に血湧き肉躍る若武者の慨があります。其形其色其光、等しく此れ神樣の御業には相違ありませんが、何となく白い山は神の境のもの、紫の山は人の間のもの、樣に思はれます、然し其れで以て、白い山はよく人に親しみ、紫の山は人に狎れないのであります。今ふと私は、ジャンヌダークは白い山の樣な人、ナイチンゲールは紫の山の樣な人であると思ひました。但し之は必ずしも前來述べた定義めいたものに據つたわけではありません。富士を始め白い山は其鮮かなスカイラインのためか、多くの注目を集めて居ますが、蒼空より色別けするには餘り力弱い紫の山は稀に讃美者を持つてる位であります。唯ラスキンが、紫菫藍等を山の特色となし、一般の景象が山あるが爲に變化あるは、實に此等の彩色を有する山岳を背景に負へる時なりと論じ、純紫色は山中にありて始めて之を觀ると斷ぜるは、會心の事であります、實に濃く紫を沈澱むだ山は活きたる山であります、熱情詩人夜雨先生を生んだ紫の筑波山、私は白い山と共に紫の山を讃美する人の多からん事を願ひます。古往幾千萬載、白い山と紫の山と此物の兩方面を啓示するが如く、沈默の雄辯を振つて居ます。哲學者は宜しく白い山を仰いで思索すべく、詩人は紫の山を望んで詠嘆すべきであります。又神洲の強き男子には白い山の意志あり、弱き女子には紫の山の情緒ありたいものであると思ひます。

論文らしい論文とでも言ひませうか、少し文字に囚はれた嫌ひもありますが、白い山と紫の山とに區別したところが面白いと思ひました（評）

〇かうもり傘の色

伯耆　新田文子

妾は、或る日弟と二人道を歩いて居ました。澤山な女は種々な着物や、帶をして居ると同時に、又種々雜多な、絹日傘に日をよけて、歩んでおるのです。で、一寸絹日傘の色につき、思ひつきましたから、左に書いて見ませう。

コバルト。これは上品で、しかもハイカツて居るので、妾ら田舍ものから見ると、いかにも、都風に思へるんです。そして、照り輝く、强い光線に最も配合が好いと思ひます。さして居る人の顏の色迄好く見え、心地よく思はれます。

赤色。　これはほんとに、可愛く見えます。十二三から、十四五位な、ふつくらとした、肉附の好い、少女の赤い絹日傘に、日をよけて、徐かな足どりで、歩んで居る樣などは、はなやかな、繪か或は、詩にでも現したい樣です。

ねずみ。　見るから、沈着な氣高い感にうたれます。然し上品な、しと

やかな丸髷姿の、奥樣方のさして居らつしやるのを、いふのです。之れに反して小さい根下りの、銀杏返しの、どこかの茶店のお內儀さんなどならば、粋に見えます。

うすぶどう。　妾は、これを見ると直ぐ小說の浪さんを、思ふのです。浪さんは、屹度此の色の樣な姿だつたと、想像して居ます。とにかく、ゆかしい、弱々しい、なつかしい、色だと思ひます。

まだ澤山ありますが、今日はこれだけで……。

一寸思ひつきでした（評）

○九月號を讀みて

齊藤梅子

表紙は例によりて平凡ですね。本欄に移つて新らしき女に就て——は新らしい面白さうなお話でしたが、梗概だけ伺つたのでは面白い芝居の筋だけきかされる樣なもので、猶本文が讀みたくなるばかりでした、次に對話別れませう——は終りの方の無關係、無關係、無窮の會はざる進路のあたり面白うございました、醒川樣の强者に對する同情——よく私たちの心の中を知つていらつしやるには前々號でしたかの新女性立脚地で驚きました、こんどのお話も私共には實に有益なお話でした、この先生のお話伺ふ毎に眞に悟る所あるやうな氣がします。

投書欄では小說おちゑ——はおちゑが不安で〳〵日毎に闇から闇へ追はれて行くといふやうな心持ちがよく出てゐないやうに思はれますが、おさよは秋聲の小說をよむ氣がしました詩十八歲の春に愬へる——華やかな若い少女の詩とはどうしても讀めません、模倣とならば實に巧なる模倣とたゞ感じ入りました。散文お金さんお銀さんは双子からの感じが平凡ですね、今少し深酷でありたいと思ひますね、論文と書簡文はいつもながらあまり振はないやうでした、中で戸隱よりがなつかしい感じのする文でした。



夏の海　青森縣　稻垣みち

○本誌小說批評（九月號）

久蔦

○おちゑ——小笠原ゆり子樣。おちゑといふ女が血統病を恐れて鬱ぎ込む、といふのであるが、成程表面にのみ流れた情は充分といへぬが、大切の底に流るべきである深みがない。けれども此の作者は『馴れた人』といふ風なことを思はせられる。作中母の言葉に「馬鹿ア、またそんな事、おめへ心配してるだが、なぜさう心配性に生れたゞかなあ」といふのがあるが、これで母親が生かされてゐる、おちゑの心理はあまりに作者が立入り過ぎたゝめかゴテ〳〵してゐる樣に思ふ。

○お小夜――妙子様。興奮してザツと喋舌つて了つた様に思へる。然しお小夜の個性は前のおちゑよりも現れてゐる。ところ〲鋭い閃がある。
○山の家――草葉の露様。好短篇といへるが、作者がもう少し客觀されたならばと思ふ。けれども佳作で前の三篇よりは秀れて居るかも知れない。
○狸！――梅子様。些細の事にオド〲する少女がよく描き出されてゐる。佳什。
○小森さん――流水女様。書き足らぬ節が多いが、これを以て女學生の一面を伺ふことも出來る。惡い作とはいへない。
○梅雨――ＳＨ女様。お民もおりうも出てゐない。

○漫録（其二）

白光女

先生を訪ふた折、「貴女の方では平常女は何をして居ますか、まあ内職に」といふ意味の問ひを受けました。お恥しい話しですが私の地方で、一家を持つてる女の職業としては皆無といつて宜しいのです。比較的下流で子供でも少ないものは、機織とか製絲會社へ通ふとか、ハンカチ縫バテン位のもの。娘子供もさうですが、中以上になると遊んで居るといつてよろしいでせう。土地の富まないのも無理ではありません。女子の職業といふ事も隨分勢を上げて來ましたが、内部に入つてみれば到底一般に普及されて居るとは云はれません。家政や何かの傍、何とか生產力を作る工夫を講じたいものです。

○

知人〇〇子様は某村の小學校に教鞭をとつて居られるのですが、其の村の人の宅へ來ての話しに「貴女〇〇の友達ですつてが、あの人は學校の成績はどうでしたか」はまだしも「あんなぶすつたらありやしない、こつちで言葉を掛けたつて知らん顔してゐる」と、これは青年なのですから大方戯謔でもいつたのでせう。〇〇も返事をしなかつたでせう。が先づ大半の人はこんなものです。他の友人でやはり小學校へ出てゐる者の話しによると、此方から言葉をかけないと何とかかとか批評するのださうです。瘦せても枯れても國民教育者ではありませんか。自分達の子供は誰れに人の道を教へられるのでせうか。まるで下女かなどを置いたやうな心持ちで居られては、國民教育も危いものです。誠に嘆かはしいことでございます。

○

「女學生の兄様」といふ言葉があります。一寸の知己でも何でも青年でさへあれば兄様といふのださうです。女子開放の、新しい女のといつても、まだ〲女はかうした幼稚な道を歩いて居るのですから、前途遠いことでせう。

○八月號批評

淡路亂菊

口繪寫眞中名所、井上様寄送のがよい、あの鐵梯子から降りると、夏尚寒からうと思はれます、七月一ぱいを利用して奥羽地方から北海に旅行なさつた貞子様の境遇がお羨ましい――本欄、人間一生の身體の變化、から云ふ醫學上の記事を屢々乘せて頂きたい、旅行心得八ケ條は最近色々の雜誌で度々拜見致しました、美を愛する心、花の美に心迷ひ輕い乍ら罪を作るのは惡い事ですが世には有がちの事、而し此一文を讀んだ吾々は注意致しませうね！。

河井先生の水平線、を拜讀してから心得て居升が稍もすれば感情に傾いてなりません、婦人旅行談、玄海灘上の產婆が最も事柄が珍らしくつてよい、產月の姙婦が旅行するのも珍らしい、小說中では入賞の分よりも賞外の手紙が女性としての氣質がよく露れて居るから私はこんなのが好きで御座います。

散文天賞感服の外何とも申様を知りません、人賞白無垢、慈母の惠みを文につゞつたもの――お揃ひで寫眞をお撮りになつたら女子文壇社へ一葉寄送なさつたら宜しいでせう、日記天賞馬の歩みぶりに品が有とは初耳で御座い升、磨志緒様のは何だか少し嫌味がある、御免なさい

書簡文

編輯局選



○都の友に（地賞）

埼玉縣　ほ す ゝ き

殘る暑さも雨に流されて、昨日今日はめつきりと秋めいて參りました。殊に今朝程のお涼しさ、母も私も浴衣に綿入羽織といふ仕末ですの。今日は久し振に染さんのお墓詣を致しました。三年の月日はまるで夢ですわねー、旅のみ空で亡くなられた、おいとしさは、命日の今日にも誰訪ふ人はないのですもの。お父樣も朝鮮へ入らしつたといふお噂は耳にしましたが、其後さつぱり音沙汰はございません。「せめて御同胞のお一人も入らしたら」つて母とさう申して泣きましたのよ。去年二人して植ゑて上げた黄蜀葵の花が、勢なげに只一輪雨にぬれてしよんぼりと立つて居りました。「なつかしいわ私此花を見ると死だお姉樣に逢ふ樣な氣がしてよ」つて恍惚と涙ぐむだあの瞳……紺蛇の目の傘がしなやかな肩に支へられて、ぐつたりとうなだれたあのお姿。私はあの時あの美しい花の精がぬけ出たのかと思ひましたわ。野畑の隅に自然の姿を愛でられたあの花が、今日は昔の面影もない、いたましい佳人の墓を守つてよく來てくれたと云ひ顏に、稀に訪ねた私をなつかしむかの樣に、其ぐつたりとしほれた花片から涙の樣な雫をホロリと落しました。それを見ると、もう胸が一ぱいになつて、私しみ〴〵と泣きました。あの時の三人が、僅三年の間にかうも變つてしまはうとは夢にも思ひませんでした。義理ある母樣の御手に氣を兼ねつゝ生ひ立つた染さんの短い十五年の生涯も、いたましいけれど、一人の母のいけにへとなつた私の之から……之れからの生涯はまー何と長い事でございませう。云ふまいと思ひつゝもつひねー、けれどこんな愚痴をおきかせ申すも貴女許よ。秋風立ち初めた都の御消息どうぞ御もらし下さいな。幸うすい故郷の二人に引かへて、一人の君の上に幸あれかしと朝夕祈つて居ります。

態とらしい技巧の跡の明らかに見えるのはイヤだが、一體にシンミりした情趣がある。モ少し突つ込んで深刻に書いたらと思ふ。これだけではどうも物足りない。

○弟に（入賞）

西多摩　三ヶ島葭子

一昨日の今頃はちやうどあの川畔を歩いてゐたのね！風のひどい日で時々ばら〳〵雨がやつてきたり、幾度も幾度も虹が出たり、たまたまめぐり逢ふのたど思つて、もうちつと天も落ちついてゐてくれればよかつたのに、何も話したやうな氣がしないでしかたがないのでもう大抵お忘れになるだらうと思つた〇〇もう見つけて送つて下さつたのかと只今あなたなればこそと思つてつく〴〵感謝してをりますよ、あの晩清ちやんが兄さんも歸つたから姉さんも歸つたらうつて一ねむりして起きた時悲しさうに床の上にちやんと座つてねぼけてをかしかつたのよ、可哀さうに其夢の通り昨日は又私の出かけるのをつまらないなあと母様のお膝によりかゝつて見てゐたのがいぢらしくつて五つやそこらの時から離別の味など覺えさせて可哀さうね！今年の父様のお年の寄りやうどうお思ひ？、末子に生れたものは思へば心細いのね！知らずに居るけれど。九月になつたと思つたら急に心細くなつてつまらぬことを云つてすみません、あんまりつく〴〵ぼうしが鳴くので昔あなたと紙袋でとつたことを思ひ出したからよ、今は午後三時、この手紙がたつた今屆くものならよいけれど、忙がしくつて直に開くことも出來ない時にいきましたらごめん下さい、さよなら。

中々おちついて書けて居る。態とらしく無暗に泣かないのがいゝ。但し「五つやそこらから離別の味」は少々大仰過ぎる。

【秀逸】

○大島より

一條光子

汽船の來る度に多くもない客は二人三人と減つて、此島は、ますます寂しくなりました。其上毎日海が荒れて、郵便船も汽船も影さへ見せません。此方から出すはがきや手紙も郵便局のポストにさへ入れゝば二日か三日目には東京に屆くものゝやうに思ひますが、實は一週間でも二週間でも船の來る迄はおなじポストの中にたまつて居るのですもの、考へると・ほんとに悲しくなります。まるで波に守られて居る囚人のやうなもので、私も此暴風がやむ迄は歸る事が出來ません。白い泡をたてゝ、無遠慮によせて來る波を見ると、嫌らしくなります。島のあんこう（娘）等は私の顏を見る度に（姉さん何時でざらしやるだい、學校がおそくなるだらうに、さぞ心配だらうなー）等と云つて私のいらいらするのに同情してくれます。もう、カンナも百合も散つて今は心もさびれて來ました。波がザブン、ザブンと聞えるたびに、東京がだんだん遠くなつて行く

やうな氣がいたします。今は唯不愉快な汽船の笛を待ち倦んで居ります。――九月四日――

うら淋しい悲みの心持がよく書けて居る、全部的にも、一部的にもよく出來て居ると思ふ。

○雨の日に

茨城　川和田初子

美香さん。又秋が來ましたのネ。やつぱり秋は寂寥しいわ。別けてこんな山の中…此の靜けさ、何といふ淋しさでせう。今しも細い細い雨は夢のやうな籬の晝顔の花に注いでゐます。じーつとみつめて居ます私の心は暗く、ホロホロと譯もわからぬ涙が滴れます。此麼日には、只何となく貴女がなつかしくてなりません。どうかそつと夢の樣に來て、夢のやうに歸つて下さい。

しまひの一句がよく利いて居る。平凡な句ではあるが美しい句だ。散文詩をよむ樣だ。

○山の姉さまに

木がくれ

私、今カンナの花を寫生して居ます、曇つて居ますから影がはつきりしないで、出來上りが見榮えないだらうと、少し惜しい氣とお腹の逆立ちとで、いら〳〵します。御手紙有りがたう、お返事を早くかいて、わだかまつたうきばらしをしようと思ひ乍ら、いろんなことに捕へられておそくなりました、昨夜も蟲が大變なく薄明な月夜の情調にチヤームされて、暫く無我の境に居ましたが、洋紙をのべてペンを取つて、姉さまの所へおたよりしようとすると、○○樓から甲高い三味線の音と、押へることを知らない男の太い聲が手にとるやうに、この窓に流れ込むのです、折々女の引きしまつた聲も交つて居ました、窓から首をつき出したらあだつぽい藝者の髪は丸見えなんです、強い電燈の光りの下に、制することを知らない肉慾の叫びを上げて居る男と、デリケートなスタイルの併し傷ついて居る女がはね廻つて居るんでせう、外から見たら、その空氣は如何にもはれやかで、そゝられるやうな感じがします、でも、ひゞきだけは聞いて覗いては見ませんでした、憶病な子ですよ私…私、藝者つて云ふものは割合に女として充實した生活がして行けるだらうと思はれます、あ…姉さま、それ顔をしかめてらつしやる、此の葉は仕樣が無いつて…まあ、怒らないで頂戴、自分で自分を叱るのに、つかれて〳〵生きた心地もありませんのですもの、自惚れ無き者は幸ならず、自尊心、自信無きものは猶幸ならざるなり…全く私さうと思ひます。

もう色がかわきかけて、ワットマンが怪い涙を現して居ます、これからほんとに背景にかゝりますの、これでおはなしは止めます、すまし込んでいらつしやらずに度々御手紙を下さい、心には只一人の姉さんがあるばかりでございます。

チョイと氣の利いた都會式の書振が氣に入つた。併し藝者の生活が充實して居たり、肉慾の叫びにそゝられたりしては少々閉口だ。「自尊自信なきものは幸なり」こんな事を手紙の中へ麗々しくかき入れることは、月夜の情調と何の交渉があるのだらう。

○月の夜友に

埼玉　白ばら

俊さんのおすきな月がでましたよ、なんて美しい月なのでせう、「世の中に月てふものゝなかりせば……」が胸にむら〱とわいて來ます。あゝ清い月……もし此美しい月がなかつたら、世の中はどんなにさびしいでせう。弱い者の慰安はたれがするでせうか。あゝなんて靜かな夜でせう、涼しい風がスー――ッと稻葉の末を渡つて來て、頰をなでゝ行く心地よさ、十五日の滿月はさやかな光を田の面に浸して、涼しげな稻にあびせてゐます。
あゝ俊さんは今何して……きつと例の御庭の松の下で……共に語りたいわね。俊さん又私例の、考がへると悲しい思ひがひし〱と胸にせまつて來ますの。あゝ私はどうしてこんなに弱い女なのでせう。私の胸の中には暗い冷たい影がひそんでゐてともすれば夕ぐれ一人枯野の末を行く樣な思ひがするのです。弱い私はもうとこしなへに明るい御光に浴する事が出來ないのでせうか。ちつとも御便りして下さいませんのね――御月見してまたこんな事かんがへてしまひましたの。
今宵の感想御洩し下さいな、御待ちして居ります。

例の悲觀病にも困つたものだと禿頭のお爺さんはいふだらう。僕はこんな上つ面の悲觀はちつとも困らない。まア何とでも言つて居るさ。

○病床より從弟へ

三重縣　山崎初子

秀夫さん先達てから私の病氣してる事まさか知らずに居るとは云はれますまいね、四五日前叔母樣がいらした時ちやんと見て御いでなすつたもの！、だのに一度も慰問に來ないのね、こんなに病人から催促うけるなんて餘り男らしくもありませんよ、而し私は催促するだけの權利があつてするんですから何と云はれたつてグーの音も出ないでせう！秀さんこの春病だ時はどうでした！さんざ人に世話やかせて置いてさ、私の時は知らぬ顏なんて少し虫がよすぎやしない事！この手紙讀み次第羊羹の三四本も持つて御見舞に參上しなさい、と云ふ處ですが實は胃腸がカタッテルんですから食べられないの、でね食物以外のもの、本がほしいのよ文學に關するのを幾冊でもかまはないから持つて來て頂戴、多い程いゝの、其の代り私の讀みがらも大分貯つてますから貸して上げますよ、でもね秀さんの御志次第で鷄卵を二三十個持つて來て下すつても迷惑じやないわ、ホヽヽお品のいゝ笑ひ方でせう、病氣の故なの、之を讀んで何だ胃腸か、食しん坊のなれの果なんか云つたら承知しませんよ、憚ながら秀さんの樣な一夜づくりの急腸なんか云ふ其んな下品なのとは少々質が違ふのですからね、じや確り賴みましたよ、毎日々々天井と額と軸とこれにやもう眼も倦々しましたからね、どうぞ、之が本音なのよ、今度の永病ひには私眞實困つてるの、いつもより樣子が違ふので心配でたまらないわ、では屹度ね、さよなら。

なか〱シッカリ書けて居ます、病氣だと云つて居てこれ位の元氣があれば、もう本復は通り越して居る。秀さんはイッそ貴女の前では、小さくなつて慄へてるでせう、かあいさうに。

○すつぱぬき

函館　清子

御姉樣御手紙ありがたうございました。何か珍らしいことを書いてよこすやうにとの仰せですが、今のところ何もございません。けれども一寸をかしいことがございますよ、昨日宅へ八卦やが參りまして、皆のを見ました。千鶴樣などは肥つて御出でなさるからようございますが、やせておまけにあれ性の私、手を出すときには少々はづかしかつたの、あたるも八卦あたらぬも八卦といひますが、昨日ばかりは不思議とあたりました。千鶴樣の手をみて「今緣談が掛つてゐますね」といひましたの、千

鶴様は赤くなつてね、私が「ハイあります」といふたら、いやといふほどひねりました。八卦やは「方位も相性も萬事よい、なるべく今月中に式をあげるやう」にっていひましたの。八卦やがかへつてから千鶴様が「今月中なんてそんなに急なら御斷りするわ」ですと、心の中の嬉しさは私でさへも知つてゐるのに、よほどそんなら御斷りなさいなといふてやらうかと思ひました。そして「でもね清さん、よくもわるくもみてもらつて安心してよ」だつて、そのくせ惡いとでもいはれたら青くなるでせうにね、をかしいのね。あまり千鶴様のことばかりすつぱぬいて電信でもつたはるとこまりますから、これでやめます。私のは御教へ申すやうなこともありませんから、これで失禮いたします。

もう千鶴さんから電信がかかりました、そして、清子さんは御自分の事を棚にあげて、人の事ばかりいふのよ、と言つて來ました、清子さんお目出度う。

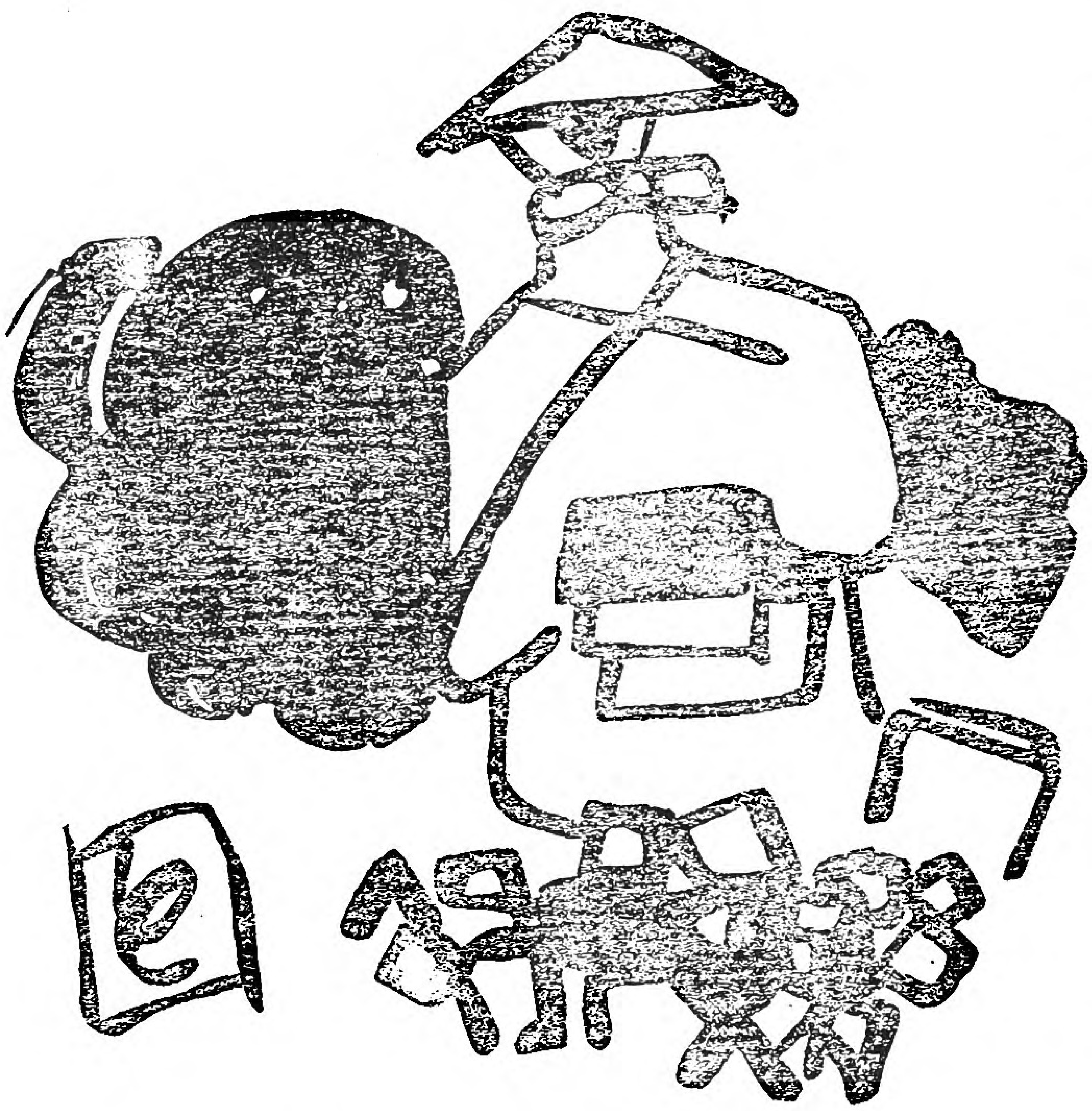
○濱より都の兄様に

香野子

東京は暑いでせう、今日は何度、普通の時でさへ暑がり坊の兄様は此の暑さでは、定めしゆでたこの化物然として苦んで居らつしやるでせう。誠にお氣の毒様、こちらへいらつしやいと云ふにきかぬ故早速罰が當たのよ。ホヽ此處は實によい處よ、三方は山で前が波靜かなる伊豆の海いゝ山の名、アイドントノーよ。私達は前の山だの後のはげ山だのと呼んでるの、朝など後の山の中腹から白雲がわき出て、フワ〳〵中空に浮いて行くのは、何とも形容の言葉もありません。兄様私ね泳が上手に成ましてよ、今も光子と競爭したの、えゝ勝は無論私、光子は敗けて大不平、駄々をこねて今姉様を困らしてる最中。姉様と申せばね、姉様は駄目よ何がつて泳が。私など一日に五度も入るのに姉様はやつと五日目に一度、それも私に攻られてシブシブなのよ、やれ胸が痛いの何のつてからうそ、皆色がやけるのがこわいからよ。困つたものね、兄様しかつて頂戴。どうしても旦那様のでなくては駄目。私のなどは天から馬耳東風「よくつてよ」なんですもの、旦那様のおこゞとが最もこわいのよホヽ兄様この繪は兄様の何かさんが書いたのよ、荒い縞の海水服着てござるは誰、あてゝごらんなさい

それはかく申すかの子にて候よ。ホヽさよなら。

諷刺の力に富んだ才筆といふと褒めることになるが、小姑は鬼千疋



茶摘女　古河町　小堀としこ

と昔から云つてある。嫁さんたるも亦辛い哉、あゝ。

○従姉の道さんへ

相模　告天子女

道さん、秋海棠が咲きました、薄桃色に、貝細工見たいな可愛い花が、今朝から泣いてる樣に降りそゝぐ秋雨に彼のまるい大きな葉が、花が、雨を浴びて緑も紅も一としほ濃艶に、美くしさつたら、お好きだと仰有つた貴女にお眼にかけたい、今ごろは、小石川の伯母さんのお宅で、お裁縫！、お嫁入りの衣服が一枚〳〵ふえて、二つ目の簞笥が最ういつぱいね、そうでせう、私、私はねあの秋海棠の澤山植ゑられてある離れの丸窓、あの障子の内で終日お琴の稽古よ、兄さんの惡口つたら、頭痛がするつて、苦情がでゝ居るの、今、今はね其の窓に頰杖ついて、雨を含んだ秋海棠の花を恍惚眺めて、貴女と去年の今頃此の花を活けようと大騷ぎした、あの時の事を思ひ起して、懷しくなつて此の手紙をかいたのよ、道さん、見合はすんで？立腹つちや嫌！、お返事頂戴な――。

お嫁入、二つ目の簞笥、見合、生命はないが、美しい花やかな文字だこんな手紙をかいて居る中は、天下泰平だ。

○千代樣に

伊豫　躑躅

千代樣貴女と私とは大變仲よしですねそれに一月もお便りも何もありません私も惡いけれど貴女もあんまりよそれに一里もはなれないのにねいらして頂戴明日きつとよ未だ肩揚げのとれない女ですもの思ひきりさわがうぢやありませんか。

ガランとしたお寺見た樣なくづれかゝりの大きな家に老人を相手に雨の降る日なんかたまつたものでありません、面白い御話しがたくさんあつてよ貴女の御嫌な例の下女はかはりましたわ私の人格に關するなんておつしやらず御安心していらつして頂戴一寸、ミス〇〇〇〇から端書がきてよ勿論英文よ今日朝から字引と首引きしてもわからぬところがあるのお頭拜借よ、アバヨ。

罪がなくていゝ、そして言ふだけの事が言へて居る。思ひ切騷ぐのは肩揚のとれない女の特權らしく仰やるが、それでは人格とかに關するのぢやありませんか。道理で下女を頻に煙がつてると思つた。

○御返事だけ

備中　小見山春子

新ちやんが毎日何して遊んで居るかつて私知らして上げ樣と思つてたの此間叔母樣のお見舞にいつた時見て歸つたんでせう、昨日わね針金を簞笥のかんに結んで、片端を玩具のノゾキにくゝり、足の上に置き、呼鈴を右手に、おもちやの望遠鏡をレシーバーとして、リンリン若しお母さん一寸來て下さいと、お母樣が何の御用て仰ると、わたしあのお菓子がほしくなりましたよ、早く頼ますさやうならリンリン、可笑くて大笑しました。今日もねこそこそしてましたが、叔母樣の病室に仕掛けあつたつて紐を引いたりゆるめたりすると、團扇が動いて風が來る樣に成つてる。あんな事を不完全ながら造つて居るの、お父樣がお前も馬鹿ぢや無い、樂しみがあるとお笑になつたら、いつか占者が坊ちやんは出世なさると云ひましたものと、眞じめで、それから何日だつたか兵士が慌てずぼんの脫げ掛つてるに氣が付ないで、お尻を出して走つた風ね、あれを毎日眞似て吹きだすの、全くあの時は可笑くてね、さつきパチパチと手を拍く音がするので耳を澄ますと、はゞかりで急いだので、姉さん今日丈どうぞと義さん其つまらなさ相な顏たら、どうして可笑くて叱る事も出來ないで、涙を流して笑ひしました。すべて遊ぶ事がハイカつて居るので、近所の小供なんか來てもぼんやりしてるのだから、合手なしで毎日内でばかりお掃除した方へ廻つてはおもちや箱ひつくり返して全く夫には姉さんも澁い顏が出るの。でね田舍に居たつて一寸も心配はないのよ、姉さんが附いてるのではゝゝ又始まりましたね、だから安神して入らつしやい、書く事が澤山あるけど、長くなると規則があるつてお云ひだから、書き度けども今日はお尋の事だけ、身體を大切にね頼みます。

玩具の望遠鏡を受話機にする位の智惠は、都會の小供にはありうち

の事だ。凡て遊ぶ事がハイカつて居るのは結構だが、それがハヽカりのパチ〳〵の讃辭の樣に見えるから面白い。

○昨日の御禮

淡路　加藤菊子

昨日はわざ〳〵お使を以て逸枝の病症おたづねに預り有難く、わけて、頂きし水蜜お珍らしう逸枝迄もボヽ〳〵と云つて大そう悅んで居ます。病症は耳下線炎と診斷がつきましたからどうぞ御安心下さいませ、然し今に熱が持續して居升が何分にも小供の事、晝の間はガサ〳〵と元氣よく遊び升からとても安靜など守れませんの――それ故か夕方から夜間へかけて熱が高う御座いますので姨樣夜の眼も合さず愛兒のみとりして被在い升、昨夜眞夜中に夢に驚いて醒め升とコツ〳〵と姨樣が氷割る音が致し升の、なぜかしらそれが耳に響き升と止め度なく涙が溢れ升。生れて母の愛を知らぬ私、父の情に何不自由なく暮して居升が只病床に臥した時計りは亡き母が戀しう御座い升、よしえ樣、お母樣を大切にしておあげ遊ばしませ、此世に母程よいものは御座いませんよ。色々申上たい事が御座い升がいづれ近日御邪魔に參上致します、今日は是で失禮――。

手紙らしい手紙である。あんまり感情をおもちやにしない所が却つてよい。

○失意の友より

京橋　葉香

おなつかしいわ、すみ樣定めし、いつもお變りなく千草にすだく虫の音を友となされて月影淸きあの丸窓の下によき詩想ねり給ふ事と存じます私?私は相變らずよ、然し心に受けたきずは……あゝさぞ馬鹿者よとおさけすみなさるでしようが、世の中に私あなたばかりが味方なのよ近ければ、羽根があればとんで行つて、君のおひざ下でこの苦しい胸のうちをおもふ樣申上げたいわ、この頃は毎夜悲しい夢を見てよもすがら悶えて泣いて泣きあかすこと度々よ、察して頂だい。あの心うき立つやよひなかば、君と共に墨堤に遊んだ時の幸とは別人よあの時分が戀しいわ、丁度○○大學のボートレースでしたわね、夢中になつてとう〳〵ハンケチを川中へおとしてしまつて。ほんとにあんな氣にもう一度なつてみたいわ。すみ樣、私は私は、成らぬ戀に泣いて、あたら青春の血のそゝぐあてもなく平凡な一生を終つてしまうの……誰しも幸多かれと祈るのですが自由にならぬが世の常とあきらめましたわ。どうぞこのあはれなる姉を忘れたまはで末永く御交り下さいね。心がみだれて居るのでこの通りの亂れ書き何卒御判讀下さい、さよなら。

人はつまらないと云ふだらう、併し失戀は一面に於ける戀の成功だ美しい戀を我から破つて汚ないものにする結婚、それがどうして目出度いだらう、失戀は祝福すべきもので、悲むべきものでない。

○姉の許へ

金澤市　文子

姉さん水がついたそうですネ、此狹い土地に居ながら少しも知りませんでした、今姉さんからのお使で初めて知り喫驚しましたところ、それでもまあ皆樣御つゝがもなくて御結構でしたね、今朝からこの降りやうでは水が出ねばよいがとは思つて居りました、けれども、私の家へは、つきませんものですから、逐油斷してお見舞もさし上げませず何卒お許し下さい、私丈夫ならば只今とも云はず駈けつけてお手傳いたすんでございますが、何分こんなからだですから上つては却つてお邪魔かと存じまして多吉をさし上げました、少々耳が遠くございますから其おつもりでお使ひ下さればよく働きます。露ちやん太郞さんはどうして居ますか、少さいからだに濕氣はどうかと案じて居ります、何なら二三日水の減るまで私方にお泊りになつたらどうでせう、尙し上草履粗末ですけれども持たせてやりましたから御使ひ下さい、先づは取りあへず、さよなら。

手紙文としては行屆いて書けて居る。惚々する樣な妙趣はないが、これでも立派に用は足りる。



短文　編輯局選

〇洪水の跡（地賞）

長野縣　近藤清子

洪水の跡を留めて、四方は只廣々とした砂の原。見ゆるものは所々に淋しさうに立て居る大欅ばかりだ。何處と無しに洪水の跡の淋しさが滿ちて、西の空はオレンジ色に暈されて、遠い物から靜かに暮れて行く。

評　印象頗る強し

〇立秋の日（人賞）

金澤　むらさき

さあーと云ふ風の音。ばら〱ばらと青桐の葉がかしましく囁いてゆく若き日の思出のやうな、戀からさめた時のやうな臆病さの冷たい弱い日光が、透明な秋の空を透して、地にふりそゝいでゐる。

評　描寫新鮮

【秀逸】

〇かげ

木がくれ

充實した天地が、ゆるんだやうな感じ、冷たくなつた朝、髪結ふのに、井端へ金盥取りに行くと、祖父さんが井の中を腰をかゞめて見つめて居る「何ですか」同時に覗く、昨日大きい鮒を入れたが見えないと云ふ、自分も頭を下げて水底をすかして見た、五分……十分、影すら見せない。祖父さんの長い高僧に似た面影と自分の如何にも丸い白い顔が、はつきり並んで浮んで居る、思はず、微笑した。

評　神機觸發は未だし

〇間引菜

徳島縣　吉田　紫花

近い内に嫁入する事に定つた義さんが裏の小川で間引菜を洗つて歸つてゆく、笊からは水晶の玉すだれの樣な雫が落ちて笊の中には根の眞白な若い間引菜が生き〱とほの暗い夕暗にはねてこぼれる樣、美さんは濡れたきれいな手でソツトおさへて行

く後姿、脊にからんだ襷の綾どりが其刹那ふと女といふ字にチラリと見えた。

評　四邊くらうして紅襷ひとり殘る

○瓦斯燈　　京都　久芳清子

新設された瓦斯燈が今晩から點火する事が出來た、今まで薄暗いランプであつた家々から活氣のある青白い光りか羞明い程街道を照した。時代の思潮におくれたての町も今夜から新しい活動をし初たと云つた樣に大變賑やかであつた、何となく華かな巴里の夜を思はしめた、けれども道行く若い女の顔が青白く光つて物凄かつた。

評　文明の一面は百鬼夜行の圖

○溫い石　　西多摩　葭子

日中の暑さに萎れた草木の葉には秋風が、空には天の川が、涼しく流れて、虫の聲が小波のやうに起る中に立つてゐる自分の身も、冷やかな水に溺れるのではないかと思はれる時ふと腰を下した庭石の生溫さ、私は慄然として立ちあがつた。

評　更に鄕の額に手を加へ見よ

○秋雨　　上毛　S子

秋雨が降る、昔から淋しいと言ふ、どうしてだらう、お米の收穫時で樂しい筈の田舍でさへ此の雨が降ると何となく淋しい。あゝ此麼日、萩や桔梗や女郎花や屋花の根に可愛いゝ蟲の亡骸が幾つ横はる事だらう。

評　その哀調を奏し盡して……

○秋　　安藝國　窓

夏菊がしほれて萩がさいた樣の下でこほろぎが鳴く一種の哀愁を伴ふた風の吹く度にゆらゆら櫻の葉に空しく脱殼は殘つて居るが今日はまだ一度も蟬の聲をきかぬ日はもうお寺の屋根を通りこしたのに……

評　夏も爛熟しつくしぬ

○友　　麻布　草雲雀

「紫は色は褪せますがあなたとの友情は變りはないと思ひますから」と紫で書て友に送つたら。「私はいやよ褪る紫なら私はいやよ動かせない黑で書きます」下さつた私には黑は淋しい出來ることとならつかいたくない。「私は深き友情はあお色に書きます」と折返して送つた。かうして黑とあお色の友情はいつまで流れるでせう。

評　替言すれば丸善インクとチヤムピヲンインクとどちらが褪めないかと云ふ事

○逝く秋　　近江　中川つる子

病に瘦せ衰へし身を、そと起して欄干によれば、しとしとと降る、寂しき秋雨に、小庭の萩ほろほろとちる、あゝ秋は、西を東と定めなき漂浪の身の瘦せ病む姿に、悲しき想を殘して逝くのだ、今や靜かなる連山は、寂々として、暮色に包まれて行く。

評　平凡ながら寂しい感じは出てゐる

○草津溫泉にて　　牛込　平塚白百合

グッタリ勞れた湯上りの身體を横たへて見ると三階四階の旅館計りなのに皆屋根は板葺でその上に石が順序よく並べられてる。違つてゐるのは小學校と役場のとたん計白根の薄雲にかくれた山が雜木山の間から秋の日に赤くそまつて、噴火當時立枯れた木が冷たく麓を灰色に包んでゐる。白根ホテルの方から外人が浴衣掛けてやつてくる。時間湯のベルがチヤランくなり出した。

評　この通りの畵をよく見ます

○こほろぎ　　臺灣　はな子

汽車は今私共母子の悲しいく思ひを乘せて繪の樣な興津の海岸を走るのであります苫屋々々に立ち登る煙の末が淡く霞んで松原は丸で夢の樣ひたくと寄せ來る夕の色！母樣も私も無言

青山で捕へたこほろぎ袂に入れてリボンで結へたのは？

評　はかない人、はかない業。

○秋の夢　松江　清き花

妙なるピアノの音が、とある西洋館から洩れて來る。思はず立どまつた。するとピアノの音ははたとやんでカムイン！お、聞き覺えのある聲しかも懐しい、急いで行かうとずると、誰やら『行つちやいけない』と大きな手で、むんずとばかり手をとらへたむりにふりはらつて行かうとすると、ドンと横ざまにうち倒した、あつ……今のは夢！

評　なかく／＼ハイカラな夢だ、バタが唇についたまゝお睡りしてたんでせう

○絶　交　ときいろ

私ほんとに迷ふてるのだから貴女きめて下さいねあの學校へ行く時毎朝逢ふポッケットを筆挿代用にしてた學校の方ね此頃にいらしてたのでつひお友達となつたら師が惡いんですてだけど私どうしても絶交する勇氣もちませんの。

評　天下の人悉く川島武男のお婆さんのみならんやだ

○庭の松　信濃　よし子

下枝の松と云へば村ではたれ知らぬ人はない位の何年立ちし物とも知れぬ枝ぶりの好い珍らしい老松である。

お母様は此の松を見ては、松の樣な小供があつたらいゝがねえーといつも仰つしやる。私が幼い時遊んだのも此の庭の松の下で池のふなを見ては學校の試驗と云ふて勉强したのも泣たのも戀も空想も詩も女子文壇を讀むのも今松の木にもたれて池のふなを見つめて煩悶するのも皆こなのです。

評　煩悶はよくない、その上やるとその松の木で縊れたりしたら大變だから、冗談はおいて此文一種の情味がある

○月と目　備後　梢　月

春の月はあまき戀に醉ふて居る乙女の目の樣、夏の月は日まだ淺き、花嫁の目の樣、秋の月は嚴格な漢文の先生の目の樣、そしてやさしい暖い母樣の目は、あの寒い／＼冬の月の樣

評　失禮かも知らんが一噱する丈けの價値はある

○蚊　若狹　ＡＢ

輾寢の彼女は突然飛起きて蠟燭に火をつけた、呪ふ樣な目をして見廻してる、氣違の樣に物凄い。すうつと立つたさうして白い襖に飛白の樣に止つて居る蚊を燒き初めた。ぷつ、ぷつ！羽のやけたぐみの樣に赤い蚊の死骸が横たはつて見えた。

評　隨分なる哉

○妾の願ひ　岩代　かつ子

祖母樣常々妾にながしもとをきれいにすればお嫁に行つてから美しい子が出來ると仰有つたから毎日ながしもとをきれいにして居りますが大きくなつて美しい可愛い子が出來ればそれで妾の願はかなひますのよ。

評　好い心掛です

○桐の葉　金澤市　桐の葉

バサリ！桐の葉だ、自分は甘い夢から醒まされました、いつ迄熱い夏なものですかお前の袖にはもう秋風が吹いてるじやないかと、あるものの告げをうけた時すべての恨みを晴らさうがため自分は此の秋を活動してやらうと、生れ變つた其時に心の中の出產屆につけ上げた名がすなはちこの桐の葉でございます。

評　身分登記簿

○運命の絲　麴町　月待草

東から來た運命の絲と、西から來た運命の絲とが此處で結ばれた。其先の行方を胸にたどると二つの絲は險しい峠、深い谷を、離れまいともつれ合つてうねつて行く。常春の國さして……

評　又常暗の國こえて

○石　屋　札幌　佐々原清子

石屋の源作爺は今日もトボ／＼出て行く醤油で煮しめた樣な手拭を頰被りにして道具箱を下げて行つた。仕事場迄來ると、すぐ、裸になつてコツ／＼やり初めた。パラ／＼と飛ぶ石の粉が雪の樣に白い、燒けんばかりに照る日光も厭はず、尙も一心にコツ／＼やつて居る

評　定型五十年、又倦まず

○影　德島　中村玉野女

秋の末の午後の弱い日射がとろとろ／＼と流れさして、小さく咲いたコスモスの影を淡く薄く地上にひいてゐる。黃ばんだ消え入る樣な總ての影が日の動くに從つてゆら／＼搖れる。……動く……ふと見ると立つた私の影も淡い、薄い。全で幽靈の樣だ。「おや——」吃驚してゐる頭の上をキラキラ羽を夕日に光らせて赤蜻蛉が飛んでゐる。

評　黄昏魔國より迫る

○冬の日　千葉縣　石井よし子

それは盲目の子であつた。薄暗い路次を杖に叩いて現はれた彼は右に曲つて私の女學校の門に立た、源氏平家の戰は……、唱歌室より洩るゝ生徒の歌に、見えぬ目を瞬いてあらぬ方を振り仰だ彼は、持たる杖を其小さな双の腕にひしと抱いた。吹く風が寒い。

評　しかしメロディの波は暖かい

○夕がほ　伊勢　露木雅子

何となく寂しい幽愁のたゞよつて居る薄暮に、得もいはれぬ清いかほりを凋闇に放つて、何の恐怖も躊躇もなく、其の眞白な花の面をば、灰色の大空に向けて、思ふまゝに潔く、立派な花が開く！未だうす青の蕾からいかなる聲が洩れるやら、あゝとき齢い花言葉！

評　夕顔の花に恐怖なしと　はいさゝか聞えぬ思ひもあれど

○きのて　仙臺　夕がほ

朱染のお椀の蓋を取るとプンと菌の香がしたあゝ故郷の山の香だ。兄と暮る迄取つて家に入ると母がまああと云ふ。鹽で揉で大根おろし入れた味噌汁にして明いランプの下で食べるのだと思ふとなつかしくて私は胸の中まで染みよと食べる樣にして又嗅いだ。

評　なつかしの味よ香よ、故郷はなつかしい處

○愛國心　朝鮮　酒匂美子

美子是を小さく替へてくれて、兄樣が御仰る、ハイとは云つたものゝ折角日本錢を集めたのに今更出すのは惜しいチヨヽと見てると又催促されたたつて日本錢計りですもの、アハ、大變愛國心が御有りですね、えらいですつて私は何んだかをかしくもあれば、うれしくもあつた。

評　合邦になつてさう云ふ面倒もなくなつた

○說敎　丹後　仲田晶子

坊さんは一生懸命に說敎して居る。お爺さんお婆さんは、わけも解らぬに、南無阿彌陀佛……と數珠をもんで居る。坊さんは「が」といふ口癖がある。之が強く響く度、子供がくすくす笑ふ、十三遍十四遍と數へる、其内には子供は皆蠟燭の焰を見て居る。

評　所詮子供は極樂へは行けさうにもない

○魂　備中　篠原繁子

昔から死んだ多くの人を埋めた墓所、其埋められた多くの人の魂は、暗い地の底へくくと沈んで行つて、果ては、くらくく火の燃えてる所に行く、其時魂は驚いて、一かたまりとなつて力の限り狂ひ出す、あ、其時く地上に地震や、火山が起るのではあるまいか。

評　考證該博にして又奇抜



若き母　千葉縣　片岡幡子

○お兄樣が欲しい　札幌　みどり子

お向ひの浪子さんは何所へいらつしやるにも兄樣と手をひいて、睦ましさうに參ります。私は常に羨ましくてあゝ……兄樣があつたならばやつぱりあの樣に可愛がつて戴けるのに……たゞく欲しいのはお兄樣！兄になつて下さる方がおるなら嬉しいけれども？

評　妹があつたらと云ふ兄さんもあらう

○かへり道　札幌　女郎花

病床の友を訪れての歸り道廣い野道を唱歌等口すさびつゝ來ると傍への大きな家の垣根を洩れて洋琴の音が床しく聞えたはたと立とまつて中をのぞくと色々の花が一杯咲いて居るお庭に向つて美しい人の調べであつた。仰げば早や日が暮れかかつたので其音に合して歩き出した。

評　その稚氣を愛す

○悲しみ　周防　屋根のくさ

私は笑顔はよくしますが至つて口無調法で吾乍ら御挨拶の不行屆には愛想がつきます他家訪問

の折等道から練習して参るのに失敗します、それで居て交際家になりたいと願ふのですもの、あゝ……歸宅後の不安と不愉快と悲しみはとても筆紙のつくす處では御座いません

評　交際家の練習も亦苦しい哉

○窓　　伯耆　佐々木とさ子

秋の日の午下り、町は人通りが一寸杜絶えて淋しい、其の時嗄枯れた聲で義太を語る老爺と、三味線を彈く老婆の二人連れが門際に來た、向ふの雜貨店へ一層聲を張り揚げてはいつたが斷わられて出た、其の二階には坊ちやんと美いちやんが鬼ごつこして騷いでゐた。

評　彼と是とは人が違ふのだ

○落　日　　福井市　岸本てつ子

堤の上を通る浴衣の白が懷しい。川畔の柳が青うゆれて、シスター石鹸の電氣廣告が赤ふ浮いた。西の空はまだ燒けてるが、橋の下には紫色の水が流れて、夕月は透いて光る樣になつた。『オーイ待つて呉れエ』……船は地獄の樣な下流を辷つて行く。

○渦　　岐阜　蔦の葉

岩根に木の葉に生れ出るとはどうしても思はれない大河の水が、電燈點じ船を浮べ、とう〱と下へ〱先をあらそふ如、精米の役にもたつて來た、橋をくゞり岩にしぶきして海へ大きな海へ軍艦の浮ぶ鯨の棲む或處ではやさしい、小さな渦も巻いて。

○灸　　伊豫　躑躅

祖母樣の白い脊中から十二すぢの煙が立昇って輪になつて消て行くお線香持った手をつとつき出すと若い繼母樣の白い細い手と並んだ。私の黒い手がすうと袖にかくれた「繼母樣煙が眼に入ると大變いたいもんですね……」。

○玉蜀黍賣　　札幌　幸坂隆子

雨の降る暮方であつた、高渠の下で年頃三十位の女が、赤兒に乳房をふくませながら、玉蜀黍の燒賣りをして居た、其所へ亭主らしい男、「ああ勞れたそれでも今日は五十錢になつた」と、顋から手拭を取る、女は嬉しさうに笑ひながら一本の玉蜀黍を取つてやつた。

○朝つゆ　　東京　若むらさき

朝まだき紫の雲が薄うく空をはいて夢の樣に淡い月が樫の木の梢にかゝつて居る。白い腕に赤いたすき姉樣かぶりゆるく井戸端にたつたお香代さんの後姿如何にも初々しい、つるべに手をかけるとハラ〱とまきついた蔦露がこぼれて長い袂やフツクラした肩のあたりをぬらす。

○たそがれ　　大阪市　野澤紫水

清水寺の鐘がゴーンとひゞくと、塒に急ぐ烏の四五羽、尾花吹く風身にしむ、中天には櫛の如なお月樣冷やかに、お隣の濵枝樣は子守歌高らかに、久夫樣をすかして居ます、私は木の葉を拂ひつゝ、雁の行方を見護てると、「繁樣郵便です」よと姉樣の聲、「ハイ」と受取る、西の空で修業中の八重樣からの音信。

○野　菊　　三重　峯の花

萩も散つた、朝顔もかれた、淋しい風は訪れて來た、思ひ出多い秋、悲しい秋。ほんとに此頃の月の美しさ、然し見れば見る程悲しい氣がする、秋の日の熟柿に落つる山家哉、ほんとにそうた庭の柿も三つ程になつたこんな花が一面に咲いてゐる、何?

○同　情　　豊前　津田村まさ子

今日も母のお使で、町のお醫者に藥取りに行く寒い雪の夕である。玄關に二三足の下駄。中に古い女ばきの小さい下駄を見て「ア、今日亦彼の娘が御藥貰に……」と思ふと同時、言葉は交した事ないが、彼の可愛さうな運命に同情したくなつた。

○髮　　淺草橋　ひなげし

まあいやだ!赤い裏の鳥打帽、綾のネクタイ、何て樣だらう身の程もわすれて!。「ヤ、しばらく、お蔭樣でやつと卒業しまして」と。けちな眼が金縁から漏れて「あゝ松田さん、みぢめな鬚が生えてねエ」袴を蹴つて、プイと立つてやつた。

○平和の女神　　伯耆　新田文子

お隣りの、嫁さんが、やぶ入りして居た間、姑と、息子とが、始終衝突して、ごた〱して居たが、昨日の晩方美しい若い嫁さんは、歸つて來た。俄かに賑な、笑ひ聲が聞え出した。今朝は若夫婦が、夜のあけない内から勢よく、草刈りに行つた。嫁さんは、平和の女神でせう。…

○ありあけ　　笹ゆき

今朝は、珍らしく夜明の明星を見た、まだランプ消すのは早いと思ったが、夜明方の月の光りを、座敷に流すのも詩的と思つて、八分心のランプに細い息一ッ、ふつー、とかけたらすぐ消えた。

○失戀　遠江　加藤敏子

冷たい涙が、止度もなくこぼれる。けがらはしいわと、生きた爪で手紙をめり〱と引裂いて白い齒でかむ。本の間から寫眞を出して、第二の爪へ掛けようとした時、椽で人の足音、ハッと思つて涙をそつと拭ぐつて寫眞をかくした時するくと障子が開いた。

○柿　熊本　波の花

路傍の柿が大分大きくなつて毎朝二つ三つ落ちる、と子供等は爭て未明から押よせる、雨風の日、いつの間にか大勢よつてあんぐり眺めて居る、飢ゑては澁さも感じないのか皮のまゝかぢり付て居る、勝ち得た者羨しきもの、終日去り得ない。

○早朝　筑後　柴田百枝

唐草模樣の雲は次第に輪廓がくづれてきた、大安寺の塔は夢の樣に靄に包まれたまゝ森を背景に靜かに立つてる、桃の木の蜘蛛の巣が露にぬれて眞白い花のやう、ポトッと芙蓉の蕾んだのが落ちた、と宵から鳴き續けてゐた根本の蟲がハタと鳴き止むだ。

○月　靜岡縣　富永ふみは

「姉ちやん〱、早く來て御覽、大きなお月樣が出てよ」と妹が嬉しげに呼ぶので、私は筆投捨てゝ裏に出た。病上りの母樣も何時になくほゝ笑顔に、見ていらつしやる、「お母樣眞實に艮い月ね」と言ひつゝ置椽に腰掛た。金盃の樣な月は莞爾として、私等を照す。萩の夜露がキラキラと光る。

○雨の夜　琵琶湖　あしの花

雨がしと〱と降つて居る、實に詫びしい晩！秋だ？と云ふ感じを、身にしみながら、夜仕事を仕て居ると、ばざ、ざゝゝ……と、傘の投げ出された音がして急に赤兒の泣き聲がする。「なんだ、こいつめは、うか〱して居るからだ、一晩川へつきはめてやろか」、と毒々しい聲あゝ——やさしかるべき母の聲?。そつとのぞいた。母親の背には何もなかつた。あゝ?雨の夜のかよわき重荷……

○母の言葉　三重　池のふじ浪

度々事業の失敗に兄や姉が失望して居ますと母は御前等二人で自分の可愛子供を育てる樣にして事業にかゝれと云ひましたが私には少しもわかりません子供が有ませんから

○洪水の報知　佐久艮子

大洪水大慘狀なので新聞で見るとも今迄其樣にも思はなかつたのに誌上で多くの知己を得てからはたら神奈川誰々東京の誰々埼玉茨城と知りも・せぬ御顏が目に浮ぶ、又今日の新聞では關西地方中國四國の方が出水との報知、又知らぬ御顏も想像する、そして何物かがひどく胸にこだはつてる樣で、大變働いた後の樣にがつかりした

○糊張　呉市　碓井呉竹

五つになる妹は、手拭を姉さんかむりにして、緋のたすきして糊張のお稽古、折角お母さんの張つて居らつした張板へ、赤い切を張つて暫し見て居たが、やがて林檎の樣な頰へゑくぼを見せて「お母さんこれでよくつて」は罪が無いですね。

○雨の夜　金澤　宮本登美子

雨が降つてゐます、外は眞暗です、今夜も又女子文壇を開きました。あー如何してもわかりません、詩の意義が。讀めば讀むほど何わからない。私には一生この詩が、わからんのでせうかなみだが出てなりません。雨はまだ止まない、水車のきしる音が、時々聞えます、うなる樣に。

○蟲の音　足尾　小山百合子

丸窓の下の叢で虫が鳴き出した、靜寂な秋の夜の空氣に微かな慄ひをおびた其音色、物悲しい心地がしてくる、秋風がガサ〱と笹の葉に渡ると其音がハタと止む、暫時すると又低い微かな聲で鳴き出す、そして次第に高く強くなつて行く。

○夕　京都　森本俊子

弱々しい蟬の聲が、庭の松から聞える、萩の中から紫の煙が夢の樣に上るのを、妾は縁前に凝乎と眺めてゐた、兄樣は今下駄脫ぎ捨てゝ、書院にはいられた處、妾が靜かに歌思ふて居ると涼しい秋の虫が訴へる樣に泣た、書院から淡い光がさして居る。

○秋だ　千葉縣　峰島星華

白く濁つた西風が、咲きおくれた朝顏の花を襲ふ、黃金色の千町田の案山子の弓の先に百舌が鳴く、野と山に、犬が走つて銃聲が響く、白の手拭を冠つた栗採る乙女の、淸らかな唄が聞える、森の中のSさんの宅が見えて來た、最う秋だ。



俳句

内藤鳴雪選

○（天賞）

冷やかな人と呼ばれてそれし秋　秋田　芙美子

○（地賞）

此の山は僧三千の納涼かな　北見　ひで子

○（人賞）

とがむれば花ぬすむ人の返歌して　深川　佐久間貞子

【秀逸】

朝寒の蝶徒らに飛びにけり　神戸　森本豊子
秋の水美しき水の戀あらん　千葉　高山左枝子
若武者の鎧美し月の秋　徳島　あをなみ
我と我を占ふ夕柿落つる　港の女
青蠅の音なく飛びて秋の風　桑名　山崎初子
暑き夜や笛吹いてゐる幮の中　長岡　泰山木
明月や源氏を語る古法師　淀橋　龜井芳枝

朝顔の露ちる垣に犬起ぬ　永川慶子
我ひとりそゞろあるきや草の月　佐渡　美穂子
取出す守刀や春の月　麹町　牧野嵐水
秋風や少女の頰に紅さゝん　濵松　平岩白菊
重き日をつばさに載せて鷺の飛ぶ　流水
涼しさよ何所も同じ夏の人　上毛　世伊子
雨淋し天長節を旅にして　備中　小見山春子
秋草やテニス果てたる線の跡　西茨城　田村波津子
追ひ行けば星となりたる螢かな　近江　都志慶子
山一つ越えて家あり砧打つ　釜山　五月雨女
蟲賣の後追かけて秋の風　三重　池のふし浪
ボート漕ぐ男の子あまたや夏の磯　京都　忘な草
焚きあげた飯めでたさよ今年米　新潟　山本せい
秋の暮順禮唄も聞かばやな　美濃　紫水
人知れず涙は落ちてほとゝぎす　岩代　鈴木千代子
木曾路来て人懐しやほとゝぎす　三島　はる子
名月に帆柱攀る船子かな　安藝　田村繁子
名月の影を碎きて瀬戸の舟　長野縣　宮坂明子
取殘す草の一葉の毛むしかな　千葉縣　宇佐美あい子
池水の輪の廣ごりや秋の雨　臺灣　花子
秋の夜や障子にほそき人の影　遠江　加藤敏子

燈臺の燈火あはし秋の雨　横濱市　米山千代子
寺見えて鐘の音もして秋の朝　丹後　雪子
夏やせの重き布團や小雨降る　福井市　今木豐子
鷄鳴て縫の高き暑さかな　麻布　横谷白雨
琵琶は今妙境に入りて月の萩　阿波　迷草
秋風や都乙女の髪をふく　新潟縣　岩本芳子
月すゞし柳結んで見たりけり　高崎市　岸とも
都なる尼と語りぬ秋の雨　奈良縣　中富よしみ
月乃宴宗匠一人殘りけり　筑前　笹つゆ
月影に容つくろふ男かな　宮城縣　齋藤菊子
欄干に白衣干したり寮の秋　遠江　鈴木一二三
鮎燒いて酒飲む君に與へけり　淺草　夕月子
青き灯のふら〱と消えぬ秋の雨　岐阜　蔦の葉
明月や髯なき人となぶられて　下關市　山田國子
選集に洩れたる歌や夏寒し　三重縣　田中みね子
稲妻やほのかに見えて船の人　靜岡縣　富永ふみほ
秋風や置き所なき大團扇　道場　松露
紫苑咲く隣の庭や虫も鳴く　大阪　高山米子
我犬のくるふ野原や女郎花　備前　佐久間緣女
明月やそむけて通る人の顔　すゝき
秋雨に子養の鳥を逃しけり　京都市　久芳清子
明月もたゞさびしうて旅の秋　遠州　平岩歌子
飛んで出て月を眺むる子供かな　札幌　佐々原清子
口笛に寄り來る犬や朝寒し　芝區　本田蔦里子
冬の雨我戀ふ君は啞なりき　越後　金塚美代子
桐の葉に秋知る夕や鐘遠し　大阪市　野澤繁子
行く秋や何處へ流るゝ古筏　大阪　田野しか子
曉や茄子摘む畑の露涼し　大連　坂本千枝子
松蔭に笛の音ゆかし何人ぞ　羽前　草玉荻
秋風に吹かれて高き柳かな　麻布　吉田あい子
かくれ家の小雨にくるゝ柳かな　岩代　栗村かつ子

蓮の香や椽に干したる緋の袴　大阪　田野靜子
そぼそぼとふる五月雨や塔低し　千住　吉田清子
霜白く夜汽車の人は眠りけり　兵庫　足立春子
名月や宮居の松の露降りて　芝區　三好たけ子
西行の草鞋にかゝれ玉の露　小樽　清田芳枝
一人居の寢ざめや秋の雨の音　備中　篠原繁子
おしまねど今一日も菊の花　下谷　亡き人の子一枝
蠻人の面に殘る暑さかな　茨城縣　喜惠子
僧が洗ふ旅の脚絆や秋の水　越後　藤原法子
筏ながす左右に山の錦して　廣島　後藤壽美枝
橋行けば臥待月は登りけり　長野縣　コスモスの花
身をかこつ大の男や秋の月　丹波　大槻幸子
奉納の幟を書くけり秋日和　伯耆　佐々木とさ子
笛によき平家の君や今朝の秋　日本橋　松岡千代子
吹く風に高う飛ぶなり秋蜻蛉　信濃　岩波むら子
麻刈りて歸る女や二日月　新潟縣　村田けん子
橋くゞる舟と舟とや風薫る　群馬縣　早川男美子
落武者の枯れ野行くなり晝の月　豐後　菅原芳子
芋畑に櫓太皷や秋晴るゝ　新潟市　吉田紫栗
文机に月代したり萩の宿　京都　三宅壽賀子
朝寒の後姿や小傾城　靜岡縣　鈴木けい子
雨晴や水田にさびし月一ツ　四谷　桝﨑佐喜子
灯火の影に去りにけり秋の蚋　和泉　金田文子
朝顔やよべの小雨に色あせて　横濱市　山﨑糸子
間借りして火鉢小さき夜寒かな　岐阜市　牧野米子
薫風やそれ投球拾ふ草の中　越後　三保子
新田の道斜なり蕎麥の花　深川區　津谷末子
名月に臼挽く女歌高し　釜山　今井久子
こほろぎや小窓に人の影法師　宇都宮　松葉子
畑主のそれにも似たる案山子哉　越後　不言子
暮れ果てゝ我宿遠し時鳥　上州　きく子

吾家の動物

(餘興)

○熊の洋行

野の百合

私がまだ十二三の麻布は古川のほとりに住んで居た頃牝熊を一匹飼つて居た、父が北海道から伴れて來た當時は、まだほんの猫程な首に月の環をかけた全身黒毛な目の愛らしい、とんと膝にでも乘せたい樣なのであつた、入れて來た小さな檻から二間四方のに移してやつてからは、それは馴れて可愛いものであつた。常食は麥の煮たのと、牛肉のあらとで、それを何時も持つて行く車夫の和助には、一番能く馴れて居た。和助ならば手を檻へ入れても、頭を撫でても手から直ぐ食させても、少しの害もせず、かへつて嘗たり頭を擦りつけたり、まるで犬の子のやうに戯れて居た。私共はとても怖いので「マチ」(マチと命名けて置ました)の好物な寶來豆や、パンなぞをやりに行ても、遠くで「マチ」と呼んでから、そつと投げてやつて居た、それでもよく馴れては居て、私共が檻の側へ行くと、もう喜んで手を出したり、ちやんと座つて嬉しさうに體をゆすぶつたり、何がな御愛想と思つてか、かけ昇つたり、ぶら下つたり、飛び降りて見たり、飛び上つたり、それは色々の藝當をして見せる、しかし一朝恐つた時の其怖ろしさ、私などは泣きさうになつた事もあつた。もう二歳過ては幾ら可愛くても置ないので惜しいやうでは有つたが、上野の動物園へ寄贈してしまつた。其後も時々行つて見たが、例の愛嬌もの、何時もをかしい藝當で多くの人を引つけて居た私共は其いつでも他の熊よりも人々から喜ばれて居るのが嬉しくて仕樣が無かつた、園の人に賴んでお菓子をやる時「マチ」と呼ぶと、ちやんと覺て居て嬉しさうに飛で來て食べて呉れたそれから半年程經て、隣の檻の皇太子殿下御寄贈の同種の牝熊と結婚して一つ住居に睦まじくして居た。其後また半年、獨逸の動物園へ我國產として寄贈されることゝなり(確か先方の珍らしい動物と交換されたのでした)新郎新婦手をたづさへて赴いた。私共は動物界の幸運兒よと我ことのやうに喜んだ。今でも折にふれ何うして?と思ひ出して居る。(天)

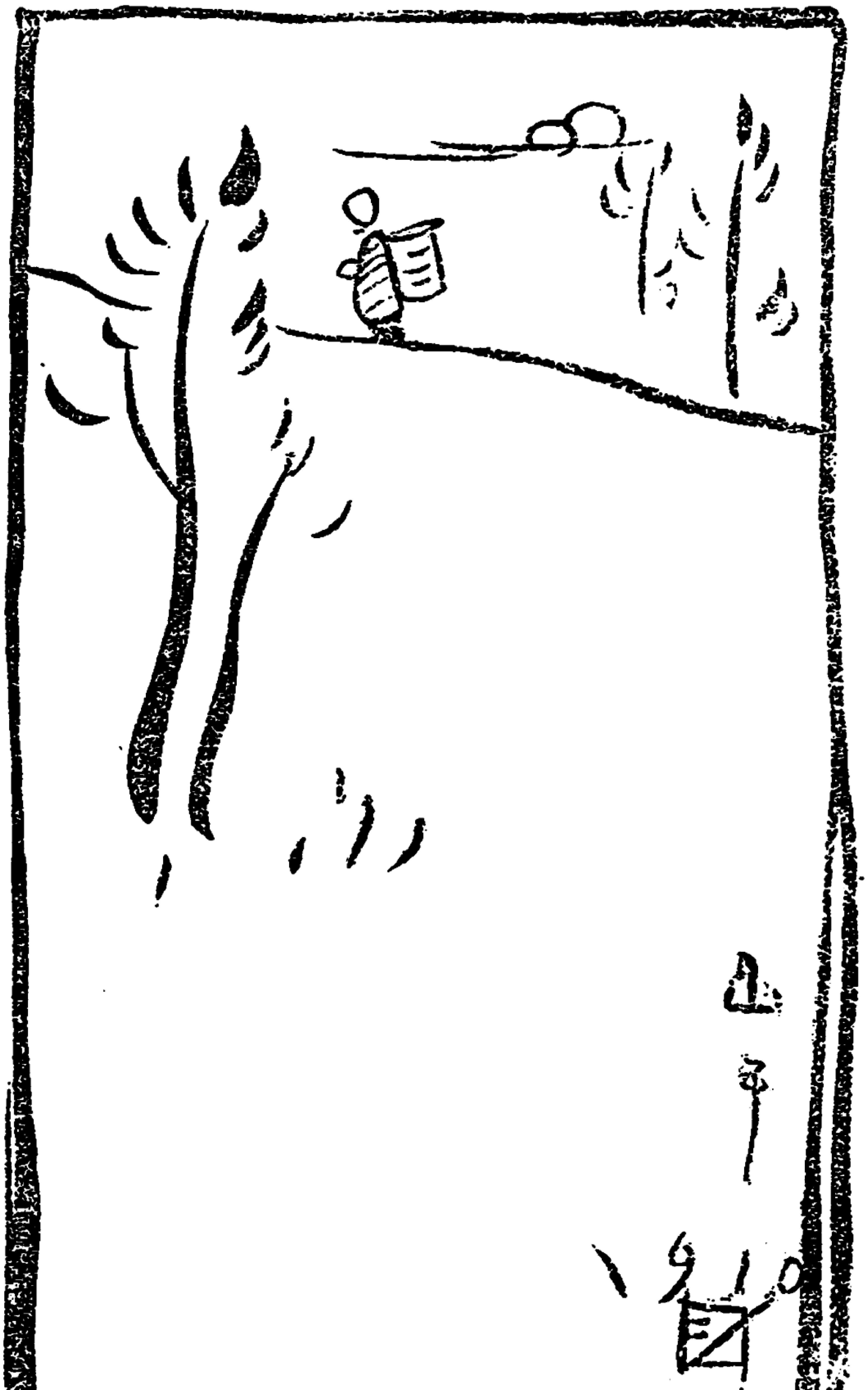
○百羽の鶏

松本市外　吉澤　辰美

「さあちやんは小さいからチヤボ、武さんはけんかが好きだからシヤモ、色の黒い兄様はミノルカ、色の白い姉様は、白色レグホーン、頭の毛の白い父樣は銀色ハンバーク母様は肥えてゐるからコーチンけれど母樣の足にはあんなに毛が生えていないわ」、表の廣庭に百羽餘の鶏の遊んでゐるのを見て、中の妹が鶏舍守の清作とこんな話をして居る。

シシ(犬)は倉の前にキチンとすわつて八方をにらんで居る、物置の陰には、ねずみきらひの猫が、カゼを取たむくゐで、いましめのなわに、つながれて、苦しげにないて居る。

其前には小猫が六つ行儀よくならんで、情ない様な悲しい様な聲して、泣いて居る、可愛さうだけれど、後のため、仕方がない。(地)



山に　本郷　佐藤靜枝

○犬

周防　屋根の草

私が九歳位の時に、宅にチヨロと申す大きな狐色の飼犬が居ました至つて人なつこく尾ばかりふつて居ましたもので、私に大變可愛がられて居ました、處が或日の事、チヨロは學校の控所を長い鏈をひきずりながら、うろついて

居るぢや御座いませんか、見つけた私は大狼狽、四五人の友にかこまれて、漸く暗い〳〵掃除道具入の中へ隱れました、すると間もなくチヨロは近くでほえ出しましてね、何だか男兒等が面白がつていぢめる樣子でせう、暗中で一人はら〳〵してましたら、先生がオイそんな者誰がつれて來たのぢやつて鋭い聲、いよ〳〵たまらず塵拂ひの上へ泣き伏しました、と始業のベルがジヤン〳〵〳〵あゝ絶退絶命一度は戸を開けて出ようとしましたが、人に見られるのが恥しく、また泣き倒れました、處へ先生は笑ひ乍ら、泣く事はないですもう大丈夫、小使に渡しましたからサアおやめなさい、と云つて手をとつて教室へ入れて下さいました、其時の嬉しさと申したら、今に忘れる事が出來ません、然し其犬は毎朝私について行きたがつて、世話がやけますので、遂々人手に渡しましたが半年ならずして犬殺のために命をなくしたと聞きました時には、さすがふびんに堪へませんでした。(人)

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○愛する鳩

北海道　白菊

昨年五月、大掃除の際、本堂へ飛んで來たのは此鳩。一年餘たつた此頃は鳥籠の戸さへとつてやると自由に出たり入つたりする樣になつた。誰の頭でも肩でもかまはずとまつて、座敷でも椽側でも遠慮なく糞をするので之には一番閉口だ、でも母樣や弟は(此鳩は何所へ移る時でもつれて行かなければならない)といふて居る位。ポーポー……と呼ぶとチヨコ〳〵來てあの可愛目してキヨロ〳〵四方りを見廻しながら餌を拾ひ始める、其早い事つたら、凝乎と見て居る私の頸の方がだる〳〵なりさうだが、一向平氣でコツ〳〵やつて居る。私が裁縫をして居ると側へ來て、赤い布でもあるとすぐ啄たり、引張つたりして、恰度小供みたいに戯れてゴゴゴゴゴツンゴゴツンゴツン〳〵と啼くので猶更可愛い——。

○猫と時間

茨城縣　靜花

私の家でも猫を一匹とレグホーン種の鷄とを飼つて置きます。猫の名はタヤと申しまして、鼻の上がポチッと黒く、梅の花瓣の樣になつて居る、可愛いのですの、鼠は毎日三匹位は取ります、又奇體な事には、能く時間を知つてゝ三度の食事とおやつの時には、きつと催促を致します。ですから忙しい時など時間を忘れて居て猫が來たのでやうやう氣の付く樣な事も有ります又能く人の聲を聞き分けてタヤ〳〵と呼びますと、何所に居ても駈けて來て飛びつきます。ほんとに可愛くて頬ずりせずには居られません。又鷄の牝に一匹悧怜なのが居ります、頸の所に黒ホシが有るので、ポチヤと呼んで居りましてそりや良く馴れて居ります。背や頭を撫でても平氣で餌をあさつて居りますし、腰をかければ膝の上に飛び上ります。又他の鷄同志がけんか等すると、きつとポチヤが仲裁致します、それからをかしな事には猫と鷄が大變仲が好いんですの。わけてポチヤは猫と一しよに御飯を戴いたり寢たりしてまるで兄弟の樣です。

○猫

長岡市　秋月すゞ子

友をとふたら友の家の愛らしい猫が私にじやれた、それからきらひだつた猫がほしく成つて妹と一疋ゴゝ叔父に貰つて來た。いそ〳〵としらない家を室中まはつて二疋して馳け合つてる、可愛くて可愛くて仕方がない、さつそく紅ちりめんの切を細そく〳〵けて鈴をつけてくびにつけてやつた、尚は更可愛くてならない、みな樣もかつてごらんなさい。



誌友倶樂部

交際を望む

●●●●●●●●
○遙に太平洋の彼方より　　小學校を中途で止しまして、父の許に渡航いたしましたのは五年の昔になりました、今ではハイ、スクールに通學して居ますが、日本人の學友は一人もなく、毎月着します本誌を友なき異郷の唯一の親友でございます、諸姉樣方の内米國の野菜の種子が御望みならば、六紙の種類はありますから、和服の御寫し繪、又は何品にでも宜しい御交換下さい(米國加州エルモンテ道路郵函一九四、丘貞子)

●●●●●
○クリスマス　　秋も老いて來ます、クリスマスも近づいて來ます、未だ見ざる愛の友よ、皆樣の中でクリスマスに、日曜學校の生徒に、やらせるもので、何か新らしい歌か、暗誦か、朗讀かを御持ちの方は御知らせ下さい、但常磐はあります、新らしいのを、一應お端書を頂きたうございます、(越後岩船郡猿澤小學校内曾爾從子)

●●●●
○面白いお話　　私ね、今年から皆樣のお仲間に交へてもらつたのよ、どうか、此後は永く永く御交際を願ひます、面白いお話でも、あれば御知らせ下さいませ(大和宇智郡宇智村、九谷はるゑ)

●●●●●●
○群馬縣のお方に　　皆樣何いふ譯でせう何雜誌を見ても群馬は、見えませんが群馬の者は記者樣にすかれないのでせうか此歴に嫌はれては仕方がありません皆樣最少ふるつて下さい私は群馬と云と目を丸くして見ます(文香七子)

●●●●
○眞の交際を　　記者樣始め女子文壇誌友諸姉樣此度妾しも誌友に仲間入れさして戴きます故何卒宜しく御導き下さい それから眞の心で眞の姉妹の如に親密なる御交際を何卒御願ひ申ます、妾は不束な者で御座います故左樣御承知の上御交際を願上ます。和歌俳句寫眞繪葉書古雜誌の御交換願上ます、和歌俳句は無論自作の物にてよ、小説も少しは有りますは。(靜岡縣引佐郡都田村新木西鈴木はる子)

●●●●
○妾の悲み　　毎月出る本誌を見るのをこよない樂しみとして居る妾は、九月號が郵便局で紛失してチラとも優しい姿を見ずにしまつたのは、友を失つた樣で悲しくつて堪りません、皆樣の中で九月號をお惠み下さるお方は御座いませんか、風景繪端書(六枚)なりと交換して下さい、そして繪葉書なり玉章なりで、御交際下さる方は是非に願ひます、妾は悲しくつて……。(福島縣田村郡三春町北町百十八橋本ふさ子)

●●●
○田舍から　　おなつかしい皆樣久しくお伺ひも致しませんでしたがお許し下さい。昨年のお正月までは長崎からこの親しい文壇にも時々顔出しては厄介になつて居ましたが、本年の春からこの寂しい田舍の子供のお守役となりましたから已知諸孃舊に倍してお玉章や、繪端書の交換をお願ひ致します(福岡縣八女郡星野尋常高等小學校、持丸武子)

●●●●●●
○御無沙汰のお詫び　　先日來又々病床に臥して只何となく心憂く爲めに誌友の皆樣へ御無沙

決致して居升が何卒御免下さい、わけて東京の田中樣香川縣の白萩樣へはお送りせねばならぬ品が御座い升が全快までお待ちの程願はしう存じ升（淡路、加藤菊子）

○誌友の諸姉樣よ　私は昨年十二月まで本誌の愛讀者でありましたが、昨年の十二月末に家事上の都合で當地に歸りました其の後引續いて愛讀し樣と思つても家に歸ると色々用事があつて遂々皆々樣にも御無沙汰しました今後も相變らず御交際を願ます、皆樣の御健全を祝します。（下野鹽原、佐藤かほ子）

○熱望　前橋のみどり樣、四谷のすゞ子樣暫く御ぶさたいたしました御無事ですか、洪水の時にはお見舞も申上ませんで、さぞ虛偽の女と思召したでせう御ゆるし下さい丁度八月は死ぬやうな煩悶にすごして、今はやはり闇い淋しい胸を抱いて泣いてゐます、寂しい土佐に。一片の端書もさし上げないですみませんけれど、今暫く直接御交際いたしかねますから決して久しい間ではありませんから惡しからずね。若し皆樣の中に東京の方でも、又地方から東京に出てらつしやる方でも、一個の職業に就いておられる眞面目な女の方と、眞面目な御交際を熱望いたします御免し下さる方は誌上で御名御洩し下さいまし御願ひいたします（土佐にて桃の花）

○橫須賀にて　本誌愛讀の諸孃樣よ私はまことに不束ものなれ共何卒御交際を又寫眞やエハガキ、玉章の交換を願ます（橫須賀市逸見八番地、吉岡しづい子）

○古琴お持の方に　本誌愛讀の諸姉上よもしも古琴お持でしたら、おゆづり下さいませんか、お願ひ致します（長崎縣南高來郡島原町一七一、大澤さい子）

○少々異ひます　妾は、少し諸姉樣方と氣質が異なつて居ますけれども、農業に趣味の深い方、田野に出で、立ち働く方、華美な生活をしてない方、悲境に落ち入つて居る不幸の方に、潔いく御交際を願ひます（栃木縣安蘇郡田沼町大字吉水、松島キチ子）

○秀才なお方へ　諸孃樣方の中に文學に趣味持つて居なさるお方お交りを願ひます、私文學を好んで居ますのよ、これから英語を研究したいと思ひますが、どうぞ秀才なお方御導き教へ下さいな、尙誌友の皆樣お捨てなくお交りを願ひます（熊本縣上益城郡大島村高河原町、米村とも子）

○淸國より　皆樣御玉章有がとう、遠方ですのに、內地便が來る度に、誌友の兄姉樣から、エハガキ玉章が、五六通はきつと參るのです、其の中で御返事を忘れた方はどうか御知らせ下さいませ、又今後も、玉章、繪葉書、など御交換下さい。淸國奉天井深內、武內蔦子）

○高女三年　誌友の諸姉樣よ妾は女學校三年に在學致して居りますが玉章や其の他の淸き美くしき御交際を御願ひ致します又自筆エハガキの御交換もして下さいな。（深川區御舟藏前町三十七番地吉原米藏方、望月芳枝）

○文學好きの方　誌友のお姉上樣妾は、前々よりの、愛讀者ですが…？皆樣の內に、文學好きで御いでのお方は、御交際して下さいませんか、繪葉書や、あみ物などが澤山、ありますからお送り致します、（岩代國耶麻郡喜多方町島坂病院內入江駒子）

○留守中　十月一日以後御玉章其の他下さつた御方も澤山ありましたが、私が留守中なくなつたのが、數しれませんの、ネ皆さんおこらないで下さいネ、寫眞御惠み下すつたら、御禮にゑはがきたくさん差上ます（本所區橫川町十九大野方松島あや子）

○不束な者　で御座いますが妾に誌上で淸き交際して下さい繪葉書又は文通の交換を望む（大阪南區北桃谷西阪井義子）

○同意とお禮　改野たけ子川崎みち江子讓誌友會の件同意に付大いにお賛成致ます京都本下君子大阪村中不二子樣御玉章ありがとう前期試驗の爲お返事いたさず何卒以後もよろしく御交り下さい尙誌友の姉上樣御交際被下い（大阪市南區石ケ辻町五二九二竹田樣方、大阪師範生徒辻井信子）

○植物標本　誌友の皆樣あの私は將來のため植物標本を集めて居りますが、御地の植物御手數ながら封筒に入れて、下名の所に送つて下さいませんか、尙草名も御知せ下さるやう願上ます、繪はがきでお禮いたします。（仙臺市東二番町四六、猪狩ゆき子）

○新しい愛讀者　誌友の姉上樣方餘程冷氣を覺えてまゐりました、お變りもありませんか、私事はじめて十月號より愛讀者の一人となりましたが、淋しくくらす田舍で只一人の哀れな身の上です、何卒哀れとお思し召して繪葉書編物玉章の御交換を願ひます私も御禮として當地の名所繪葉書手本にある編物にて御禮致します（和歌山縣那賀郡山崎村大字曾屋、桃井君子）

○大阪より　女子文壇を愛讀なさいますお孃さん、皆々樣よ、不束な妾に御交際して下さいまし、文通、繪葉書の交換たのみます（大阪南地元町二大念佛前咸䊮方、酒井百合子）

○ヴァイオリン　不用に付御ゆづりいたします、但し中古よりは新しき方、御のぞみの御方は左まで申込を（東京本所表町四十四番地、佐藤清野）

○偶感　私ね日本橋から京橋あたりの下町風な、意氣な方と交際したいのよ、佐藤ます子樣私大好けれども、私のやうな者にはおつきあひして下さらないでせう、信州の山田邦枝樣の從妹さん、私知つてますの、よく信州の從姉々々つておつしやるから、だん〳〵きいて見たら、邦枝樣の事なんですの、今は故あつてお家に居らつしやらないのです、邦枝樣、若しこれを御覽になつたら、きつと御心當りがあるでせう、平塚白百合樣も、よく宅の前をお通りになります（牛込、緋鹿の子）

○とても逢はれぬ姉上樣へ　御願申ます漸く覺めて惱めるものゝ爲に飾らぬ淸き御狀賜りたく只管願上ます（東京神田猿樂町二ノ三五昧方、算四子）

○私は先月號から　本誌の愛讀者の一人となりましたどうか誌友の御姉樣御手紙及繪葉書の御交際を願ひますきつと御返事差上ますから（京橋區木挽町一ノ十四三橋幾枝子）

○うれしいこと　なつかしき誌友の皆樣よ私も嬉れしい事にはお交際が出來る樣になつたのよ此後共に御交際を願ひますわ永久にね（新潟市東港町二丁目船木尾花子）

○御姉樣方　私ね只今誠に淋しく暮して居りますから、どうぞ一時的でなく、永久に御交り下さる御優しい御方がありましたら、どうぞ御玉章御めぐみ下さいましね、早速御返事致しますから、濱松に平岩白菊樣九日ごろの本らんにて御芳名拜見致しました どうぞ御住所御知らせ下さいね（鳥取市上町長田神社前岸本八重子）

○京都より　大阪の改野たけ子樣川崎道江樣京都の愛讀者會に御遠方をお出で下さいましてありがたくほんとにうれしう御座いました何分第一回の不都合のかず〳〵もありましたでせうが何卒〳〵これにこりず第二回の時も是非御出で下さいましね―大阪の時はきつとよせていふときますからほんとにおなつかしう御座いますわ要司村さん町田さん濱部さん深く〳〵感謝いたしますわおかげで盛大な美しい會がひらけました私は嬉しう御座いますほんとにたのしいでした何卒ね―第二回もこれにまして盛大なやうに今から祈つて居ります田中千代子樣御あいさつも致しませず失禮致しました何卒惡からず御ゆるし下さいませね、來會下さいました皆樣はほんとに御なつかしう御座いますわ何卒以後もよろしくね（京都三宅壽賀子）

○印版の交換　妾の宅は印版屋であります、貴姉方の内に同業の方が御有りでしたら、印章の印影御交換望みます。（新潟縣南蒲原郡本城寺村新保、大桃實方、千鳥）

○誌友會について　其後誌友の皆々樣には御變りありませんか、當地の誌友會は、年内に開くはずで御座いましたが、編輯に多忙なため、河井先生の御來阪が願へませんから、來春早々開催致す事に致しました、年暮るれば正月が來る、誌友會が來る、皆樣御たのしみ？（大阪、改野竹子、川崎道江）

○紅葉の里　より御願致します、私の家は寫眞店で、風景、美人、山水等が撮山うつして有ます又、名所コロタイプ繪はがきもありますから趣味ある御交換を願ます。（信濃下高井郡往郷村庚、靑木深雪子）

○田舍にて　私は小學生時代から女學校に入つて、二學年生までは、少女世界の讀者でありましたが、ふとした事から、此の本誌を愛讀するやうになりました、ですから諸姉上樣よろしく御交際を願ます（栃木縣安蘇郡佐野町常盤丁高野松子）

○俳句同好の御方に　下手な橫好きとか申されますが、私も其御中間の一人でして、山家育ちの至て見地も狹く、皆樣の御氣に召す樣な、御返事は差上られませんが、御返事丈は必ず致しますから、どうか繪葉書に、御自作もの三句

御書添へ御送りを願ひます、末筆ながら壇友諸孃さんの幸福を祈ります。(野州安蘇郡田沼町吉水四十七、石川甲三郎方、栗花)

記者と讀者

○横瀨先生にお尋ね申します。毎月日記欄に山車とか釣鯛とかいつて出されてありますのは、やはり或一句だけ書いて、投書するのでございますか。一寸誌友くらぶでお知らせ下さいませ(鳥取櫻草)横瀨先生に代つてお答いたします、あれは皆さん方の投稿の中から、選者の眼に着いた一語乃至一句、一節を拔いて、選者のそれに伴つた聯想又は批評を加へたものです(記者)○私は九月號の誌友倶樂部でUM樣が四箇年間愛讀の上初めて御投稿なさいました由を拜見致しまして私もUM樣と同じ境遇ですものから投稿する氣になつたので御座います勿論文章も字も下手ですけどこれから時々投書して上手になるつもりで御座いますから宜しう御願ひ申し上げます(なでし子)拜承、然う云ふ方もございませう、強ち年齡にばかりよりませんが、いろ〳〵の事情で年長けてから筆に親しむ方も澤山あるやうです(記者)○名古屋の禎子さんに、森川葵村氏はちやき〳〵の東京子です、何かのお思ひちがひでせう(記者)○東宮殿下行啓につき、母から一圓を戴いた、此一圓で行啓紀念として書籍を求めたいと思ふのですが、若し、小說なぞを書きたいなぞと思つたときに漢字のわからない字を見る、辭書のよいのはありませんでしようか、何卒記者樣、私の爲にお答へを願ひ上ます、價はすこし位越えても紀念のことですから どうぞお敎へを願ひ上ます(もみぢ)(記者曰『言海』なら一通りの用は便じます)○記者にお尋ねの件やら、御挨拶やら拜見したものは一々御答に及びませんが、御芳名を擧げて置きます、凡てお申越の通りでよろしい。廣島、後藤素美枝。桐生、石じましづ子。長岡市、江口みゆ。横濱、奥泉迂枯女。大坂、京谷政野。佐賀縣、山口しと子。みどり子。すみ。新潟縣、高橋みほ子。名古屋、鍵枝。岐阜、加藤一子。秋田縣、栗林けい。青林、野の菊。波月女。林光枝子。おえふ。

改良案に就いて

誌友くらぶ改良案を募りました處、存外改良案を出す方は少うございました、其中で、林光枝、佐分華影、雫、曙の里の四君のが比較的考へてありました、けれども凡て發表するに足るほど要領を得たものは少いのでした。

林さんの方法は確に間違ひは起りますまいけれど、餘りお役所的で、やかましすぎて實行が簡易に出來ますまいと思ひます。

佐分さんの通信と交換を別けるお考もよろしいが、皆さんはなか〳〵通信の方をよこさないのです、今まで幾度も試してみたのですがうまくゆきません。

曙の里さんのは先づ要領を得て居ました、少からず參考となりました。

雫さんのは別に考案とてありませんでしたがお說は尤もです。

なほ記者の方でも能く考へてみませう、折角でしたから林さん、佐分さんのお二人に僅かな賞品を差上ることにして置きました、皆さんも好い考があつたら述べて下さい(記者)

個人消息

○本郷の啓子樣毎度お文有りがたう。貴女お轉居なさるさうでしたがお移り遊ばしたの私御許の御消息を待つて居りますの成たけ早くネ……福岡縣の福田八重子樣お文有難たう早速御返事上げ樣と思つて居りますけれど御住所が不明でしたから御無禮いたしましたすぐ御住所をネ……私の住所あれだけでは隨分配達夫が困りましたつて(長崎市油屋町六四中村登和子)○土佐の十六歳と題してあつた小枝さんよ、私し御手紙差上ましたが歸つて來ましたよ、くはしい御住所おしらせ下さい其他の皆樣不束者ですが妹と思召して御交り下さいませきつと下手ですが御返事お上します(石川縣金澤市八幡町目七みどり)○木下さん和歌御送り下され有りがたう御座います御返事差上げようと存じますが、根岸海岸では參らないでせうと存じまして、ついつい差上げませんでしたから、何卒住所をくはしく御しらせ下さい、妾の方で御しらせ申す事も御座いますから(横濱にて光香)○鈴木小菊樣誌上で御見識いたしましてより、御心易く御文通も願ひうれしく暮して居ましたが、近頃ろ一向に御消息がわかりません、心配しております、去る九月には貴孃の御懇望の小說及西洋紙封筒等を小包で御送り申しました、其後全く御音信が

絕て右小包の着不着も判明いたしませず、御安否も氣遣はう御座いますから、ハガキで二回おたづね致ましたが、これにも御回答がありません、どうなさつていらつしやるのかと、明暮御案じ申ておりますどうか御たよりをなさつて下さい(東京小石川區表町百九番地星野照子)○記者様の御蔭をもつて親しい誌友を得ました深く御禮申上ます、東京の立花様お變りはございませんか其後御無沙汰致しまして御許し下さいまし土佐の小松様私の着きましたか、御二人の御方よ無學な田舍者でも何とぞ長しへに御交際を御願ひ申し上ます私も澤山お話し致しますわ、御身御大切に。(近江里夕)○アメリカから蠻潮生として繪葉書下さいました御方様に厚く御禮申上ます、早速返事致す筈で御座いますが、私英語なんて存じませんものですから、出す事が殘念ながら出來ません、こゝに貴重な誌上を拜借して御禮申上ます(大阪不二子)○御なつかしき皆様の中もしや二三年前名古屋飯田町三丁目十八番地に見えた上田やす子様の今の御住所御存じでしたら恐れ入りますが御知らせ下さいませんか、清き美くしき姉様方御交際下さいまし(愛知縣中島郡一ノ宮町佐分富美子)○土佐の小松小枝子さん早速お返事下さいましてありがとう御無事ですつてねお目出とうそれから加藤さんお變りもありませんか(美濃花子)○大分縣の三浦喜代子様、羽後の茨木つな子様、去る七月中御はがき下さいまして、誠にありがとうございます、早速御返事差上るのでしたが私只今家に居りませんのでとんだ失禮いたしました、どうぞあしからず、思召下さい、只今の住所は申上かねますから此後は誌上で御交り下さいませ、名前も申ませんが御心當りがございませう。(淺草の一少女)○前橋のみどり様私も同縣の美登利と申ますおなつかしう存じますわもしも御差支なくば誌上で御住所御知らせ下さいましな本當に何となくお慕しう思はれますの私はね前橋の或女學校出身ですのよ(群馬縣、美登里)○都の川崎幸江子様、妾しは卒業後貴女の御住所を存じませんで、遂御無沙汰致してをりましたが今度とある筋から現住所を承はりました。何卒御玉章下さい。皆様東京の小松田春世(お年も十八歳で女學校出身の御方です)様の現住所御存じのお方は是非御報知下さいませ。手元にある小說本か會津の名所繪葉書で誓つて御禮はへたしますわ(會津若松市南町新屋三三九丸山方樋山伊勢子)○鳥取の安木春子様、おなつかしうございます。まだお目にかゝつた事もございませんが——あつても知らないのか——あなた鳥取縣立高等女學校の明治四十年の御卒業ぢやございませんか、そしてお宅は鑄物師町邊で?何時も文才のあふれる樣なお作に接して、蔭ながらお慕ひ申して居ます。どうか、振はぬ我が縣下の愛讀者のため、ます〱御自重發展せられん事を願ひます。私は同高女四十一年の卒業でございます。(鳥取櫻草)○木村那賀子様、雨降る十月の夕貴女の御手紙を幾度となく繰り返しました、つゝましき御言葉心から嬉しう思ひました、すべて世の中は思ふやうにはゆきません。お互に進めるだけ進みませう、出來得る限り奮鬪いたしませう、文藝のために……我等が國のために……せめては永く親しいお友達となつて戴きたいけれど。(ゆめの葉)○東京の前田春子様とやら、十月一日發行の本誌上で見苦しい私の姿見たと仰つて、わざ〱なる御玉章たしかに拜見致しました磨志緒とは私の號、又あの寫し繪は昨年の初夏、初めて一人旅びを思ひ立ち、京都に遊びました時、國の友なるたみ子の君を訪ふて、共に寫しとりましたもの、一年たちし今は彼の姿もどこへやら、小さくとも一家の主婦として、朝夕を心せわしう暮して居ります、全く御心にある方々は人違ひで御ざいます、あの時、折返し御手紙差上るが本意で御ざいましたれど、娘時代の如く、文の往復に日を過す事もなりませず、心にもなき御交りを願ふも却て罪深う存じました爲、わざと誌上を拜借致しまして、延引ながら御答へ申して置きます、惡しからず思召下さいまし。(滋賀縣ましを)○豐後の小泉ゆり子様、水戸の池水はな子様、長々御無沙汰いたしました、お變りありませんか、それから小澤蝶子様、何卒誌上でお交り下さい(越後にて百合香)

繪葉書を好む

○記者様始め誌友の諸姉様、私ね此度都合に依りまして下名の所に住ふ事になりましたの?姊も管と變りましたから左樣御承知下さいますやう!何卒相變らず親しく御教示下さいましよ

そして皆様後生ですから繪葉書交換仕て頂戴！必ずお返し致しますから、(京都府新舞鶴町五條通り敷島東入辻伊三郎方管幸子、舊姓大槻)○繪はがきの御交換を御願ひ致します外國にいらつしやる御方に特にヱハガキ交換を御願ひ致します(野州足利町一、柳田君子)○誌友の諸姉さま方よあはれプーアなる私も昨月より本誌のお仲間入りを致しました何卒永久的眞情ある姉さま方と御交際を願ひます而して名所ゑはがき風景はがき差入はがき及び玉章など折々交換して下さい(名古屋市外東山村覺王山一八、横井梅枝)○日韓通信事業合同五週年紀念スタンプ付き當地風景繪端書が少し有ります寫眞と御手紙とを下さつて永久に御交際下さる方には一枚宛差上ます(朝鮮黄海道海州、伊藤靜)○誌友の皆皆様これ迄私風景畫葉書を樂んで居りましたが此度美人の畫葉書を少し集め度いと思ひますのでどうぞ私の持つてゐる風景畫を送りますから美人畫葉書と御交換下さいませな(大阪西區天保町五八、村中不二子)○皆様繪葉書の交換及び御交際を願ひます(福岡縣直方町多賀町中野英子)

持つてゐる書物　讀みたい書物

○漢籍　四書五經を初め漢學の書何にても宜し、おゆづり下さる方は書名と御住所を次號にて御敎へ下さいませ。代價なり交換なり何れにても宜し。又改題評註講議も望まし。妾の手許にせ紫上下、戀燕ながし、戀か夢か、テニソンの詩、キーツの詩の原書、金色夜叉等あり望みの方に差上ぐ(尾張、鈴江子)

○辭典あり　私に不用の故事熟語辭典が御座います、文學書の何にても御交換を願ひます。(岡山縣英田郡河合村上山梓子)

○詩集と歌集　歌集海の聲(牧水)白光、小扇(晶子)小詩國、わが思ひ(薫園)黎明(十月會集)を所持致して居りますが若し諸孃の中にて邪宗門、廢園、靜夜を御所持の御方は御交換下さいまし他の詩歌集でも宜しう御座います御希望の方は何卒誌上にて御住所を(芝エスエス)

○女學世界　八月號九月號お讀みあきのお方樣はお氣の毒ですが暫時おかし下さいませんかお願ひ致します。(尙夢二畫集晶子先生の歌集いづれにてもよろし)おあきのお方は何卒お貸し下さいませ。眞實は固く守ります。御禮には繪葉書を差し上げます(淡路國三原郡松帆村濱田留子)

○誠實なる姉樣へ　少女手紙の文、及び手製で御座いますが友ぜんちりめん製の、櫻形手さげ袋等、皆新しいのが御座います故、御望の方は住所氏名明記の上、御一報下さいませ、尙風葉の戀ざめも不用につき、美文作法マダム振りか新流行品と取かへ下さい(秋田縣象潟町、齋藤りゑ子)

○飜譯もの　皆樣の内で飜譯小說噫無情(ユーゴー原著)か「若松氏譯小公子」「松本氏譯何處に行く」をお持ちの方がございますなら、私の「三國誌(四冊物)」か「飜譯小說古王宮」「宇宙根本問題」と交換して下さいませんか但し交換は双方共此認め順序通り致しました(備後双三郡田幸村鹽町、林小枝)

○まさ子樣　妾ね都會の婦人も若き婦人も持つてゐますの、不幸にして地方の婦人持つてゐませんのよ、實に好都合だから、妾の二冊どちらなりと御交換くださいよ(石川縣山中溫泉山田順平樣方、星子)

○まさ子樣　地方の婦人御持ちとの事幸ひ私都會の婦人持て居ます故御交換いたしましよ住所は(岡山市古原町八、坂本内、白衣)

○妾は女子文壇が大好なのだが少しも持つてゐませんもし皆樣の内で不用の女子文壇が有りましたら如何損じてもいとひませんから御惠して頂戴ね但し御都合のよい御方樣は何年何月發行と記して御手數の所御一報願ます相當の御禮は致しますよ(福島縣北會津郡湊村大字共和、中村せい子)○親愛なる誌友の姉々樣に御願ひです妾の手許に小說新細君、女夫波、と教育界四冊太陽三冊、女子文壇五冊、と常盤號十冊、支那文學全書では老子、列子、孫子、呉子、忠經、孝經、講義、婦人くらぶ、人の妻等がありますから、姉樣達の夢二畫集、魔風戀風三冊、寄生木、ハイカラ令孃前後、女道樂、思出の記、等に御不用の分御座りますれば御交換下さいな、妾の本何冊でも御送り致します、先着申込の御方には妾の見苦しい寫眞を御送りいたします又寄生木は二週間程御貸し下されば禮には雜誌と妾の寫眞とを送ります妾は神にちかつて不正な事は致しませぬ(兵庫縣津名郡廣石村第三一一、林光枝子)○諸姉樣の内で地方新聞を交換して下さるお方はありませんか到着次第發送しますか

ら（名古屋中區南桑名町五丁目若山京方石黒鍵枝子）〇親愛なる皆樣に御願申升本年九月及び十月號の女子文壇新文林婦人世界女學世界及び少女雜誌など只今御不用に成て居る御方は一時御貸し下さいな親切丁寧に取扱ひ讀み終り次第に粗末な品を添へて屹度御返し申升（岐阜縣加茂郡黒川村遠見場六二、加藤舍の內、一子）〇妾が十號月で圖書交換をしましたら送つて下さつた諸姉が十一人ほどありましたからそれ〲書籍を贈りました又交換を願ひます左の本物がまだ妾の手元にありますから姉さん等の御手製の枝折或は編物又は皆さんの御寫眞（風景でもよろしうございます）又四十年前の雜誌何んでもよろしうございますから先着にかゝはらず順序に送ります金色夜叉、己が罪、寄生木、門の草、美文斷片、不如歸、筆子、肉彈、女學世界、婦人界二十八宿、夢二畫集等です（茨城縣結城郡養蠶村飯岡左門方、田中芳江子）〇なつかしい御姉上方私の手許に繪葉書澤山、雜誌、少女世界、少女の友、女學世界、家庭の友其他色々ありますから皆樣の小說、思出の記金色夜叉其他繪葉書あみもの指南など、御交換下さいませ屹度御送り申ます（備後國神石郡木津和村近藤たつ子）〇皆さまのお手許に不用な詩俳句和歌等に關する書物がございましたら私の少女界少女の友女學世界と交換して下さいな又繪はがき交換もね（富山縣中新川郡東水橋町、相山やえ子）〇左の書籍妾の元にあります寫眞美人の繪葉書編物、リボン文章世界の古いの又女子文壇の古いのを惠み下さつた方に差上げます先着廿名に手製枝折を添て贈ります紅葉全集、思出の記、想婦戀、筆子、女學世界、少女界、少女の友、言海、女子文のしをり、花袋小品、藤村詩集、和歌獨學俳句大全、小栗風葉の金色夜叉。（茨城縣宗道村下大園木飯岡隱居田中春江子）〇皆樣の內にハモニカ御不用の方は私の少女世界（一昨年より今年まで）、四十年前後の女學世界又當地の名所繪葉書と御交換下さいまし若しそうして下さる方は先御一報をそれから滋賀縣の坂靜香樣に紅葉全集でなくば一葉全集ではいけませんか私今もつて居ますが如何ですの次號御答を（高知市帶屋町上一丁目、西木ちづ子）〇皆樣の中にて絹ハンカチーフ絹製の寫眞掛同製のしぼりリボン又皆樣のお寫ゞ繪お惠み下さいますなら御禮に繪葉書少女世界、少女界少女の友、女學世界、新小說レース編物等にて必ず〲お禮致しますわ皆樣きつとよ（富山縣東水橋町相山やえ子）〇誌友諸姉樣の內に鏑木淸方畫小說繪はがき、鏑木淸方畫戀下褄、一條成美畫、浴後の美人、一條成美ハイカラ三美人、梶田半古畫改良服繪はがき、泰西名畫はがき上下、淺井忠畫花、夢二畫集、靑春全三冊、魔風戀風上中下、嫁ヶ淵上下、金色夜叉、終編金色夜叉、不如歸、等御不用のお方は、私の、省亭花鳥畫譜、百廿枚插繪はがき帳、バイロン詩集、鐵幹子、白玉姫、豐旗雲芭蕉蕪村俳句全集、文藝界、肉筆繪畫、各展覽會出品畫はがき、肉筆繪はがき、其他各種繪はがき等と御交換下さい（伊豫宇和島裏町三丁目福井亥吉方、伊達春峰）〇遠く都をはなれてこの片山里に弟と二人この淋しい秋をむかへて居ります御情にとみ給ふ諸姉樣方の御內に夢二畫集かハイネ詩集又は小說御もちのお方御めぐみ下さいませんか私のバイロン花紅葉アラビヤナイト等いろ〲ありますから御好みの品と交換致し度う存じます（長野市長門町二二、樋口みよ子）〇私こと漢文辭林を持つて居りますが何か新書と御取替下さいませんでせうか（京橋區新佃東町二ノ四大久保方、谷美登里子）〇皆樣御寫眞にお年お名を書いて御惠ぐみ下さい、婦人世界（本年一月より今月迄）其の他の品物で御禮致します、又面白い小說なれば何でも御拜借致しとう存じます御禮はきつと相當な品か何かで差し上げます（香川縣善通寺中通町笹崎浦、大西彰子）

追加

〇京都の誌友會お盛んで結構でした、初めから斯くお盛んに出來ましたのは全く幹事の皆さま方の御骨折と存じます、二回三回と永久に斯くあらんことを祈ります（大阪、改野竹子、川崎道子）〇皆さま、和歌の交換を澤山にねがひます、また御文通もね（本所區林町二丁目三十二番地林白愁歌）〇趣味のある繪ハガキで御たより下さい、むやみに宜しい繪葉書でなくても、趣味のあるのをお送り下さい（兵庫縣駒ヶ林村三四九、喜多よし子）〇皆さま、いつまでも〲御交際下さい（石川縣江沼郡南鄕村字保賀、田島鈴子）〇御文通をお待ち申ます、又お寫眞を送つて下さいます方がございましたら、恥しながら私の寫眞御返禮いたします（京都府相樂郡中和東村字杣田、大西武子）

雜　報

展覽會素通評

十七日の雨降る中をチョイと展覽會へ行て觀た。日本畫の方は、大抵素通りする規則になつて居るから、ツイ失敬して、別にこれといふ深い印象を止めなかつたが、其中でいゝと思つたのは矢張り魔障と黑き猫だ。

魔障の方はしちくどく言ふにも當らぬが、黑き猫は猫の感じが非常に鋭く出て居る。陰影も思ひ切つて大膽に書けて居る。去年の春草に比しては無論劣つて居るが、全體に動物畫の振はなかつた今度の展覽會に於て、確に出色の作たるを疑はない。

平井楳仙の「大佛炎上」と、尾形月三の「葵祭」とは、只作者の熱心を感歎しておく。

木村武山といふ人の「孔雀王」は、繪の具が美しく塗つてあるのに感心した。

淸方のと蕉園のとは、場中第一の人氣だ。人氣のあるといふ事が藝術品としての價値を示すものとしたら、矢張り傑作なんだらう。僕は只綺麗な大きい繪だと思つたばかりだ。

竹邨の「秋山曉靄」も一寸面白い所がある。

洋畫の方では中川八郎の「巖壁」をいゝと思つた。中澤弘光の「温泉」も心持のよい出來である。湯の中の光線がしつくりと出て居る。特別室では「湯あがり」が一等いゝ。

渡邊與平の「ネルのきもの」は、所謂ネルの着物の快い輕い調子がよく書けて居る。パックの淡味なのを惡くいふ人もあるが、若し濃厚な色彩が加はつたら、折角の軟らか味がなくなるだらう。太田三郎の「ビーヤホールの女」は、後の人物が目障りだ。光線も稍强すぎる樣に思ふ。

正宗得三郎の「夕日の反映」は、却々明るい作だが、夕陽といふ感じが些とも出て居ない、繪の具屋の築山を見て居る樣だ。

今年の石橋和訓はダメだ。彼方の畫界の伎巧に囚はれて居る、少しも個性がない。

彫塑では、荻原守衛と戸張孤雁の「女」がいゝと思つた。北村四海の「花の精」は右の手がダメだ。軟らか味のないのがイヤだ。朝倉文夫の「墓守」も一寸面白い。

木彫では米原雲海の「仙丹」が一等氣に入つた「動物園の犬」は、犬らしくない。疲れた心持も悲みの心持も、こんな犬から發見することは出來ぬ。

小倉といふ人が二宮何とか云ふ百姓の肖像を出したのは、藝術を辱めるものだ。

池田勇人の「ボンヤリした馬」は、要するに矢張りボンヤリした馬だ、何の爲にこんなものを展覽會に出す必要があるのだらう。

「疲れたるモデル」は、只ノツペリと出來て居るだけだ。格別深いインプレッションを與へない。

結婚と離婚

▲一年間の緣組數

明治四十一年中の婚姻數は全國總計四十六萬千九百四十組で、之を三百六十五日に平均して見ると、夏でも冬でも毎日千二百六十五組づゝの婚禮が行はれて居る割合となる。之を府縣別にすると、東京の二萬二千五百二十二組が最多で次が新潟の一萬九千百九十二組、次は兵庫愛知廣島大阪福岡である。

▲一年間の離婚數

同年中の離婚數は總計六萬三百七十六件、之を三百六十五日に分けると、一日平均百六十五件となる。即ち一昨年は、正月元日から師走の大晦日まで、毎日〳〵千二百六十五組の婚禮と、一方には百六十五組の離緣とが、行はれて居た勘定になる。

▲離婚の割合

結婚と離婚との割合を算出して見ると百の緣組に對し十三强の離緣、即ち一割三分强の離婚があつた譯である。

▲離婚は何處が多い

一割三分の離婚は全國の平均であるが、割合の一番多いのは秋田縣の一割八分、新潟縣の一割七分三厘などである。

▲一年間の出產數

一昨年生れた赤ん坊の數は百八十三萬五千三百〇三人であるが、其內死んで生れたのが十六萬二千六百七十六人あるから、實際に增加した子供の數は百六十七萬二千六百二十七人だ。

▲一年間の死亡數

一昨年に死んだ者の數は、百三萬八千百十人である。

▲生れる者と死ぬ者

即ち一昨年に於ては、新に生れた者が百六十七萬餘あつて、死亡者が百三萬餘あつたのだから差引六十四萬人の人口增加である。今年からは朝鮮が加はるから一層增加するに相違ない。

文士の召使

頃日、昔忠實にEdmond de Goncourt に仕へた女中が死んだ。ゴンクウルは著述の出來る度に此女に讀んで聞かせて批評を聞いた。女中の名は Pelagia と云ふのであつた。これを機として古來の詩人の奴婢の事が新聞に出た。

Chateaubriand には、Julien といふ僕があつて『主人が巴里よりジエリユサレヘム』を著せば、自分も同じ旅日記を書いてゐた。旅日記は頗る乾燥無味な物だつたが、それでもジユリアンはかう云つてゐた『なんでも道中で本當にあつた事を知りたいなら、わたしの日記を御覽なさい、詩人の書くことは當てになりませんから』

Saint-Beuve の女中 Mme Dufour は校正をした。

Théophile Gautier, Arsene Houssaye, Gerard de Nervl の三人は Rue Saint-Germain-des pres に共同世帶を持つてゐて、Margot といふ女中を使つてゐた。その女中に韻文で用事を言ひ附ける癖が附いて、しまひには散文で言ひ附けられた用事はしないやうになつた。それから後にゴオチエが使つた僕は不精な奴であつた。客がベルを鳴らしても二三度鳴らしてからでなくては出て開けない。そこでをりをり主人がじれつたくなつて、開けに立つ。さうすると僕があとから附いて出る。客は先きに出て開けたのを僕だと思つて、あとから來る僕に恭しく挨拶をするといふ風であつた。

Flaubert の僕 Narcisse は酒飲みであつたある晩主人が作をしてゐるところへ醉つて歸つて、くだらない事をしやべつて、うるさくて溜まらなかつた。主人が寢ろと云つても聽かないどうぞ寢てくれと賴むと、それなら此靴を脫がせてくれと云ふ。そこでフロオベルは僕の沓を脫がせて遣つた。

Victor Hugo の門番を Lagoutte と云つた。此門番が不平を言つた。あの『一犯罪者の話』に門番々々と書いてあるが、己の名が書いてないと云ふのであつた。

文壇詩壇

▲若い作家の一派が集つて今月から『曠野』といふ雜誌を出すさうだ、詩歌を中心として、新しい思想を發表するのだ、厚さは六七十頁のものらしい。

▲『スバル』の本月號は短歌號として比較的多くの短歌を載せる。

▲『秀才文壇』は本月十日增刊『新進號』を發行する。

▲『創作』の本月號には散文詩論と、其創作が多く載る。

▲結婚の噂ありて、未だ式を擧げざるものに眞山青果氏あり、正宗白鳥氏あり。

▲石井柏亭氏は本年内にいよ〳〵洋行するとのことである。

▲神田の琅玕洞では與謝野晶子女史の肉筆短冊を一枚一圓で特志家に頒つてゐるが、望みてはなか〳〵多いさうだ。

▲小說を初め純文藝の著述は殆んど現れない文壇沈滯の聲あるも尤もである、短歌も批評は盛んだが、それほど好い創作に接しない、詩壇も依然として振はぬ。

▲文壇は不振なるに拘はらず、新たに出る文學雜誌の種類は相當に增加しつゝある、注意してみると、其分脈に多少の新運動の兆も見えるが、果して文壇の大潮流は一轉換するであらうか、自然主義に由りて洗禮されたる文學は、更に如何なる新運動を生ずるであらうか、不振は頓て來るべき光明を意味す。

新刊

○路傍の花　川路柳虹著

著者川路柳虹氏は我國最初の口語詩人である、多大の難關を飛躍し、一擧にして口語詩の新體を樹立した當時の氏の意氣込は、其作物に現はれたる如く、最もはな〳〵しく、最もわか〳〵しきものであつた。今や、口語詩風、散文詩風の詩律は殆んど全詩壇に影響を及ぼしてゐる。珍しいことではない、只皆之れを自覺せずに、模倣と、雷同と、好奇心のみ、獨り著者の詩風は詩歌として、其使命を忘却せず、而かも現代語を自由に使用したる點に於て、他より一歩を先んじたるものである。此一歩は頓て千里の差を生じて、多數の追隨者を後へに瞠若たらしめたのである、要するに『路傍の花』一卷は、現代の詩歌を知らんとする者の、是非とも眼を通さねばならぬ詩集である、褒貶は世評に於て免

る丶能はざる處なれど、我等は此の新代の藝術を新人の前に推奬することを憚らないものである。（定價金五拾錢、京橋畔東雲堂發行）。

○新題詠歌詞林　羽根田文明著

昔の歌の題と、今の歌の題とは、大變に相違して來てゐる、其處に眼を着けて、今の歌の題詠に供する爲め、作例及び用語を蒐集した書物で先づ其新しい題の多きに驚いた、銀婚式、金婚式、博覽會、緑門、活動寫眞、牛乳暖爐など新しい題が百以上も集めてある、外にない歌道初心者の重寶である。（定價五十錢、巣鴨、內外出版協會發兌）

○小公子　百島操譯

有名なる小公子を能く筋の分るやうに、書きつゞめたもので、家庭用には至極よろしからう。通俗文庫の第拾編として發行された。（定價貳拾錢、同上發兌）

○ナイチンゲール　中村勁林著

本書の目次はあはれナイチンゲール、ナイチンゲールの生立、ナイチンゲールの修養、クリミヤ戰爭、クリミヤの慘狀、クリミヤの天使、ナイチンゲールに對する英國民、赤十字社とハインリツヒヂユナン、日本の赤十字事業、其他數項以て內容を知りたまへ。（定價金參拾錢、神田南乘物町東洋社發兌）

○社交訓

人なか〳〵出る心得を詳しく書いた書物である。（定價金二十錢、京橋西紺屋町良明堂發兌）

編輯通信

初めての投書を歡迎す

新年號からいろ〳〵改革を施す中にも、初めての投書を歡迎するといふことも其一つです。從來初めての投書は何うしても落伍の悲運に陷る場合が多かつたのですが、特に新年號からは初めての投書家の爲に紙面を與へて、其文章にいろ〳〵注意をしようと思ひます、其文章には特に『初めての投書』と書き添へて下さい、投書は各種の文章に限ります、詩歌は別とす、文章の長さは二十四字詰、三十行限り、締切は本月十五日です、賞を呈す。

實驗と告白

若き奥樣達の家庭其他の實驗談と、若き令孃方の告白談、換言すれば身の上話を集めて毎月發表したいと思ひます。此れは文章の上手下手よりも、能く分るやうに、確實にさへ書いてあれば採用します、長さは百行限り（二十四字詰總振假名つき、ものによりて短いのは差支へありません、下手に長いのは採用しません、賞を呈す、締切本月十五日。

新年號の投稿

右の外、新年號の投稿は、凡て本月十五日に締切りますから、好い材料と、好い作物とを寄稿して下さい、創作（小說詩歌散文の類）諸欄も多少改革をいたします、其方法は次號に詳しく發表しますから、諸嬢は何でも好いものさへお作り下されば よろしい、皆本月十五日に締切りますからお忘れなく――。

豫告

新年號の豫告は次號に發表します、例の通り目新しい附錄を添へて、愛讀者の皆樣を欣ばせたいと思つてゐます。本誌の姉妹雜誌『少女』も盛粧して、皆樣のお妹樣方に見えたいと目下着手中です。

○京都の會　京都で開かれた本誌愛讀者の會は意外の盛會で、記事と寫眞を御覽になれば當日の模樣は皆樣にもお分りになるでせう、私は本社長忌中に付き、出席することが出來ませんで甚だ殘念でした。なほ大阪にも會を開かうと云ふ御相談があるやうですから、遠からず發表されることゝ思ひます。（醉茗）

○寫眞の寄贈　本月十五日までにお送り下さいますれば、新年號に掲出しますから、皆樣のお寫眞を拜借したいものです、若き日の紀念として皆樣もお出しなさることをお勸めいたします。景色、風俗もよろしいのです、御入用のものは凡てお返しいたします。

投稿規定

▲原稿は一切女子文壇社宛に送ること▲原稿には女子文壇原稿の文字を書添えて下さい▲文字は能く分るやうに書くこと▲小說と詩と短文には振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は同字詰三十行以內、日記、論文も同上、書簡文は同字詰二十行以內、詩は行數制限なし、和歌と俳句とは一人一首限り、短文は十六字詰七行限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、凡て半紙、原稿紙、罫紙等に限る▲圖畫は二寸に三寸の大さにて薄き日本紙に限る▲投稿は凡て女子に限る

▲定期號の投稿は毎月十五日堅く締切る

○女子文壇投稿各種懸賞定額

▲特別賞金五圓（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲甲種（短篇小說、散文）
天賞金參圓。　地賞金壹圓五拾錢。　人賞金七拾錢。

▲乙種（家庭日記、論文、書簡文、詩）
天賞金貳圓。　地賞金七拾錢。　人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、圖畫）
天賞金壹圓。　地賞金五拾錢。　人賞金貳拾錢。

◎各種とも金壹圓以上の價格の當選者には相當の吳服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す。壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

●賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽窃したるものは無効とす）

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

○定期發行分　▲毎月一回（一日定期發行）

一冊（一回分）	定價金拾五錢	……郵稅一錢五厘	計金拾六錢五厘
三冊（三月分）	前金四拾三錢五厘	……同四錢五厘	計金四拾八錢
六冊（半年分）	前金八拾四錢	……同九錢	計金九拾三錢
十二冊（壹年分）	前金壹圓五拾六錢	……同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分　▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

一冊（一回分）	定價金貳拾錢	……郵稅一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）	前金三拾八錢	……同三錢	計金四拾壹錢
四冊（壹年分）	前金七拾二錢	……同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部　▲十六回

四冊（三月分）	定價金六拾三錢五厘	……郵稅六錢	計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）	前金壹圓二拾三錢	……同拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六冊（壹年分）	前金貳圓二拾八錢	……同二拾四錢	計金貳圓五拾二錢

▲申込注意（振替にて拂込む時は誌代の外に壹錢登記料増すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絕）、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	上等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁……	半頁……	半頁十二圓
		一行四拾錢

部數多く有効に比し無類の割安

〆切 毎號十五日前

特約取扱○日本電報通信社○明治廣告社○博報堂○弘報堂○東京勉强社

明治四十三年十月廿五日印刷
明治四十三年十一月一日發行

定價金拾五錢

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區宗十郎町十五番地　松本魁
印刷所　東京市京橋區宗十郎町十五番地　國文社

不許轉載

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】